

## 第7章 勉強嫌いの小児のように——廬山、常州、登州

[第7章その一]

げんほう 元豊7年 [1084年]、そしよく 蘇軾49歳。

■【07-1-001】円通禅院、先君旧游也。四月二十四日晚、至、宿焉。明日、先君忌日也。乃手写宝積献蓋頌仏一偈、以贈長老仙僊公。僊仙撫掌笑曰、昨夜夢宝蓋飛下、著処輒出火、豈此祥乎。乃作是詩。院有蜀僧宣、逮事訥長老、識先君云

【解題】けんこうすい ぶいんがいろうじょしゅうだんれんふくし りょうい 検校水部員外郎汝州団練副使に量移するとの皇帝の命令を受けた蘇軾が黄州を発ち、ちやうこう こう きゆうこう ずいしやう 長江沿いに南東に進んで江州 [九江] の瑞昌県に至ったところまでを前の章で見た。その後の蘇軾の行動は、指定された汝州へと真直ぐに向かうのではなく、のろのろとさかんに回り道をし、あたかも「小児の遷延として学を避けるに殆ど似る」[→作品番号 07-2-065]、つまり、勉強嫌いの小児がなかなか教室に行こうとしないようなものであった。

ずいしやう ちんざう ほうざんし 瑞昌県で陳慥 [方山子] が去ると [→作品番号 06-5-035]、黄州から一緒に来た友人は参寥師 [道潜] だけとなった。一行は家族および馬正卿ら使用人で、合わせて20人ほどだったようだ。汝州に船で行くルートは、おうせい ゆ 王齊愈宛ての手紙 [→作品番号 06-5-025] に自ら記していたように、長江をずっと下ってから大運河に入って北上するのだが、蘇軾は長江から離れて南に進路を取った。左手前方に廬山が現れ、山の北麓にある円通禅院に宿を取り、この詩を詠んだ。長い詩の題は次の通り。「円通禅院は先君 [蘇軾の父の蘇洵] がかつて遊んだところである。四月二十四日の晩に着いてここに宿った。翌日はちょうど先君の忌日 [命日] であったので、(維摩経にある) 宝積が天蓋を捧げて仏を讃えた一偈を手で写し、長老の遷公に差し上げた。遷公は掌を撫

ぜて笑い、『昨夜、夢に宝蓋ほうがいが飛んで下り、着地したところからすぐに火が出ました。それはこのことがあるとの祥きざしだったのでしょう』といった。それでこの詩を作った。円通禅院には長老に仕える蜀しよくの僧せんたいの宣し速すくがいて、先君を識しっているといった。

### 【訳文】

石耳峰せきじほう [廬山ろさんの高峰の一つ]のあたりの路は天に接し、

梵音堂ぼんおんどう [円通禅院えんつうぜんいんにある]の上の月は泉を臨み見る。

我が人生で初めて廬山ろさんの水を飲む。

いつの日にか、禅門に入ることがあるのだろうか。

袖の内から書いたものを出そうとすると、

夢の中で天蓋が飛んで、私わたしがくと伝えたといわれる。

しかし、ここでは私のことなど誰も知らないはずだ。

野の鶴のような気構えたけはあっても、

俗気はまるっきり抜けていない私であるのだから。

【補足】 [蘇洵そじゆんが廬山ろさんに遊んだのは、制科せいこの試験しけんに落第して放浪の旅をしていたとき  
のことで、それは慶暦7年 [1047年]、これより37年前であった。蘇洵はさらに南方  
の虔州けんまで足を伸ばしたあたりで父の蘇序そじよが亡くなったとの報せを受け、急いで帰郷  
した。それからは家に籠かごってひたすら学問がくもんに励み、7年後に、成都せいとにきた張方平ちやうほうへいを訪  
ねて、それまでに書き溜めていた文章を見せ、ついに世に知られるに至ったのだった]

■【07-1-002】子由在筠作東軒記、或戲之為東軒長老。其婿曹煥往筠、余作一絕句送曹以戲子由。曹過廬山、出以示円通慎長老。慎欣然亦作一絕、送客出門、帰入室、跣坐化去。子由聞之、乃作二絕、一以答余、一以答慎。明年余過円通、始得其詳。乃追

## 次慎韻

【解題】これも円通禅院で詠んだ詩で、やはり長い詩の題がある。「弟の蘇轍は筠州で『東軒記』を作ったことから、ある人が戯れに弟のことを『東軒長老』と呼んだ。東軒長老の婿殿の曹煥は、かつて筠州に行く折に黄州に立ち寄ってくれた。私は一首の絶句を作って曹煥を見送り、合せて弟への戯れの言葉とした。曹煥は（その後で）廬山を通り、円通禅院の慎長老にその詩を見せた。慎長老は欣んで一首の絶句を作った。慎長老は寺の門から出て曹煥を見送り、部屋に戻って趺坐するとそのまま化し去ってしまった [亡くなった]。弟はそのことを聞いて二首の絶句を作った。一首は私の詩に、一首は慎長老の詩に答えるものであった。翌年、私は円通禅院を訪れて初めてこうした詳細を聞いた。それで慎長老の詩に次韻した」。蘇轍の『東軒記』は作品番号 06-1-112 で見ていて、蘇轍のことを「東軒長老」と呼んだ「ある人」とは、むしろ蘇軾自身であろう。また、光州知事の曹九章の息子の曹煥が蘇轍の娘を娶ることになり、黄州に立ち寄ってから蘇轍のいる筠州に向かったことは作品番号 06-3-062 で見ていた。そのときに、蘇軾はこの詩の題にあるように送別の詩を贈っていて、それがここで見る第一首である。

### 【訳文】

其の一[黄州で曹煥を送る詩]

君は、幾日あれば、筠州に行ってここに帰ってこられるのかな。

筠州に着いたなら、降り積もった塵や埃をすっかり掃うがよい。

君に一つの籠を贈ろう――

きっと受け取ってほしい。

何のための籠かというと、

この中に東軒長老とうけんちやうろうを抛り込んで、  
ただちに持って帰ってきてほしいのだ。

### 其二[慎長老しんの詩に次韻した詩]

大士だいし[慎長老]にはもとより生も死もない。

小儒しょうじゆ[蘇軾]はどうしても窮きゆう[窮迫]よりは通つう[榮達]を求めてしまう。

たまたま大士と小儒のささやき声[贈答し合った詩]が、

千の山ろざん[廬山]の上に留まることになり、

もしかしたらそれが風に乗って、

人間世界に一万もの共鳴を生み出したりするだろうか。

## ■ 【07-1-003】 与仏印

【**解題**】廬山ろざんは多数の山の集合体で、遠く古代から知られる名山である。景勝地も宗教施設もたくさんあって見どころが多く、現在でも有数の観光地で、巡り始めたらきりがない。円通えんつうぜんいん禅院に着くより少し前に、仏印ぶついでんぜん禅師じりようげん了元 [→作品番号 06-3-039 など] から手紙が届き、帰宗寺きそうじにくるよう誘われていた。それへの返事。

### 【訳文】

かたじけなくもお手紙を頂戴どうたい あんかし、道体の安佳あんかでありますことをお聞きし、はなはだ心が慰められました。廬山ろざんに遊ぼうとのお約束、もとより私の願うところあります。ただ、筠州いんへと道を急ぎますので、いますぐには走って参れません。またの日にお約束を果たしたいと思います。匆々そうそうに失礼いたします。

【**補足**】廬山ろざんの高僧こうそうである仏印ぶついでんぜん禅師了元からは、蘇軾そうしが黄州こうにきた初めのころから山に遊びにくるよう誘われていた [→作品番号 06-1-080]。しかし、蘇軾えんつうぜんいんは円通えんつうぜんいん禅院ぜんいんに

一泊しただけで廬山を離れ、さらに南へと道を急いだ。汝州じょに向かう本来のルートから離れたのは、筠州いんにいる弟に会うため、むろん廬山巡りより優先されるのである]

## ■【07-1-004】 過建昌李野夫公扱故居

【解題】廬山みざんの山裾から南に進んで建昌けんしやうに至ると、逆に北に向かう王適おうてきと出会った。王適は蘇轍の婿で、作品番号 06-3-047 などで見ているように、黄州こウを2度訪ねている。このとき王適は何らかの用事で筠州から旅に出たところだったようだ。建昌では、李莘しん [字は野夫]、李常りじやう [字は公扱] の兄弟の故居を訪ね、この詩を詠んだ。李常は蘇軾の親友で [→作品番号06-4-040など]、このときは都きョウにいて、その兄の李莘 [→作品番号06-4-069] も他郷で官職に就いていたので、故郷の家には誰もいなかった。

### 【訳文】

ここは彭蠡湖ほうらいこ [鄱陽湖はようこ] の東北みなもとの源にして、

廬山ろざんの西南の麓、

そして、修水しゅうすいのほとり――

誰がここに一對の玉 [李兄弟] を生じさせたのか。

二人を想ってもいまは見ることができず、

破れた家に竹が高く伸びあがっている。

近隣の人々は互いに戒めて合ってこの土地を犯すことなく、

十畝じふばかりの広さの竹林は束ねられるばかりにぎっしりと生い茂っている。

私がここに来たのは五月の初め、

竹は持箒かたを脱いで緑が新たになっている。

私に向かって鳥が静かに鳴き、  
 村の人々はここに宿をとるよう勧めてくれる。  
 行きつ戻りつ、去り難している間に、  
 細い月が高い木の上に掛る。  
 遥かに想像する――  
 いつの年にか、老いた兄弟はここに帰ってきて、  
 官員の印を解き、緩い衣に着替え、二つの<sup>ベッド</sup>牀を並べる、  
 竹の軒端に夜の雨が鳴り、  
 伏して近くの寺の鐘を聴く、  
 窓辺では燈火が書物を照らしている……

【補足】[蘇軾にとって、<sup>ベッド</sup>牀を並べて夜の雨音を聞くこと、すなわち「夜雨対牀」は兄弟愛の象徴 [→作品番号 02-1-013] で、<sup>り</sup>李兄弟もまたそれを理想とするであろうというのである]

## ■ 【07-1-005】 与子由弟

【解題】官員としての正しい振舞い方は、肉親の情よりも皇帝の指示に従うのを重んじて直ちに汝州に行くべきであるのに、大きく迂回してまで弟に会おうとしたのは、今後の身の振り方についてどうしても弟と相談したかったからであろう。汝州は都に近く、それだけ<sup>こう</sup>黄州よりも危険性が高いと警戒しなければならなかった。都に召喚された<sup>とうげんはつ</sup>滕元発がすぐにあらぬ嫌疑で告発された悪い前例もあった [→作品番号 06-5-003]。蘇軾はこのころにすでにあるプランを描きつつあって、一刻も早く弟に会って意見を聞いてみたい気持ちでいたのではないだろうか。これはお道の途中で弟に送ったメモ。

【訳文】

すでに奉新県に宿をとりました。旦夕のうちに会えることでしょ。

【補足】[奉新県から筠州までは数十キロである]

■【07-1-006】 将至筠、先寄遲、适、遠三猶子

【解題】あとわずかで筠州というところにまでくると、蘇轍の息子の遲、适、遠がこちらに向かってきているとの知らせが入り、この詩を作って3人に寄せた。

【訳文】

露に宿り、風を食らって六百里、

明朝は南江[筠州の川]の水を馬に飲ませてやることができる。

いまから豊盈犀角[状貌の優れたさま]の諸君等に会うわけだが、

これより先に玉雪[色白の秀才]の王君に会った。

諸君等と牀を並べて連夜の語りをしたいと思っている。

きっと諸君等のことだから、星を上に乗く早朝に町を発ったのだろう。

そういえば、私は夜にこどもの虎[蘇遠の幼名は虎を意味する於菟である]を夢に見た。

きっともう立派な髻髻が両耳に垂れているのだろう。

思い出すのは、

時の移りに従って、私が古河東[河中府]へ移動となって済南[齊州]を過ったときのこと、

春がまだ動かない残雪の中で、やはり諸君等が迎えに出てきてくれた、

たくさんの酒や肉を持ってきてくれて、我が家族は大いに喜んだのだった。

それからの私はすっかり落ちぶれ、

一頭の羸馬[疲れた馬]と化し、

宿場の荷担ぎ人夫とも「おれ」「おまえ」で呼び合うありさまで、  
 そのような私を見て、諸君等はきっと驚くに違いない。  
 それでも身体は健やかなので、  
 窮愁の内にあるのをひたすら恥ずかしく思わずともすみそつだ。  
 私は諸君等の父上のために十日間ほど留まるつもりだ。  
 それとてぴかりと稲妻が光る間のこと、何のたのみにもならない。  
 だから急いで詩を作らないとならない。  
 ほろ酔い加減の二人の老人[蘇軾、蘇轍の兄弟]の詩は、  
 たぶん酒のうまさには勝るであろう。

【補足】[(1)「玉雪の王君」とあるのは王適のこと。蘇軾自身の注で、「建昌で北に行く王適に会った」と記している。(2)蘇轍の第三子の誕生を祝った詩を作品番号05-1-014で見ている。赤ん坊だった「虎」もすでに11歳になった。(3)詩の中ほどで「<sup>さいなん</sup>済南を<sup>よぎ</sup>通り」とあるのは、かつて<sup>みつ</sup>密州知事の任を終えて次の任地[始めは<sup>かわちゆう</sup>河中府とされていたが、後に<sup>じよ</sup>徐州に変更される]に向かって移動する途中で済南に立ち寄ったことを指す[→作品番号05-3-003]。そのときも蘇轍の子等が町の外にまで迎えに出てきてくれたのだった]

## ■【07-1-007】端午游真如、遅、适、遠従、子由在酒局

【解題】蘇軾は4月末に筠州に到着した。兄弟の久しぶりの再会であったのだが、弟はなかなか多忙で、端午の佳節も仕事で役場に出なければならず、兄は3人の甥とともに<sup>しんによ</sup>真如寺に遊んだ。詩題にある「<sup>しゆきよく</sup>酒局」は、塩税や酒税の管理をする蘇轍の執務室である。

### 【訳文】



ひとたび弟と別れてから、

端午の節句はこれで七回を数える。

端午の節句といえば、

五色の糸を身に付け、菖蒲の根を漬けた酒を飲んで悪病をよけるのだが、

私は俗世の糸に繋がれ、心には菖蒲酒よりも苦いものがあり続けた。

今年は、馬にまたがってここにきてからは、佳節の訪れを毎日数えて待っていた。

甥たちは私がかいていることを喜んで、かいかいしく馳走を並べてくれた。

水餅<sup>すいぺい</sup>——これを食べるのは蜀<sup>しよく</sup>の風習で故郷を思い出させ、

飯筒<sup>はんとう</sup>——これを水に投げ入れるのは楚<sup>そ</sup>の風習で人の心の優しさを偲ばせる。

私はいった、

「ちよいとでも酔ったなら、故郷なまりがまんまん飛び出してしまつたらうな」

ところがその日になってみたら、

弟は官に仕える身の悲しさで、酒糟の匂いに埋もれてあつあつで、

仕方なく私は三人の甥とともに出て、古利に禅僧を訪ねることにした。

寺にきてみたら、私の出番はなく、

禅僧とのちゃんとした議論は梁<sup>りやう</sup>くん[蘇<sup>そ</sup>遲<sup>ち</sup>の幼名]と羅<sup>ら</sup>くん[蘇<sup>そ</sup>适<sup>かつ</sup>の幼名]に任せ、

詩を詠む順番は虎<sup>こ</sup>ちゃん[二於菟<sup>そと</sup>、蘇<sup>そ</sup>遠<sup>えん</sup>の幼名]に譲る。

帰ってからは、仕事にばかり精を出す弟をからかって笑い、

長く端午の節句を一緒に過ごすことができなかった憂さばらしとする。

【補足】[蘇軾は年次の経過を極めて正確に記憶している。これより前に端午の節句を弟と一緒に過ごしたのは徐州知事として赴任した直後のこと [→作品番号 05-3-026]。そのとき 42 歳であったから、確かにこれはそれから 7 年後のことである]

## ■ 【07-1-008】 宿資福院

【解題】<sup>いん</sup>筠州の近くに<sup>りゅうせん</sup>竜泉県があり、このときの知事は<sup>こうていけん</sup>黄庭堅 [→作品番号 06-4-015 など] の兄の<sup>こうたいりん</sup>黄大臨で、<sup>しふくいん</sup>蘇軾は会うために竜泉を訪れた。その折に<sup>しふくいん</sup>資福院に泊まってこの詩を詠んだ。

## 【訳文】

奥深い寺の林を、明るく月が照らし出し、

<sup>こうこ</sup>江湖[田舎]の風光がしみじみ心に入ってくる。

我が衣は爐の煙にすっかり染まり、

石の鼎では静かに茶が煮られている。

山あいの官舎の上に無数の星が光り、

この僧院は、人生の旅人の舟が宿るところ。

都ではこの夕べにも人々が国事を愁いているであろうに、

私は<sup>せいしゆ</sup>聖主[皇帝]<sup>ところ</sup>の意に適う意見をいまだかつて出したことがない。

## ■ 【07-1-009】 阮郎帰

【解題】この詞の制作時期は不明であるが、<sup>いん</sup>筠州訪問のころにどこかの寺で休息した折に詠んだとみてもよいであろうか。

## 【訳文】

緑槐高柳咽新蟬、[<sup>えんじゆ</sup>緑の槐、高い柳、初めて鳴き出した蟬]

薰風初入弦。[薰る風は古代の琴の音を奏てます]

碧紗窓下水沈煙、[<sup>みどり</sup>碧の紗<sup>カーテン</sup>のかかる窓の下に<sup>すいせんこう</sup>水沈香の煙]

棋声驚昼眠。[碁石の音で昼寝から目覚めます]

微雨過、[微かな雨が通り過ぎ]

小荷翻、[小さな蓮の葉が翻り]

榴花開欲然。<sup>ざくろ</sup>[榴の花が燃えるように開こうとしています]

玉盆纖手弄清泉、[ほっそりとした手で清らかな泉の水を盆に掬おうとすると]

瓊珠碎却円。<sup>たま</sup>[珠が蓮の葉の上で砕けて無数の円になります]

【補足】[泉の水を汲んだほっそりとした手<sup>せんしゅ</sup> [纖手] の持ち主は誰なのか。王朝雲<sup>おうちよううん</sup>であったと想像してみたい気もする。前年の冬に生まれたばかりの逯<sup>とん</sup> [→作品番号 064-057] を伴っての旅はたやすいものではなかったはずで、蘇轍のもとにいた日々は少しはほっとできるものだったのではないだろうか]

## ■ 【07-1-010】 別子由三首兼別遲

【解題】筠州滞在は10日間ほどで、5月8日に兄弟は別れ、蘇軾はこの詩を詠んだ。第一首と第二首を弟に、第三首を甥の蘇遲に贈った。

### 【訳文】

其の一

僕はわかっているんだ、

君が僕のことを<sup>おも</sup>念っているから、この別れを難しくしているのだと。

この別れはこれまでとは違う。

僕は風の中の楊<sup>やなぎ</sup>の花——いまだに行き先は定まらないけれど、

僕は雨の中の荷<sup>はす</sup>の葉——決して自身が濡れてしまうことはない。

三年の間、僕等は己を磨くために何百もの書物を読んだ。

僕等を一目見るなら、二つの壁が並ぶ以上のものがきつとあるはずだ。

君は、いつまでこの地に留まっていなければならないのかと嘆くことはない。

小劫しょうこうの六十倍だって風雨が過ぎ去るほどにあつという間なのだから。

【補足】〔(1) 最後にある「小劫しょうこう」というのは不思議な計算式によって出てくるとてもなく大きな数。(2) これまでの別れとは違うとっているのは、兄弟ともに苦難を経た結果として、人間としてより強くなった〔現代のはやりの言葉でいえばレジリエンスが増した〕という確かな思いがあるからなのだろう。黄州こうでの最初の年の終わりに天慶観てんけいかんに49日間籠る前に秦観しんかんに宛てて書いた手紙に、「期が満ちたときには、根本から立ち直っていることでしょう。その後でまた世間の事に関わっても、事がすめば心は根本のところに戻るので、再び駄目になることはもうないでありましょう」〔→作品番号06-1-103〕と書いていたのを思い起こさせる]

## 其の二

先君せんくん〔父〕は昔、洛陽らくように住みたいと考えたことがあった。

僕は、いま嵩山そうざんの麓に行こうとしている。

周公しゅうこうが洛陽らくようの地をトって都を築いたような大げさなことは考えていないけれど、

ために伊川いせんのほとりに姿のよい竹林でも買ってみようかと思っている。

また、緱山こうざんには泉眼せんがんというよい泉があって、

氷の玉のような清らかな水が、

町に沿い、林を穿って流れていると聞いている。

遙かに想像するのは、

その水に照らされる茅葺の庵があり、

二人の翁がそこで向き合っているありさま、

その姿はあたかも白い鶺鴒おおどりのようである。

【補足】〔(1) 兄弟の父の蘇洵そ じゆんは不遇の時代に各地を旅して洛陽らくようにも行き、貧乏暮らしの身には叶わぬ夢ながらこの古都に住んでみたいと考えた。蘇軾が指定された行き先の汝州じょは洛陽に近いので、この詩では嵩山そうざん、伊川い せん、緱山こうざん、泉眼せんがんといった洛陽周辺の名所の名を詠み込んでいる。(2) 茅葺の庵で向き合う翁は蘇軾、蘇轍の兄弟である。

「鶺鴒おおどりのようだ」というのは、歐陽脩おうえいしゆうの最晩年〔66歳〕に老友の趙概ちやうがい〔80歳〕を訪れたありさまを想像して蘇軾が詠んだ詩句「二人がやりとりする清らかな句は、雪の中で鶺鴒が鳴く声のようだ」〔→作品番号 04-1-026〕を想起させる。(3) この詩からは、蘇軾は当然のように汝州に向かおうとしていると見えるのだが、たぶん弟には別のプランを打ち明けていたのではないだろうか。しばらく後にそれは明らかになり、「小児しょうの遷延に ぐずぐず」が本格化する]

### 其の三

二人の翁が帰郷して退隱するのは難しいことではない。

ただし、そのためには、蘇の家を任せてよい子が必要だ。

憶うに、君〔蘇遲〕の父〔蘇轍〕がかかつて君くらいであったころのこと、

筆をひとたび下すと、ばらばらと三千もの文字が落ちた。

世間の人はそれを聞いて、

そんな馬鹿なことがあるものかとひどく笑った。

いつか君が子を持つときには、

決して二人の翁のようであってはいけない。

車を駆って千里の道をひいひい走り回ると、

ちよれき  
 樗櫟[使い道のない木]の大木が家の庭に堂々と聳えるのと、  
 いったいどちらがよいのだろうか。

### ■【07-1-011】初別子由至奉新作

【解題】弟と別れ、奉新県 [→作品番号 07-1-005] に立ち戻つての詩。時は5月半ば、夏の盛りである。

#### 【訳文】

君が好い夢を見たら、そこに僕の手紙が到着した。  
 二羽の鶺鴒が僕に先んじて飛んで、東軒[蘇轍の居所]の屋根に上がったのだ。  
 かくて僕等は端午の佳節を一緒に過ごした。  
 ひとつの喜びをいつまでも玩んてはられない。  
 いまここで首を回らせば、  
 それはもうすっかりなくなっている。  
 勢いよく流れる川の上に高く架かる橋——  
 来たとき渡った溪を僕はまた渡る。  
 暑い夏の空は茫茫としてどこまでも広がり、  
 君のいる町は藹藹として遠い彼方になった。  
 青い山はやるせなさの中にあり、  
 落ちゆく日は寂しさの外にある。  
 世の盛衰など、あれこれと僕の思うことではない……  
 離合集散だって、僕にとってさわりとなるようなものではない……  
 だから、僕は憂いを解くものを求める必要などないのだ。  
 最も肝要なことを僕はしまぼ了解してしまっているのだもの。

【補足】 [(1) 最初の句は、作品番号07-1-005で見た手紙のことを詠んでいる。(2) 別れに際して、弟はくれぐれも口を慎むよう兄にいったのだろう。弟の心配は痛いほどわかるので、この詩では敢えて、憂いもないし何もかもわかっているといってみせたのだろう]

## ■ 【07-1-012】 白塔鋪歇馬

【解題】 <sup>はくとう ぽ</sup>白塔鋪というところで馬を休ませて詠んだ詩。

### 【訳文】

前方に、<sup>かんざん ろざん</sup>甘山と廬山が向き合っている。

林の隙間から、やわらかな日の光が漏れてくる。

東の国では、<sup>おそ</sup>晚い蚕ために桑の葉を切り出したところだろうか。

南の国では、早い稲の苗を植え移したところだろうか。

谷の水は、人が行くのに随うよう<sup>はるかほるか</sup>こして迢迢へと急になり、

<sup>いわお</sup>巖の花は、馬の鼻先を撃って<sup>かさなりあつ</sup>冉冉で香りが立つ。

望み見るわが眼は、飛ぶ鳥とともに遠くへと及んで行く。

深く白雲の重なり合うところ――

ああ、わが故郷はどこであろうか。

## ■ 【07-1-013】 初入廬山三首

【解題】 <sup>ろざん</sup>廬山を目の前にしたなら、この機会を逃すまいと思うのが当然の心理であろう。それでも弟の蘇轍<sup>いん</sup>は筠州に行くことを優先して、棲賢谷<sup>せいけんこく</sup>を訪れただけですぐ立ち去り [→作品番号 06-2-021]、蘇軾も弟に会うことを優先して<sup>えんつうぜんいん</sup>円通禪院に一泊しただけだった。弟との再会を果たしたからには、皇帝に指示に従ってすみやかに<sup>じょ</sup>汝州に向か

わなければならぬのだが、蘇軾は「当然の心理」に任せて、しばらく廬山に遊んだ。  
これは山中に入った第一印象を詠んだ詩。

【訳文】

其の一

この青い山々はもとの知り合いでなく、

たかぶる  
偃蹇ありさまは、なかなか親しめそうにない。

ろざん かお し  
廬山の面をよくよく識るなら、

後にはなつかしい友のようになるのであろうか。

【補足】 [これは、筠州に行く前に廬山を見たときの印象であるのかもしれない]

其の二

昔から、清浄な心地で賞翫することを懐い、

こころ はる もや  
神ばかりを、杳かな藹の間で遊ばせていた。

今やこれは夢ではない——

ま  
真実しかと廬山に在るのだ。

【補足】 [これは、二度目に廬山にきたときの印象であるようだ]

其の三

わらじ  
芒鞋を履き、

青い竹の杖の先に百錢を引っ掛け、

深い山の中を遊ぶ。

不思議なことがあればあるもの……



東の坡たかぼりで瓜を作っていたこの農夫を、  
山の人々の皆が知っているのだ。

【補足】[末句において、原詩では自身のことを「故侯」と称している。「故侯」は作品番号 06-1-005 などで見えた召平しょうへいを指す。召平は秦しんの時代には高い位にあったが、世の混乱から逃れて一農夫となり、長安ちやうあんの東の農園で瓜を栽培した。召平の作った瓜は甘く、後にその名が知れ渡った。蘇軾そ せきはもとより有名人で、廬山ろ ざんでは行く先々に待ち受ける人がいた]

## ■ 【07-1-014】書導師詩

【解題】廬山ろ ざんの浄慧じやう え禅院ぜん いんにある温泉とうせんに遊び、この短文を書いた。ここの湯泉では硫黄泉が湧き、湯治の場となっていた。

### 【訳文】

湯泉とうせんに遊び、そこに書き留めてあった百余篇の詩文をみ、導師じゆんしのこの一偈いちげがよいと思った。

禪庭誰作石龍頭、[禪寺の庭に誰がこの石の竜かしろの頭を作ったのか]

竜口湯泉沸不休。[竜の口から温泉が沸いて休むことがない]

直待衆生塵垢尽、[衆生はこの湯で塵ちりや垢あかを流し尽くそとするのだが]

我方清冷混常流。[私は普通の水の流れの内にせいれいあっても清冷である]

戯れに一絶句を作ってこれに応えた。

石竜有口無根、[石の竜には口があるが、口には根がない]

自在流泉誰吐吞。[誰がその口から自在に流れる水を吐き出させているのか]

若信衆生本無垢、[もしも衆生が本来は無垢であるのなら]

此泉何処覓寒温。[この泉にしても、熱かろうか冷たかろうかが構い乱ないのだ]

げんほう

元豊七年五月十三日。

【補足】[<sup>じゆん し</sup> 遵師とあるのは<sup>か じゆん</sup> 可遵という僧で、このときは<sup>えんつうぜんいん</sup> 円通禅院 [→作品番号 07-1-001] に退居していた。蘇軾が可遵の句を褒めたことが円通禅院に伝わると、可遵は有頂天になり、馬に乗って蘇軾の先回りをし、誇らしげに蘇軾の新しい句に唱和してみせた。それがあまりにも下手くそで大恥をかいた——きっと嘘であるに違いない話が伝わっている]

## ■ 【07-1-015】書葛道純詩後

【<sup>かつかく あざな どうじゆん</sup> 解題】<sup>ろ ざん かんじやくかん</sup> 葛格 [字は道純] とともに廬山の簡寂観に遊んでこの短文を記した。葛格は<sup>いん</sup> 筠州の人で、科挙に合格するのが遅く、短期間だけ地方官を務めた後に、このころはすでに引退していたようだ。サービス精神あふれる蘇軾は先輩格に当たる葛格を立て、筆を執ってその詩を書き残した。葛格の詩は可もなく不可もないもので、特に訳さずともよいだろう。

### 【訳文】

涼流絶壁散、靈煙翠洞深。巖際松風清、飄飄灑塵襟。

観蘿玩猿鳥、解組傲園林。茶果邀真侶、觴酌洽同心。

曠歲懷茲賞、行春始重尋。聊將横吹笛、一写山水音。

こうあん いん かつかく ろざん かんじやくかん  
高安[筠州]の葛格とともに廬山の簡寂観に遊び、葛格がこの詩を誦した。これを石に刻みたいから、私に書いてほしいといいた。

げんほう じょしゅうだんれんふくし  
元豊七年五月十九日、汝州団練副使蘇軾。

## ■【07-1-016】跋太虚弁才廬山題名

【解題】同じ日に蘇軾は慧日院にまで行き、この短文を記した。参寥の名が再びここに登場する。蘇軾が筠州に行っている間は参寥は廬山に留まっていたようだ。

### 【訳文】

だいかくぜんじ うんろうこう  
大覚禪師とは別れて十九年になる。大覚禪師は今は俗世間から離れ、海のほとりの雲楼[杭州の禪院]におられる。思いがけずここで大覚禪師が記されたものを見て、拳拳も巻を撫でて太息する。またお会いしたいと思っても、恐らくはできないであろうか。

さんりょうし ろざん  
たまたま参寥師とともに、廬山の北側から出て東に至ったところ、どこもが大覚禪師の旧跡[修行時代に過ごしたところ]であった。山中には、そのことを話してくれる大勢の人がいた。

えじついん しんかん べんさいだいし だいいい  
ここ慧日院には秦観と弁才大師の題名[訪問記録]がある。その後ろにこのように記して、参寥師に示す。

秦観は今年三十六歳、参寥師は四十二歳、私は四十九歳、弁才大師は七十四歳、大覚禪師は七十六歳である。吾等五人が一緒に会えることがあるのだろうか。

生きている者は笑い、死んだ者は嘆く。

げんほう  
元豊七年五月十九日、慧日院で大雨の中に書く。

〔(1) 大覚禪師は父の蘇洵が親しくしていた懷璉という僧で [→作品番号 02-1-002、04-2-052]、これより19年前とあるのは、蘇軾が都にいたときに会っていたということであろう。(2) 秦観、弁才大師、参寥の三人に親交があることは作品番号 06-1-081 で

見ている]

## ■ 【07-1-017】 登楼題名

【解題】 慧日院えじついんに宿泊したときの記録。蘇軾そしつファンにとってその廬山ろざん訪問は一大イベントであったので、細かい記録まで後世に伝えられた。

### 【訳文】

元豊七年五月二十三日、眉山びざんの蘇軾そしつは參寥さんりょうせんじ禪師とともにこの楼に登って雨を観た。

■ 【07-1-018】 世伝徐凝瀑布詩云、一条界破青山色。至為塵陋。又偽作樂天詩称美此句、有賽不得之語。樂天雖涉淺易、然豈至是哉。乃戲作一絶

【解題】 蘇軾そしつが広い廬山ろざんのどこをどのような道筋でまわったのかは必ずしも明らかではない。以下の詩文は順不同である。昔の日本人にとって、廬山で最も有名なところといえば香炉峰かうろほうであった。いまでも多くの高校の古文の教科書に、「少納言しょうなごんよ、香炉峰の雪いかならむ云々」という清少納言せいしょうなごんの『枕草子まくらのそうし』の一文が載っている。これは中宮定子ちゆうぐうていしが清少納言の知識レベルを試そうとした問いで、清少納言はすぐに白居易はくきよい [白居易はくらくてん] の詩にある「香炉峰の雪は簾すだれを撥かげて看みる」に倣ならって御簾みすを高く上げたので、中宮定子はいたく褒めた。その香炉峰の南に大きな滝がある。蘇軾はその滝を見て、後世に残るような名句を吐いたかという、そうではなかった。この詩の長い題は次の通り。「唐の時代に徐凝じよぎやうが（廬山の）瀑布を詠んだ詩が世間に伝承されている。しかし、『一条界破青山色』 [一条界破いちじょうかいす青山せいざんの色] の句などは全く塵陋ごみくずのようなものだ。白居易がこの句をすばらしいと称え、『これには敵わない』といったとされるが、それは徐凝のでっちあげである。白居易の語は平易で浅いこともあるが、こま

でひどくなることはない。戯れに一絶句を作る」。蘇軾が酒誥評した徐凝の詩はいまも名作としてよく引用されている。蘇軾がここで引いたのは対句の片割れで、対句全体としては「今古長白練飛、一条界破青山色」〔古いにしえから今に至るまで白練しろねりの絹が長く飛ぶようにかかり、その一条が青い山を分け破っている〕である〕

### 【訳文】

天帝は銀河のひと流れをここに垂らした。

古いにしえからこの滝を詩に詠み得たのはたまた李白りはくだけだ。

滝の水は飛んで流れて、

その滴しずくはいったいどれほどあるのだろうか。

それでも天帝は、

徐凝じょぎょうの悪詩をすっかり洗い流すのには使わなかったのだ。

【補足】〔ここで蘇軾が称赞している李白りはくの詩は以下の通りで、この詩の勢いに敵う詩は詠めないと観念し、徐凝じょぎょうをだしにして、この詩を踏まえて遊びの詩を作ったのだろう。ごみくず扱いされた徐凝はとんだ迷惑であったろう〕

日照香爐生紫煙、〔日こうるが香炉峰ほうを照らし、紫の煙もやが生じる〕

遙看瀑布掛前川。〔遙みかに看るのは、前の川に掛かる瀑布〕

飛流直下三千尺、〔飛んで流れて直ちに下るは三千尺〕

疑是銀河落九天。〔あるいは銀河きやうてんが九天〔天のまた上〕から落ちてきたのだろうか〕

### ■ 【07-1-019】 書司空図詩

【解題】五老峰ごろうほうの白鶴院はくかくいんに遊び、それから数年後にこの文章を記した。

## 【訳文】

司空図しこうとが己の詩を論じて、世の味わいの外の味わいを得たと考えた句がある。その中でも最もよいのがこれであろう。

緑樹連村暗、[緑の木々が村の暗がりへと連なり]

黄花入麦稀。[黄色い花はまだ稀にしか麦に入っていない]

また、この句もよい。

棋声花院静、[碁の音だけかして、花園は静まりかえり]

幡影石壇高。[石段の上高くに旗の影がある]

私はかつて五老峰ごろうほうに遊んで白鶴院はくかくいんに入ったところ、松の陰が庭に満ち、人は一人も見えなかった。

ただ、碁を打つ音だけが聞こえていた。その後、この句が工たくみであることを知った。ただ残念なのは、寒々しくていかに僧が詠んだかのようにあることだ。

杜甫とほの次の句は、オカが富健さいりき ふけんで、司空図などからは遠く離れている。

暗飛螢自照、[暗がりを飛ぶ螢は自らを照らし]

水宿鳥相呼。[水に宿る鳥は互いに呼び合っている]

四更山吐月、[真夜中過ぎに山は月を吐き]

残夜水明楼。[夜の残りに水が楼閣を明るく照らす]

【補足】 [(1) 司空図しこうと とうちゆうは唐朝の末期の困難な時代を生きた人。晩年は、当時の政治情勢に絶望して退隠し、唐の最後の皇帝が殺害されたと聞くと、絶食して命を絶った。ここに引用されている句は、司空図の詩集に残るのとは若干の字句の違いがある。

(2) 白鶴院はくかくいんで碁を打つ音を聞いたことは、さらに後にまた文章に書き残す。それは第12章で見ることになる]

## ■ 【07-1-020】 廬山二勝、并叙

【解題】 廬山ろざんで特に印象の強かった二カ所について詩を詠んだ。短い序文がある。

### 【訳文】

叙  
私は廬山ろざんに遊び、南に北に歩いて十五、六の奇勝を得た。ほとんど言葉で記述できないほどのものばかりで、しかもものぐさであるために詩を作らなかった。ただ最も優れたところを選んで二首の詩を作った。

#### 其一 開先かいせん ぜんいん 禅院の漱玉そうぎょく亭

高い巖いわに赤い日が下ると、  
深い谷に悲しげな風がやってくる。  
天帝てんていは青玉せいぎょく峽を押し開き、  
二匹の白い竜[滝]を飛び出させた。  
水しぶきが活れ飛んで霜や雪を散らし、  
神さびた滝壺の中で大空が揺れる。  
溢れた水は声も立てずに滑らかに流れ、

二つの岩に挟まれた谷へそそと瀉がれる。

私はここに来たまま立ち去ることができずにいると、

吊り橋の東に月が昇り、

そうぎよくてい 漱玉亭がはるかなはるか 蕩蕩な白銀の輝きを發し、

ふけゆく 沈沈なかですいしょう 水精の宮殿に化す。

そうだ、さんこう 琴高先生[いにしえ 琴の名手であった古の仙人]に随って、

赤い鯉にまたがって水の世界に消え去ってしまおうではないか。

蓮の葉を手に取り、ふわりと跳んで、清らかな滝壺に飛び込むのだ。

## 其二 せいけんこく 棲賢谷のさんきやうきやう 三峡橋

私は聞いている、

たいざん 泰山の尖った岩は、

日々に糸のような細い流れによって穿たれたものであると。

今ここに見るのは、

百の雷が一度に落ちるような音を立てて、

万世にわたって滝が岩と闘ってきた結果である。

深さは地の底を九回も突き抜け、

険しさはかのさんきやう 三峡[ちやうこう 長江の大峡谷]をも凌ぐであろう。

どこしえにたにがわ 尽きることのない溪川は、

底なしのあな 竇を満たそうとし続けている。

跳び跳ねる波は潜む魚を空に翻らせ、

どよめく響きは飛ぶ猿をも落としてしまう。

ぞっとする寒さは山の骨髄にまで入り込み、



草も木もことごとく堅く尖っている。

煙る霧くもが空濛として立ち込めるなか、

瀕洞こゝろとして音楽を奏するような音も聞こえる。

彼方に、吊り橋が彎彎わんわんとして垂れ下がり、

半月はんげつが激激として弓を張った形で昇ってくる。

玉淵潭ぎょくえんたんは神竜のすまいに近く、

晴れた昼にも霞が乱れ飛ぶ。

そこに瓶かめを垂れて清く甘い水を汲もう。

それは呑むべきであって、

隠者すずを気取って口を漱ぐべきではない——

ここは私などがいてよい場所ではないのだから。

【補足】[この2首は杜甫や韓愈の詩を踏まえて、天下の絶勝を詠んだ雄篇とされるが、難解な語句が容赦なく連射され、現代のわれわれにとってはあまり興味を誘うものではない。この訳文は、その難解さを8割方削ってひどく薄味にしている]

## ■ 【07-1-021】 題西林壁

【解題】蘇軾ろざんが廬山で詠んだ傑作として最も知られているのがこの詩。西林寺さいりんじの壁に書いた。

### 【訳文】

横から見るなら嶺み[山の連なり]を成し、

側面からなら峰ほう[ひとつのピーク]を成す。

遠近も高低もおのおの同じではない。

ろざん しんめんもく し  
廬山の真面目[真のありさま]を識らずにいるのは、

ただこの身がこの山中にあるからだ。

【補足】〔(1) 蘇軾がここで詠んだ「廬山の真面目を識らずにいるのは、ただこの身がこの山中にあるからだ」は、物事の渦中にある人にはかえって問題の本質が見えないという意味の成句として、現代の中国においてもよく使われている。(2) この詩を読むと、かつて杭州で詠んだ「朝方には呉山が横に並ぶのを見て、夕方には呉山が縦に並ぶのを見る」という句が想起される〔→作品番号 04-2-004〕。蘇軾は常に物事をさまざまな角度から相対的に見ているのである。(3) 廬山を巡り始めたときに「廬山の面をよくよく識るなら」と詠んだ句〔→作品番号 07-1-013〕と合わせて見ると、いっそう興味が湧くであろう。(3) なお、この詩は蘇軾の詩のアンソロジーには必ず引かれるので、伝統的な読み下し文も添えておこう】

横看成嶺側成峰、[横ざまに看れば嶺を成し、側ざまには峰を成す]

遠近高低総不同。[遠近高低 総べて同じからず]

不識廬山真面目、[廬山の真面目を識らざるは]

只緣身在此山中。[只だ身の此の山中に在るに縁る]

## ■ 【07-1-022】贈東林総長老

【解題】廬山には西林寺と東林寺があり、晋の時代の高僧慧遠は廬山に入って初めに西林寺に住み、後に東林寺に移ってからは二度と山を出なかったという。慧遠が入山したことで、廬山は中国仏教の一大聖地となった。これは東林寺の長老の常総に贈った詩。

### 【訳文】

たに 溪の声はすなわち広長舌[仏陀の説法]、  
山の色は仏法を得た清浄身しょうじょうしんに他ならない。  
夜の間に私は八万四千の偈げ[真理]を聞いた。  
いつの日にかこのことを人に挙げ示すことがあるだろうか。

【補足】[「八万四千の偈げ」を長老から教わったのではない。溪の音、山の色から得たのである。そのことは誰にも示すことができない[言葉では伝えられない]のである]

### ■ 【07-1-023】 与仏印

【解題】弟のところへと急ぐのでいまはまだ行けないと手紙を出していた仏印ぶつゐんぜん禅師じりょう了元げん [→作品番号 07-1-003] には当然ながら廬山ろざん滞在中ちゅうちゅうに会っている。ただ、そのときに記した詩文の類は残っていない。これは翌年に仏印ぶつゐんぜんに送った手紙。

### 【訳文】

年を経て法音ほうおん [仏印ぶつゐんの教え]をお聞きしていないために、経術は廢れてしまい、もはや鍛え直しようがないまでになっております。かたしけなくもお手紙を頂戴し、少しばかり俗臭が洗われたような気がいたします。このところお健やかにお過ごし、審つまびらかにいたしました。私は二年にわたって水陸万里の旅を続け、このところは疲れ、日々老病に迫られ、まして都では他所よりも十倍のごたごたがありますから、畏れずにはいられません。去年のように谷川のほとりで、八万四千偈げをお聞きすることが果たしてまたあるのでしょうか。遥か南に山門を望み見ようとして、手紙に向かって凄然せいぜんとしてしまいます。寒さ厳し折から、御自愛ごじあいくださいませ。

【補足】[(1) 上の詩で見た「八万四千偈げ」の語をここでも使っている。廬山ろざん滞在中ちゅうちゅうに仏印ぶつゐんぜん禅師とじっくり語り合う機会を得たのである。(2) この手紙は、翌年の終わり

に、いよいよ「小児の遷延」を終えて都に向かいつつあったときに書いたもので、時間順でいうと本章の終わりに置くべきものである]

### ■【07-1-024】書李公拙白石山房

【解題】蘇軾は筠州に行く途中で李常の故郷の家を訪ねたが〔→作品番号 07-1-004〕、廬山には李常が若いときに籠って勉学に励んだ山房〔白石庵〕があり、そこを訪ねてこの詩を詠んだ。李常の山房についてはすでに蘇軾が記した『李氏山房蔵書記』を見ている〔→作品番号 05-2-036〕。それは李常の依頼を受けて書いたもので、ここで初めて実地に山房を見たのである。

#### 【訳文】

たまたま流水を尋ねて険しい坂を登ると、

蒼い五老峰が笑い顔を見せてくれる。

もしも、仙人に出会ったら、

貴君〔李常〕への伝言を頼みたいものだ。

廬山の先生よ、

もう頭の上が白いのだから、

早くここに帰ってきたらよくはないかい」

【補足】〔『李氏山房蔵書記』〕に書かれていたように、李常の白石庵は、蔵書九千巻とともに昔通りに残されていた]

### ■【07-1-025】同年程筠徳林求先墳

【解題】廬山を出たのは5月末ないし6月初めだった。山の北麓から長江を目指し、

その途中で程筠〔字は徳林〕を尋ねた。程筠は同じ年に科挙に合格したいわゆる「同年」の間柄で、改革を批判したために官界では不遇であったようで、このときは帰郷して父の喪に服していたのだろう。先祖の眠る墓所に建てた思成堂と帰真亭のそれぞれについて蘇軾は程筠の依頼で詩を詠んだ。

## 【訳文】

### 其の一 思成堂

墓所を囲む樹木は山へと連なり、  
道端を照らすようにして、  
先祖を祀る祠堂〔思成堂〕が建っている。  
ここの松は大切に養われ、鹿が触れることもなく、  
祭祀のときには、鳥までも手伝いにくるほど馴れている。  
貴君が郷里を夢に見たのは、  
ここで祭祀が行われる寒食よりも必ず前で、  
貴君は小児の真似をして老いた両親を喜ばせるのだった。  
このあたり一帯は、貴君の先祖からの家風に感化され、  
道に酔った老人がいれば、人々が競って助ける、  
そのようなよきありさまが、  
遠く離れていても、想見できるのであった。

### 其の二 帰真亭

昔の人〔孔子〕は、  
桓司馬が自分自身のために立派な石の棺を用意しておこうとして、

三年かかっても完成しないのを笑った。

今の人[程筠]<sup>ていいん</sup>は、

自然の石をそのまま墓標とした鄭大夫<sup>ていたいふ</sup>を師としている。

貴君は父祖が亡くなってから悲しみの内にあり、

歲月<sup>ゆ</sup>の流れ祖くのさえ知らずにいる。

楸<sup>ひさぎ</sup>や梧<sup>あおざり</sup>が空しく老木となりゆく下で、

父祖を祀る礼法を昔のままに守り、

畦道の名も父祖が名付けたままに用いている。

梢<sup>こずえ</sup>の先に見えるあの石碑のもとに行き、

貴君が記した千字の文を読むとしよう。

【補足】 [(1) 生前に立派な石の棺を用意しておこうとして三年経っても完成しなかった桓魋<sup>かんたい</sup>のことは作品番号05-5-009で見ている。(2) 「千字の文」とは父祖の事績を記した文章である]

## ■ 【07-1-026】 陶驥子駿佚老堂二首

【解題】 陶淵明<sup>とうえんめい</sup>は廬山<sup>ろざん</sup>の北、尋陽<sup>じんよう</sup> [江州<sup>こうしゅう</sup>] の人であった。蘇軾<sup>そしつ</sup>は尋陽に行き、その地に住む同姓の陶驥<sup>とうき</sup> [字は子駿<sup>あざな ししゅん</sup>] のもとを訪れ、この詩を詠んだ。陶驥は佚老堂<sup>いつろうどう</sup>を建て、退隠生活を送っていた。

### 【訳文】

#### 其の一

後漢<sup>ごかん</sup>の時代<sup>こうゆう</sup>に孔融<sup>りよう</sup>と李膺<sup>りよう</sup>が初めて会ったとき、

「我等<sup>こうし</sup>は孔子<sup>こうきゆう</sup> [孔丘<sup>こうしゅう</sup>]と老子<sup>らうし</sup> [李耳<sup>りじ</sup>]以来、先祖代々の古い馴染みでありますな」といった。

まして、私は陶淵明<sup>とうえんめい</sup>を師と仰ぎ、先生はその子孫である。

先生はまさしく陶淵明その人——

わずかな俸禄のために我が身を縛られまいと、

官職に留まって歳月をいわずらに過ごすことをしなかった。

私は『<sup>ききよらい</sup>帰去来の歌』を歌う——

陶淵明は千載を隔てたまことの尚友<sup>しょうゆう</sup>〔偉大な古人の友〕である。

これまでは書物の中でのみ師と会ってきた、

それはこゝして先生と酒を酌み交わすのにはとても及ばない。

先生はお酔いになられたので、私はひとまず帰るけれども、

明朝また来ることをお許し下さるであろうか。

【補足】〔(1) 後漢時代<sup>ごかん</sup>の有名な賢者である孔融<sup>こうゆう</sup>と李膺<sup>りよう</sup>は、孔子<sup>こうし</sup>〔孔丘〕が老子<sup>ろうし</sup>〔李耳<sup>り</sup>〕の弟子であったとの伝説に基づいて、我等〔孔氏と李氏〕は遠い先祖からの師弟関係にあるといった。(2) この詩にいう『<sup>ききよらい</sup>帰去来の歌』とは、陶淵明の『<sup>ききよらいけい</sup>帰去来兮の辞』を音楽に合わせて歌えるように蘇軾<sup>しよくへん</sup>が作った『<sup>しよくへん</sup>哨遍』の詞である〔→作品番号06-3-042〕。(3) この詩の終わりで、陶驥<sup>とうき</sup>が酔ったようだから帰りますといったのは、陶淵明の詩に、「わしは酔ったので君は帰りなさい」という句があるのを踏まえている]

其の二

私は廬山<sup>ろざん</sup>を出たときに、

山に向かって飛ぶ一つの雲を見送った。

すると、道<sup>りくどうし</sup>でぱったり陸道士に出逢い、

これは千年前の人であると知った、

陸道士がこのようなことをいったからだ。

「あのころの友はいなくなりましたなあ。

なつかしい虎溪も塵のように消え去りました。

ただ佚老堂には幾世を隔てた子孫がいます。

陶淵明のように五字の詩をよく作り、

頭には酒を漉すための頭巾を載せています」

世間の人には先生のことを「小靖節」[靖節は陶淵明の諡]と呼んでいるけれど、

先生自身は「葛天氏の民」[葛天は上古の帝]と号している。

【補足】[この詩は慧遠 [→作品番号 07-1-022] の有名な故事を踏まえて作られている。慧遠は東林寺に籠って仏道を修め、寺の前の川、虎溪にかかる橋を越えることがなかった。ところが、友人の陶淵明と陸修静が訪ねてきたときには、話に夢中になっていたの間にか虎溪の橋を渡ってしまい、3人で大笑いをした。これを「虎溪三笑」という。廬山から尋陽にくる間にたまたま陸姓の道士に会ったのをおもしろくこの詩に詠み込んだのである]

## ■ 【07-1-027】 和李太白、并叙

【解題】尋陽 [江州] で道教の寺院を訪れ、この詩を詠んだ。序文がある。

### 【訳文】

叙

李白に『尋陽の紫極宮で秋に感じる』という題の詩がある。紫極宮はいまの天慶観である。天慶観の道士の胡洞微は、李白のその詩を刻んだ石を見せてくれた。胡洞微の師の卓玘が刻んだものである。卓玘はすでに亡くなり、道術に優れ、節義は人を超えるものがあつた。李白の詩に「四十九年非、



一往不可復い「四十九年は間違っていた、ひとたび往って復することはない」とある。私もまた四十九歳である。このことに感じて李白の詩に次韻する。

胡洞微ぎょくしは玉芝を植えて育てている。玉芝は一名瓊けいでんそう田草という。植えて七八年になり、「さらに数年も育てれば食べられるようになりましょう」といって私に贈ってくれた。そのことも合わせて書いておく。

【補足】りはく「李白の詩にある「四十九年は間違っていた」の句は孔子と同じ時代の蘧きよはく伯玉の言葉ぎょくを踏まえたもので、作品番号 06・5・006 でも見ている]

天慶観てんけいかんの虚寂堂きよせきどうに身を寄せて臥す。

月の明りがまばらな竹を浸し、

冷や冷やと我が心を洗う。

我が身の内に月の光をおさめたくて、

それを飲もうとしたけれど、手に掬えない。

流れる光に永く嘆息するのは、

私一人だけではなく、昔からのことだ。

四十九歳だった李白が、

この北向きの窓の宿へと、

私かに化してまた還かえって来たのか。

緬ほるかに懐おもうのは卓道人たく人たくき [卓珩]、

医者や易者の間あって[仙人であることを隠して]老いたのたろう。

仙界から謫せられたという李白はさらに遠くの人、

もとよりまた来ることなどはない。

世間は碁のようなものか、

変化を極めて同じ局面がまた現れることはない。

ただ玉芝ぎよくしはきつと老成し、

待てば蟠桃ばんとう[仙界の桃]も熟すであらう。

【補足】〔(1) 昔の人の詩にも次韻するのは、次韻の達人である蘇軾が始めたことであるらしく、後に陶淵明とうえんめいの詩に和したものを多数見ることになる。李白りはくの詩に和したこの詩は次韻の通弊として、もとの韻の位置に制約されてややごたごたした構成になっている。陶淵明の詩に和したものは、次韻の詩であることを全く意識させないほどに完成度が高い。(2) この詩にある「世間は碁のようなもの」[世道せどうは弈棋えきぎの如ごとし]とあるのは、碁のファンにはおもしろく感じられるであろう。(3) 蘇軾はこの後、慈湖じこの近くの山に遊んで、数本の石菖蒲せきしょうぶを採取した。それを鉢に植えて舟に持ち帰り、まわりにきれいな石を並べたりしてしばらく楽しんでいたのだが、これからの旅路に耐えられないだろうと考え、天慶観てんけいかんの胡洞微こどうびに預けることにし、その際に一文を書き添えている。それは石菖蒲について蘊蓄を傾けた文章で、記者には理解が及ばないので割愛する]

## ■ 【07-1-028】次韻道潜留別

【解題】黄州こうを一緒に発った「異人いじん」たちで最後まで一緒だった參寥さんりょう [道潜どうせん] とも長江ちやうこうのほとりで別れた。そのときに參寥が詠んだ詩に次韻した。

### 【訳文】

廬山ろざんに真の隠者が大勢いると貴僧から聞き、

私は高人こうじんに就いて俗世間との縁を断とうとした……。

喜ばしく思うのは、

禅の心を得た貴僧には、別れの言葉などはないということ。

それでいながら、

詩作にあまりにも打ち込んで髪がまばらになってしまった昔の人のことを、

貴僧は剃髪していながらなぜか気にしている。

疑うことがないのは、儒、道、仏の三教も実は一つであるということ。

我も物もついに無に還るのである。

私はこれより汝州じょに行く——

いつか北きたに開く窓を開けて、

貴僧とともに嵩山そうざんの三十六青山を見るであらう。

【補足】〔(1)「儒、道、仏の三教も実は一つ」の原文は「異同更莫疑三語」〔異同更いどうさらに三語さんごを疑うたがう莫なし〕で、三教は根本において同一であるとした議論は疑う余地がないということを書いてある。歐陽脩おうようしゅうや蘇軾そが文章の規範として仰かんいだ韓愈かんゆは、衰微してしまっていた儒学のルネサンスを目指して特に仏教を排撃したので、この点では考え方が非常に違っていた。宋代は三教の融合を特徴とする時代であった。(2) 參寥さんりょうとの間で交わされる詩は、仏教の専門語を多用していつも難解である。この詩も、新しい赴任地である汝州じょで再会しようと詠んだ終わりの部分以外は、見当はずれの訳である。嵩山そうざんは古来有名な名山で、洛陽らくようと汝州の間にある]

## ■ 【07-1-029】石鐘山記

【解題】廬山ろざんの東側には巨大な鄱陽湖はようこ〔古くは彭蠡ほうらいたく沢といった〕がある。蘇軾そは九江きゅうこうから長江ちやうこうを少し下り、その支流を南に遡って鄱陽湖のとぼ口まで行った。鄱陽湖を訪れたのは珍しい風光を見るためだけではなく、蘇軾が湖州で逮捕されてからずっと近くで支えてきていた長男の蘇邁そまいは、徳興とくこう県に赴任することが決まっています〔→作品番号 06-4-092〕、蘇邁はこれより鄱陽湖の水域を百キロほど渡り、さらに山中を百キ

口ほど進んで徳興に行くのであった。父子の別れは6月9日で、その折に蘇軾はこの文章を記した。

### 【訳文】

『水経』[河川について記した漢代の地理書]にこう書いてある。

「彭蠡[鄱陽湖]の口に石鐘山がある」

(『水経』に注を付けた)酈道元はこれについてこう書いている。

「下に深い潭を臨み、微かな風が浪を鼓すと、水と石が搏ちあい、洪鐘のような声をする」[だから「石鐘」の名がある]

この説を人々はずっと疑ってきた。鐘や磬[打楽器の一種]を水中に置いて、たとえ強い風が大きな浪を起こしたところで、鳴らすことなどできない。まして石がどして鳴るのか。

唐代に至って李渤はこの歴史的遺跡を訪れ、潭の上で二つの石を得た。扣いてその音を聆くと、南の石の声は函胡[と濁り]、北の石の音は清越[と澄み]、桴が止まっても響きが騰がり、余韻がしばらく続いてから歇んだ。李渤はこれでわかったぞと思った。

しかし、この説を私は最も疑う。鏗然と声を立てる石ならどこにだってある。ここだけが「鐘」をその名としているのはどしてなのだろうか。

元豊七年六月丁丑[九日]。私は齊安[黄州]から舟で発ち、臨汝[汝州]に適いつつあった。長男の邁が饒州の徳興県の尉として赴任することになったので、送って湖の口に至った。そこでいわゆる

「石鐘」とされているものを観た。寺の僧や小童が斧を持ち、そこらに乱れ散る石の間から一つ二つを選んで扣くと、磴磴と鳴った。私は笑って、もとより(それが石鐘のいわれのもとであることを)信じなかった。

その夜、月が明るく、私は邁と二人だけで小舟に乗り、絶壁の下に至った。大きな岩が側き立つこと千尺、猛獸か奇鬼のようで、森然として人を搏たんばかりであった。山の上に鶻が棲み、人の声を聞いて驚き起ち、磔磔と雲の間に鳴いた。老人が山の中で歎をし笑っているような声かき、ある者[船頭]

いて驚き起ち、磔磔と雲の間に鳴いた。老人が山の中で歎をし笑っているような声かき、ある者[船頭]

が「あれはこうのとり鶴鶴です」といった。

私は心が動揺し、還ろうとした。すると、水上に大きな声が生じた。じゅんじゅん噌吰と鐘や太鼓のように鳴りやまない。船頭は大いに恐れた。おむむ徐ろに観察すると、山の下にはどこも岩の穴罅ほらあながあり、その深さはわからない。微波きざなみが穴に入ると、涵澹澎湃として音を立てるのであった。

舟が回って二つの山の間に至り、入り江に入ろうとすると、流れの間に大きな岩があった。その上に百人が座れるほどで、中はがらんどうで、たくさんのあな竅があり、風や水が呑まれたり吐かれたりするたびに、かんかんとん窾坎鐘磬という声かした。これが先のじゅんじゅん噌吰と応じて音楽のようになるのであった。

私は笑って邁にいった。

「おまえに識るかい。じゅんじゅん噌吰というのは周の景王が造らせた無射の鐘の音と同じなのだ。かんじゅん窾磬というのは晋の魏献子が賜った歌鐘の音と同じなのだ。古の人が『石鐘』といったのはまさに正しかったのだ」

この目で見てこの耳に聞くことをしないで、ある事柄があるとかないか臆断するのはよろしくない。酈道元が見聞きしたのは私とほとんど同じであったのだろう。ただしその記述が詳細ではなかった。世間の士大夫は夜に絶壁の下に小舟を止めるということをしなかったので、きちんとしたことを知ることがなかった。獵師や船頭は知ってはいても、それを世間に対していうことがない。それで世に真相が伝えられなかったのである。あひはか陋な者が斧でもって石を撃って音を立て、その事実を得たと思いつ込んでいたのだ。だから私はここにこのことを記した。

つまるところ、酈道元の記述が簡潔でありすぎたのを残念に思い、李渤の陋なのを笑うのである。

【補足】そまい蘇軾は蘇邁を見送るとともに、『水経』に書かれていることの真偽を確かめるためにほやうこ鄱陽湖を訪れたのである]

## ■ 【07-1-030】邁硯銘

【解題】そまい蘇軾は蘇邁との別れに硯を与え、この銘を記した。

## 【訳文】

この硯を使って道を学ぶときは、常に渴き切った者のようであれ。

この硯を使って事に向かって進むときは、常に畏れをもつように。

この硯を使って財を治めるときには、常に人のことを思え。

この硯を使って裁きの文章を書くときには、常に生の大切さを思え。

## ■ 【07-1-031】 評文選四首

【解題】長男の蘇邁そまいと別れた蘇軾ちようこうは、長江に戻って東へと下り、その船の中で、『文選もんぜん』を読んで四篇の感想を記した。『文選』は南北朝時代に編集され、その時代までの主要な文学作品を収めた非常に価値ある書物として長く尊ばれ、日本でも奈良、平安時代の貴族の必読書とされた。しかし、蘇軾の評価はあまり高くなかった。四篇のうち、『文選』から不適切なものを取り去るべし [文選去取失当] の一篇を訳す。

## 【訳文】

舟の中で『文選』を読んでいる。残念なことに、その編集は無定見で、取舍選択がまるで当を得ていない。(南朝の)齊朝せいちよう、梁朝りやうちようの文章は衰えてたらしなく、(『文選』の編者の)蕭統しょうとう [昭明太子しょうめんたいし]の文はひどく冴えない。『文選』の序文を見るがよい、李陵りりやうの文章や蘇武そぶの五言詩は偽物であるのに、その見分けすらつかないのだ。いま陶淵明とうえんめいの詩集を見ると、喜ぶべきものが非常にたくさんある。しかし、『文選』には数首しか取られていない。そのことだけからしても、ほかの人の作品で漏れたものが非常に多いことがわかる。『文選』に収められている陶淵明作の『閑情賦かんじやうふ』は、『詩経』の「国風」の詩が「好色であるが淫らではない」と評された通りのもので、『詩経』の中でも本当に立派な「周南しゅうなん」の詩には及ばないのである。屈原くつげんや宋玉そうぎょくの辞は「周南」の類であるのに、蕭統はそれをけなしている。子供が無理に知ったかぶりをして偉そうなことを言っているだけなのだ。

げんほう

元豊七年六月十一日記す。

【補足】〔(1)『文選』の序文をけちよんけちよんに叩いて痛快である。『文選』に収録されている李陵の文章や蘇武の詩は後人のでっちあげであることは定説になっているし、『文選』に収められている『閑情賦』は陶淵明の作品でも特に出来の悪いものだ。蘇軾のこの感想は現代のわれわれの感覚にほぼ合致し、『文選』はあまり興味を誘わない退屈なアンソロジーである。(2)『詩経』について述べているのは作品番号06-4-073を参照。『文選』は本物を選び損なっているというのである。なお、蕭統のために少しだけ弁護しておく、韓愈以前と以後とで文学観が大きく変わり、なおかつ我々は西洋の影響を受けて文学観がさらに大きく変わったために、『文選』が面白く読めなくなったのである。蕭統が『文選』で提示した文学観は数百年にわたって中国のみならず日本にも大きな影響を与えた〕

## ■ 【07-1-032】書李白集

【解題】船で長江を下ること数十キロで彭沢に至る。彭沢は陶淵明が最後に官職に就いていた地であるが、蘇軾はそのことには触れず、李白の詩にまつわるこの短文を記している。

### 【訳文】

いま李白の詩集にある『帰来乎』、『笑矣乎』、『贈懷素草書』など数詩は決して李白の作ではない。

きっと唐末五代のころの貫休、齊己といった連中の詩であろう。

私はかつて富陽の国清院で李白の詩とされるものを見たが、極めて平凡な作であった。近ごろ、彭

沢の唐興院を過り、また李白の詩を見たが、これも李白の作ではない。

李白はもとより豪俊で語句をあまり選択しないので、詩集のなかに往々にして瞬時に思い付いた句が

ある。それで、妄庸<sup>やから</sup>な輩が偽物を選んで詩集に入れてしまうようなことにもなるのだ。杜甫<sup>とほ</sup>の詩であれば、誰も間違えて選んだりしない。

【補足】〔(1) 蘇軾はここで数篇の詩を偽物だと断じている。しかし、その説は受け入れられていないようだ。蘇軾は自分の見識眼に相当に自信があったのだがときには間違えることもある。(2) 富陽<sup>ふよう</sup>の国清院<sup>こくせいゐん</sup>に立ち寄ったのは杭州<sup>こう</sup>副知事のときであった〕

### ■ 【07-1-033】 与王文玉

【解題】彭沢<sup>ぼうたく</sup>から長江<sup>ちやうこう</sup>をさらに百キロほど下ると池州<sup>ち</sup>に至る。池州知事<sup>おうち</sup>の王琦<sup>あぎな</sup>〔字<sup>ぶんぎよく</sup>は文玉〕に会い、ともに蕭丞相<sup>しょうじやうしやうろう</sup>楼に昇り、作品番号06-1-051で見た文章を記した。これはその後で王琦に送った手紙。

#### 【訳文】

……お召しを受けて、敢えて参らぬことはないのですが、突然、ひどい瘡癩<sup>そうせつ</sup>が起り、長く座っていることができず、食事を用意させて、渡し場に船を泊めて横たわっております。山婦<sup>さんふ</sup>〔妻の王閏之<sup>おうにんし</sup>のこと〕を煩わしてよい薬を調合してもらっています。……

【補足】〔瘡癩<sup>そうせつ</sup>は何かのできものであるのだろう。この手紙を受けて、王琦<sup>おうき</sup>は蘇軾の看病をする人を派遣している〕

### ■ 【07-1-034】 天石硯銘

【解題】腫れ物を患いながらも蘇軾は船を進め、蕪湖<sup>ぶこ</sup>に至ると持ち前のサービス精神を発揮して、東承天院<sup>とうしやうてんゐん</sup>の蘊湘<sup>うんしやう</sup>のために筆を揮った。その経緯は作品番号06-3-052ですで見ている。その後、当塗<sup>とうと</sup>に至る船中でこの文章を記した。これは作品番号01-2-007として先に掲げたものであるが、もう一度ここで見ておこう。



【訳文】

私が十二歳のときのこと、(眉山びざん県の)紗穀しゃこく行にあった宅地の隅で、子供等と地面に穴を掘って遊んでいたところ、珍しい石が出てきた。魚のような形で、表面がつやつやで、浅い碧あお色であった。表も裏も細かくきらきら光り、叩くとかんかんと音がした。試しに硯すずりとして使ってみると、うまく墨がすれて、水が貯まって残ることはなかった。

父は、

「これは天が生んだ硯である。硯としての徳が具わっていて、ただ形が十分ではないのだ」

と言って、私にくれて、

「これは、そなたの文字[文学ないし学問全般]が進むしるし祥であるう」

と言った。

私はこれを宝として使い、この銘を作った。

父上の言葉をいただき、

それに違えるようなことはしない。

徳を主とし、

あるものは形も完全である。

徳と形と、

どちらを取るのを願うのか。

形にとらわれてへつらう、

世間にはそういう例も多い。

げんぼう

元豊二年[1079年]秋七月、私は罪を得て獄に下され、流されて家族は離れ離れに、書物は散り散

りに乱れた。翌年<sup>ことう</sup>に黄州に至ってからこの硯を探したところ、見つからなかった。それでなくなってしまったのだと思った。元豊七年[1084年]七月、(罪を赦されて黄州を離れて)舟で進んで<sup>とうと</sup>当塗に至り、書物を取めてある箱を開くと、忽然とこの硯がまた出てきた。甚だ喜び、息子の<sup>たいい</sup>迨と<sup>か</sup>過に渡した。硯を入れてあった<sup>こぼこ</sup>匣は<sup>たくみ</sup>あまり工なものではないけれど、父上が手ずから硯を受けるところを刻み、職人に仕上げさせたものであるから、これはまほかのものと換えてはならない。

## ■【07-1-035】郭祥正家、酔画竹石壁上、郭作詩為謝、且遺二古銅劍

【**解題**】<sup>とうと</sup>当塗での詩。題は「郭祥正<sup>かくしょうせい</sup> [字は<sup>あざな</sup>功夫<sup>こうふ</sup>]の家で酔い、石壁の上に竹を画いた。郭祥正はその謝礼として詩を作り、二振りの古い銅劍を贈ってくれた」。郭祥正は官界の先輩で、このころは政界から引退していた。

### 【訳文】

酒を得ると、  
空っぽだった我が<sup>はらわた</sup>腸に、何やら植物の<sup>せい き</sup>生氣が生じ、  
肝臓や肺臓から、もそもそと竹が伸び始める。  
林を作らんばかりの勢いとなり、  
もはや止めようがなく、  
貴君の家の、雪のように白い壁に向かって、  
ぱっと吐き出す。  
普段から私は詩を好むだけでなく、  
画も好んで、塙や壁を汚したりしてしまうので、  
いつも罵られてばかりいる。  
怒られなければそれだけで十分にお釣りがかるのに、

謝礼までたさったりするのは、世間に貴君のほかにもない。

ふたふりの銅劍は秋の水の光を発し、

貴君の二首の新詩は切っ先の鋭さをその劍と争う。

いま劍は我が傍らに置かれ、詩は我が手の内にある。

さてさて、竜のようはに吼えるのは、

銅劍であろうか、詩を吟唱する貴君であろうか。

【補足】かくしょうせい [この詩からは郭祥正となかなか楽しく過ごしたと知れるのだが、蘇軾は実は郭祥正をひどく怒らせてしまったということがりくゆう陸游のにゆうしよくき紀行文『入蜀記』[→作品番号 06-5-026] に記されているので見ておこう]

## 【訳文】

りくゆう にゆうしよくき  
陸游:『入蜀記』卷二より

り はく こじゆくじゆえい 李白の詩集に『姑熟十詠』という作品がある。私の一族の伯父であるりくげんえん陸彦遠がかつてこのようなことをいっていた。

とうば こう どうと よぎ こじゆくどう  
東坡が黄州から帰還して当塗を過ったときに、(石に刻まれていたその詩を姑孰堂で)読むと、手を打って大きく笑っていった。

「ひどい贋作です。李白がこのような語を吐くはずがありません」

それに対してかくしょうせい郭祥正は、李白の真作であると強く主張した。

すると、東坡はまた笑って、

「もしかすると、李白の生まれ変わりが作ったのでありましょかな」

といった。

それで郭祥正はすっかり怒ってしまった。

郭祥正はまだ少年だったころから特に詩に優れ、諸先輩から一目置かれて、李白の生まれ変わりだ

といわれ、郭祥正はそれを自負していたのだった。東坡はそのことで戯れたのである。

【補足】〔(1) 蘇軾の諧謔好きは、このように人を怒らせてしまうこともあった。郭祥正の顔色が変わったのを蘇軾は見てとると、その詫びとして竹の画を描き、さらに和解のしるしとして郭祥正が銅劍を贈ったという順序であるのなら、まるくおさまったことになる。(2) なお、『姑熟十詠』が偽物だと論じる蘇軾の文章が残っているが、郭祥正を怒らせたということは書かれていない〕

## ■【07-1-036】 竜尾硯歌、并引

【解題】当塗では方彦徳にも会い、この詩を作った。序文がある。方彦徳は上で見た郭祥正の友人である。

### 【訳文】

引[序文]

私はかつて『鳳唼石の硯の銘』を作った。そこに、「私は鳳唼の硯を一目見て、竜尾の硯も、この硯の前にあっては牛尾になってしまうと、恥ずかしがるであろう」[蘇子一見名鳳唼、坐令竜尾羞牛後]と記した。後に歙州の硯を求めたところ、歙の人から、「あなたには鳳唼の硯があるではありませんか。その上何をお求めになるおつもりなのですか」といわれてしまった。きっと鳳唼の硯を褒めたのが気にさわったのだろう。

方彦徳は竜尾の大きな硯を持っている。非常に優れたものだ。方彦徳は、「詩を作って前言を撤回するならば、この硯をさしあげましょう」といった。そこでこの詩を作った。

【補足】[いくつかの固有名詞があつてかなりごちゃごちゃしているので整理しておこう。歙州の硯[歙州硯]は天下に知られる名品である。歙州硯の一つに竜尾山の石で作られる硯がある。その竜尾の硯よりも、別の産地の硯の方が優れていると書い

たのが、『鳳<sup>ほう</sup>味<sup>しゆ</sup>石<sup>せき</sup>の硯<sup>すずり</sup>の銘<sup>めい</sup>』である。その銘には、「竜尾」と「牛尾」[原文は「牛<sup>ぎゆう</sup>後<sup>ご</sup>」。すなわち「鶏口となるとも牛後となるなかれ」の「牛後」]をかけたかなり皮肉なジョークがあった。それは歙州硯を愛する者にとっては笑ってすますわけにはいかないものだったのであろう。なお、鳳味石の硯については次の項で詳しく見ることにする]

黄色<sup>ぎよく</sup>い玉も透明<sup>こはく</sup>な琥珀も、

天はそれを出し惜しんだりしない。

天が恐れるのは、

凡夫が貪って死んでも手放すまいとすることだ。

竜尾<sup>りゆうび</sup>は単なる石材ではない。

それこは玉<sup>ぎよく</sup>の徳<sup>とく</sup>と金<sup>きん</sup>の聲<sup>こゑ</sup>が宿<sup>すく</sup>っている。

その徳と声から天が石を作ったのはいつだったのか。

人が初めてその石から硯を作ろうとしても石は嫌がらなかった。

鮑照<sup>ほうしょう</sup>や謝靈運<sup>しゃれいうん</sup>といった詩の達人が、

その硯を詩に詠んだところで石は気にも留めなかったし、

鐘繇<sup>しょうよう</sup>や王羲之<sup>おうぎし</sup>といった書の達人が、

その硯で筆を使っても石は知らん顔であった。

錦で包もうが、玉飾りのある箱に納めようが、極美の石の机に置こうが、

石にとっては塵芥<sup>ちりあは</sup>の中にあるとの変更はない。

まして蘇先生<sup>そ</sup>が『鳳味石<sup>ほうしゆせき</sup>の硯<sup>すずり</sup>の銘<sup>めい</sup>』を作って、

戯れに「牛後<sup>ぎゆうご</sup>」の語で嘲ったところで、怒ったりするはずもない。

竜尾の硯に水を湛えるなら、

碧い天を映し、雲を吹く風が生じ、  
窓辺からも机の上からも塵が消えてあたりは清らかになる。  
それでも石はいくらろう。

「わしは天地の間に生まれ出た一つの余り物でしかない」

蘇<sup>てたらめ</sup>先生は支離な人間で、

行きあたりばったり、大きなことといえば、ちまちましたこともいい、

筆を持って書くのは、春の蚯蚓<sup>みみず</sup>やら秋の蛇がのたくった跡である。

東<sup>とう</sup>坡<sup>ば</sup>老人が何をいおうとほったらかしにするがよい。

仁<sup>じん</sup>者<sup>しや</sup>は細かい是非を問うことなどしないのだ。

【補足】[蘇軾はのらりくらりと弁を弄し、はっきりと前言を撤回したのではなかった]

## ■ 【07-1-037】書鳳唼硯

【解題】上の詩の序文にあった鳳唼硯<sup>ほうしゅけん</sup>とは、建州<sup>けん</sup>の鳳凰山<sup>ほうおうざん</sup>に産する石で作った硯に対して、蘇軾がその名を与えたもので、その経緯がこの短文に記されている。なおこの文章はこれより4年前に書かれたものである。

### 【訳文】

建州<sup>けん</sup>の町の北に鳳凰山<sup>ほうおうざん</sup>があり、鳳<sup>おおとり</sup>が飛んで舞い下るような形状をしている。山の下に、叩くと銅や鉄のような音のする石がある。それで硯を作ると至って美しい。表面は青竹のようにつやつやとしていて、ほとんど玉<sup>ぎよく</sup>のようである。墨が滑ってしまうように見えるのだが、墨との相性はとてもよい。

熙寧五年[1072年]、国子博士の王頤<sup>きねい</sup>が初めてこの石で硯を作り、私にその名を求めた。それで私は「鳳唼硯」と名付けて、戯れにその底に銘を記し、「坐令<sup>そ</sup>竜尾<sup>りゅうび</sup>羞<sup>ぎゅうご</sup>牛後<sup>ぼくご</sup>」[坐<sup>ま</sup>に竜尾<sup>りゅうび</sup>をして牛後<sup>ぼくご</sup>を羞<sup>はづか</sup>し

めん]とした。すると、歎しゅうの人々がこの言葉を非常にうとましく思った。

あるとき私は人伝ひとでんてに歎しゅうの人に硯いんを求めると、歎しゅうの人々は、「鳳唼石ほうしやくをお使いおつかいになればよろしいでありましよう」といって、ついによい硯いんを得ることができなかった。それによって、名は物の累つらみとなり、嫉み争ねたうもになると知ったのである。ある人は、「嫉み争ねたうことになるとか、そんなことは石は知りませんでしゅう」といったので、私は、「嫉み争ねたうことを知らないのだったら、美しい名を好むことも知らないはずですよ」と応じた。

【補足】 [(1) 熙寧五年とは、蘇軾きねいが杭州こうにいたときで、そのころに鳳唼堂ほうしやくどうを建てているので [→作品番号 04-1-011]、「鳳唼」は当時の好みのワードだったので。

(2) 王頤おういはかねてから親交のあった人物で、王頤けんが建州けんに赴任するのを見送ったときの詩を作品番号 03-2-005 で見ている。建州は現在の福建省の北部の町で、蘇軾きねいは生涯のうち一度も足を踏み入れたことがない。(3) 蘇軾きねいは王頤けんに与えたものも含めて『鳳唼硯ほうしやくいんの銘めい』を三回作っているが、他の二つの訳は割愛する]

## ■ 【07-1-038】張近幾仲有竜尾子石硯、以銅劍易之

【解題】 竜尾りゅうびの硯いんも鳳唼ほうしやくの硯いんの前まへでは牛尾ぎゅうびになってしまおうと戯ざれ言ことを書いていた蘇軾きねいだが、その実、竜尾りゅうびの硯いんに御執心おんしやくしんであったというのがこの詩。張近ちやうきん [字は幾仲あざな きちゆう] が竜尾山りゅうびざんの子石しせきで作った硯いんを持っていると知り、手持ちの銅劍どうけんと交換しようとして申し出た。類るいをもって前の詩しに続けて訳すが、詩中しちゆうで「雪堂せつどう」に言及げんじつしているので、黄州こうで詠えいんだものであろう。銅劍どうけんはもしかすると鄭文ていぶんから贈られたもの [→作品番号 06-1-049] なのだろうか。

### 【訳文】

我が家の銅劍は赤い蛇のようだ。

貴君の家の石硯は蒼い壁のようで、窪んだ楕円形をしている。

貴君が我が銅剣を得たなら、どこに行くのか——

剣の飾りがちやがちや鳴らしつつ、唐朝の宮殿をのっしのっしと歩くのだ。

私が貴君の硯を得たなら、何に使うのか——

雪堂の窓の下で、古代の詩歌をさらさらと写すのだ。

銅剣も石硯も、この世に存在するものとしては、

人と異なることはないし、風に随う花と同じく、

高くに飄ったり、下に落ちたりする。

剣を飾るのが草であろうか、宝玉であろうか、

いずれにしても剣自体とは関わりのない外物であり、

皇帝の詔を書こうか、道家の教理を書こうか、

どちらにしても硯自体にとっては価値に違いはない。

誰もが知っているように、

昔、秦国の王は趙国が有する宝玉が欲しくて十五の町と交換しようと申し出た、

趙国の藺相如は秦国に乗り込んでその偽りを見抜いて宝玉を守り抜いた、

昔、鮑という男は、親戚の韋君が乗る二頭の馬が乱くなり、

家にいる二人の歌妓と交換したところ、女も馬ももとの家を思っ泣き続けた。

そうした交換に比べたら、

銅剣も石硯も同じ無情のもの、釣り合うのではなからうか。

永く好を結ぼうではないか。

【補足】[(1) この詩に応じて、張近は蘇軾に硯を贈るとともに、詩を添えて銅剣を返却した。その詩にさらに応じた蘇軾の詩があるのだが、解し難いところがあって、残念ながら訳出することができない。(2) ついでながら、この詩には以下のような跋



文が付してあったともされる]

【訳文】。

『剣易張近竜尾子石硯詩跋』[剣をもって張近の竜尾子の石硯に易える詩の跋]

私は若い頃は、人が声色を好むように書画筆硯の類を好んだ。大人になるにつれて自覚が生まれ、老いてからは己を笑い、この病はもうなくなったように思った。ところが昨日、張君の卵石の硯を見て、この病がまた萌え出て、ついに剣と交換した。硯を手になると、果たしてこれに何の益があるのだろうか、己の習性を除き尽くすのは難しいと知ったのだった。

【補足】[ここで「卵石」と記しているのが「竜尾石」であろう。なお、蘇軾には『卵石の銘』という作品があるが、訳は割愛する]

■ 【07-1-039】眉子石硯歌贈胡閻

【解題】これはもう少し長江を下ってからの詩であるが、硯を詠んだ詩としてここで見ておこう。眉のような形をした硯「眉子石硯」の歌。胡閻という人に贈った。蘇軾の遊び心が充満した詩だといえるだろう。

【訳文】

誰もが知っているように、

唐の玄宗皇帝は成都の画家に命じて「十眉図」[女性の眉の十種のモードを写した図]を描かせた。

そのころ「横雲」とか「却月」とか名付けられた眉の新奇を競い合っていた。

風流人は、少々擷める眉[楊貴妃のこと]を描いた図を指さし、

「ここに、漁陽[反乱を起こした安祿山の根拠地]の馬の嘶声が潜んでいたのだ」という。

やはり誰もが知っているように、

たくぶんくん 青い扉の細い隙間に碧の眉を寄せ、みどり 司馬相如し ば そうじょ かん [漢の時代の成都の人]の姿を盗み見た。

司馬相如は卓文君に見染められてその運命が決まってしまう、

色に迷って健康を害し、千金を費やして薬を買わなければならなくなった。

司馬相如や楊貴妃ゆかり しよくに所縁のある蜀の地では、

とかく女性の眉のために天帝が憂うほどの騒乱が続いたので、

眉を流罪に処し、

貴君の家に伝わる硯に閉じ込めたのだった。

その眉が、小窓の薄い幌カーテンの下で流し目を使い、

暁の夢に貴君の顔を赤く染めさせようとしたところで、

古の維摩居士いにしえ ゆい ま こ じのように空を談じる貴君であるから、

いかなる花が飛びかかっても衣に触れることさえできないのだ。

試みにこの硯で天女に墨を磨らせてみるがよい、

貴君はたちまち千の偈げを書くてあろけれど、

その実、そこには一語もないのである。

【補足】 [(1) 詩は成都せい とつながりで、漢代の文人の司馬相如かん だい し ば そうじょを引き出してくる。司馬相如が色に迷って健康を害したというのは不確かな伝説である。(2) 詩の後半で、硯が流し目を使って胡閨こ ぎんを誘惑すると想像するところは、異界の女性と恋に落ちる中国の伝奇小説によくあるパターンと類似する。(3) 結びの句は、真理を伝える言葉はいかに多言であっても実は無言であるということいっているのだろう]

## ■ 【07-1-040】 与王文玉

【解題】 蘇軾は6月末頃に金陵きんりょう こうねい [江寧府、現在の南京なん きん]に到着した。金陵は南北朝時代に長く南朝の都が置かれ、また五代十国時代には南唐国ご だいじゅうこく なんとうこくの都が置かれた由緒ある大

都市である。これは到着後すぐに池州知事の王琦 [字は文玉] [→作品番号 07-1-033] に宛てた手紙。

### 【訳文】

昨日、お手紙を頂戴しました。その後もお健やかに過ごしのことを承りました。私は金陵に至り、瘡毒はまた解けません。今日は下剤を服し、ひどくやつれてしまいました。来客があっても、長く話すことはできません。極めて短いお手紙で失礼します。暑さが続く折から、万万自重されますように。

### ■ 【07-1-041】 白鷺亭題柱

【解題】蘇軾は金陵に半月余り滞在したことがこの短文から知れる。金陵の名所である賞心亭の西にある白鷺亭の柱に記したもの。つまり落書きである。

### 【訳文】

東坡居士は黄州から汝州に行く途中で、この亭の下に船を半月ほど泊めた。日頃の想いを傾けて江山を楽しんでいる。元豊七年七月十四日、蘇軾が題す。

### ■ 【07-1-042】 張庖民挽詞

【解題】詩の題にある張庖民 [字は翔父] は金陵の人で、2年ほど前に他郷で亡くなり、黄庭堅がその死を悼む詩を作った。誰かがその詩を蘇軾に見せ、張庖民の挽歌を作るよう頼んだ。この詩はさほど興趣を誘うものではないが、頼まれれば断らずに、それなりに巧みに応じるといふ蘇軾の義理堅さを知ることができるであろう。

### 【訳文】

張庖民は、

晋しんの時代とうえんめいの陶淵明かん、漢とうほうさくの時代の東方朔さくのような人――

心安らかに山水に向かい、文章を作ることに長じ、

侯公こうこうの地位などは軽んじ、囊ふくろいっぱいふくの錢かぜも羨あやんだりしなかった。

天から与えられた才能が高い人は鬼神に憎まれるといふけれど、

骨が朽ちてもその名は永久に芳しい香りを残す。

張庖民が葬られた地は暗く閉ざされた遠くにあり、

金陵きんりょうの旧宅は荒れたままになっている。

張庖民を偲ぶ人々よ、

私のこの詩は刻むまでもない、

優れた哀悼の辞をすでに黄庭堅こうていけんが作っているのだから。

【補足】[蘇軾が依頼を断らずに応じることが多いのは、サービス精神に溢れ、義理堅いからだけではなく、恐らく、実益を伴うこともあったからなのだろう。この詩を作ってもらった人にしても、何がしかの金品をもって謝礼に代えたであろうから、それは長旅を続ける蘇軾にとって大いに助かることであったはずだ]

## ■ 【07-1-043】次韻段縫見贈

【解題】金陵きんりょうは大きな町で、蘇軾が来たと知れるとたちまち大勢の人が会いに訪れ、にわかに次韻の詩が多くなる。これは段縫だんほう [字は約之あざな やくし] から贈られた詩に次韻したものの。段縫は州知事などを歴任し、このころは政界を退いて金陵にいた。

### 【訳文】

戦国時代に全国を遊説してまわった策略家そしんの蘇秦そしんだって、

洛陽らくようの近くによい農地を持っていたなら、

代々の家業に打ち込んでいたはずだ。

蘇秦の知恵をもってすれば、

五十本のにん薙を植えることから始めて、

ついには三百軒分の稲を収穫するようになったであろう。

きんりやう金陵の町の北、貴君の隣で農耕に励めるのなら、

私はきっと(洛陽の近くじよの汝州に行くことはおろか)故郷に帰ることも忘れて、

ここで老いるであろう。

たん い ひつば短衣匹馬[世の中に使役されること]は元来、吾が事ではない。

門を閉ざし、吾が運命を虚心に天に問うまでもないのだ。

【補足】〔(1) 蘇秦は「わしは農地も持たぬ貧乏人であったから、六つの国から宰相並みに遇されるまでになった」と反語的に豪語した。蘇軾はそれを敢えて逆の意味でここに引いている。(2) 「たん い ひつば短衣匹馬」は、軽装で使役される平民と馬に乗る兵士を指すのだが、ここでは役人もその中に含めている。(3) 恐らく、だんぼう段縫はその詩でほんの挨拶代わりに、隣に住んで一緒に退隠生活を送りませんかと誘ったのだろう。それは意外にも蘇軾の急所を衝き、この詩には本心が漏れ出ているようだ。これがきっかけとなったかどうかはわからないが、蘇軾はじよ汝州に行かないもう一つのプランに本格的に取り組むようになる〕

## ■ 【07-1-044】次韻杭人裴維甫

【解題】きんりやう金陵でこう杭州出身の裴維甫と会い、贈られた詩に次韻した。裴維甫は蘇軾より2年遅れて科擧に合格した人。

### 【訳文】

杭州の門の外に葉が舞い飛ぶあの秋を、  
 私はなおも覚えている、  
 町の人々は、去り行く私の舟を引き留めようとした。  
 私は(杭州西北の)臨平山の上の塔に別れを告げた。  
 この五年の間は、雲夢沢の南の州[黄州のこと]をさすらい、  
 我が心からは、淒涼とした悲歌が生まれた。  
 貴君との出会いによって、私はしばしここに留まることとなった。  
 貴君の手づるで、  
 西湖の馴染みの風月に謝りたいものだ——  
 私はいまそこには行けない、  
 時に夢の中で遊ぶことを許してほしい……

【補足】[蘇軾が杭州を去ったのは10年前の秋だった]

## ■【07-1-045】次韻答宝覺

【解題】金陵の定林寺の宝覺の詩に次韻した。

### 【訳文】

宝覺師は、  
 脚に脚絆を巻き、足に芒鞋を履き、そして手には竹の杖、  
 千山、万山もなんのそのだ。  
 唐代の禅僧の馬祖は尋ね来た僧にこう尋ねた。

「あんたは何者か」

「石頭」

「石の頭は滑る。ひっくり返るぞ」

「ひっくり返っていたら、ここには来ておらぬ」

脚がなければ滑らないし、道の困難を知ることもない。

宝覺師の脚固めは何のためなのか。

【補足】<sup>ば そ せきとう とうだい</sup>〔馬祖と石頭は唐代の著名な禅僧。その問答を踏まえた戯れの詩。記者には意味がほとんどわからない〕

## ■ 【07-1-046】次荊公韻四絶

【解題】<sup>きんりやう</sup>金陵滞在中に蘇軾は思い切った行動に出た。<sup>おうあんせき けい</sup>金陵の南に隱棲する王安石〔荊公〕を訪ねたのである。先に見た段縫も宝覺も日頃から王安石と交流があり、その縁で訪問が実現したのだろうか。王安石は大改革の立案者であり、それを激しく批判する蘇軾とは政治的に鋭く対立した。それから十数年が経ち、会って何を話したのか。<sup>しやうはくおん</sup>邵伯温の隨筆『<sup>しやう し ぶん けん ろく</sup>邵氏聞見録』という書物は以下のように伝える。

### 【訳文】

<sup>しやうはくおん</sup>邵伯温:『<sup>しやう し ぶん けん ろく</sup>邵氏聞見録』より

<sup>おうあんせき</sup>王安石と<sup>そ しよく</sup>蘇軾は初めは何ら隔たりがなかった。<sup>りよけいけい</sup>呂惠卿が蘇軾の才が高いのを忌み、その間を割いたのである。

<sup>しんそう</sup>神宗皇帝が蘇軾を間近で用いようとしたとき、王安石はそれを難じた。蘇軾は文士であるから行政の実際には通じていないだろうと、<sup>かいほう</sup>開封府の副知事にして困らせてやろうとした。蘇軾は(実務をこなした上で)憚ることなくますます政事について論じ、科挙制度の改革に対して長文の意見書を提出し、現在の政治は甚だ危うと警告した。王安石は蘇軾をいよいよ<sup>よろこ</sup>悦ばず、蘇軾は地方官として都を出た。<sup>りてい</sup>李定が王安石によって用いられると、李定が母の喪に服さなかったことをもって、蘇軾は李定のことを

不孝者であるとして憎んだ。李定は恨み、蘇軾は詩を作って朝政を誹謗したと弾劾した。李定は湖州知事であった蘇軾を御史台の獄に下して殺そうとした。神宗皇帝は殺すに忍びず、散官[仕事のない名目上の職]に落とし、黄州に安置[軟禁]した。

蘇軾が汝州に移ることになったとき、金陵を通り、王安石と会って非常に歓んだ。

蘇軾が、

「某には公に申し上げたいことがあります」

という、王安石は表情を変えた。蘇軾がかつてのことを言い出すのではないかと思ったのだった。

蘇軾はいった。

「某が申し上げますのは天下の事です」

王安石は顔色をやわらげ、

「いわれるがよかろう」

「漢朝も唐朝も大兵[外国と大いに戦火を交えること]と大獄[政敵を政治犯として厳しく弾圧すること]が滅亡の兆しとなりました。宋朝はその弊害を革めようと、太祖皇帝、太宗皇帝は仁政をもって天下を治められました。いま西北では戦争を起こし、何年経っても終わりが見えません。東南[都]ではしばしば大獄を起こしています。これを救うために公はどのように何もおっしゃらずにいるのですか」

王安石は手を挙げ、二本の指を示して蘇軾にいった。

「その二事は皆、呂惠卿が始めたことだ。私は朝廷の外にいる者、それらについて何も申すべきではないのだ」

「一般的にはそうでありましょう。朝廷にあるときは政治について述べ、外にあるときにはいわない。これは君に仕える者の普通の礼法です。しかし、お上は普通の礼法によらずに公を特に遇されたのです。公がお上にお仕えるのに、どうして普通の礼法によるのでよろしいのでしょうか」

王安石は語気を強め、

「私に何をいわせようとするのか」



そして、

「私の口から出れば、貴君の耳に入るではないか」

王安石には、かつて「このことはお上には知らせてはならない」と密かに呂惠卿に書いたことを、呂惠卿によって神宗皇帝に明かされてしまったという苦い経験があった[それが失脚の原因の一つになった]。それで蘇軾が泄すことを恐れたのである。

王安石はさらに蘇軾にいった。

「不義とわかっていてそれをする。無実の人を殺す。天下を得たとしても、この二つをしないのなら、人としてよろしいであろう」

蘇軾は戯れにいった。

「いまの君子は、半年早く昇進できるのなら、人殺しだってしかねません」

王安石は笑ったが、何もいかなかった。

【補足】 [(1) 以上のことを記した邵伯温しょうはくおんは蘇軾より 20 歳年少で、父の邵雍しょうようは著名な学者で司馬光等しばこうと親しくし、自身もまた若くして司馬光等当時の著名人と直接に交流があった。だから、ここに記してあることが必ずしも事実そのままではないとしても、当時の事情通の間でこのようなことが語られていたのであろう。(2) 邵伯温の息子の邵博しょうはくが記した [したがって信憑性はより薄れる] 『邵氏聞見後録』 [→作品番号 06-1-001 で引用がある] には、王安石は蘇軾に三国時代の歴史書を編集し直すことを勧めたと伝える。蘇軾が歴史好きで、黄州では赤壁こうせきへきの戦いに材を得た詩詞を詠んでいたこともあって、政争よりも学究に生きるよういったのだろう。(3) 蘇軾と王安石が会ったのは、当時としては大きな事件であったので、さまざまな書物にいろいろなことが記されている。ここではこれ以上あれこれ吟味することはせずに、王安石が示した 4 首の七言絶句に次韻した蘇軾の作品を見ておこう]

## 【訳文】

## 其の一

<sup>すもも</sup>李の葉が青々と繁っている。

そこには自ずと鳥が集まりくる。

清真<sup>おうぎし</sup>な王羲之<sup>し</sup> [王安石<sup>おうあんせき</sup>を指す] が手ずから栽<sup>う</sup>えたのである。

深い紅、浅い紫、様々な花が争って咲き、

白い鷺、黄色い鵝鳥も翼を広げる。

【補足】 [これは王安石<sup>おうあんせき</sup>の住まいの様子を美化して歌ったもの]

## 其の二

先生は、

竹<sup>き</sup>を斫り、花を掘り去り、緑の苔を破ってこの庭を造られ、

<sup>はんのき</sup>檀の苗木を得るために、詩を作ることまでした。

造物者のするところを仔細に見るなら、

初めから物を造ろうとの意思などはなく、

万物は自然に生まれ出たのだった。

春<sup>こうなん</sup>が江南に到るとき、

花は自ずと開くのである。

## 其の三

<sup>ろばの</sup>驢馬に騎って、私<sup>はるばる</sup>は渺渺と荒れた陂<sup>ぬまら</sup>をやってきた。

想い見るのは先生がまた病気になる前のとき。

先生は三畝<sup>は</sup>の宅 [小さな家] を求めてみてはと勧めてくださる。

しかし、先生の教えに従うのは十年遅かった……。

【補足】<sup>きんりょう</sup> [金陵の町から<sup>おうあんせき</sup> 王安石の住まいまで数キロの道のりであったという。王安石はこの年の初めに病気になる、<sup>しんそうこうてい</sup> 神宗皇帝が侍医を派遣したほどであったが、このころには回復していた。10年という数字は概数で、王安石が提唱する改革を蘇軾がさかんに批判したころに遡って、腹藏なく議論したかったというのである。もしもそうしたことが行われていたならば、その後の展開は大きく異なっていたであろう]

#### 其の四

立派な屋敷があったところで真に我が物ではない、  
趣のある花にしてもたまたま載えただけのものだ。  
先生は家を仏寺に替えて清浄の場として供し、  
仏道を求める人のために門を開いている。

【補足】<sup>おうあんせき</sup> [(1) 王安石は、長男の<sup>おうほう</sup> 王雱を喪うと政治的意欲が急速に薄れ、政界を引退する一因になったといわれる。その王雱の菩提を弔うために私宅を仏寺にしていた。

(2) 王安石はこれより2年後に亡くなっているので、蘇軾のこの訪問は唯一無二の機会を生かしたものであった]

#### ■ 【07-1-047】 同王勝之遊蔣山

【解題】<sup>きんりょう</sup> 金陵の東に風光明媚な<sup>しやうざん</sup> 蔣山 [鐘山] <sup>し きんざん</sup> がある。現在名は紫金山で、標高 448メートル、中国の国家重点風景名勝区の一つに選ばれている。蘇軾は政界の大先輩である<sup>おうえきじゆう</sup> 王益柔 [字は<sup>あざな</sup> 勝之、このとき 72 歳] とともに<sup>しやうざん</sup> 蔣山に登り、この詩を詠んだ。王益柔も王安石の改革を強く批判した一人であった。

## 【訳文】

貴君は金陵きんりやうに赴任してきたものの、  
 席の暖まる間もなく、新たな辞令によって他郡に移ることになり、  
 この地の人々は口をあぐり開けて呆然としている。  
 町から十里足らずのところにはすばらしい山がありながら、  
 行かずにいたならばこの先ずっと悔いが残るであろうと、  
 貴君は南朝時代の寺たを敲いて廻ることにした。  
 私も小舟に乗せてもらって一緒に山に向かうと、  
 かつて高貴な人々が朱色の門を並べていたところは、  
 仏寺に代わって紺色の門を連ねている。  
 舟を降りると、道の両側には高々と松が聳え、  
 山裾が斜めに傾いて人を出迎えてくれる。  
しやうざん  
 蔣山は古くゆかしい国に竜のようにわたかまり、  
 山の重なりの上に鳥の爪のような峰が抜きこんでいる。  
こげ  
 竹の杪の先に、飛ぶようにして屋根が見え、  
 松の根もとに細い泉が湧き出ている。  
 多数の山が巧みに日を支えているかのようであり、  
ちやうこう  
 遠く長江は天に浮かんでいるかのようだ。  
 丸木橋が秋の水の上に横たわり、  
 高い塔の先端に夕暮れの霧がまつわりつく。  
 帰るときになって、己の影を踏んだので、  
 ふと見ると、ちぎれ雲の間に細い月がある。

【補足】 [この詩のなかほどでは多数の比喩的表現を並べている。「多数の山が巧みに

日を支えているようであり、遠く長江は天に浮かんでいるかのようだ」〔峰多巧障日、江遠欲浮天〕の句を王安石が称赞し、この詩に次韻している]

## ■【07-1-048】書子由金陵天慶觀詩

【解題】4年前の4月に弟の蘇轍は金陵に立ち寄り、天慶觀で詩を詠んでいた。その詩を天慶觀の壁に書いた。

### 【訳文】

興廢不可必、冶城今静祠。[世の荒廢は定めがなく、いまここは静かである]

松声聞道路、竹色浄軒墀。[松の音や竹の色はいつも変わらない]

江近風雲改、庭深草木滋。[川からの風に雲は飛び、庭の草木は深く生い茂っている]

孤墳弔遺直、銘暗閔元規。[古い墓に昔の人を遠く思ふ]

元豊三年四月、弟の蘇轍がここを過って詩を留めた。七年七月十六日、それを壁に書く。

【補足】[弟の詩は金陵の変遷について思いを巡らせたもので、特に新味はないので大意だけを添えた]

## ■【07-1-049】去歳九月二十七日、在黄州生子名遯、小名幹兒、頽然穎異。至今年七月二十八日、病亡於金陵、作二詩哭之

【解題】蘇軾は金陵で大きな不幸に見舞われた。この詩の題は、「去年九月二十七日、黄州において子が生まれた。名は遯、小名は幹兒である。体が大きく非常に賢かった。今年の七月二十八日、病のために金陵で死んだ。二詩を作ってこれを哭す」。遯が生まれたことは作品番号 06-4-057 で見ている。

## 【訳文】

## 其の一

私の年齢は四十九、  
旅の間に幼い子を失った。  
幼い子は真に吾が子、  
生まれながらにして顔の形が私に似ている。  
まだ好き嫌いの判断などできそうにない年齢であるのに、  
這い這いで書物の後を追いかける。  
梨とか栗などは頭を振って退け、  
そんなものを欲しがるのは恥であるのを知っているかのようだ。  
私は老いるにつれて歡ぶものが少なくなり、  
この子を見ての一笑一喜だけを頼りとしていた。  
しかし、忽然と奪い去られた——  
悪業の報いだとしたら、私の罪が及んだのだ。  
薪をもって亡骸の衣とする、  
世間のそのやり方に従って葬る以外に何ができようか。  
人は一瞬にして変滅してしまうものなのだ。  
事を終えて帰りければ、抱く懐きは空しい。  
水を瀉ぐばかりの老いの涙……

## 其の二

我が涙は拭うことができる。

日が経って遠くなれば、きっと日に日に忘れてゆくのだろう。

母が哭すのは聞くに堪えない。

おまえとともに亡んでしまおうとしている。

おまえの衣が今も衣桁いこうに懸かっている。

乳が漲って寢床に流れる。

ここに痛み、私は「生せい」というものを忘れようとする。

ひとたび臥して終日じっと倒れたままとなる。

中年に至って忝みぢも「道」について聞き、

「生せい」は夢幻であると、すでに詳しく知っていた。

しかし、おまえのために山のように薬を用意し、

病気が重くなってからはさらに方士ほうしの術も求めた。

恩愛やいばの刃によってこの衰老はらわたの腸はずたずたにされてしまった。

これは迷いなのだ……

もとの自分に反ろうてはないか……

ひとたび慟哭して、心に残る傷を送り去るのだ……

【補足】 [子を喪った母 [王朝雲] の悲しむありさまが何よりも辛かったのである]

## ■ 【07-1-050】 葉濤致遠見和二詩、復次其韻

【解題】 葉濤しょうとう [字は致遠あざな ちえん] が上の詩に和したので、それに次韻した。葉濤は王安石の弟の王安国の婿で、王安国は兄が進める改革には賛同せず、政治的には恵まれずにすでに8年前に他界していた。葉濤はこのころは金陵きんりやうにいて、しばしば王安石のもとを訪れて詩を唱和し合っていた。葉濤は、蘇軾のもともとの詩の韻字の位置を入れ替えて和したので、それに蘇軾が和した詩も韻字の位置がもとの詩とは異なっている。蘇軾

の最初の詩は真情から発したもので、葉濤も深く同情して和したのだろうが、時間の経過とともに悲しみもやや薄まり、次韻するという知的作業がさらにそれを助けたということもあったのだろう、この詩は言語遊戯へと流れて行ってしまったかのようで、2首のうち1首だけを訳す。

### 【訳文】

#### 其の一

私には娘がないので、

娘の可愛らしさにめろめろになるようなことはなかった。

こう  
黄州に滞在する間にこの子が生まれ、

るたく  
流謫生活を十分に慰めてくれた。

それが真実のものではないとは知るべくもなかった。

造物者がいささか私に戯れを仕掛けたのだ。

煩惱も、初めから根となるものがあるのではなく、

恩愛が種子となって、そこから生えてくるのだ。

貴君を煩わし、

恩愛などは仮のものであると、反復して御教示いたたい。

苦海の浪を除くには、愛の河の水を乾かさなければならない。

かつてかん 伊韓愈は、

たかが一寸ばかりの魚に執着して終日釣り糸を垂れる者を笑った。

貴君も同様に私を笑うであろう。

私は貴君への返事としてこの詩を作ったのだが、

これとて酒の上の一時の取に異ならない。



## ■ 【07-1-051】 次韻葉致遠見贈

【解題】 同じく葉濤 [字は致遠] から贈られた別のテーマの詩に次韻した。興に乏しく、意味不明の箇所もあるが、このころ悩ましい心情にあったことを示唆すると読むこともできるであろうか。

### 【訳文】

五畝<sup>は</sup>ばかりの地を得て農民になりたく思いながら、  
官に仕える身として行商人ように各地を転々としている。  
私は我が命運に任せるだけで、  
行き先についてとやかくいことはないので、  
人に逢って語るときには、  
いまだにあれこれ言を左右してしまいがちである。  
酒を飲めと勧めてくれる言葉よりも、  
私には貴君の詩(にある助言)の方が好ましい。  
文章などはひとつの遊びであって言に足りないものだ。  
知るべきは私の教えの深い意味合いである。

【補足】 [葉濤の詩に和した作がもう一首残っているが、著しく興に欠けるので訳は割愛する。黄州にいたころは次韻の詩が少なくてどの作品も味わい深く読めたことを思うと、罪を赦されたのは詩にとっては幸いではなかったのかもしれない]

## ■ 【07-1-052】 題孫思邈真

【解題】 隋から唐の時代に名高い道士であった孫思邈を描いた画を見て作った詩。

## 【訳文】

先生が世を去ってから五百年、

いまもなお峨眉山の西の峰の中におられるとか。

本当は天上の仙界の高官になっているのであって、

尸解して地上に残した亡骸を蛆虫に食わせるようなへまはしないのである。

【補足】[肉体を地上に残して昇仙することを尸解し かいというが、孫思邈そん し ぼくはもっと高度なわざで仙人になったはずだと蘇軾そくはいうのである。郷里の山に隠れた仙人に託して、我が心を解放させようとした詩なのだろうか]

## ■ 【07-1-053】 戯作鮎魚一絶

【解題】鮎魚かいぎょという魚についての詩。昔、鐘山しょうざんにいた宝公ほうこうという僧の故事に基づいて詩を作ったものであるという。

## 【訳文】

紅い斑まだらの石首魚せきしゅぎょは頭だけは堅けれどぷるぷるの骨なし、

雪のように白い河豚ふぐはうまいけれど毒がある。

ちつとけな鮎魚かいぎょはなんぞはさらにろくでもないもの。

あるとき宝公ほうこうが川べりを歩いていて、

魚をおぎまり食らう男を見て、

「愚僧も御相伴にあずかりたい」

といてつまんで口に入れた。

僧侶がそんなことをしたので人々が呆れて見ていると、

宝公は口の中のものを川に吐き出し、  
たちまち無数の鮠魚となって泳ぎ出したのだった。  
してみると、天公てんこうだか河伯かほく[川の神]だか知らないが、  
鱗の輝ものたちを生じさせたのは、確かに意味のあることなのだ。

## ■ 【07-1-054】 与滕達道

【**解題**】とうげんはつ あぎな たつどう 滕元発 [字は達道] に宛てた手紙。滕元発は作品番号 06-5-003 で見たような経緯によって湖州知事となり、このころは湖州に向かって移動の途中であった。

### 【訳文】

きんりやう 私は金陵に来ておりまして、けいこう おうあんせき 荆公[王安石]にお会いしましたところ、はなはだ喜んでくださいました。公は時に詩を誦し時に仏典について説かれています。貴君は王安礼君にはお会いになったことがあるでしょうか。私はまたその機会がなく、よく存知上げません。

先ごろいん筠州に行き、弟に会いました。弟もまた都に近い地に移ることになるであります。いまごろはすでに移動を命じられているかもしれせん。

ごこう こ 呉興[湖州]の風物は貴君のお心を慰めるに足るものであります。土地の人であるか-しゅう 賈収君は、行いが正しく、詩が極めて上手で、り-じやう しやうじゆん 李常君も章惇君も優れた人として賈収君には礼をもって接していました。ただし私が最もよく賈収君のことを知っています。貴君もときに尋ねられて、互いにおちぶれ 牢落た身を慰め合うとよろしいでしょう。

先にぶんしゆこうちやう せいど 文肅公楼[盛度を記念する楼閣]を過り、そのあたりを歩きつつ、盛度公の人柄を想って立ち去ることができませんでした。私としては、そ し 楚州、泗州のあたりに参りましたら、朝廷に願ひ出で、じやう 常州あたりに住まうことができるようになればと考えています。幸いにもこの願ひが聞き届けられましたなら、小さな舟に乗って、お目にかかりに参れましょう。

【補足】〔(1) この手紙にはいろいろなことが盛り込まれている。蘇軾のことをよく知る<sup>とうげんはつ</sup>滕元発であるから、きっと理解してもらえらるだろうと説明抜きに書き並べている。

(2) 王安礼<sup>おうあんれい</sup>は王安石<sup>おうあんせき</sup>の弟で、王安国<sup>おうあんこく</sup>とともにその三兄弟は「臨川<sup>りんせん</sup>の三王<sup>さんおう</sup>」として郷里の誉れと称された。王安礼もまた王安国と同じく、王安石の改革には必ずしも同調しなかった。蘇軾が獄中で厳しい取り調べを受けていたとき、王安礼は皇帝に直接蘇軾の罪を赦すよう進言したといわれ、きっとそのことが蘇軾の耳にも入ったので、この手紙でとくにその名を挙げているのだろう。(3) 弟の蘇轍<sup>そけい</sup>はこれより少し後に績溪<sup>せきけい</sup>県の知事に任命される。県知事であるから前職よりは地位が高く、筠州<sup>いん</sup>よりは都に近くはなるが、山間の小さな町である。(4) 賈<sup>か</sup><sub>しゅう</sub>取<sup>あざな</sup>〔字は<sup>うんろう</sup>耘老<sup>こ</sup>〕は湖州の隠者で、賈<sup>こ</sup>取<sup>こ</sup>から学んだ儉約術で経済的苦境を乗り切ろうとしたことを作品番号 06-1-103 で見ている。李<sup>り</sup>常<sup>じょう</sup>も章<sup>しょう</sup>惇<sup>じゆん</sup>も一時期湖州知事を勤めていた。(5) 北宋の初めのころの人である盛<sup>せい</sup>度<sup>ど</sup>の功績を記念した文<sup>ぶん</sup>肅<sup>しゆく</sup>公<sup>こう</sup>楼<sup>ろう</sup>が筠州<sup>いん</sup>にあって、弟を訪ねた折にそこに昇っていた。盛<sup>せい</sup>度<sup>ど</sup>は杭<sup>こう</sup>州<sup>しゅう</sup>の人で、湖州<sup>こうなん</sup>や杭<sup>こうなん</sup>州<sup>しゅう</sup>などの江南の地への思いが募るということから、汝<sup>じょ</sup>州<sup>しゅう</sup>には行かないもう一つのプランがここに記されている。蘇軾の予定された船路は、この後大運河に入って都へと北上するのだが、楚<sup>そ</sup>州<sup>しゅう</sup>や泗<sup>し</sup>州<sup>しゅう</sup>にあたり<sup>じょう</sup>に到ったところで、朝廷に退隱を願い出ようというのである。そして退隱先として湖州に近い常<sup>じょう</sup>州<sup>しゅう</sup>を挙げている。(6) この後も蘇軾と滕元発との間で何度か手紙が交<sup>じゆん</sup>わされ、潤州で落ち合う約束が成立する]

## ■ 【07-1-055】 漁家傲

【**解題**】 8 月中旬に王益柔<sup>おうえきじゆう</sup>〔字は勝<sup>あざな</sup>之<sup>しょうし</sup>〕〔→作品番号 07-1-047〕は新たな任地である南京<sup>なんけい</sup>応<sup>おう</sup>天<sup>てん</sup>府<sup>ふ</sup>に赴くために金<sup>きん</sup>陵<sup>りやう</sup>を去り、その送別の宴で蘇軾はこの詞を詠んだ。短い序文がある。

## 【訳文】

金<sup>きん</sup>陵<sup>りやう</sup>の賞<sup>しょう</sup>心<sup>しん</sup>亭<sup>てい</sup>で王<sup>おう</sup>益<sup>えき</sup>柔<sup>じゆう</sup>を送<sup>おく</sup>った。王<sup>おう</sup>益<sup>えき</sup>柔<sup>じゆう</sup>は金<sup>きん</sup>陵<sup>りやう</sup>の知<sup>ち</sup>事<sup>じ</sup>として政<sup>せい</sup>務<sup>む</sup>を視<sup>し</sup>ること一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>だけ南<sup>なん</sup>郡<sup>ぐん</sup>〔南<sup>なん</sup>京<sup>きやう</sup>天<sup>てん</sup>府<sup>ふ</sup>〕に移<sup>うつ</sup>ったのだった。

千<sup>せん</sup>古<sup>こ</sup>竜<sup>りゆう</sup>蟠<sup>ぱん</sup>並<sup>へい</sup>虎<sup>こ</sup>踞<sup>じよ</sup>、〔千<sup>せん</sup>古<sup>こ</sup>の昔<sup>むかし</sup>から竜<sup>りゆう</sup>が蟠<sup>ぱん</sup>り虎<sup>こ</sup>が踞<sup>じよ</sup>る金<sup>きん</sup>陵<sup>りやう</sup>〕

従<sup>じゆ</sup>公<sup>こう</sup>一<sup>いつ</sup>弔<sup>てう</sup>興<sup>きやう</sup>亡<sup>わう</sup>処<sup>しよ</sup>。〔公<sup>こう</sup>に従<sup>じゆ</sup>って興<sup>きやう</sup>亡<sup>わう</sup>の跡<sup>あと</sup>を見<sup>み</sup>渡<sup>わた</sup>すのです〕

渺<sup>めう</sup>渺<sup>めう</sup>斜<sup>しゃ</sup>風<sup>ふう</sup>吹<sup>ふ</sup>細<sup>さい</sup>雨<sup>う</sup>。〔遥<sup>はるか</sup>か彼<sup>かの</sup>方<sup>かた</sup>からの風<sup>ふう</sup>によつて吹<sup>ふ</sup>き込<sup>こ</sup>んでる細<sup>さい</sup>い雨<sup>う</sup>〕

芳<sup>ほう</sup>草<sup>そう</sup>渡<sup>わた</sup>、〔渡<sup>わた</sup>し場の芳<sup>ほう</sup>しい草<sup>そう</sup>〕

江<sup>かう</sup>南<sup>なん</sup>父<sup>ふ</sup>老<sup>らう</sup>留<sup>りゆう</sup>公<sup>こう</sup>住<sup>ぢゆう</sup>。〔江<sup>かう</sup>南<sup>なん</sup>の父<sup>ふ</sup>老<sup>らう</sup>は公<sup>こう</sup>をこゝに引<sup>ひ</sup>き留<sup>りゆう</sup>めよとします〕

公<sup>こう</sup>駕<sup>か</sup>飛<sup>ひ</sup>車<sup>しや</sup>凌<sup>りやう</sup>彩<sup>さい</sup>霧<sup>きよ</sup>、〔公<sup>こう</sup>は空<sup>あや</sup>飛<sup>ひ</sup>ぶ車<sup>しや</sup>を走<sup>ま</sup>らせて彩<sup>さい</sup>なる霧<sup>きよ</sup>を凌<sup>りやう</sup>ぎます〕

紅<sup>かう</sup>鸞<sup>らん</sup>駢<sup>ぺん</sup>乘<sup>じやう</sup>青<sup>せい</sup>鸞<sup>らん</sup>馭<sup>ぎよ</sup>。〔紅<sup>かう</sup>い鸞<sup>らん</sup>が同<sup>どう</sup>乗<sup>じやう</sup>し、青<sup>せい</sup>い鸞<sup>らん</sup>が車<sup>しや</sup>を馭<sup>ぎよ</sup>します〕

却<sup>けつ</sup>訝<sup>ぎん</sup>此<sup>し</sup>洲<sup>しゆう</sup>名<sup>な</sup>白<sup>はく</sup>鸞<sup>らん</sup>。〔(南<sup>なん</sup>京<sup>きやう</sup>天<sup>てん</sup>府<sup>ふ</sup>に至<sup>いた</sup>つて)そこに白<sup>はく</sup>鸞<sup>らん</sup>州<sup>しゆう</sup>があるのをいふかしく感<sup>かん</sup>じます〕

非<sup>ひ</sup>吾<sup>わ</sup>侶<sup>りよ</sup>、〔僕<sup>われ</sup>らはここの仲<sup>なかつ</sup>間<sup>かん</sup>ではないと鸞<sup>らん</sup>は思<sup>おも</sup>い〕

翻<sup>はん</sup>然<sup>ぜん</sup>欲<sup>よく</sup>下<sup>げ</sup>還<sup>えん</sup>飛<sup>ひ</sup>去<sup>こ</sup>。〔下<sup>した</sup>りかかつて、また飛<sup>ひ</sup>び去<sup>こ</sup>つてしまふのです〕

【補<sup>お</sup>足<sup>そく</sup>】〔最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>の部分<sup>ぶぶん</sup>は、王<sup>おう</sup>益<sup>えき</sup>柔<sup>じゆう</sup>は南<sup>なん</sup>京<sup>きやう</sup>天<sup>てん</sup>府<sup>ふ</sup>に行<sup>い</sup>つても、こつちがよかつたと金<sup>きん</sup>陵<sup>りやう</sup>にまた戻<sup>もど</sup>つてくるという期<sup>き</sup>待<sup>たい</sup>を込<sup>こ</sup>めたものであるとの解<sup>かい</sup>釈<sup>しやく</sup>によつて訳<sup>やく</sup>した〕

## ■ 【07-1-056】 至真州再和二首

【解<sup>かい</sup>題<sup>だい</sup>】蘇<sup>そう</sup>軾<sup>しやく</sup>は王<sup>おう</sup>益<sup>えき</sup>柔<sup>じゆう</sup>とともに金<sup>きん</sup>陵<sup>りやう</sup>を発<sup>はつ</sup>つた。長<sup>ちやう</sup>江<sup>かう</sup>を少<sup>せう</sup>し下<sup>げ</sup>つた真<sup>しん</sup>州<sup>しゆう</sup>に至<sup>いた</sup>るまでの間<sup>かん</sup>に、先<sup>せん</sup>に蔣<sup>しやう</sup>山<sup>ざん</sup>で詠<sup>えい</sup>んだ詩<sup>し</sup>〔→作<sup>さく</sup>品<sup>ひん</sup>番<sup>ばん</sup>号<sup>ごう</sup> 07-1-047〕に王<sup>おう</sup>益<sup>えき</sup>柔<sup>じゆう</sup>が和<sup>わ</sup>したので、さらには和<sup>わ</sup>して返<sup>へん</sup>した。2首<sup>しゆ</sup>のうち1首<sup>しゆ</sup>を訳<sup>やく</sup>す。

## 其の一

詩の妙手にして朝廷の高官であった王維、

窮乏した無官の孟浩然——

王維は宮中に宿直した晩に孟浩然を呼び、二人で詩を論じあった。

貴君も、境遇の違いや年齢の上下を忘れ、

私との旧交を温めてくださった。

北上する貴君のお伴をするのは難しいけれど、

しげしの間、東に向かって貴君の船を追ってきた。

送別の宴が開かれた金陵の賞心亭では、

貴君は花の輝きに照らされ、

私は、酔ったような目で蓮を窺う驚と同じように、貴君を見つめていた。

船が進むにつれて、金陵の三山が消え去り、

順風を受けて船上の旗が向きを転じた。

瓜歩にある江の女神を祀る祠の前を通ると、

松並木の下に古い石畳が連なるのが見えた。

これから行く真州の清香閣には、

酒のような水の湧く白玉泉があると聞いている。

そこに坐して夜も門を掩うことなく、

月が天に流れるのを待とうではないか。

紫檀の琵琶の音が華やかに部屋から流れ、

庭には樺の皮を巻いた蠟燭の煙が立ち昇ることだろう。

そのときに、貴君の詩を朗読しよう、

かの名妓しょうせんけんの小嬋娟しょうせんけんのような女性に命じて。

【補足】〔官員同士の社交上の詩で、さほど興趣を誘うものではないだろう。最初の部分は、王益柔おうえきじゆうを王維おういに、蘇軾そしつ自身を孟浩然もうこうねんに喩えて、かつて蘇軾が都にいた時期に王益柔が先輩として目をかけてくれたことを詠んでいる。それは鳳翔ほうしょうでの任を終えて都に帰還したところで、蘇軾の官界人生は順風満帆と見えていたのだった〔第3章の初め〕〕

## ■ 【07-1-057】 与袁真州

【解題】次の目的地である真州しんしゅうでは知事の袁陟えんちやく〔字は世弼あざな せいひつ〕が蘇軾の到着を待ち受けていた。袁陟は蘇軾よりも10年早く科挙に合格した先輩である。金陵滞在中から真州に到るまでの間に袁陟に出したと推測される手紙が4通残っていて、そのうちの2通を見ておこう。

### 【訳文】

(1)私は金陵きんりょうにきて一カ月になろうとしています。赤ん坊が病気になる、ついに助かりませんでした。何かと労苦があって、そこに悲悩が重なり、ほとんど耐え難い思いです。いまずくにも貴君にお会いしたいところですが、残念なことに飛んで行くわけにもありません。貴君から深く真心のこもったお尋ねを頂戴しながら、これまで御返事をさしあげず、まことに申し訳ありません。お詫びの言葉もありません。

(2)再びお手紙を差し上げます。王益柔君おうえきじゆうによって少し足止めを食らっております。残念ながら飛んで行くことはできず、風向きがよくなりましたら出発いたします。秦観君しんかんの手紙を受け取りました。それへの返事を書きましたので、どうか秦観君に御送付願います。金山きんざんにいなければ潤州じゅんしゅうにいることでしょう。お手数を煩わせて申し訳ありません。

【補足】<sup>えんちよく</sup>袁陟は州知事として官の郵便網が使えたので、<sup>しんかん</sup>秦観 [→作品番号 07-1-016] の手紙を蘇軾に届ける中継ぎをしたのだらう。秦観はもう少し下流で蘇軾が到着するのを待っていた]

## ■ 【07-1-058】 贈袁陟

【解題】<sup>おうえきじゆう</sup>蘇軾は<sup>しん</sup>王益柔とともに真州に到着すると、王益柔はそのまま任地への旅を続け、蘇軾はそこにしばし留まった。

### 【訳文】

この身は元来、虚空であるのだらう。

だから、万物はみな我がものである。

どうして、強いて内と外を分別するのか。

百金を出して田や家を買う必要などはない。

<sup>えん</sup>袁先生は心の馬、尻の輿に乗って、

<sup>ユートピア</sup>無何有に遊び、

一椀の飯のほかに願うものはない。

官界の湖を我が池とし、官の学舎を我が家とし、

子孫に遺すものは何もなく、

我が身は竹の筵にくるんで葬ればよいとしている。

春の風は自ずと柳を暗く繁らせ、

秋の水は自ずと蓮を清らかに咲かせる。

袁先生のことを私はよく知っている。

袁先生はきっと魚の楽しみを知っているのである。



【補足】〔(1) この詩の最初の二句「此身如虚空、万物皆我儲」〔此の身は虚空の如く、  
ばんぶつ みなわ ちょ せきへき ふ〕は『赤壁の賦』〔→作品番号 06-3-057〕で述べた思想を 10 文字に要  
約したとってよいだろう。(2) 終わりの部分は、魚の心がわかるのだろうかという  
『荘子』の問答〔→作品番号 03-4-031〕を踏まえている

## ■ 【07-1-059】次韻蔣穎叔

【解題】真州で蔣之奇〔字は穎叔〕に会い、その詩に次韻した。蔣之奇は蘇軾と同  
じ年に科挙に合格した仲で、そのころに蔣之奇から出身地の常州宜興県の風光のよろ  
しいことを聞かされ、ならば政界を引退した後に一緒にそこに住もうではないかと、  
蘇軾は軽口で応じたというエピソードがあることを作品番号 04-3-026 で触れている。  
この詩はそのことを踏まえて歌われている。

### 【訳文】

月明かりの中で鶻かきすが騒いでいる、  
その身を安んじる枝がまだ得られていないのだろう。  
貴君は想う——  
小舟に棹をさして飄然と自分の影だけを随えて行くことを。  
江の上に秋風が吹き、波は限りなく広がる。  
官界で過ごす人生など短い春の夢のようなものだ。  
私は貴君と同じ年に科挙に合格し、  
都の瓊林苑での祝宴で語りあった——  
そのとき、貴君は故郷えん が けいの罨画溪の美しさを語り、  
ならばいつかともに陽羨溪ようせんけいに住もうてはないかと私は応じた。

しかし、本当に約束したのは、

隣同士で仲良く行き来することではなく、

宮中で国家の案件を論じ合うことだったのではなかったのか。

【補足】〔(1) ここに詠まれている<sup>えん が けい ようせんけい しょうし き</sup>晁画溪や陽羨溪は<sup>じょう ぎこう</sup>蔣之奇の故郷である常州宜興県にある景勝地で、かつて蘇軾は杭州副知事であったときに、しばしば常州を訪れ、陽羨溪を訪れていた [→作品番号 04-3-026]。真州で<sup>しん</sup>蔣之奇と再会し、話が自ずと昔の約束に及んだのだろう。蘇軾は、このとき作品番号 07-1-053 で見たように、常州に隠棲するプランを心に抱いていたのだが、どうやら蔣之奇にはその本心をぎりぎり明かさなかったようである。蔣之奇はこのとき州の上のレベルの路の役人としてかなり高い地位にあったので、うかつに口に出すことは憚られたのだろう。しかし、この詩に詠まれた陽羨はこの後すぐに見るように、蘇軾にとって特別な場所になる。(2) 終わりの部分で「仲良く行き来する約束」と訳した原文は「<sup>けいしよ やく</sup>雞黍の約」。互いにいつ訪ね合っても「<sup>にわたり きび</sup>雞や黍」、つまり自らの収穫物で歓待することを約束するという意味である〕

## ■ 【07-1-060】次韻滕元発、許仲塗、秦少游

【解題】蘇軾は<sup>しん</sup>真州から<sup>ちようこう</sup>長江を少し下って<sup>じゆん</sup>潤州 [京口] に至ると、約束していた通<sup>とうげんはつ あざな たつどう</sup>り滕元発 [字は達道] [→作品番号 07-1-054] がそこで待ち受けていた。<sup>しんかん</sup>秦観 [字は少游] もまた、作品番号 07-1-057 で触れていたように蘇軾の到着をここで待っていた。これは、滕元発が最初に詩を作り、それに<sup>きよじゆん あざな ちゆうと</sup>潤州知事の許遵 [字は仲塗] と秦観が次韻し、最後に蘇軾が次韻したもの。

## 【訳文】

に こう どうげんはつ きょじゆん  
二公〔滕元発と許遵〕の詩の品格は老成し、かつよいは新鮮である。

や じん  
野人〔蘇軾〕が酔って狂おしく吟じるのをお許しくださいよ。

南の海の遙か二十五万里に青丘せいきゅうがあって、

中国などは沢に浮かぶ芥であるかのように呑み込んでしまおうとしているという。

二公にはまさにその勢いがある。

私は恥ずかしいことに、

小さな水たまりにちよろちよると生える草のようなものだ。

こ じゆん  
湖州と潤州と二つの旗は輝いて互いに照らし合い、

私は十畝ばかりの農地を自ら鋤や犁で耕すだけの者。

ここにさらに天下の妙手である秦君しんが現れ出たのであるから、

来年あたりはひとつお上にこちらにお出まいたいて、

御前においてお三方の詩の優劣を競ったらよいだろう。

【補足】〔じゆん潤州までくれば、そこからこう杭州副知事時代に行き来した馴染みの地である。親しい人々と会えば、蘇軾の心が当然浮き立ち、このような戯れの詩が生まれることになる〕

## ■ 【07-1-061】 以玉帯施元長老、元以衲裙相報、次韻二首

【じゆん解題】潤州には有名な金山きんざんがある。蘇軾は潤州に行くたびに金山に登っていて、今回もやはり訪れた。金山にある金山寺きんざんで蘇軾は仏印禪師ぶつゐんぜんじ〔了元長老りょうげん〕に会った。仏印禪師とはすでに廬山ろざんで会っていて〔→作品番号 07-1-023〕、詳しい経過はよくわからないが、仏印禪師はもともと金山寺の僧で、一時期廬山に行き、このころに金山に帰ったものようである。この詩が詠まれた状況は次のようであったと伝えられている。蘇軾と仏印禪師が話をしていると、傍らからある僧が蘇軾に戯れて、「公こう〔蘇軾〕が

長老と問答をなさり、もしも公が返答に窮したならば、<sup>お</sup>佩<sup>ぎよくたい</sup>びるところの玉帯〔官員のしるしである玉飾りの付いた革の帯〕を山に寄進されるというのはいかがでございましょうか」といった。蘇軾が同意し、問答が始まるとすぐに蘇軾は答えに詰まり、玉帯を差し出した。仏印禪師は玉帯を受け取ると、その代わりとして<sup>のうくん</sup>衲裙〔僧侶の衣〕を贈り、2首の詩を添えた。これはそれに次韻したもの。

## 【訳文】

### 其の一

<sup>びょうこつ</sup>この病骨の身<sup>ぎよくたい</sup>を玉帯で<sup>こつじき</sup>困むのは苦しくてかなわない。

しかし、本性からして鈍く、いまだに煩惱の矢や鋒で突かれ続けている。

師は、そんな私に、<sup>かき</sup>歌姫の集まるところで<sup>こつじき</sup>乞食をさせて鍛えようというのであろう、

特に<sup>うんざん</sup>雲山の古<sup>ほうい</sup>びた法衣を与えてくださるのである。

### 其の二

この帯は<sup>うわぎ</sup>駟舎のようなもの。

次から次へと人が入れ替わり、

ようよう私がやってきた。

ごたごた飾りのついた<sup>うわぎ</sup>錦の袍なんぞは私には合わない。

そうだ、

<sup>らうまんかい</sup>あの老万回の阿呆坊主にくれてやったらよいのだ。

【補足】<sup>とう</sup>〔唐の時代に万回和尚という者がいた。遥か西方のシルクロードにいる兄に会うために、朝に都を出て夕方に帰ってくるということを日々繰り返して1万回になるといっていた。皇帝は万回和尚を尊崇して錦の<sup>うわぎ</sup>袍を与えた。蘇軾は玉帯や錦の袍よ

りも、衲裙のうくんの方が自分に似つかわしいと言って受け取ったのである]

## ■ 【07-1-062】 送金山郷僧帰蜀開堂

【解題】金山寺きんざんじに同郷しよくの蜀そう出身の僧がいた。間もなく故国に帰って寺を開くということ  
を聞き、この詩を贈った。

### 【訳文】

浮玉山ふぎょくさん [長江ちやうかうの水に浮かぶ金山きんざんのこと]で鐘が撞かれ、

三千の指 [つまり三百人の僧] が私を迎えてくれた。

衆僧が談笑するなかから、

また語り合わないうちに、貴僧が郷里の人であることが知れた。

私が「箇中こちゆうの人ひと」 [ここに在るべき人、つまり縁のある人] でなければ、

どうして黙ったままで貴僧のことを知り得ようか。

貴僧は衣を振るってたちまち帰り去るといふ。

千山の彼方にこぼつんと貴僧の影が消えて行くのを私は見送る。

さあ、飲みたまえ、

金山きんざんの中冷泉ちゆうれいせんの水は蜀しよくの涪江ふかうの水と同じ味がする。

氷の上に載せられた琥珀こはくのような砂糖さとうよりもずっとずっと甘いのである。

【補足】 [金山きんざんの中冷泉ちゆうれいせんの水が天下第一の名水であるとされていることは作品番号 03-4038 で見ている。蜀しよくの涪江ふかうと中冷泉ちゆうれいせんは長江ちやうかうでつながっているのも同じ味であるといっているのである]

## ■ 【07-1-063】 金山夢中作

【解題】<sup>きんざん</sup>金山に泊まって夢の中で作ったという詩。

【訳文】

<sup>こうとう</sup>江東の商人はみな木綿<sup>コット</sup>の裘。

商人たちの宴会が終わって人々が去ると、

酒楼は金山にかかる月の光で満たされる。

夜半になり、よい潮がきて、風もまたよし——

船に<sup>ふえ</sup>ころりと臥せ、簫を吹きつつ、

商人はたちまち揚州<sup>よう</sup>に至るのである。

【補足】 [(1) ここでいう江東とは潤州より南東側の地であろう。江東は温暖なので、商人は毛皮ではなく木綿を身にまとう。揚州は、潤州から長江を横切って大運河を少し北上したところにある交易の一大中心地。(2) この詩は天下を自在に往来する商人への一種の憧れを歌っているかのようなようである。蘇軾の先祖が絹を扱った商人であったらしいことを思えば、官員としての束縛を離れて先祖の業に戻ってみたいとの想いを込めているとみることもできるであろうか]

■ 【07-1-064】 秦少遊夢発殯而葬之者、云是劉発之柩、是歳発首薦。秦以詩賀之、劉涇亦作、因次其韻

【訳文】 これも夢に関する詩。秦観<sup>しんかん</sup> [字は少遊<sup>あざな</sup> しょうゆう] が妙な夢を見たのが事の始めであった。詩の題は「秦観は夢に葬列に加わった。葬る者が『これは劉発<sup>りゅうはつ</sup>の柩です』』といった。すると、その歳に劉発は官職に就くべく推薦されたので、秦観は祝いの詩を作って贈った。その詩に劉涇<sup>りゅうけい</sup>が和し、さらに蘇軾が和した」。葬列の夢は不思議と縁起がよいものだと考えられていたようである。

【訳文】

雉は死んでも節義を失わない鳥——

古代の士は雉のように、

国に少しでも補うところがあるのなら己を殺すこともした。

官に就いて職務に死ぬのは戦で死ぬのと同じ、

だから、屍を夢に見るのは、官職を得る兆してであると、昔からいわれてきた。

(世界を構成する木火土金水の)五行が正しく身の内に整う者が官に就くのであって、

私などは「土」で、五行の最も下の人間である。

仕官して禄を得ていない者は君主にとっては賓客である。

だから、無官の者が「純良の臣」などと自称するのは古例に反している。

禄を授受することで、君主と臣は仲間内とは異なる呼び方をし合うようになる。

世が衰え、道が微かくなって、士は己を失い、

官に就く者のあり方が本来のものとは異なってしまった。

官員でありながら、衣服や住居、車馬のことに気をとられ、

群れをなして飲酒して遊ぶのもつばらとしている。

科挙に合格した者は喜びのあまり、川に船を浮かべ、月に毬を蹴って遊び、

葬儀には舞わない、墓所では歌わないとの禁も平気で破り、

花を見て浮かれ、馬でやたらと走り回る狂態を見せる。

秦観君と劉涇君はまだ年少であるが豪逸、

詩を作り酒を飲んで、お上に仕える苦しみを知らない。

天は官の厳しさを示すために、劉発君の棺を夢に見させたのであろう。

諸君等にいおう、

「官員になっても己に本来あるものを腐らせてはならない、  
 葬礼に用いる泥で作った車、草で作った馬などはみな仮のものだ、  
 世の中の何が真であるかを仔細に見て、誤るようなことはあってはならない、  
 時がきたならば、大空に飛翔して鳴くのだから、  
 諸君等を敢えて朝廷に推挙せずともよいであろう」

【補足】[劉発と劉涇がどのような人であるのかわからないが、劉涇は秦觀と同じく  
 まだ科挙に合格していなかったので、蘇軾は二人を励ます意味合いでこの詩を詠んだ  
 のであろう]

## ■ 【07-1-065】送沈達赴広南

【解題】潤州に滞在する間に、遠く南の広南 [いまの広東あたり] へと赴任する沈達  
 に出逢い、この送別の詩を作った。

### 【訳文】

ああ、私と貴君はともに丙子[景祐三年]の生まれの四十九歳、  
 窮したとはいえまだ死んではいない。  
 貴君は幕府に従って西方で戦い、  
 凍り付いた河を夜に渡り、  
 雲のように高い要塞へと切り込んだ。  
 天に飛塵が漲り、甲に矢が降り注いだ。  
 そのような中から帰還し、妻子と再会したとき、  
 これは夢ではないかと疑った。  
 私は黄州に五年ほど流され、



ちようこう

長江の波にもまれるちっぽけな舟のようであった。

知り合いからの音信は絶え、

病と飢えと寒さによって死んでしまうのではないかと疑った。

貴君と会って手を握り合い、大きく笑う。

「白髪でやつれた顔が互いにそっくりではないか」

私は長江から離れて北に、

貴君は万里も軽いと南に行こうとしている。

功名は幻のようなもの、期待して得られるものではない。

学問の道を歩むのならば必ず得られるものがあることこそを喜ぶべきである。

貴君の行く地には丹砂たんさがあるという、

貴君はきっと仙薬を得るであろう。

私が行く地には瘤こぶの生じる病があるという、

私は運命に甘んじて病んでも取乱さない。

今度貴君が帰還したときには、

私と「雞黍の約けいしよ」を結んで果たそうというのなら、

私は今から田を買い、家を建ててを始めておこう。

【補足】 [(1) 四十九という年齢にはちょっとした思い入れがある [→作品番号 06-5-006、07-1-027 など]。 (2) 「雞黍の約けいしよ」は作品番号 07-1-059 でみている。ここではいわばリップサービスとして「雞黍の約」を結ぼうといったのだろう]

## ■ 【07-1-066】 次韻周種恵石銚

【解題】 これも潤州じゆん滞在中の詩。周種しゆうとうという官人が詩を添えて石の銚ちよう [茶や飲食物を煮たり温めたりする器] を贈ってくれたので、それへの謝拈。

## 【訳文】

銅の腥<sup>なまけ</sup>い臭いや鉄の渋みは泉水によるしくない。

この石の器<sup>そうびん</sup>の蒼然とした色合い、深くかつ寛やかな形<sup>ゆる</sup>は愛すべきである。

これを火に置けば、

蟹の眼のような泡が浮かんで湯がすくに沸き、

竜の頭のような柄は火をよく防いで冷たいままである。

新鮮な生姜と少々の塩を加えると、

湯に漬かった茶葉は雲に蒸された苔のような状態になって、

よい仕上がりの茶がでてあがる。

昔からいように三本足の鼎<sup>かなえ</sup>はたいていどれかが折れてしまう。

むき<sup>きく</sup>脚にそが軽やかで安らかなのである。

【補足】[茶に生姜や塩を加えるのは郷里での古風な飲み方である [→作品番号 064-027]]

## ■ 【07-1-067】 贈潘谷

【解題】墨を作って売る潘谷<sup>はんこく</sup>という人に贈った詩。最初に同姓の潘岳<sup>はんがく</sup>の故事を引いている。

## 【訳文】

晋の潘岳<sup>しん はんがく かよう</sup>が河陽県の知事だったとき、

自ら植えた桃や李<sup>ずも</sup>の花を、多数の美女を連れて見に行き、

町の人々はそのありさまに驚嘆した。

潘岳は天下第一の大金持ちの石崇せきすうに憧れ、

馬の蹄の下にかしこまって石崇の姿を拝んだ。

つまるところ、潘岳の胸の中は泥と塵だらけだったのだ。

今日の潘谷君はんこくは全く異なり、

身にまとうのは真っ黒な破れた衣、

手は亀のようにひび割れ、

黒い笏しやくで墨の長さを測り、からからと音を立てて切って売っている。

しかし、心を内は、氷の壺に秋の月を貯えている。

世間の人とはとかく耳で聞いたことを重んじ、目の前で見えていることを軽んじる。

張遇ちやうぐうとか李庭珪りていけいとかの名を聞いただけで、

その墨が極上であるかのように言い争う。

仙界せんがいに帰った李白りはくを訪ねに、ある日ふらりと潘谷君が行ってしまったならば、

人間界じんがくにはただ「墨仙」[潘谷のこと]を描いた画だけが虚しく残されることになるのだ。

【補足】 [(1) 「大金持ちの石崇せきすう」はこの後に見る「豆粥まめがゆ」の詩 [→作品番号 07-1-079] にも登場する。贅沢三昧に暮らしただけの愚物の最高峰として蘇軾はよくその名を引いている。それに憧れたのだから潘岳はんがくはよほどの愚か者だということになる。先にさんざんな評価を下した『文選』には、潘岳のかなり感傷的な作品が幾つか収められていて、すこぶる有名である。(2) 蘇軾は世間の評判よりも自身の眼が確かだとして、しばしば異論を唱え、定評のある張遇ちやうぐうや李庭珪りていけいの墨よりも潘岳の方が優れているというのである。もっとも李庭珪の墨が優れていることは作品番号 06-4-065 などで蘇軾自身が記している]

## ■ 【07-1-068】 書潘谷墨

【訳文】<sup>はんこく</sup>潘谷について記した短文。これより数年後に書かれたものであるようだ。

【訳文】

<sup>はんこく</sup>墨を売る潘谷について私はその人となりを知っているわけではないが、その為すことを聞くと、そこの町の人とは異なっている。墨は精妙でありながら、その値は一つに定まっていない。金をあまり持たない人が墨を求めると、その多少によらず墨を与える。これだけをただ者ではない。かつて私は詩を潘谷に与えたことがあり、

一朝入海尋李白、[仙界に帰った李白を訪ねに、ある日ふらりと潘谷君が行ってしまったならば]  
空看人間画墨仙。[人間界にはただ「墨仙」を描いた画だけが虚しく残されることになるのだ]

と、詠んだ。

潘谷はある日、墨の金をまだ支払ってもらっていない書き付けを焼き、三日間酒を飲み続け、狂を発してやたらと走り回り、井戸に赴いて死んでしまった。人が井戸を見下ろすと、井戸の中で<sup>ふざ</sup>跌坐して、手には数珠を持っていた。

<sup>ちやうげんめい</sup>張元明に会ったときに、このように話してくれた。

【補足】〔(1) <sup>はんこく</sup>潘谷が不思議な死に方をしたので、蘇軾の詩がそれを予言していたのだと評判になったという。(2) <sup>ちやうげんめい</sup>張元明は未詳〕

■ 【07-1-069】 与滕達道

【解説】<sup>とうげんはつ あざな たつどう</sup>滕元発 [字は達道] [→作品番号 07-1-060] は蘇軾と会った後に<sup>こ</sup>湖州に向かい、その際に、皇帝に着任を報告する「謝表」の代筆を蘇軾に頼んでいる。滕元発は文章を書くのが苦手だったのか、蘇軾は何度も代筆を引き受けている。これは<sup>じゆん</sup>潤州で

会った後に滕元発に宛てた手紙。

### 【訳文】

かつてお別れしてから四年の間は、互いに流離し無沙汰を重ねておりましたが、思いがけずまたお目にかかることができました。手を取り合い、恍然としていつの間にか涙がこぼれておりました。

日に日に風俗が悪くなり、忠義というものがほとんど見られなくなり、そのようなときに貴君を見ると、人は勇気が増すのを感じます。かつてお別れしてからのおもいは佳ろしいものではありませんでしたが、このたびお教えを受けてすっかりそれが解けました。お手紙で貴君が日々御佳勝のことを審らかり、安堵いたしました。

まだ少しばかり用事が残っていますので、さらに数日をここで過ごしてから北に向かいます。宜興の田についてはすでに問い合わせをしています。もしもやや佳いところがあったなら、舟で行って視ることになるでしょう。その折に湖州にも参れましょうか。貴君とお会いするのはもとより願うところですが、配慮すべきこともありますので、あるいは行けないかもしれません。もしも常州に住みたいとの願いが聞き届けられましたなら、もとよりすぐに湖州に参ります。それまでには数カ月ほどかかるでめいしょうか。万万自重されますように。

【補足】〔(1) 冒頭に4年前に会っているように記されている。黄州では二度のすれ違いがあったことを前の章で見ている。実際には会えていたということであろうか。

(2) 「宜興の田」とは、作品番号 07-1-054 で触れていた常州に退隠するプランで、滕元発と具体的な場所を挙げて相談を始めていたのだろう。作品番号 07-1-059 で上げていた陽羨溪は常州宜興県にある。(3) ここには、数日中に北に向かうと記してあるが、潤州滞在は意外と長引き、しかも長江をまた遡って真州に行くことになる。潤州と真州の間を行き来する間にも滕元発に何通かの手紙を出しているが、それらを時間順に並べるのは難しい。いよいよ「小児の遷延」が本格化して、はたから見ると蘇

軾はふらふらと迷走をする]

■ 【07-1-070】 蒜山松林中可卜居、余欲僦其地、地属金山、故作此詩与金山元長老

【解題】 上の手紙で見たように、蘇軾は「宜興ぎこうの田」を得ることを模索しつつ、もつと手近によい場所があると聞いて、そちらにも強い関心ちようこうを示した。長江のほとりにある蒜山さんざんの松林の中に手頃な土地があり、そこは金山寺きんざんじに属するというので、詩を作って金山寺きんざんじの仏印ぶつゐん禪師ぜんじ〔了元長老りようげん〕〔→作品番号 07-1-061〕に己の希望を打診してみた。

### 【訳文】

太古の魏王の巨大な瓠、

そんなものが本当にあったかどうか誰も知らない。

その種を植えたら、五石の水を入れることのできる実が成り、

割ると二つの大きな樽船ができたとか。

ただ困ったことに、

どこの川も湖も、浅くて狭くて、それを浮かべられなかった。

私は現代の魏王の瓠なのか、

本来何の役にも立たないのに、

虚名ばかりが大きく膨らんで世間を驚かせている。

大きな馱法螺を吹くやからは昔からいて、

漢かんの東方朔先生とうほうしやくは「知恵と勇氣は孔子の高弟二人分」とほざいていたし、

唐とうの杜甫先生とほは「老いて愚かなことは古代の大馬鹿者二人分」とぼやいていた。

私なんぞは孟子もうしが褒めた柳下惠りゅうかけいの奥ゆかしさを学ぶとかいっているくせして、

これは酸っぱい塩辛いものどつまらない言い争いに首を突っ込んでしまう。

金山さんざんにもおかしな人がいると、以前から聞いていたけれど、  
ようやく今になって知り合うことができた。

我は酔ういつも「世間とはもうおさらばだ」というのだが、  
傍の人は笑い飛ばして聞こうとしてくれない。

金山のその和尚だけは本気であると見抜いていて、  
「どこに帰るつもりかね」

と私に尋ねてくれる。

私は笑って蒜山さんざんを指さし、

「『生は浮せいかごとく、死は休むかごとく』といいます。

あそこが浮いて休む身を寄せるところです。

どうかこの『無家一房む か いちぼうの客』[定まった住処を持たない旅人]を招き入れてください」

【補足】[この詩はたぶんダメ元で仏印ぶつ いん禪師ぜんじに送ったのだろう。よい返事は得られなかった]

## ■ 【07-1-071】蘇子容母陳夫人挽詞

【解題】蘇軾じゆんは潤州で二篇の挽歌を作っている。ただし、この後で見るように、蘇軾は「小兒の遷延しょうに せんえん」の間に何度も潤州を通過しているので、そのいずれの時期に詠んだのかは必ずしもはっきりしない。すでに上で読んだ作品のいくつかも同様である。これは蘇頌そ しょう あざな しょう [字は子容] のために作ったその母の陳夫人ちんの挽歌。蘇頌は蘇軾よりも16歳年長で、その名を作品番号06-5-016、05-3-038などで見ている。蘇頌はこのとき母の喪に服して郷里の潤州に帰っていた。この詩は、この訳文を見ればわかる通り内容は乏しい。かつて蘇軾が母の墓誌銘し ぼ こうを司馬光し たい ふに書いてもらったことを思い返すなら

[→作品番号01-2-017]、当時の士大夫が互いにその両親を重んじる付き合い方をした

ことが知れてくるであろう。

### 【訳文】

陳家の舅翁〔陳夫人の父〕は氷のように清く、

蘇家の甥〔蘇頌の父〕は玉のように輝き、

その始まりからして頽れた風俗を正す風儀を具えていた。

陳夫人の高い節義はその家風に適い、

凜凜として寒さにも映える松や竹のようであった。

鶏が鳴くころから日々に新たなる善に努め、

八十三年を一つの朝のよに過ごした。

家を守り母君の長寿に仕えただけでなく、

朝廷のために優れた人を生んだのであった。

身を忘れて国ために殉じる人こそがその子で、

三度朝廷に仕えて喜びや怒りを表すことはなく、

正しいことをいおうとするだけで、官位の高下にこだわることはなく、

人の世の去来はすべて夢のように見なしていた。

ここに誦じる挽詩などはまことに小さなもの、

墓碑の千字もまた陳夫人の行いを十分に記すものではない。

後に歴史家がこの家に伝わる文書を見たならば、

史書に掲げるべき立派な夫人がここにいたと知るであろう。

### ■ 【07-1-072】 王中甫哀辞、并叙

【解題】 潤州で王沈之〔字は彦魯〕と出逢い、その父の王介〔字は中甫〕を偲ぶ詩



を作った。王介は嘉祐<sup>か ゆう</sup>6年〔1061年〕と一緒に制科<sup>せい か</sup>に合格した間柄で、その死を悼む詩を作品番号 05-2-024 で見ている。序文がある。

## 【訳文】

叙

仁宗皇帝<sup>じん そう</sup>の御世<sup>せい か</sup>に制科<sup>せい か</sup>に合格したのは十五人。私が 忝<sup>かたじけな</sup>くも合格となったときにはそのうちの九人が世にいた。すなわち、富弼<sup>ふ ひつ</sup>、張方平<sup>ちやうほうへい</sup>、銭明逸<sup>せんめいいつ</sup>、呉奎<sup>ご けい</sup>、夏噩<sup>か がく</sup>、陳舜俞<sup>ちんしゆんゆ</sup>、銭藻<sup>せんそう</sup>、王介<sup>おうかい</sup>、それに私と弟の轍<sup>てつ</sup>であった。それから十五年、密州<sup>みつ</sup>で王介の死を哭し、詩を作って吊った。このときすでに銭明逸、呉奎、陳舜俞が亡くなっていた。さらに八年、私は黄州<sup>こう</sup>から汝州<sup>じょ</sup>へ量移<sup>りやうい</sup>となり、たまたま京口<sup>けいこう</sup>〔潤州〕で王介の子の王沆<sup>おうえん</sup>之と会い、手を取って泣き合った。このとき十五人のうち生きているのは三人だけとなっていた。すなわち張方平と私と弟の轍である。ああ、悲しいではないか。

ここに先に王介を哭した詩と同じ韻を用いて王沆之に詩を与える。ときに王沆之もまた罪を得て流謫<sup>りゅうてき</sup>となり、錢塘<sup>せんとう</sup>〔杭州〕に住むという。

貴君の父上は、一束の藁<sup>あつ</sup>でその篤<sup>あつ</sup>い心を示した昔<sup>こうし</sup>の高士のような人であった。

貴君は、一束の藁<sup>どうぼく</sup>を盗んだ童僕<sup>どうぼく</sup>のために連座した昔の忠臣のような人である。

貴君は達観し、これからいかになるかと思ひ煩<sup>わづら</sup>たりない。

私は衰え、これからいかにしようかと、夢の中で空想することさえできない。

昔の寓話に、

Aさんは世間のために何もしないで長生きをしたが、最後は虎に食われてしまい、

Bさんは世のために奔走したけれど、若くして病死してしまった、

CさんがDさんに「おまえは間もなく死ぬ」といったところ、

Dさんは「俺が死ぬなら、俺は俺の死んだことを知らないし、おまえが生きていることだって知らない、どっ

ちが死んだのかわかりはしないと答えた、

つまりところ、A、B、C、Dのどれがよいのかわかりはしないのだ。

はつきりしているのは、東の坡たかざのにくずでとんまな野郎がいるということ。

その者は、

舟から川に剣を落して、急いで舟ばたこしるしを付け、

「ここで落とした」と叫び続けているようなことばかりしているのだ。

【補足】〔(1)「哀詞」という題ではあるが、哀しみは序文で十分に書いたということなのだろうか、詩は王介おうかいのことよりもむしろ蘇軾自身のことを多く歌っていて、しかも諧謔の作である。(2)原詩は、いくつかの故事を並べ、その解釈は読む人に委ねている。この訳詩は含意するところのものをやや顕わに出している。全体として、運命に翻弄される身ではあるけれど、いたずらに己の過去に縛られることなく、高潔な志は失わずにいたいということがいいたいのだろう。(3)仁宗皇帝じんそうの世に制科せいこに合格した15人中の最後の3人であるとは、蘇軾の強烈な自負心を示すとともに、時代の流れと乖離してしまった焦燥感をも示すのだろう。両者の葛藤からは、これ以上罪人としての屈辱を味わうよりは、誇り高く退くべきであろうとの結論が出るのは容易に推測できる。(4)この年の8月に官界の大先輩ちようべんの趙抃〔→作品番号06-4-030、05-5-082〕が亡くなっている。8年後に蘇軾は趙抃の墓所に建てる神道碑しんどうひに刻む文章を記す。それは父の蘇洵そじゆん以来趙抃に特に世話になった感謝の念から執筆を引き受けて、遺族から示された資料に基づいて綴ったもので、蘇軾らしさをそこに見出すことはほとんどできない]

## ■【07-1-073】減字木蘭花

【解題】蘇軾は9月中頃に潤州を発った。船に乗り込もうとすると、2人の女性が

「どうかあのお願いを叶えてくださいませ」とすがりついた。見れば、潤州知事きよじゆんの許遵きよじゆんが催した宴席ていようにいた鄭容ていようと高瑩こうえいという妓女で、2人は宴の隙を見て、「我らは『落籍』らくせき〔官妓かんの身からの解放げんぱう〕と『従良』じゆりよう〔良い夫のもとに嫁ぐ〕を願っております。どうか手助けしてください」と蘇軾そしつにささやきかけていた。蘇軾はうなずいただけであったが、蘇軾そしつがかつて官奴かんど〔官に仕える妓女は自由を奪われているのでこのようにいわれていた〕を解放してきたことを知っていたので〔→作品番号 04-1-052〕、この機会を逃すまいと、蘇軾が旅立つ前にと懸命に追いかけてきたのだった。蘇軾は微笑み、「これを知事殿のところを持って行きなさい。見ればわかってくさるであろう」と、一篇の詞をさらさらと書いて渡した。それが以下の詞で、詞としての意味は特にないので訳さないが、各句の頭の文字を並べると「鄭容落籍、高瑩従良」となっていて、2人の妓女の希望をこの詞に托して許遵に知らせたのだった。

・  
鄭莊好客。

・  
容我樽前先墮幘。

・  
落筆生風

・  
籍籍声名不負公。

・  
高山白早。

・  
瑩骨氷膚那解老。

・  
從此南徐。

・  
良夜清風月滿湖。

【補足】〔この詞によって2人の妓女が解放されたかどうかは伝えられていないが、許遵きよじゆんはきっと無視することはなかつただろう。なお、妓女の身を管理する権限は知事に

あった]

## ■ 【07-1-074】 与王荊公

【解題】 ようやく潤州を発った蘇軾は北に向かうのではなく、西に長江を遡って再び真州を訪れた。これは金陵で会った王安石 [荊公] に宛てた手紙。一通目は会って間もないころのもの、二通目は二十日余り経ってからのもの。二通目から、蘇軾は潤州に行ってからまた真州に戻ったことがわかる。

### 【訳文】

(1)私がかねてから公の門下生でありながら、これまで長らく、お訪ねしてお近くにお声をお聞きすることありませんでしたので、今回のことは幸いの極みでありました。お別れしてすでに日が経ち、なお仰ぎ見る気持ちは言葉では尽くせません。敢えて重ねて参上することはありませんが、今後の御康勝をただただ願うのであります。

【補足】 [ここで門下生であると記しているのは、蘇軾が制科の試験を受けたときに王安石が試験官の一人であったからだ]

(2)……私は初めて金陵に田を買って、できればお膝元にお仕えて、鍾山の下に老いたいの気持ちを持ちましたが、それを遂げることはできず、いままた真州に来ております。あれから二十日余り、田を求めようとしていますが、まだ成否のほどはわかりません。もし幸いにうまくきましたなら、舟によって往来して、公にお会いするのも難しくはないでしょう。

先にしばしば高郵の秦観君について申し上げました。公もまたあらかたその人となりを御存知であります。いま秦観君の詩文数十首を得ましたので、差し上げることにします。……[秦観を褒め、王安石の支援を願う言葉を並べる]……

【補足】 [(1) 金陵きんりょうに来てから以降は、もはや汝州じょに行く気をなくし、とにかく土地を得ることに懸命であった。(2) この手紙の後半は秦觀しんかんを支援してほしいと、言葉を尽くしている。才能がありながら科挙には縁がない秦觀のために何とかしたいと蘇軾は力を尽くしているのである。このとき王安石に送った秦觀の詩文は、潤州じゆんで会ったときに受け取ったものであろう]

## ■ 【07-1-075】 菩薩蛮

【解説】 二度目の真州しん訪問で蘇軾が何をしたのかはわからない。また潤州じゆんにもどり、潤州から今度は大運河を南に下って常州じょうに向かった。先に作品番号 07-1-069 に記してあった「宜興ぎこうの田」を得られる目途が立ち、宜興ぎこう県の陽羨ようせんにまで行き、土地の人である単秀才たんしゅうさいという人物に伴われて現地を見て、そこを買おうと決めた。得た土地の管理は蔣公裕しょうこうゆうという者に頼んだ。もしかすると、蔣之奇しょうしき [→作品番号 07-1-059] の一族の者であるのかもしれない。土地を獲得するに当たっては、湖州こ知事になっていた滕元発とうげんはつの助力もあっただろうし、郷里の大先輩である范鎮はんちん [→作品番号 06-4-017] からの資金援助もあっただろう。これは土地を得たことを歌った詞で、弟に向かつて詠んだという解釈のもとで訳す。筠州いんで弟と会ったときに [→作品番号 07-1-010]、このようになるとの方向性を告げていた推測しても、たぶん大きな間違いではないだろう。

### 【訳文】

買田陽羨吾将老。[田を陽羨ようせんに買い、そこで僕は老います]

従来只為溪山好。[これまではただ溪山けいざんのよろしいところでありました]

来往一虚舟、[これからは舟に一人乗って行き来し]

聊随物外遊。[世俗の外に出て遊ぶのです]

有書仍懶著。[君からの手紙に物憂くてまだ返事をしていません]

水調歌歸去。[かつて『水調歌頭』の詞に早く退隱すべきことを歌いました]

筋力不辭詩。[僕の身体のかは詩を詠むくらいならまたできます]

要須風雨時。[待たれるのは、君と牀を並べて夜の雨の音を聞くことです]

【補足】[かつて詠んだという『水調歌頭』の詞は作品番号 05-3-051 で見ている。「夜雨対牀」は兄弟の最も望むものである [→作品番号 02-1-013]]

### ■ 【07-1-076】 艤舟迎恩亭題

【解題】宜興県で土地を見て引き返すときに迎恩亭で記した短文。

#### 【訳文】

朝早くに宜興を發ち、わずかな酒で酔い、机の上に拳を置き、頭を垂れ、そのまま寝てしまい、舟が出たのも知らずにいた。迎恩亭は門の外を見るだけでとりわけ風味があり、千年の歳月を想像させるものがある。

### ■ 【07-1-077】 陶淵明詩

【解題】上と同じ舟中で陶淵明の詩を写した。蘇軾自身の言葉はないが、このときの心情を十分に窺い知ることができるであろう。

#### 【訳文】

丈夫志四海、[男見たる者、天下を志せといふけれど]

我願不知老。[私が願うのは——老いを知らずに]

親戚共一処、[親戚が一緒に暮らし]  
子孫還相保。[子や孫もそろって元気で]  
觴弦肆朝日、[朝から盃やら楽器やらを並べ]  
樽中酒不燥。[樽の中の酒が途切れずにあって]  
緩帶尽歡娛、[帯を緩めて楽しみを尽し]  
起晚眠常早。[起きるのは遅くて、いつも早く眠ること]  
孰若当世士、[どっちがましなのだろうか——いまの世間の連中が]  
冰炭満懷抱。[氷と炭のような互いに反することをいっばい願って]  
百年歸丘壟、[百年後に墓に納まるまでの間に]  
用此空名道。[ずっと虚名にひきずられっぱなししているのと]

げんほう ぎこう どうぼこじ  
元豊七年十月二日、宜興の舟中で写す。東坡居士記す。

## ■ 【07-1-078】 楚頌帖

【解題】土地を獲得できることになって、蘇軾の気分は高揚していたのだろう。上と同じ日にこの短文を記している。

### 【訳文】

私は陽羨ようせんにきて、舟で荆溪けいけいに入った。気持ちか豁然からりとして、ふたんからの望みがまさに遂げられかのようである。ゆゆくはここに帰って老いるのが、ほとんど前世からの縁おうぎしだったのだろう。王羲之とうは、「私は東山さんで死ぬのだ」といった。死ぬべき場所が定められているとするのは虚言ではないのだろう。私はもともと農作業を好み、果樹の接ぎ木がてき、橘を植えるのを最も好む。陽羨どうていさんは洞庭山の近くにあり、柑橘類を得やすいところだ。暇な折に小さな畑くつげんを買い足し、柑橘類を三百本ばかりも植えるでしょうか。屈原

は『橋の頌歌』を作った。我が果樹園ができたなら、そこに一つの亭あずまやを作って、それに「楚頌」と名付けるそしょうとしてよう。

元豊七年十月二日。

【補足】 [(1) 将来の楽しい計画について記しているのは作品番号 06-2-024 の其の六に似ている。(2) 蘇軾の死ぬべき場所がどこに定められていたのか、第 13 章の終わりで見るとであろう]

## ■ 【07-1-079】 豆粥

【解題】 この詩は常州で詠んだか定かではないが、このころの心情を推し量るよすがにはなるであろう。

### 【訳文】

誰もが知っているように、

劉秀りゅうしゅう [後の光武帝] が戦に敗れ、滹沱河こたがの流れで車軸を折られてしまったとき、

將軍ふういの馮異は急いで豆粥まめがゆを用意し、

参謀とうりゅうの鄧禹は湿った薪かまどを破れた竈かまどにくべ、

劉秀は濡れた衣を自分で乾かした。

豆粥で飢えと寒さを免れた以上に、

劉秀は馮異と鄧禹の心に感じ入った。

やはり誰もが知っているように、

金谷きんこくにあった晋しんの石崇せきすうの邸宅ていせきでは、

不意の客人とびりがあっても、帳のもとに美女をずらりと並べて豆粥を煮させ、

そのときが氷を敲いて割る嚴冬の季節であっても、



粥には春の野菜がふんだんに入れられていて、

どのようにしてそれを用意したのか知る者はいなかった

石崇は戦が迫ってきても、<sup>せいしよく</sup>声色にまどわれつかれたまま心は酔い続け、

どこにも身を寄せるところがなくなりました。

身も心も<sup>ひっくりかえって</sup>顛倒いるのが自分でわからなくて、

どうして人間世界の真実を知ることなどできようか。

石崇の贅を尽した豆粥などは、

川のほとりの葦原の茅ぶきの小屋で細い煙を上げて煮た劉秀の豆粥にはとても及ばないのだ。

粗末な<sup>うす こめ ひ たま</sup>碓でも<sup>こ</sup>杵を挽けば玉のように輝き、

粗末な<sup>かめ</sup>瓶でも豆を煮れば<sup>ヨーグルト</sup>酥のように柔らかくなる。

私はいま老いて所有するものは何も無い。

東の地に来て、書物を売り払って、ここに住もうと思っている。

臥したまま鶏の鳴き声を聞き、

寝癖のついた髪のまま杖をついて君の家に行くと、

ちょうど豆粥が煮え上がっているのだ。

【補足】〔(1) この詩は先に見た『<sup>びせきけん</sup>眉石硯の歌』〔→作品番号 07-1-039〕と同じ構成になっていて、対照的な二つの故事を並べて、己の考えを提示している。(2) 最初に引いた故事は、<sup>かんおうちよう</sup>漢王朝を再興しようと立ち上がった<sup>りゆうしゆう こうぶてい</sup>劉秀〔光武帝〕が命運をかけた一戦に大敗し、最大の危機に陥ったときのことである。蘇軾もいま大きな岐路に立っていると感じていたのだろう。(3) 石崇は作品番号 07-1-067 にも登場していた大金持ちの大馬鹿者である。朝廷の実権を握る人々に靡いて、その石崇のような贅沢な暮らしを手に入れようとするのは論外としても、<sup>じよ</sup>汝州に行けばさらなる恥辱を蒙る恐れは多分にあった。かといって<sup>りようい</sup>量移の命令に背くことはできない。ならば退隱する以外にな

いと、ささやかな農地を獲得したのだった。(4) この詩の最後の句にある「君」とは誰なのか、次に見る手紙の人であるのかも知れない]

### ■ 【07-1-080】 答賈耘老

【解題】 宜興<sup>ぎこう</sup>県から常州<sup>じょう</sup>に戻る間にこの手紙を書いた。賈<sup>か</sup>収<sup>しゆう</sup> [号は耘老<sup>ごう うんろう</sup>] への返書である。賈<sup>か</sup>収<sup>しゆう</sup>は湖州<sup>こしゅう</sup>の隠者<sup>いんしや</sup>で、滕元発<sup>とうげんはつ</sup>に会うことを勧めていた [→作品番号 07-1-054]。

#### 【訳文】

私はすでに陽羨<sup>ようせん</sup>に農地を買いました。我が余生<sup>よせい</sup>に憐れみをかけてくださいますよう聖主<sup>せいしゅ</sup> [皇帝] に申し出て、そこに住むことをお許しただくつもりです。幸いにも許可が得られましたなら、荆溪<sup>けいけい</sup>のほとりに住まいを築き、そこで老いを迎えるつもりです。私は門を閉じて外出しませんので、貴君におかれてはどうか舟でお越してください。酔ってまともな字が書けません。お許してください。

### ■ 【07-1-081】 答秦太虚

【解題】 蘇軾<sup>そしつ</sup>は常州<sup>じょう</sup>からさらに潤州<sup>じゆん</sup>に戻り、知事<sup>ちじ</sup>の許遵<sup>きょじゆん</sup> [→作品番号 07-1-060] に送別の詞<sup>し</sup>を送って長江<sup>ちやうかう</sup>を渡り、揚州<sup>よう</sup>に至った。ようやく汝州<sup>じょ</sup>に至る順路に乗ったことになるのだが、陽羨<sup>ようせん</sup>で土地を得られることになった蘇軾<sup>そしつ</sup>は汝州には行かずにすませる算段を思案して実行して行くことになる。皇帝の指示に反することをしようというのだから簡単に実現できるものではない。そのことについて秦觀<sup>しんかん</sup> [字は太虚<sup>あぎな</sup>、少游<sup>たいきょ</sup>] [→作品番号 07-1-064] に宛てた手紙に記している。秦觀<sup>しんかん</sup>は潤州で蘇軾<sup>そしつ</sup>と会った後に郷里<sup>きやうり</sup>の高郵<sup>かうゆう</sup>に帰り、大運河を北上してくる蘇軾<sup>そしつ</sup>を待ち受けていた。

#### 【訳文】

お別れしてからお手紙を書こうと思いつつ、<sup>ごたごた</sup>紛紛して暇がなく、<sup>いばま</sup>またすぐにお会いできるであろうと思って  
もいたので、ついつい書かずにいましたところ、一日また一日と過ぎて、ついに今に至ってしまいました。  
重ねてのお手紙を頂戴してこの日々の御様子を伺い、心が慰められます。

私は<sup>ぎこう</sup>宜興に少しばかりの田を手に入れました。<sup>よう</sup>揚州に至りましたなら、<sup>てい</sup>遞[<sup>じょう</sup>官の通信網]に附して常州  
に住むことを皇帝に乞い願うつもりです。いま宜興県に錢を納めるために甥の息子を遣わしており、その  
者が帰ってきたなら出発するつもりなのですが、まだ戻ってきていません。その母が私と別れ難くても  
います。<sup>ちくせい</sup>舟は竹西で待っていて、二三日のうちには必ずそこに行くでしょうから、貴君には冬至の前  
にお会いできるでしょう。若い者は事に慣れていなくて、いささか心配でもありますので、そのまま抛って進  
んでしまうこともできません。お会いするのが遅くなり、一日が一年のように感じられます。……

【補足】〔(1)「甥の息子」とあるのが具体的に誰であるのかはわからない。また、訳  
者はこの時代の土地の売買について無知なので、「<sup>ぎこう</sup>宜興県に錢を納める」と記されて  
いるのが何のためであるのかわからない。後に、土地の所有権を巡って若干のトラブ  
ルが生じたようなのだが、それが何に起因するのか、どのように解決されたのか理解  
する力がないので、その件について触れることができない。(2) 皇帝に願い出る文章  
とあるのは、次にそれを見る。(3) <sup>ちくせい</sup>竹西は<sup>よう</sup>揚州の町を通り抜けた先で、後でまた見る  
ことになる]

## ■ 【07-1-082】 乞常州居住表

【解題】<sup>じょう</sup>常州に退居することを願う文章。「表」とは皇帝や役所に願ひ出る文章。

### 【訳文】

<sup>じょう</sup>汝州団練副使本州安置不得<sup>ふ</sup>簽書公事<sup>き</sup>騎都尉の臣蘇軾、

右の者は<sup>きょうもう</sup>狂妄をもって罪を得ましたが、<sup>せいおん</sup>伏して聖恩を蒙り、<sup>せい</sup>なお余りの生を賜り、<sup>よ</sup>善い地に置いて<sup>た</sup>た

いました[黄州こうに流されたことをいう]。それより歳月がいまだいかにほどでもないのに、お目こ孔を蒙り、都に近いころりょういに量移されなることとなりました。この再生を賜り、万死をもってしても酬むさいることができません。

臣わたしの家は貧乏を重ね、すぐに安置される所へと向かうべく船に乗りましたが、黄州こうを離れてからは、波風の恐ろしさに驚かされ、一家を挙げて病気となり、幼い子を喪いました。今はすでに揚州ように至りましたが、旅費が尽き果て、陸に上がることもできません。汝州じょに参りましても、そこに土地があつて農業を営めるわけでもなく、いかに生きたらよろしいのか、飼い主のない犬や馬と同じように憂い、飢えや寒さに厳しく迫られることとなりましょう。密かに思いますに、朝廷は仁の至りわたしによって臣の命を全うさせてくださいましたからには、それが失われることはきっと憐れんでくださるでありましょう。

臣わたしは先にわずかな農地を得まして、それは常州宜興縣じょうこうにあります。薄い粥じゆくらいならどうにか得られますので、聖慈をもって特に常州に居住することをお許しただきたく希望するものであります。もしも罪の深さにかかわらず生きながらえられ、さらには身を捨てて酬むさいることができるのなら、死んでも留まるものではありません。

臣わたしはいまここで敢えてぐずぐずすることなく南京応天府なんけいおうてんに至り、朝廷からの御指示を仰いで従うようにいたします。

天威を犯し、伏して罪を待つこと戦々恐々の至りにございます。謹んでお伺いを立て、伏して勅旨ちやくしをお待ちいたします。

元豊七年十月十九日、汝州団練副使本州安置不得簽書公事騎都尉臣蘇軾、状を以て奏します。

【補足】[皇帝からの指示に従わずに自分の願いを申し出るのであるから、蘇軾は非常に気を使ってこの文章を書いたのだらう。移動の旅の困難を書き、旅費が尽きたと記している。自分がいかに困難な状況にあるかを強調したものではあろうけれど、実際に蘇軾の懐具合はかなり苦しかったはずである]

## ■ 【07-1-083】 広陵後園題申公扇子

【解題】揚州は物流の一大拠点で、北宋の四大都市〔都、揚州、杭州、成都〕の一つで、ここでも蘇軾は積極的に大勢の人々と交流している。その1人に呂公著がいた。そのときの様子が邵博の随筆『邵氏聞見後録』〔→作品番号 07-1-046〕に記述されている。呂公著は蘇軾より18歳年長の保守本流の超大物政治家で、蘇軾とは時折接点があった〔→作品番号 05-4-117など〕。この項の表題に掲げたのは、蘇軾の詩のタイトルで、以下の訳文では、詩の前後に邵博が記した文章を添えてある。

### 【訳文】

呂公著が揚州知事であったとき、蘇軾は黄州から汝州に移る折に揚州を経由し、呂公著に会った。呂公著は蘇軾に酒を出したが、終日一語も交えなかった。蘇軾は酔って眠り、「夜は寒く、羅衣の薄さをそぞろに覚えます」と歌妓が歌う声に、蘇軾は驚いて目を覚ました。歌妓はこっそり笑い合った。酒が終わって庭に出て、座が改まると、蘇軾は筆と墨を求め、歌妓の团扇に詩を書いた。

露を宿す葉、風に揺れる枝、

暁の風儀はともに等しい。

そして、緑の陰の青い実は浄く塵もない。

家を巡って樹木がたわわに繁ると歌ったのは陶淵明であった。

ここでその句を吟じると、

なるほど陶淵明は可人であったと知れる。

呂公著はこれを見ても何もいかなかった。

【補足】〔(1) 蘇軾の詩は、呂公著りょこうちよを陶淵明とうえんめいに比して讚えただけのもので、内容は乏しい。(2) 歌妓が歌った歌詞は「夜来走卻羅醫博」という当時の諺にひっかけた駄洒落になっているようなのだが、その諺の意味が訳者にはわかっていないので適切な訳ができていない(3) 呂公著が終始無言であったのはなぜなのか。朝廷の目を気にしてのことであるのは間違いないだろう。呂公著は名門の大物であり、蘇軾は人気随一の文人、2人が会って何を話したのか、必ず世間の耳目を集めることになる。(4) 上で見た皇帝に願い出る文章を、蘇軾は官の通信網つうしんを使って揚州から都に送ろうとした。ところが、役人は規則に反するからと受け取りを拒否した。朝廷の中心人物たちから嫌われている者の勝手な願いを受理したらどのようなお咎めを受けるかわからないので、細々した規則を盾に拒否するのが役人としての当然の態度であったのだろう。その際に、知事の呂公著は何ら手助けをしなかったようである。管轄外のことで介入できないということであるとしても、蘇軾と会っても終始無言であったということに呂公著の姿勢がよく現れているといえるだろう〕

## ■ 【07-1-084】書韓魏公黃州詩後

【解題】蘇軾が8歳のときに憧れたスーパースターの1人かん きに韓琦がいた。韓琦は若い頃に一時期こう黃州に滞在していたことがあり、それから40年後に黃州出身の孫賁そんぶんという官員の訪問を受け、韓琦は一篇の詩を詠んだ。孫賁はそれを石に刻んで黃州に置きたいと考え、蘇軾に記念の文章の執筆を依頼した。これはそれへの返事として書いて送ったもの。揚州よう滞在中に書いたと推測されている。

### 【訳文】

黃州は、山水は清遠、氣風せいえんは厚善こうぜんである。その民は求めることが寡すくなく、争いごとがない。その土は

静かで風采があり、朴訥であつても陋びていない。路地裏の貧者であつても、賢者を敬愛することを知っている。

黄州の人々は、「吾が州は都から遠く、ちつだけなところではあつても、かつて王禹偁様も韓琦様もお住まいなされた」と、四方の人々に向かって誇らげにいう。王禹偁は黄州から蕪州に移り、そこで亡くなったのだが、世の人が王禹偁を語るときは必ず黄州をいい、黄州の人は「吾が王禹偁様」という。韓琦は黄州を去って四十余年経つても黄州のことを思い、忘れることなく詩に詠んだ。

そもそも賢人、君子は天下の民のために何かを遺し、天下の民はそれを共有する。黄州の人だけが二公の遺したものを専有しているのだろうか。あるいは、徳を尊び、道を楽しむことが他の土地の者と異なっているのだろうか。二公と黄州の人の間に、遠い昔から知ることできない契りがあったのだろうか。

王禹偁は黄州の郡守となりその民に対して徳があった。だから、黄州の民が王禹偁のことを懐いて忘れないのは理解できる。韓琦は家人の喪に服し、その兄に従つて黄州に住んだだけだった。それでいながら、黄州の民はどのように韓琦のことを知つたのだろうか。

『詩経』にはこうある。「匪たる君子[立派な君子]あり、金の如く、錫の如く、圭の如く、璧の如し」。この句は、金、錫、圭、璧のあるところを瓦礫や草木が覆つてその光沢を隠したとしても、その本質を失わせることはないということから、君子の徳も隠せないことを歌っている。韓琦はまさにそういう人なのである。

奉議郎の孫貴は黄州の人で、韓琦の客人となり、韓琦は孫貴のことを深く知つて、属官として用いた。

私は韓琦の門人で、五年の間、黄州に謫居した。東の坡を耕し、雪堂を築き、そこに老いることとなつて、自分もまた黄州の人であると考えた。我等二人は、韓琦の詩を写して石に刻み、もつて黄州の人々が韓琦を思うことを無窮に伝えようとするものである。そして、我等二人はここに託して韓琦と黄州のつながりを忘れまいとするのである。

元豊七年十月二十六日、汝州団練副使蘇軾記す。

【補足】[なお韓琦は9年前の熙寧8年[1075年]に亡くなつている[→作品番号05-1-053]]

## ■ 【07-1-085】 与徐得之

【**解題**】徐大正〔字は得之〕に宛てた手紙。徐大正は、かつて黄州知事の任にあった徐大受の弟で、兄が亡くなったために、その棺を携えて帰郷したのだが〔→作品番号06-5-011〕、蘇軾に会おうとして揚州の方に向かってきているとの手紙が蘇軾のもとに届いた。これはそれへの返事。徐大正の故郷は閩中〔福建省〕の建安で、揚州からは南に遠く離れている。徐大正が黄州を発ったのはこの年の3月で、半年余りのうちに、郷里での葬儀をすませてさらにまた揚州にくることになったのだろうか。もしかすると、また郷里にへの旅の途中で、兄の棺をどこかに留めて蘇軾に会いにこよとしたのだろうか。

【**訳文**】

貴君とは足掛け二年にわたって家族と等しいような気持ちでお付き合いし、たちまち遠く別れることになって、いまも残念に思っております。お手紙をいただき、お健やかにお過ごしのこと、結構に存じます。こちらに来られるとのことですが、遠くに水に隔てられ、難儀であります。果たして十五日までに間に合いますか。すでにそちらを発たれたてでしょうか。私はこの間にあれこれ努め、ついに定住するよい場所を得ました。万万自重されますように。

【**補足**】〔ここにある「十五日」とは、11月15日のことであろう。後の経緯を見ると、11月15日には揚州を離れることを予定していたので、それまでに来てくれれば会えるというのである〕

## ■ 【07-1-086】 徐大正閑軒

【**解題**】幸いにも徐大正〔字は得之〕と再会でき、蘇軾はこの詩を贈った。徐大正の



住まいである「閑軒」に寄せた詩。

### 【訳文】

氷雪の中で繭を作るとい「氷蚕」は、寒さというものを知らない。

火山の中で毛を伸ばすとい「火鼠」は、熱さというものを知らない。

だから、閑ということを知り、閑なるところを知る者は、

実は閑を侶とする者ではないのである。

ここに東の坡の翁がいる。

誰よりも懶散で、身体を酔夢の内に置き、

暮らし向きのはまったらかし、

早くに眠るから灯火を見たことがなく、

遅くに起きるから普通の人の晩飯が昼飯になる。

盗人が毛氈を盗っていこうとしても横になったまま眺め、

麦が雨に流されても座ったまま眺めている。

話すのが稀であるから舌はこわばってしまい、

歩くのは少しだけであるから足腰は屈まってしまう。

黄州の町にいること五年、黄州の太鼓の聞こえないところにまで出たことがない。

人はいう、

「東の坡の翁はもともと閑人であるから、閑なるところに置かれているのだ」

翁は問う、

「はて、閑とはどういう味わいのものなのだろうか」

眼が自分の眼を見ることができないように、

翁には閑というものがわからない。

翁いぶかが訝うらやまるのは、

「徐君じょは閑軒かんけんとかいらつておるようだが、どれほどの閑かんを得ているものやら」

とかく世間の者ものは閑かんには耐えられない。

伝介子でんかいしという人は、遠く西国に刺客として行くことを敢えて志願したし、

尹翁帰いんおうきという人は、文官と武官を分けたときに敢えて両方を兼務したいといった。

二人はこうして家の名を輝かした。

翁いぶかは閑であるから詩でも作るしかない。

かくてこの詩を作るうちに、

だんだんと閑かんでないことをいふようになってしまった。

徐君は閑軒に住んでいながら、

いったいどういふわけで千里を走る汗血馬かんけつばのように遠くやってきたのだろうか。

まあ背に鞍を載せるくらいなら、

鞭で打たれつつ塩を満載した車を曳ひよりはましたろう。

【補足】[詩の後半は、蘇軾と会うためにあたふたやってきた徐大正じょたいせいを、「閑かん」とは正反対のことをしていると、少々手荒くからかったものであろう]

## ■ 【07-1-087】 与徐得之

【解題】徐大正じょたいせい [字は得之あざな とくし] は遠くから来て、たちまち去って行ったようだ。

### 【訳文】

聞けば舟を操って数百里の道のりも遠いとはせずに来られたとのこと、風義の重さに感慰の極みであります。お疲れではないでしょうか。揚州には数日間留まるとはいえ、御一緒できる機会は少なく、一緒に宿泊することもできないままにまた遠く別れてしまうのでしょうか。残念なことであります。

■ 【07-1-088】 元豊七年十一月十三日、与幾先自竹西来訪慶老、不見、独与君卿供奉、蟾知客東閣道話久之

【解題】 この詩の題は、「十一月十三日、杜介〔字は幾先〕とともに竹西寺からある寺に来て慶老を訪問したが不在であった。寺には君卿〔元の官員〕と供奉〔接待役の僧の〕蟾がいたので東閣でしばらく仏教について語り合った」。杜介の名は作品番号 06-1-110 で見ていて、蘇軾が湖州で逮捕されて都へと護送されて行く途中で揚州を通過したときに、舟から杜介の隠居所を見て、何ともいえない気持ちを抱いたのだった。竹西寺は揚州郊外にある禅宗の寺。慶老と君卿については不詳。

### 【訳文】

黄色い落ち葉が長い廊下を走る。

香の煙は長く垂らした簾の内に籠ったまま。

主人〔慶老〕が帰り来るのを待っているのだが、

ついに帰って来ない。

紅い火は消え尽くし、香は灰となって雪のようになる。

【補足】 [これより 10 年余り後に、蘇軾はふとこの詩を思い出して書き留めた。そうしていなかったら消えていた作品である。蘇軾の記憶力は驚異的で、日付も、一緒にいた者の名も正確に覚えていたのである]

■ 【07-1-089】 秦少游真贊

【解題】 竹西寺には秦觀〔字は少游〕〔→作品番号 07-1-081〕の肖像画があり、蘇軾はそれに贊を記した。

## 【訳文】

貴君をもも仕えさせたなら、粗末な服を着て、その行動は正しい。貴君をもも隠れさせたなら、美しい言葉をいい、心は豊かである。貴君が一人置かれて、人が求めなければ貴君は一人のままでいる。人が求めるのなら貴君は腹藏なく話す。仕えさせるか隠れさせるか貴君が預かり知るところではなく、そのようになるよるところにたまたま遇えばそれに乗るだけで、そのようにして世に遊び、ついに郷里に帰るようなこともないのである。

## ■ 【07-1-090】別扱公

【解題】禅僧の無扱むたく〔扱公たくこう〕と別れたときの詩。無扱とは今回初めて揚州で知り合ったようで、揚州郊外の竹西寺ちくせいじにまで蘇軾そくに同行し、そこで別れた。無扱とは後にまた会うことになる。

## 【訳文】

揚州ようの北ほくに、隋ずいの煬帝ようたいを葬たくこうった塚がある。

わざわざそこに立ち寄って煬帝を弔うほどの暇は、

無扱師むたくしは持ち合わせていない。

それでも、竹西寺ちくせいじに来られたのはなぜなのか。

揚州から流れる遊興の音楽を聴こうというのだろうか。

【補足】〔揚州ようは繁華な都会であったから、歓楽街も繁盛し、その賑わいが竹西寺ちくせいじにまで聞こえるのだろう。巷の喧騒を耳にするのもまた仏道に帰依する縁になるというのだろうか〕

## ■ 【07-1-091】 邵伯梵行寺山茶

【解題】蘇軾は竹西寺から船で発ち、大運河を北上した。杜介 [→作品番号 07-1-088] が同行し、邵伯鎮の梵行寺に立ち寄り、山茶花を詩に詠んだ。

### 【訳文】

山茶花の木が対をなしている。

誰が植えたのだろうか。

細かい雨が降り、あたりに人はない。

私は独りにこに来て君[山茶花]に問う。

「爛紅 火の如くに雪中に開く——

その真実の意味は何か」

問いかけたところで、君は理解しない。

【補足】[山茶花は蘇軾の問いを理解しないのではなく、真理はもとより山茶花に宿り、それを理解しないのは蘇軾の方であるということであろう]

## ■ 【07-1-092】 高郵陳直躬処士画雁二首

【解題】蘇軾は 11 月下旬に秦観の故郷、高郵県に至る。ここに画を得意とする陳直躬という官に仕えない者がいた。陳直躬が描いた雁の画を見ての詩。

### 【訳文】

其の一

野の雁は、人が来たと見ると、

飛び立つよりも前に、まずその意を改める。

貴君はどこからみ見て、

人がいないときの雁のこのありさまを写し得たのか。

雁は枯れた木とも変わらないかたちで、

その雁を写した貴君も同じ「自在」[「自ずから在るがまま」]であったのだろう。

北風が枯れた葦を振るい、小雪がきらきらと落ちかかる。

雲水は淡く昏く、水際に細かい砂礫がある。

矢を負って雁を獲ろうとしたところで無駄だ。

ひとたび起つなら、

雁はもう江海の遥か向こうを飛んでいるのだ。

## 其の二

もろもろの鳥はしばしばめごとを起こす。

野の雁だけは静かで潔い。

こころ意に自得して徐におもむく進み、

首を上げ下げする動作にもきちんとした節義がある。

私は衰えた身をこうこ江湖に寄せ、

老に伴うのは驚鳥やら鴨やらの騒がしい連中だ。

しょ書を作ってちん陳先生に尋ねたい――

この夕暮れの景色はちようすい菖水あたりなのか。

雁は互いに依ってしたしあつ円い沙のあたりに集まり、

斜めになった月のもとでこまやか稍稍に動いている。

一羽が鳴いてはね翅をう鼓つと、

蘆についていた雪が一面の花吹雪となって舞い上がる。

【補足】 [描かれた雁に託して自身の心情を詠んだのだろう。茗水は湖州の名勝であることは作品番号 05-5-070 などで見ている。茗水の名を出して、土地を得た江南の風光に思いを寄せているのだろう。官職から退いて常州に住むというプランは、朝廷に差し出す文書を送り出すことができず、宙ぶらりんのままであった]

## ■ 【07-1-093】 蔡景繁官舎小閣

【解題】 高郵で杜介は帰り、蘇軾は秦觀を伴って船を進め、冬至 [11 月 22 日] のころに楚州に到着した。そこで官職に就いていた蔡承禧 [字は景繁] の官舎にある小閣でこの詩を詠んだ。蔡承禧の名は作品番号 06-4-078 などで見えて、蘇軾が黄州の臨臯亭の南に南堂を築いたときに支援をしてくれた人で、そのころは海州にいて、その後、楚州に移ったのである。

### 【訳文】

貴君は東南の地の誇りであるだけでなく、

お父上の立派な振る舞いをそのまま保っている。

昔むかし、蔡謨は権力者の激怒を買っても連中の阿呆な行為を嘲笑った。

昔むかし、蔡廊は権力者に強要されても愚かな政策に署名するのを拒んだ。

貴君は都を出されて三年、

風月のうちで千首の詩を詠んで懐を放ってきた。

小閣の扉を開いて、秋の清らかな光のもとに座り、

東の川の明るい照り返しに目を細める、

傍らにあるのは琴と酒、

夕日が靄を染めるまで眺め続け、

千里の彼方へと独り鳥が飛び去るのを見送ると、

貴君は窓の紙に詩を記す。

いつしか小閣の前の柳に、

都から来た立派な船が繋がれるであろうか。

近頃朝廷は制度を一新し、才ある人を集めようと大騒ぎになっているとか。

私と貴君がここで会うのは天の定めによるのか。

貴君は寂寞としてこの東南の地にいる……

【補足】〔(1) 都から見て楚州は東南の地である。(2) 同じ蔡姓の人の優れた行為を挙げて、蔡承禧父子の節義を讃えている。(3) 神宗皇帝はこれより3年前に官制の大改革を断行した。宋朝の官僚制度は唐朝からの制度を受け継ぎつつ、新たなものをその都度付け足してきたために複雑かつ無駄の多いものになっていた。制度変更に伴い、出世の道が開けるかと期待する者が大勢いたのだろう。蔡承禧も蘇軾もそういうこととは無縁であるというのがこの詩の終わりの部分。(4) なお、蔡承禧はこのときは楚州を離れて不在であったのかもしれない〕

## ■ 【07-1-094】 和王旂二首

【解題】楚州で王旂〔字は元竜〕に会い、その詩に和した。王旂は王安国〔字は平甫〕〔→作品番号 07-1-050〕の子。王安国は王安石の弟で、兄が推し進める改革には必ずしも賛同しないところがあり、特に兄が呂惠卿を重用するのを見て警戒するよう忠告した。そのため呂惠卿によって罪に陥れられ、政界を去って郷里に帰り、これより10年前に47歳で亡くなっている。この詩の第1首は父の王安国のことを詠んでいる。

### 【訳文】



其の一

かの李白<sup>りはく</sup>は仙界から人間世界に追放された人であろうといわれていた。

貴君のお父上は、

その謫仙人<sup>たくせんじん</sup>が長くそのままこの世に留まったその人ではないかと怪しまれた。

舌を動かせば雷の勢いがあり、筆を揮えば神のようにすばやかだった。

聞くところでは、

いまは鯨にまたがってのんびり遊んでおられるとか。

思い出されるのは、

かつて大官の前でも風をつぶしつつ辛辣な批判をしていたお姿。

その気迫は衆人を呑み、人々は目を開けてお父上を見ることができなかった。

お父上の詩は子弟に伝えられ、いまも絶倫の技を誇っている。

旧知の私も白髪となり、

心空しくお父上の詩巻を掩い、

涙を河に注ぎ、天に問うのである。

其の二

私がかつて軟らかな春風に送られて、

ここから遠い地に行き[黄州<sup>こう</sup>に向かったことをい]、

澄み切った冬の月の光もと、

ここに還ってきた。

一年が終わろうとしているいま、

長江<sup>ちやうこう</sup>と淮河<sup>わいが</sup>の間に留まったまま、

もっぱら貴君一家の人々の間を行き来している[先に王安石<sup>おうあんせき</sup>を訪ねたことをい]。

らくよう  
洛陽から新たに掘削された運河に氷が流れるのを嫌うわけではないけれど、

しばらくはこらの山々の松に雪がつくのを眺めていようかと思っている。

野の梅や官道の柳に春の兆しが動くのはいつだろうか。

貴君の車はそのときに長い橋を飛ぶように走りたいと、

貴君が閑になるのを待っているのだ。

【補足】 [このあたりは水路が複雑に交差し合い、都に行くことも洛陽方面らくように行くこともできた。真冬に向かって運河に氷が浮かぶようになってきたのだろう。それを理由に、蘇軾の歩みは一段と遅くなる]

## ■ 【07-1-095】 王平甫夢靈芝宮

【解題】 上の詩で見た王安国おうあんこく [字は平甫あぎな へいほ] とは、蘇軾がかつて都にいた頃に交流があり、その縁で、王安国が亡くなった後に遺族からの依頼でこの文章を書いていた。楚州そに来たこのときから7年ほど前のことである。

### 【解題】

おうあんくに きねい きちゆう  
王安国は熙寧癸丑の歳[1073年]に(皇城の)崇文館そうぶんかんに宿直し、夢を見た。

人に連れられて海上に至った。見ると、海の中に極めて堂々とした宮殿があり、音楽が聞こえてきた。

笛を吹き太鼓を叩く人が大勢いるようだった。宮殿れいしきゆうに「靈芝宮」の額が掲げられていた。出迎える人がいて、王安国は一緒に行こうとした。すると、宮殿のかたわらにいた人が、水を隔ててこういった。

「まだその時ではありません。しばらくお帰りなさい。いずれそのときにお迎えがまたあるでしょう」

そこで恍然こうぜんと夢から覚め、禁中きんちゆうの鐘が鳴った。

王安国は心にはっきりと知ることがあり、詩にしてこのことを記した。

万頃波濤木葉飛、[木の葉のような船が万頃の波濤の上を飛び]

笙歌宮殿号靈芝。[笙の聞こえる宮殿があって「靈芝」と号した]

揮毫不似人間世、[額の文字は人間世界のものには似ていなかった]

長樂鐘來夢覺時。[皇城の長樂殿の鐘が鳴って夢から覚めた]

それから四年で王安国は病気で亡くなった。家の人々は哭し、その靈に向かって尋ねた。

「かつて靈芝宮に行かれた夢を御覧になりましたが、その通りになりましたでしょうか。私たちにどうか教えてください」

夕暮れに香を焚くと、人々に語りかけるような声かした。家の人々は紙銭を燃やし、

「靈芝宮に本当に行かれたのでしょうか」

と尋ねて占うと、「そうだ」という答えが出た。

昔、ある人が海の彼方の蓬莱島に行き、樓閣が並ぶ中に白居易[白樂天]の部屋があるのを見た。白居易は詩にそのことを記した。王安国の夢とよく似ている。思ふに二人は天が生んだ逸材で、その精神が寓するものは特別で、物の道理がそこに具わり、窮め尽くすることができないほどであった。

王安国の家の人々は泣いてこのことを書いてほしいと私にいい、それでこの文章を書き、家の人々の心を慰めることにした。

【補足】[この夢のことを踏まえて、上の詩の第 1 首で王安国を仙界から来た人、「謫仙人」といったのである]

## ■ 【07-1-096】 銭子飛施菓

【解題】これは王安国の子の王旂 [字は元竜] から聞いた話を記録した短文。

【訳文】

おうほう

王旂がこのような話をしてくれた。

——<sup>せんめいいつ だいふう</sup>銭明逸は大風の治療法を知っていて、はつきりとした<sup>エビデンス</sup> 験 があり、常に人に施していた。ある日のこと、銭明逸は夢の中で、このように告げられた。

「天がこの者を病気にしたのだ。おまえは天の怒りに<sup>たが</sup>違<sup>たが</sup>うことをしている。もしも治療を施してやまないのなら、おまえをこの病気にし、おまえの方法でも治療できないようにしてやるぞ」

銭明逸は<sup>おそ</sup>懼れて、ついに治療を施さないようになった——

私が思うに、天が<sup>やまい</sup>病を為すなら、治すことはできなくて、薬を与えても効果がないはずだ。薬を与えて効果があるのなら、それは天も病を為すことができないのである。この話は病の祟り<sup>たた</sup>によるものであって、病が薬を畏れ、天を借りて人に薬を使うのを禁じただけなのだ。

昔、<sup>しんこう</sup>晋侯が病になったとき、二人の<sup>こびと</sup>豎子が体内の薬の及ばないところに入り込んでしまったと夢に見て、やはり治らなかった。昔、<sup>りしよ</sup>李子予の弟が激しい腹痛に襲われたとき、夢で兄が持ってきてくれた薬によって腹中の<sup>き</sup>鬼が退治されるのを見て、実際にその通りになった。

銭明逸は十分に考察しなかったために、<sup>き</sup>鬼によって脅かされてしまったのだ。私ならば銭明逸のようにはしないで、もしも病を治すことができるのなら、たとえ天の怒りによって苦痛を受けるとしても、薬を与えるであろう。

我が家には一つの薬方<sup>こう</sup>があって、腹中の悪いものを下すことができる。黄州で試したところ、病は良くなったので、それからは常に人にも施している。

【補足】[(1) <sup>せんめいいつ あぎな し ひ</sup>銭明逸 [字は子飛] は蘇軾よりも一世代上の人。(2) 「大風」とは<sup>だいふう まふう</sup>麻風病、すなわちハンセン病のことであるようだ。(3) <sup>しんこう</sup>晋侯の話は、<sup>やまいこうこう い</sup>「病膏盲に入る」のもとになった故事。(4) <sup>りしよ</sup>李子予の話は巷間に伝わる奇談の類で、そのときに用いた薬は<sup>はちどくせきがん</sup>八毒赤丸であった]

■ 【07-1-097】 和田仲宣見贈

【解題】 楚州知事の田待問 [字は仲宣] から贈られた詩に和した。

【訳文】

江南の酔っぱらい知事さんは大らかで、  
町の人々にも気さくに声をかける。  
旅を続ける私には川の水さえ応えてくれず、  
月だけが情があるかのように一緒にいてくれる。  
知事殿に弟子入りすることは叶わないとしても、  
「酒の友として貴君に勝る者はいないなあ」  
といってもらえたりするだろうか。  
知事殿のすばらしい歌に、  
私のこんな悪声では和しようがないので、  
とにかく燈火を継いで、觥を重ねるとしよう。

【補足】 [詩の冒頭で、「酔っぱらい知事さん」 [原文は酔司馬] とあるのは、「酔今先生」と号した白居易の故事を踏まえている]

■ 【07-1-098】 浣溪沙

【解題】 楚州知事の田待問のもとに小鬟という妓女がいて、2 首の詞を贈った。第 2 首を訳す。

【訳文】

## 其の二

一夢江湖費五年。[あれは一つの夢、川や湖で費やした五年のこと]

帰来風物故依然。[ここに帰りれば風物はととのまま]

相逢一醉是前縁。[互いに会って酔いをとにもするのは前からの縁によるのでしょ]

遷客不応常眊▲、[さすらいの旅人が憂いに悶えて何もわすれいと]

使君為出小嬋娟。[知事殿はかわい嬋娟い女性を出してくださいました]

緑鬟聊著小詩纏。[その緑のまげ鬟にこの小さな詩を付けましょ]

[▲は目+巢という字。眊▲はもうそう煩悶するありさまをいう]

## ■【07-1-099】 虞美人

【解題】船は楚州から淮河に入り、少し上流に遡った維揚で、同じ船に乗ってきていた秦観とも別れ、この詞を詠んだ。蘇軾は川の流れを遡ってさらに西に、秦観は川の流れに乗って東に行く。

## 【訳文】

波声拍枕長淮晓。[波の音が枕を打つ、長大な淮河のこの暁]

隙月窺人小。[隙間から人を覗くのは、小さな月]

無情汴水自東流。[無常にも川は東へとひたすら流れ去ります]

只載一船離恨、[君と離れてしまう恨みを載せて船は]

向西州。[西へと向かって行くのです]

竹溪花浦曾同醉。[君と竹林の谷や花咲く川辺でともに酔いました]

酒味多於淚。[酒の味にはいつも多くの涙が混じていました]

誰教風鑒在塵埃。[君の顔を見て占うに、どうして君の相そうには塵埃があるのでしょうか]

醞造一場煩惱、[ひとつの煩惱が造り出され]

送人来。[君は人を送ってここにまで来てしまったのでしょ]

【補足】 [(1) 後半でかつてともに酔ったといっているのは、先に潤州じゆんで会ったことを指すのだらう。(2) 「塵埃」や「煩惱」は、才能がありながら秦觀が科挙に合格できずにいることをいうのであろう]

## ■ 【07-1-100】 木峰偈

【解題】 蘇軾は水上交通の要衝である泗州しに到着し、しばらくの間そこに滞在する。十二月一日、香積寺こうせきじの襄師じょうしの僧房を訪ね、この偈を作った。

### 【訳文】

元豊七年臘月げんほう ろうげつ [十二月]朔日ついでち、東坡居士とうぱこじは臨淮りんわいを過り、普照王塔ふしょうおうとうに詣で、襄師じょうしの部屋に立ち寄り、所蔵するところの仏骨舍利ぶつこつしゃりを観て、山の木の一枝を喜捨して供養した。その偈げにいう、

枵然無根、生意永断。[虚しく根のない枝は生意を永久に断たれ]

劫火洞然、為君作炭。[ぼうぼうと燃える劫火ごうかによって我らのために炭となる]

【補足】 [(1) 普照王塔ふしょうおうとうは、作品番号 05-5-032、03-4-032 などで見えた僧伽塔そうがとうである。

(2) 同じころに『僧伽贊そうがさん』を作っているが、訳するのが難しいので割愛する]

## ■ 【07-1-101】 与王定国

【解題】 泗州から王鞏おうきやう [字は定国あがな だいでいこく] に手紙を送った。王鞏は蘇軾に連座して遥か南

方に流されるという重い罰を受け、前の年に赦されて都への帰還を果たしていた [→ 作品番号 06-4-089]。このときは、舅の張方平ちやうほうへいがいる南京応天府なんけいおうてん ふに滞在していた。

## 【訳文】

今日さいしよつき、蔡承禧君しが泗州に到着して、十月二十三日に送ってくださったお手紙と新詩六首、妙曲一首を受け取り、大いに心が慰められました。河が凍って舟が貼り付き、ほんのわずか進むだけでも千里を行くかのようで、ひどくじりじりとしておりましたので、貴君の佳作を得て、一日中喜びのうちに入れ、あたたかも氷から解きほどかれたような思いです。

私は揚州ようしゅうにおいて、一つの文章を書きました。常州じやうしゅうに住むことをお上に願うものです。当地の役所を通じて朝廷に提出しようとした。しかし、規則に反するというので、受理してもらえませんでした。すでに改めてもうひとつ書いて、都に使いの者を行かせようとしています。

近ごろ常州ぢんこうの宜興県で得た小さな農園は、年としに百碩余りの収穫が得られ、食べるに足ることでしょう。揚州ようしゅうのよさを知らないわけではありませんが、追い詰められた猿が逃げ場を求めて、木を選んでいる余裕はないのです。

黄寔君こうじやくが人ひとを南都なんと [南京応天府なんけいおうてん ふ]に人を遣わすというので、急いでこの手紙を書き、和した一詩だけを添えます。新済しんさいの運河は非常に浅く、凍って進むことができません。夕方にわずかに水が流れるだけで、恐らく来年の初めのころになると全体が水になるでしょうか。それからようやく私が南都に行ったら、貴君はまだそこにいるでしょうか。

もし私の願いが叶かなえものでしたら、張方平殿ちやうほうへいのお力添えによって南に戻ることもできるのかもしれませんが。そうならなければ、川を遡せいでって西都らくしゅう [洛陽]にまで至り、後は陸路じよで汝州に行くことになるでしょう。ただし、乳母をきちんと埋葬したいと思っているので、南都には一カ月ほど滞在するようになるでしょうか。夜に入って疲れてきて、意を尽くすることができません。万万自重されますように。



【**解説**】 [(1) 冒頭に名が挙げられている蔡承禧 [→作品番号 07-1-093] は広範囲の行政区である路の役人で、あちこち移動していたので、南京応天府で王鞏の手紙を預かったのだろう。(2) 揚州で皇帝に願ひ出る文章を書いたものの [→作品番号 07-1-082]、役所から受け取りを拒否されてしまったことは先に見ている。「改めてもう一つ書く」とあるのはこの後で見る。文書を提出した後に、朝廷からの指示は南京応天府で待つ心積もりでいるので、泗州からそちらに向かうのである。(3) 黄寔はかつて弟の蘇轍と非常に親しくした官員で、黄寔の娘と蘇轍の息子が結婚している。また、黄寔は章惇とも姻戚関係があったので、蘇軾とは何かと近い関係にあった。このころ黄寔は路の役人で、たまたま泗州から南京応天府に使いを出すので、それに便乗したのである。(4) 「乳母」とあるのは、蘇轍の世話をしていた楊金蟬のことで、これより7年前に徐州で亡くなったことは作品番号 05-3-032 で見ている。(5) この手紙にあるように運河は凍り付いていたのだろうか。泗州は北緯33度で、長崎県とほぼ同じである。この年の冬が特に厳寒であったとしても、蔡承禧は南京応天府から泗州にきているのだから、水上交通が完全にストップしていたとは考えにくい。恐らく、氷よりも心理的バリアが蘇軾を泗州にしばらく留めたのではないだろうか。(6) 手紙の終わりで、蘇軾は「窮猿」と自分のことを表現し、窮余の策で宜興県に隠退することを決めたといっている。王鞏が、同じ隠棲するにしても揚州の方がよいのではないかと勧めたことは次の詩にも出てくる。(7) なお、黄寔と高麗の風俗について会話を交わした記録が残っている。そこには蘇軾が泗州滞在中に、三仏斉国 [スマトラ島にあった国] の朝貢使が賑やかに通過してゆくさまが記してあったりして興味深いのだが、訳者には理解が及ばないところがあって、残念ながら割愛する]

## ■ 【07-1-102】 次韻王定国南遷回見寄

【**解題**】<sup>おうきょう</sup>王鞏 [<sup>あぎな ていこく</sup>字は定国] の詩に和して返した作品。王鞏のもとの詩は都への帰還を果たしたことを詠んだものであった。

### 【訳文】

秋の水のような輝きを放つ銅剣。

土の中に置かれると、剣に曇りが生じ、光が蝕まれてしまう。

それでも、硬い<sup>といし</sup>砥石でこしこし磨けばよいのだ。

美食と美服によって具わってしまったなまぐらな習性だって、

苦い木の実を十年間食べ続け、万里の荒波に洗われるなら、

すっかり鍛えなおすことができる。

帰還を遂げた貴君の詩は清らかにして激しく、

百丈の高さから落ちる滝壺の中に鯉を見るかのようにである。

代々の名家の余沢を享受するさまはもはや消え去り、

仙境で香草を摘むかのような風情をかし出しつつある。

貴君は遠い<sup>るたく</sup>流謫の地はいずこであったかと思いを馳せ、

かつての<sup>ほうじょう</sup>彭城での遊び<sup>じよ</sup>[徐州知事であった<sup>おうきょう</sup>蘇軾を王鞏が訪ねたことをいう]はまことに夢であったと詩に歌う。

貴君も知るように、

甘い水を湛える井戸はすぐに汲み尽くされてしまう。

私が願うのは、

苦い<sup>すもも</sup>李こそが大きな実を全うできるようになるということ。

<sup>みた</sup>妄らな心によって九回もねじぐれてしまった<sup>はらわた</sup>腸はもとにもどらないというし、

<sup>みち</sup>道の奥義を究めるには骨の髄を三回も洗わなければならないともいう。

貴君は陽羨ようせん ぎこう〔宜興県〕よりも広陵こうりょう しょう〔揚州〕の方がよいといってくれるのだが、  
大切なのは私にとっての無何かどこなのかということだ。

楽全老子らくぜんろうし〔張方平ちやうほうへい〕は現在の禪の大家で、

雷を掣え鋒を制する勢いは他に及ぶ者がいない。

楽全老子は人の心を見通し、

あれこれ問うまでもなく、印可いんかすべき者には「如是よろしい」というだけである。

貴君と逢うなら話が尽きることなく続き、

桃の花のもと、春の川にいつまでも舟を浮かべることになるだろう。

【補足】〔詩の構成がごたごたしているのは韻字の位置に制約される次韻の詩であるからだろう。それでも王鞏への気遣いは伝わってくる。終わりの部分は南京応天府での再会を楽しみにしているということ〕

## ■ 【07-1-103】 乞常州居住表

【解題】常州宜興県じやうちやう ぎこうに土地を得て、そこに退くことを朝廷に願う「表ひょう」を先に書いたが〔→作品番号 07-1-082〕、揚州の役人は受け取ってくれなかった。そこで、より委細を尽くした文章に書き改めて朝廷に提出することにした。

### 【訳文】

わたし  
臣 蘇軾が申し上げます。

わたし  
臣が聞いておりますに、聖人が法を行いますと、その怒りの威力は雷が草木を震わせるように甚たいものがありましても、最終的には人は聖人のもとで生きようと帰するのであります。また、人の上に立つ君主が人を罪しますと、父母がその子孫を譴責するように鞭打つことが甚だ厳しくても、死なせるまではしないのであります。

臣は棄てられて漂流する者、枯れてなお生きながらえている者、血を流して泣いて詞を書き天を呼んで命を請う者であります。願うところは、日月の光がいま一度臣を照らして下さり、向日葵が日に向かうのと同じ心が臣にもあると明らかになれることでもあります。このことが朝にお上のお耳に達するなら、夕べに死んでも憾みはないのであります。

臣蘇軾、誠惶誠恐頓首頓首。

臣はかつて宮中の便殿において皇帝陛下の前にこの身を置き、陛下の徳あるお声をお聞き、陛下にお知りおかれること人を超えるものがありました。しかし、妄りに狂狷を発し、お上の御恩に背いてしまったのであります。しかるべき職務にあった者は臣を誅すべきであると、いかなる明主でありましても決して赦せるものではありませんでした。しかし、お上は衆議に従われ、臣は官職を廃すること五年となりました。臣は憂いを積み、心は塞がれ、たちまち歯が抜け髪は白くなってしまったことに驚き、罪を犯した悔恨を骨に刻み、傷ついて皮や肉がわずかに存するのみとなってしまったのであります。

近ごろ御恩を蒙り、汝州に量移となりました。伏してその訓詞を読みますに、「人の材は実に得難く、ついに棄ててしまうのは忍びない」の語がありました。単に獄に繋がれることを免れただけでなく、晩年に望みをつなくものであります。まだ死なずにいてついに天に日を見ることができたのであります。こうなりましたからには、独り年老いることを嘆いたり、僥倖を望む心をさらに生じさせたりすることにはもはやならないのであります。

しかしながら、禄を頂戴することが久しくなかったために、衣食を継ぐことができずにあります。臣には係累が多く、汝州への道は遠くて舟で行くよりなく、黄州を離れましてからは、波風の激しさに驚き恐れ、一家を挙げて重い病となり、一子を喪うに至りました。いますでに泗州に着きましたが、ここで旅費が尽き果て、汝州はなお遠く、ここから陸地を行くこともできません。汝州には住むべき家はなく、食を得る田もありません。二十余人の者が帰するところがないのです。飢えと寒さの憂いが朝夕に迫っております。恥を忍んで周囲の者に無理強いて求めるよりは、誠の心を投じて、父のごときお上に命を託すのがよいと思う次第にございます。臣には常州宜興県にわずかにばかりの農地があります。薄い粥くらいはど

にか得られるであります。聖なる慈悲によって常州に居住することをお許しくださいますよう切に望むものであります。

臣の罪が至って重いことから、臣のこの希望に従うことが許されないのを恐れます。そこで、臣にもわずかながらの功勞がなきにもあらずでありますことをここに述べ、お上の御恩をお貸しいただきますのを願うものであります。臣が徐州知事でありましたときに、黄河の水が町を浸し、ほとんど沈みかけたのであります。臣は日夜守り防ぎ、どうにか町の安全を得ることができました。それによって朝廷からお褒めのお言葉を頂戴しました。また、沂州の民の程棊を選び用いて凶悪な連中を捕えさせましたところ、謀反を企てた妖賊の李鐸、郭進等一十七人を捕え、聖恩を蒙りまして罪を赦して保釈したのであります。このようなことは臣下として普通に行うべきことであって、小指の先ほども言うべきではないのですが、敢えて自ら申し上げますのは、現在の窮迫した状態によるものであります。願いますのは、僥倖を仰ぎ、臣の功罪を比べ、羈囚の身から少しく出て臣の便宜とするところに従ってもよろしいとしていただけることとであります。

重ねて念いますに、臣の本性が強情にして偏狭で、その運命はもとより窮迫すると決まっております、すでに天には罪を得て、下には助けてくれる者はおりません。怨み仇とする者がこもこも集まって、臣の罪悪をたくさんに明らかになりました。群臣の言はあるいは愛憎より起こることもあり、孤忠もついに疑わしきに陥ることもあります。臣の心に愧ることはないと自ら明らかにできないいま、人主より保全を賜うことがなければ、臣のささやかな命は今日存在することもないのであります。

伏して思いますに、皇帝陛下は聖神天縱、文武生知、天下の英才を得て、すでに三樂を完全にしておられます。皇帝陛下はその民の天寿を全うさせ、一人もお棄てになることはないのであります。まことに善を尽くされたというべきであります。臣は百年続く嘆きを抱き、そのために一回の満足な食事さへ得ることもできずにおります。貧病にこもこも攻められ、命を保ち難くしております。鳥は川や湖があれば生きられましょう。しかし、犬や馬でも君父のような主人を求めます。敢えて仁聖に祈り、憐みをかけてくださいますようお願い申し上げます。

わたし ぜん すすんで ならい ちゆうてん ふ  
臣は前に進んで南京応天府に至り、朝旨をお待ち申し上げます。

かんぼうてん い しん む にん  
千冒天威、臣無任。

## ■ 【07-1-104】 書唐林夫惠硯

【**解題**】 さいしやう き おうきやう とうとう あざな りん ふ  
【**解題**】 蔡承禧は王鞏の手紙 [→作品番号 07-1-101] だけでなく、唐垌 [字は林夫] の手紙と贈り物も持ってきてくれた。唐垌は蘇軾にしばしば書（しよ）の道具をプレゼントしてくれる人である [→作品番号 06-4-061]。

### 【訳文】

し さいしやう き とうとう よたん ちやうぐう  
泗州にまで行って蔡承禧君に会ったところ、蔡君は唐垌君の手紙に合わせて余端の硯一枚と張遇の墨半螺を渡してくれた。硯は極めて佳（よ）いもので、小さくて凸型ではあるけれど、墨を磨るのに不便（びんべん）というわけではない。この硯を作った者の意図は数百年後に知れるのだろうか。硯が平らになったときに、墨にとって極めてよいのだろうか。一つの硯であっても数百年の計がある。事を為すのにせいせい明日の計を立てるだけでは、大いに惑（まど）っているといふべきではなからうか。

【**補足**】 [唐垌から贈られる道具はいつも最上級の品であったのだろう]

## ■ 【07-1-105】 贈梁道人

【**解題**】 し ちやうどうじん  
【**解題**】 泗州に滞在する間にいくつかの作品を残（し）っていて、それを順不同（じゆんぶどう）で見つゆく。これは梁道人という奇行の人に贈った詩。例によって蘇軾の異人好みである。

### 【訳文】

いち  
貴君は市で薬を売る。

夕方に市が閉まると、かの仙人と同じ、壺の中に身を投じて消える……

ちやうあん

長安に行ったなら、

どうじん

銅人の手を撫ぜ、「五百年ぶりのなあ」と微笑み合う……

老人や長老は貴君のことをずっと昔から知っている。

貴君からしたら、造物者だって小児のようなもの、

貴君が気ままに振る舞うのを見ているだけだ。

山では、暦がないから、寒さが尽きると春が来たと知る。

川では、雨が降ろうが蓑をまとって、舟に任せて自由に行く。

聞けば、神仙の世界はどこかの官界のように序列がやかましいとか。

それで貴君はいまも人間界に留まって、

酔って歌いつつ歩むのである。

【補足】[死後の世界にしても仙人の世界にしても、現世のコピーのように厳重なヒエラルキーがあると考えられていた。社会モデルとして、皇帝を頂点とするピラミッド構造以外のものを考えつかなかったのだろう]

## ■ 【07-1-106】 亀山弁才師

【解題】泗州しの近く亀山きざんという小さな山があり、かつて杭州こうに赴任した際に亀山の詩を詠んでいた [→作品番号 03-4-034]。今回は山に立ち寄って弁才大師べんさいだいしにこの詩を贈った。なお、杭州こうの西湖せいこのほとりの寺にいる弁才大師 [→作品番号 07-1-015] とこの亀山の弁才大師は別人である。

### 【訳文】

我が人生は、一念ごとに、空に浮く雲のように変化する。

わい が

淮河よ、そなたは変わることなく流れ続ける。

淮河にかかる虹の橋の南、  
 龜山きざんの背後に新たな運河が開削され、  
 そのほとりに我が師はいま宴えん坐ざしている。  
 木魚の音が林を震わして私を迎え、  
 鉄の竿の先に赤い旗が靡なっている。  
 進むにつれて堂宇が大きく奥深くなり、  
 聞きくにつれて大師の声から風が生じ雷が鳴る。  
 大師が浮ふ漚おうくくう【空である世】の間に遊び戯れるのを羨み、  
 指を弾く間に栄枯が入れ替わる中ちゆうにいる己を笑う。  
 大師のもとで、茶を嘗め画を見るだけでもよい。  
 仏法について問い、詩を求めれば、融ゆう通ずう無む碍がいに応じてくれる。  
 私は千里の旅の途中で再び龜山きざんに立ち寄り、  
 五年も一つの夢、  
 そのときに会った人はいま誰たれかいるのだろうか。  
 来世においては香火の縁を結び、  
 永く名山の内で大師のために井戸の水を汲んでお仕えしたいものだ。

【補足】 [終わりのあたりで「五年も一つの夢」というのは、都から黄州こうに流されてからのことをいう。先にも5年ぶりに戻ってきたと歌っていたが、黄州に向かう際にはここは通っていないようなので、広く淮河の流れに立ち戻ったことをいうのであろう]

## ■ 【07-1-107】 如夢令

【解題】 泗州しの僧伽塔そうがとう [雍熙塔ようきとう] [→作品番号 07-1-100] の下で沐浴して、この詞を詠



んだ。2首のうち第1首だけを訳す。短い文章が忸いている。

### 【訳文】

げんぼう し ようきどう じょむれい  
元豊七年十二月、泗州の雍熙塔の下で沐浴をした。戯れに『如夢令』の詞を二首作った。この曲は  
こうとう そうそう おくせん し みやび  
もとは後唐の莊宗が作ったもので、一名を『憶仙姿』という。その曲名が雅でないのを嫌って後に『如  
夢令』と改めた。莊宗の詞にはその終わりに「如夢、如夢、和淚出門相送」[夢の如く、夢の如く、涙  
とともに門を出て送ります]とあり、そこから曲名を取ったのである。

【補足】 [莊宗は、五代十国時代の後唐の初代皇帝李存勗である。約 300 年の歴史を  
誇った大唐帝国の末期、李克用と朱全忠が激しく争い、勝利した朱全忠が唐を滅ぼし  
て皇帝の位に就いて梁王朝を立てた。それが五代十国時代の始まりであった。李克  
用の息子の李存勗は復讐を誓い、朱全忠の後継者を破って梁を滅ぼし、自身は大唐帝  
国の後継者だとして唐王朝を立てた。李存勗は天才的な戦術家で、戦争には滅法強か  
ったことから自信過剰になり、遊興に耽り、将兵の信頼を失い、その身を滅ぼした。  
李存勗による原曲は、仙界での宴を歌ったもので、宴を終えて、泣きながら別れた後  
は夢のようであるというのが「如夢」である]

### 【訳文】

其の一

水垢何曾相受。[冷たい水で垢を落す修行などしなくてもよろしいのです]

細看両俱無有。[よく考えてみれば、水も垢もともと無なのですから]

寄語揩背人。[背中を擦っている人に申し上げます]

终日劳君揮肘。[ひねもすあなたの肘をどうぞ疲れさせなさい]

輕手。[軽やかな手]

軽手。[軽やかな手]

居士本来無垢。[東坡居士は本来無垢なのです]

## ■ 【07-1-108】 行香子

【解題】泗州知事の劉士彦とともに南山に遊び、この詞を詠んだ。都から南東側は水流が縦横に走る低地で、初めて行き当たる山が南山だという。

### 【訳文】

北望平川。[北に望むのは平らな川]

野水荒湾。[野の水が勝手放題に流れます]

共尋春、[ともに春を尋ね]

飛歩屣顔。[急な斜面も飛ぶように歩きます]

和風弄袖、[やわらかな風が袖にまどわりつき]

香霧縈鬢。[香しい霧が髪を巡ります]

正酒酣適、[ちょうど酒酣]

人語笑、[人は笑い合います]

白雲間。[白い雲の間で]

飛鴻落照、[落ち行く日に向かって鳥が飛び去り]

相将歸去。[さあともに帰りましょう]

淡娟娟、[淡く美しく]

玉宇清閑。[玉宇は清らかに長閑です]

何人無事、[誰なのでしょうか、何事もなく]

晏坐空山。[この山で安らかに座っている人は]

望長橋上、[ところが、長い橋の上を見ると]

燈火乱、[灯火が乱れています]

使君還。[知事殿は還ってしまうのです]

【補足】 [(1) 後半は、山中に留まるわけにはいかず、残念ながら多忙な日常に戻らなければならないと歌っている。(2) この部分について王明清の随筆『揮麈後録』は次のような話を伝えている。王明清は南宋の人で、眉唾の話を好む癖があり、記事の信憑性はあまり高くないようだ]

### 【訳文】

王明清：『揮麈後録』巻七

東坡先生は黄州から汝州に移る途中で泗州に停泊し、この詞を作った。

「晏坐空山。望長橋上、燈火乱、使君還。」

泗州知事の劉士彦は法家の学問を学び、山東出身の堅物であった。この詞のことを聞くと、東坡先生のもとを訪ねていった。

「新しい詞について伺いました。先生のお名は天下に知られています。詞はきっと都にも伝わるであります。ところで、法として、夜に泗州の長橋を渡った者には二年の徒刑が科せられることになっています。まして知事が禁を犯したならどうなるでしょうか。どうかその詞を引っ込め、人に見せないようにしていただけないでしょうか」

東坡先生は笑っていった。

「私の一生は罪過ばかりです。口を開けば、いつでも徒刑二年どころではすまないのです」

【補足】 [(1) 黄州の『牛酒帖』 [→作品番号 06-4-053] で見たように、蘇軾が禁令を犯したという話は人々に好まれる。それだけに、これは作り話であるのかもしれない。

(2) 知事が山東出身であるとわざわざ断っているのは、規律にうるさい人が多いと思われていたからだろう。逆に、江南出身なら、先に江南の商人を歌った詩で見たように、目端の利く小器用な人間ということになるだろうか。(3) 上に見た朝廷に提出した文章の重々しさとこの詞の軽さの落差がいかにも蘇軾らしいのだろう]

## ■ 【07-1-109】次韻張琬

【解題】泗州の張琬という人の詩に次韻した。張琬は官職にある者であろうが、詳しくはわかっていない。

### 【訳文】

両岸が高くなったかのように見えたのは、新たに霜が降ったからだ。

塵埃にまみれた袂を挙げて、初冬の風の冷たさを識る。

淮河に臨むこの地には古より名士が多く、

他郷より寄寓する人がいれば酒を携えて楽しませよとする。

貴君は半日の閑を偷んで、

私が歌嘯の内で過ごせるようにしてくれているけれど、

人の一生の百年などは、

知らず知らずのうちに往来の内で尽きてしまうのである。

それでも、貴君は窮愁のうちにあっても老いることはなく、

詩を詠めば虹を吐く勢いがある。

## ■ 【07-1-110】泗州南山監倉蕭淵東軒二首

【解題】泗州の南山に遊んだ帰り道に、官の倉庫を管理する蕭淵〔字は潜夫〕とい

う人の東軒<sup>とうけん</sup>に立ち寄り、この詩を詠んだ。南山には都梁<sup>とりょう</sup>という香草<sup>こうそう</sup>があるので都梁<sup>とりょう</sup>山<sup>さん</sup>ともいうと、蘇軾自身の注記があり、詩の冒頭にその草のことが詠まれている。

## 【訳文】

### 其の一

樵<sup>まこり</sup>に従って都梁草<sup>とりょうそう</sup>を採取しようとした。

竹葺きの屋根、松の枝を編んだ扉があったので、水を求めたところ、

机によりかかって悠然と過ごすにちょうどよいところであった。

まさかこの主人が倉の管理をするお役人であるとは誰も気がつかない。

前<sup>たにがわ</sup>を流れる溪川の底には石が乱れ、

ここを囲む垣根には古びた趣がある。

寒い山中で採った草を茹で上げると、箸までも高く香る。

私は江南<sup>こうなん</sup>の地から来た旅人、

冠が無造作に門にひっかけてあったのを見て、

ここに白居易<sup>はくきょい</sup>が褒めた蕭翁<sup>しょうじい</sup>さんのような風流人がおられると知ったのだ。

【補足】[唐<sup>とう</sup>の白居易<sup>はくきょい</sup>に蕭<sup>しょう</sup>という隠者を讃えた詩があり、同姓の蕭淵<sup>しょうえん</sup>になぞらえたのである]

### 其の二

北を望むと塵が飛びかい、

ここから先に進んだなら、昼間も空から降り来る土に苦しめられるのだ。

心を洗って、しばらくこの東軒<sup>とうけん</sup>にこの身を寄せたく思う。

珍しい鳥の音がするのは、

南方の地を想って鳴いているのだろうか。

野の橘たちばなの香りがすがすがしいのは、

また淮河わいを北に渡っていないからだ。

有信ゆうしん[まごころがある]のせせらぎは遠くの嶺からここへと流れ来て、

無心の明月が誰もいない階段の上で光を移して行く。

小さな役目を担う役人として老いることこそがよいのだろう、

松の根が断崖に絡みつきありさまを坐して看ていられるのだから。

【補足】[詩の初句「北望飛塵苦昼霾」[北に望めば飛ぶ塵ちり、昼も霾つちふる ことに苦しめられる]は、実際の光景として間もなく黄砂の季節がくることをいいつつ、蘇軾の心象風景を表すものでもあるのだろう。つまり、淮河を渡ってさらに都に近づくなら、自分しは土の降るような中に置かれてしまうと感じているのである。かくて蘇軾は泗州しに留まり続ける]

## ■ 【07-1-111】 題雍秀才画草虫八物

【解題】泗州しに画を得意とする雍秀才ようしゅうさいという人がいた。8種の虫を描いた画を見てこの詩を詠んだ。

### 【訳文】

其の一 促織こおろぎ

草むらに注ぐ月の光の声は耿耿こうこう、

露を宿す葉の裏に鳴くおまえたんだんの声は溥溥。

長い夜に、

おまえは自分自身を暖めることもできないのだから、

世に容れられない男児が寒さに震えているのを憂う余裕などはない。

其二 せみ 蟬

濁り汚れた中で脱皮すると、  
おまえはたちまち羽を広げてみごとに飛ぶ。  
しかし、秋になるとなんと迂闊なありさま、  
枯れた茎を抱いて寒さに震えるのである。

其三 がまがえる 蝦蟇

睨みつけているのは誰を瞋っているのか。  
腹ばいになってやたらと脹らんでいる。  
むかて 百足を困らせるようなことはしない方がよいのではなからうか。  
そしているうちにおまえだって飢えた蛇に吞まれてしまうだろうから。

【補足】 [くそむし 蛭螂を詠んだ其の四は意味が掴めないので割愛する]

其の五 かみきりむし 天水牛

おまえの二本の角はやたらと長い。  
よいうように、けんぎゅうせい 牽牛星は美しいけれど箱にしまっておけない。  
おまえも牛仲間だから箱に入れられまいとびよんと飛ぶ。  
しかし、牛たという割にはできることといったら、  
枯れた桑の葉に穴を開けるだけなのだ。

【補足】 [けんぎゅうせい 牽牛星は箱にしまえないとは、真に価値あるものは独占できないというよ  
うな意味の諺]

其の六 やもり 蠍虎

よたよた  
 跂跂と這うのは足のある蛇なのか、  
にゆるにゆる  
 脈脈と走るのは角のない竜なのか。

笑ってしまうのは、

虎は虎でも、食らうのはつまらない虫どもである。

【補足】 [かつこ 蠍虎を主題にした詩は作品番号 05-3-043 でも見ている]

其の七 かたつむり 蝸牛

ねばねばの液は殻を満たすほどはなく、  
 どうにか己を潤すだけである。  
 高いところの上るだけでもとに戻ることを知らないものだから、  
 壁に張り付いたまま涸れて死んでしまう。

其の八 きりぎりす 鬼蝶

二つ眉は鉄の糸を巻くかのよう、  
 両の翅は金粉をまぶしたかのよう。  
 初めは花とあでやかさを争っていたのだが、  
 去るとたちまち跡形もなくなる。

【補足】 [これらの一連の詩は何かふう 諷するものがあるとされ、例えば、かたつむり 蝸牛の詩は王おう 安石あんせきのことを歌っていると解釈されたりする。しかし、特定の人物を指すとするのは牽強附会の説であるのを免れないだろう。それでも、し 泗州から先に進むのをためらう心理を映し出すものであるのは確かであろう]



## ■ 【07-1-112】 与藩彦明

【解題】泗州から藩丙はんへい [字は彦明あざな げんめい] に贈った手紙。藩丙は、黄州で親しくした藩一家の次男で、恒例となった1月20日のピクニック [→作品番号06-3-005など] に毎回同行していた。

### 【訳文】

別れてから貴君のことをずっと思って心を去りません。変わらずに安らかにお過ごしのことと遠く想像しています。皆さまも恙なくされておられますか。

地方試験の結果を見ていないので、お祝いを申し上げるのを控えておりましたが、必ずやよい結果を得たものと想っています。二度ほどお手紙を差し上げましたが、届いていますでしょうか。

東の坡たかざりで笑って語り合う夢をしばしば見ます。覚めた後で呆然としてしまいます。

宜興ぎこうに小さい農場を買うことができ、そこに住むことをお上に願ひ出しています。ついに常州じょうの民になるのです。

貴君はすでに都での試験を受けるために向かっていることであらう。このお手紙は出したものの、見ではいたけないでしょうか。

どうぞどうぞ御自愛ください。

【補足】[藩丙はんへいについては、第6章で見た蘇軾しんしの文章に「進士藩丙」と記されているものがあり、科挙の地方試験には合格したものの都での試験には受からなかった人物であると理解したのだが、この手紙によると、藩丙はこの年に地方試験を受けている。これが二度目のチャレンジであったのかもしれない。残念ながら、この後で藩丙が科挙に合格した形成はない]

## ■ 【07-1-113】 与千之侄

【解題】甥の蘇千之そ せん しに与えた手紙。従兄の蘇不欺そ ふ きの子で、作品番号06-5-005で見た蘇千乗そ せん じょうの弟である。蘇千之もその兄とともに都にいて科擧の地方試験を受けたのだから。その結果がここに記されている。

## 【訳文】

……お手紙を受け取りました。安らかにしていると知り、喜んでおります。皆様も恙なくお過ごしであるとのこと何よりです。秋の試験ではよい結果が得られず、まことに残念に思います。決して心を左右されることなく、ますます学問に励まれますように。人は道みちを知ることが肝要で、得失は初めから計ることはできません。

君はしばし郷里に帰ろうとしていると聞きましたが、そうなのでしょうか。私は舟の旅に出てもうすぐ一年になります。近ごろ陽羨ようせんに少しばかりの田を買いました。そこで老いる考えです。常州に住むことを願い出て、その許可が南京応天府なんけいおうてん ふで得られるでしょう。かの地に乳母を葬ろうとしていますので、行き来に二十日ほどかかるでしょうか。その後、舟に乗って陽羨に還ります。君がもし南京応天府に行かれるのなら会えるでしょう。私は罪廢の余りの身でありますから、ややもすれば人に累るいを及ぼすのかも知れません。ただ君に会って話したいのです。面と向かってでないと言いきくせないものがあります。どのような距離も厭わない思いがあります。寒暖が定まりません、万万自愛されるように。

【補足】〔(1) 蘇軾兄弟の次の世代は科擧になかなか苦戦していた。(2) 南京応天府に向かう今後の予定は作品番号07-1-101にも記されていた〕

## ■ 【07-1-114】 祭蔡景繁文

【解題】蔡承禧さいしょう き〔字は景繁あざな けいはん〕〔→作品番号07-1-104〕はこの年の終わりに泗州しで急死し、蘇軾はこの祭文を作った。

【訳文】

嗚呼あ あ 哀あしいかな。貴君の人となりは清厲孤峻、經に仁義、緯に忠信をもってし、……[蔡承禧さいしゅうきを讃  
える美辞を並べる]……私が黃州こう ちゅうに遷ったとき、衆人からは遠く除け者にされたのだが、貴君だけが  
私を罪人視することはなかった。ここに来てまさか貴君の棺を撫でることはなるかとは思もしなかった。…  
…天は貴君の窮したのを哀れみ、ここに祭り送るのだが、私は旅に苦しみ、貴君に捧げるものがない  
のを愧はじ、ここに奠詩てんしを歌って、葬送の曲に和すものである。嗚呼哀あしいかな。

【補足】[蔡承禧さいしゅうきとは個人的な関係がさほど深くなかったためなのだろう、蘇軾の語  
彙力によって形よく整えられた祭文であり深い内容がないので、一部分だけを訳し  
た]

■ 【07-1-115】浣溪沙

【解題】蘇軾しは泗州で年末を迎える。この詞には「元豊七年十二月二十四日、泗州の  
劉倩叔りゅうせいつくに従って南山なんざんに遊ぶ」との蘇軾自身による添え書きがある。劉倩叔がどうい  
う人であるのか、土地の人間であろうとだけ推測されている。

【訳文】

細雨斜風作曉寒、[細やかな雨と斜めの風が作るのは曉の寒さ]

淡煙疏柳媚晴灘。[淡い霧とまばらな柳が媚びるのは晴れてきた川辺]

入淮清洛漸漫漫。[洛水の流れは淮河に入ってますますのびやかです]

雪沫乳花浮午盞、[雪か乳のようはに白いい泡が花のように開いた午後の茶]

蓼茸蒿筍試春盤。[蓼茸たでのめに蒿筍よもぎのくきを盛った春を迎えるための御馳走]

人間有味是清飲。[人間世界の味わいとは、こうしたちょっとした飲みなのです]

【補足】[(1) 前半は眼前の風景のスケッチ。朝は寒いけれど、流れに注ぐ日の光は明るい。遠く洛陽らくようの方から流れてきた水は、淮河わいがに合流した後もその本性を保っている。と見ている。(2) 後半は、一服の茶や新年を迎える用意といったささやかなことに喜びを見出している。5種の辛いものを盆に盛った「五辛盤ごしんばん」を元旦に食べる風習があるということは作品番号04-3-001で見ている]

## ■ 【07-1-116】 満庭芳

【解題】泗州しで偶然、古い友人に出逢い、この詞を詠んだ。序文がある。

### 【訳文】

私は十七歳のときに始めて眉山びざんにおいて劉仲達りゅうちゅうたつと行き来するようになった。今年四十九歳となり、泗州しにおいて劉仲達りゅうちゅうたつに逢った。洛水らくすいが浅く凍ってしまっているために私はしばらく泗州しに留まっていて、十二月三十日に劉仲達りゅうちゅうたつとともに南山なんざんに遊んだ。昔のことを語って感じるどころがあり、この詞を作った。

三十三年、[三十三年]

飄流江海、[川に海にさすらい]

万里煙浪雲帆。[万里の煙る浪、雲に帆を掲げて私はここにきました]

故人驚怪、[古い友人同士驚き怪しむのは]

憔悴老青衫。[憔悴し、老いて落ちぶれてしまった姿]

我自疏狂異趣、[もとより私は人と趣を異にする物狂い]

君何事、[貴君はいったいどうしたことなのでしょうか]

奔走塵凡。[塵のなかを奔走し続けているとは]

流年尽、[今年も流れて尽きようとし]

窮途坐守、[道が行き詰まってこゝに留まるしかなくなり]

船尾凍相銜。[並ぶ船は凍りついたように船尾を銜くわえています]

巉巖。<sup>たか たか</sup>[巉く巉く]

淮浦外、<sup>わい が</sup>[淮河の浦の外に見えるのは]

層楼翠壁、<sup>みどり</sup>[楼閣の翠の壁]

古寺空巖。<sup>いわお</sup>[人気のない巖の上に古い寺があります]

歩携手林間、[手を携えて林の間を歩き]

笑挽纖纖。[笑って曳か細い指]

莫上孤峰尽处、[峰の尽きる先まで上るのはもうよしにしましょう]

縈望眼、[遠く望んで眼に入るのは]

雲海相攙。[雲と海とが支え合うありさま]

家何在、[我らの家はどこにあるのでしょうか]

因君问我、[貴君も問い、私も問うのです]

帰夢繞松杉。[夢は帰り行きて故郷の木々を巡ります]

【補足】<sup>りゅうちゆうたつ</sup>[劉仲達の名はここにしか出てこないようで、どのような人であるのか不明。  
恵まれた境遇にはなかつたのであろう]

## ■ 【07-1-117】 如夢令

【解題】<sup>し</sup>泗州での年の瀬に<sup>せいおいろう</sup>清淮楼でこの詞を詠んだ。『如夢令』の曲は作品番号 07-1-107 でも見ている。

## 【訳文】

城上層楼置嶺、[町を上から見下ろすのは高い楼閣と重なり合う峰々]

城下清淮古汴。[町の下を流れるのはわい河とこべん古汴河]

拳手揖呉雲、[手を挙げて南の雲に挨拶すると]

人与暮天俱遠。[暮れの空は人から遠ざかって行きます]

魂断、[魂は断たれ]

魂断、[魂は断たれ]

後夜松江月満。[夜更けの松江に月の光が、いっぱいしょうこうに満ちていることでしょう]

【補足】[松江は蘇州しょうこうのあたりを流れる川。その名を借りて、そこからほど近い常州じょうの隠棲地を想っているのだろう]

## ■ 【07-1-118】 題清淮楼

【解題】清淮楼せいわいろうで詠んだ詩。蘇軾そにしてはごく単調な詩である。

## 【訳文】

恵施けいしの観魚台かんぎょだいはすでに草むらの中に埋もれ、

夢で蝶とうになった莊子そうしの塚は木の葉を落した木が立っているだけ。

清淮楼せいわいろうからの四方の眺めで変わらないのは、

年々昔のままに町の背後を流れゆく川だけである。

【補足】[莊子そうしとその友人の恵施けいしが問答を交わしたとされる場所に建てられた観魚台かんぎょだいについては作品番号 03-4-031 で見ている]

## ■ 【07-1-119】 泗州除夜雪中黄師是送酥酒二首

【**解題**】<sup>し</sup>泗州で除夜を迎えた。雪が降る中、<sup>こうしよく</sup>黄寔<sup>あざな</sup> [字は師是] [→作品番号 07-1-101]  
が酒を贈ってくれたので、その謝礼に詩を詠んだ。

【**訳文**】

其の一

暮れの雪が、砕けた米を投げ付けるかのようこしきりと降りるなかでも、  
春の流れが、ひそやかに沙の上を走り始めているのだろうか。  
これまで過ごした日々は夢にも似て、  
たらたらとした無駄話のようなもの。  
世間から逐われた旅人は、  
僧と同じもはや定まった家を持たない身である。  
何か書こうとして、硯の水は凍ってしまい、  
かたわらの燈火は蠟がたまって薄暗い。  
そんな夜更けに、貴君から酒が贈られてきた。  
妻は驚いて起き上がり、  
我が宿はいつか賑やかな笑いにつまれたのだった。

【**補足**】 [続く第二首はいくつもの故事を用いて意味が取りにくいので割愛する]

■ 【07-1-120】 章錢二君見、和復次韻答之、二首

【**解題**】 上の詩に、<sup>しょう</sup>章と<sup>せん</sup>錢というその地の人が和したので、それまた和して答えた。  
章と錢は詩とともに蘇軾に何かプレゼントをしたのだろう、その返礼としての詩であるらしく内容に乏しいので、一首だけごくいい加減な訳文を作っておく。

## 【訳文】

## 其の二

いまの私の分際では、

春の服を縫ってくれるような御婦人はいないし、

正月の酒を注いでくれるような御婦人もいない。

鬚につららが垂れさかるような寒さのなかで、

貴君等が贈ってくれた酒に酔って、

夢からかえると、我が衣が風除けとして垂れ下がっている。

貴君等は、冷たい風のために眼を大きくあけられなかつたりするのだからけれど、

私なんぞは、己の腹がぐくぐう鳴る音で夜中でも目が冴えてしまう。

明日になれば南の山では春の気配が動き出すのだから、

のんきに正月の遊びができるのは、はてさてどの誰かさんだろうか。

【補足】<sup>こゝろ</sup>〔黄州での困窮生活を経て、長い船旅を続けるなかで土地を買った蘇軾の懐  
具合は、いったいどのようになっていたのだろう。有難く支援を頂戴するために蘇軾  
は詩や書<sup>しょ</sup>や画を次々に人に与えなければならなかったのだろう〕



## 第7章 勉強嫌いの小児のように——廬山、常州、登州

[第7章その二]

げんほう 元豊8年 [1085年]、そしよく蘇軾50歳。

■ 【07-2-001】 正月一日、雪中過淮謁客回、作二首

【し解題】 泗州で迎えた元日に雪が降った。町に行って人に会い、船に帰ってからこの詩を作った。

【訳文】

其の一

わい が 淮河に沿った十里の道、

長い堤には雪をまとった竜がのたうちまわる。

凍てついた切通しに我が下駄の歯の痕を残し、

強い風に我がコート裘茸がひどく乱れる。

我が眼を穿つのは、遥かな白の広がり。

その深い白の彼方には輝く峰が隠れている。

はてさて月はどこから生まれ出てくるのか、

その名もこうかんきゆう広寒宮に養われているのだ。

【補足】 [終わりの部分は、月の出ないついたち朔日に月は仙界のこうかんきゆう広寒宮で育まれているという伝説に基づいて、その「広寒」の文字と目の前の雪景色を掛けて詠んだものであろうと解釈して訳した]

## 其の二

眉<sup>ひそ</sup>を擧<sup>あ</sup>げている、  
 何を憂<sup>うれ</sup>っているのか、  
 よい句を得るため。  
 よい句ならいくらたくさんあっても構<sup>かま</sup>いはしないだろう。  
 寒々とした谷あい<sup>やあい</sup>を埋<sup>う</sup>めていた霧<sup>きり</sup>が晴<sup>は</sup>れたので、  
 雪<sup>ゆき</sup>に覆<sup>お</sup>われた町へと、  
 飢<sup>う</sup>えた鳥<sup>とり</sup>が出<sup>い</sup>かけて行く。  
 橋の上<sup>はしの上</sup>を賑<sup>にぎ</sup>わしていた春<sup>はる</sup>の市<sup>いち</sup>はすでに終<sup>お</sup>わり、  
 暮<sup>ゆ</sup>れ行く淮<sup>わい</sup>河<sup>が</sup>の平<sup>ひら</sup>らな水<sup>みづ</sup>面に、  
 長<sup>なが</sup>々と塔<sup>た</sup>の影<sup>かげ</sup>が引<sup>ひ</sup>かれる。  
 今宵<sup>こんしやう</sup>は乏<sup>ひ</sup>しくなった燈<sup>とう</sup>火<sup>か</sup>の油<sup>あぶら</sup>を使<sup>つか</sup>わなくてもす<sup>す</sup>みそ<sup>う</sup>だ、  
 夜<sup>よ</sup>になっても、雪<sup>ゆき</sup>明<sup>あ</sup>りて船<sup>ふね</sup>の窓<sup>まど</sup>は自<sup>ま</sup>ずと明<sup>あ</sup>る<sup>ら</sup>い<sup>ら</sup>う<sup>か</sup>ら。

【補足】[雪の日に蘇軾は何のために泗州の町に行ったのだろうか。春になればいよいよ発<sup>は</sup>たね<sup>た</sup>ね<sup>ば</sup>ならないので、その段<sup>だん</sup>取<sup>と</sup>りを定<sup>さだ</sup>めるためであつたのだろうか。同じ頃<sup>ころ</sup>に、劉<sup>りゅう</sup>という人の弓<sup>きう</sup>の練<sup>れん</sup>習<sup>じやう</sup>場<sup>ばう</sup>について詠<sup>えい</sup>んだ詩<sup>し</sup>あり、相手<sup>あいて</sup>をや<sup>や</sup>たらと褒<sup>ほ</sup>めるだけの詰<sup>じ</sup>らな<sup>い</sup>作<sup>さく</sup>なので訳<sup>わけ</sup>さないが、いろいろな人<sup>ひと</sup>から支<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>を得<sup>え</sup>る努<sup>ど</sup>力<sup>りき</sup>をして<sup>して</sup>いた<sup>た</sup>ら<sup>う</sup>か]

## ■ 【07-2-002】孫莘老寄墨四首

【解題】孫<sup>そん</sup>覺<sup>かく</sup> [字<sup>あざな</sup>は莘<sup>しん</sup>老<sup>ろう</sup>] が都<sup>みやこ</sup>から墨<sup>すみ</sup>を送<sup>おく</sup>ってくれたので、その謝<sup>しや</sup>札<sup>さ</sup>にこの詩<sup>し</sup>を作<sup>つく</sup>った。孫<sup>そん</sup>覺<sup>かく</sup>はかねてからの友<sup>とも</sup>人で、蘇<sup>そ</sup>軾<sup>しつ</sup>の罪<sup>つみ</sup>に連<sup>れん</sup>座<sup>ざ</sup>した一<sup>ひと</sup>人<sup>にん</sup>。その後<sup>のち</sup>、徐<sup>じょ</sup>州<sup>しゅう</sup>知<sup>ち</sup>事<sup>じ</sup>になつたことは作品<sup>さく</sup>番<sup>ばん</sup>号<sup>ごう</sup> 06-3-024 で、都<sup>みやこ</sup>に召<sup>めい</sup>喚<sup>わん</sup>されたことは作品<sup>さく</sup>番<sup>ばん</sup>号<sup>ごう</sup> 06-4-040 で見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>い<sup>る</sup>。

## 【訳文】

### 其の一

墨を作るための良材をかつて供給した徂徠の山にいまは老松はなく、

墨を作る良工をかつて輩出した易水の地にいまは腕利きはいない。

いま珍重されている松の材は朝鮮の樂浪郡から採られ、

現代の妙手というただただ潘谷からゐるだけだ。

墨を作る秘方は、

鯉の魚胞を用いて杵で一万回も搗くことで、

犀の角のように黒くて、二匹の竜が蟠った形のものができるという。

このようにしてできあがった墨は私的に使われることはなく、

昼永く明るい日差しが注がれる蓬萊宮[宮中]に献上されるのである。

遥かに慕わしく思うのは、

そのような墨を用いて飛白体の書に筆を揮う貴君の姿、

長い虹に瑞祥を伴った霧がまとうその書に、

天子様が微笑むのである。

【補足】〔(1) この詩の前半は当時の墨事情を歌っている。特に名を挙げられている潘谷については作品番号 07-1-067 で見ている。蘇軾自身の注で、潘谷の墨は高麗の煤を混ぜて作られていると書き添えている。(2) 後半は、皇帝への献上品として用いられる墨および孫覿の書を讃えている。孫覿は都にあって改革派に転じたわけではなく、學術、特に書への造詣の深さから皇帝に仕えていたようである〕

### 其の二

端州の溪谷の石は馬の肝のような色、

彫琢すると最上の硯になる。

えんけい す  
剡溪の藤を混ぜて漉くなら、

ぎよく  
玉のように輝く最上の紙になる。

その硯で墨を磨ると、嘘嘘と雲霧が湧き出て、

その紙に筆を走らせると、奕奕と竜が縮り踊る。

そこにどのような好きがあるのかというと、

秀でた色が眼いっぱい満ちるのである。

旧い友人[孫覚]は天禄閣[宮中の図書室]にあって、

漆で書かれた文字や虫に食われた書簡を見つ、

ゆび  
隄薬の墨[高級な墨]を支給されて、

手慣れた腕前で書物を編纂している。

そのおこぼれの墨を頂戴して、

流落の身の私<sup>あか</sup>はただ顔を赧くするのである。

【補足】[(1) この第二首は朝廷にある孫覚のことを詠んでいるために、重々しい語句が用いられていささかわかりにくい。(2) 端州の溪谷に産する石で作られた硯、端溪硯は天下の名品とされる。(3) 剡溪の藤を漉き込んだ剡藤紙が最上の紙であることは、孫覚に贈った作品番号 04-1-044 の詩に詠まれていた]

### 其の三

私は貧乏で、飢えた鼠のようだ、

だから夜長に空しきしき歯をかみ合わせている、

——というわけではなく、

硯に水を湛え、竈の消し炭のような粗悪な墨を磨っているのである。

そして、葦の軸を筆にし、柿の葉に書くのだ。

近頃、唐先生が鳥の羽のように真っ黒な墨を贈ってくれた、

すると、貴君からもまた贈られてきて、

箱の中で二つの墨が輝いている。

晴れた日に、硯を洗って窓辺に座り、

蛇や蚓かぬらぬらこのような字を書いてみたら、

世間には物好きがいるもので、

千鳥足で歩いた跡のようなものが欲しいと、門を叩くのだ。

【補足】〔(1) 唐先生とあるのは、何度も書の道具を贈ってくれている唐垌〔字は林夫〕〔→作品番号 07-1-104〕である。(2) 儀礼的で面白味のない第一首と第二首に比べて、蘇軾自身のことを詠んだ第三首と第四首はいわゆる俳味がある〕

#### 其の四

私が窮したのはもとより詩のためだ。

だから、友人たちの戒めに長らく従って、

五年の間、江湖のほとり〔黄州のこと〕で口を閉ざし、

これまでの借りを償おうとしてきた。

ところが、このごろはまた少しずつ詩を作り出し、

悪いできものを搔きむしるかのよう、

それが実に快感なのである。

先生〔孫覚〕はそのことをお叱りにならないばかりか、

詩のせいで拷問を受けるようになるのを手助けするものを贈ってくれた。

墨の放つ鈍い光は、奇怪な思いを誘い出し、

荒く怪しい句を黒々と書かせよとする。

かくて詩ができ、自分で自分を笑ってしまう——

体にさわるからと蟹や蝦えびを断ってみたところで、

一度口にしたら最後、元の木阿弥なのである。

【補足】[このころに都では重大な事態が進行しつつあった。そのことを蘇軾に伝えるようなことは、孫覿そんがくたぶんしなかったであろう。神宗皇帝しんそうは前年の秋から病み、予断を許さない状況になっていた。皇帝が絶対的権威である時代において皇帝の病気は国家の重大事である。まして、王安石おうあんせきが提案した大改革は神宗皇帝であったからこそ実行に移されたのであって、神宗皇帝が死ぬようなことになれば政治の大転換に直結する。政権中枢部は病状の悪化を極めて深刻に受け止めていたであろう]

## ■ 【07-2-003】 泗岸喜題

【解題】1月4日、蘇軾しは泗州を離れ、船の上でこの短文を記した。

### 【訳文】

私は黄州こうに謫居たくきょすること五年、今日し、泗州を離れて北に向かう。

驛馬りんばを連ね、鐸たく[鈴]が籠と触れ合って、じゃらじゃらと鳴る音が岸の上から聞こえてくる。心の内に喜びが生じる。私はこの声を長らく聞いていなかった。

韓愈かんいの詩に、

照壁喜見蠍きそり[壁を照らして蠍を見ても喜ばしく思える]

とあるが、この語はまこと虚しいものではない。

しかしながら、私は常州に住むことを願う書面を朝廷に差し出している。魚や鳥の本性は最終的には江湖においてこそ安んじられるのではなからうか。

元豊八年正月四日に書く。

【補足】〔(1)「南船北馬」の語があるように、南中国では水運が、北中国では陸運が主である。中国を南北に分ける淮河から北側に入り始めるとすぐに、蘇軾は驢馬の列の音を耳にし、心地よいものを覚え、久しぶりに北側の地に入る実感を得た。(2)ここに引かれている韓愈の詩は、地方官として外に出ていた時期に、都に召喚されるとの知らせを受け、いままでは厭わしく思えた蠍も嬉しく眺められると詠んだもの。蘇軾の心情は韓愈のように単純ではない。(3)「江湖」は字義通りに江や湖を指すだけでなく、都〔都会〕に対する田舎〔自然〕をも意味する。「江湖」の語は今後も頻出し、訳詩ではそのまま用いたり、別の語で置き換えたりする〕

## ■ 【07-2-004】 留題蘭皋亭

【解題】 靈壁鎮の蘭皋亭でこの詩を詠んだ。蘭皋亭は張碩が所有する庭園にある建物。その庭園を蘇軾は6年前に訪れ『靈壁張氏園亭記』を書いている [→作品番号 05-5031]。

### 【訳文】

雪の後の風は、  
まだ春の陽気のものではない。  
夜になろうとするいま、  
門を叩くのは各地を移ろう旅人である。  
庭園に入ると、

竹のもとに新たに生じる筈はまだ見えない。

[しかし、この張氏ちやうには代々立派な子孫が生じている]

ここまでは川の水が濁っていたけれども、

ここでは清らかな水に置き換わっている。

[しかし、昨今の政治情勢がそうであるかは知らない]

蘭阜亭らんこうていに往来するのは、贅沢な車馬に乗る者ではない。

[世間に羽振りのよい連中は必ずしもここでは歓迎されない]

今夜、ともに笑って語らうのは東の坡あかみのこと。

来年には、私もここに倣って隠棲する場を整えようと思っている、

そこはひっそりとして、雀さえ訪れることはないのである。

【補足】 [(1) 終わりの部分は二つの故事を踏まえている。一つは「三径」。昔の有名さんけいな隠者はその住まいに至る道を三本だけ開き、本当に心を許せる者にしか通らせなかった。それで「三径」といえば、そのような意味合いの隠棲の場を指すようになり、この詩では「明年、我みょうねんも亦われ亦また三径さんけいを開かん」と詠んでいる。「亦」とあるのは張氏ちやうの庭園もやはり「三径」であるからだ。もう一つは「雀羅」。隆盛を誇って、訪問客がひっきりなしにあった人も、ひとたび地位を失うと、誰一人来なくなり、門の前に雀を捕る網を張れるほどになるというのが「雀羅を張る」という成語。蘇軾はそれをひねって、あまりにもひっそりとして、網を張っても雀も捕れないとこの詩では詠んでいる。(2) 6年前に書いた『靈壁張氏園亭記れいへきちやうしえんていき』に、「泗水しすいのほりに田を買って、そこで余生を送りたいと思う。そうなれば、南に靈壁を望み見て、鶏や犬の声が互いに聞こえ合う距離にあり、ふらりと歩いては張氏の園庭に往き来して、季節ごとにそこの子孫と遊べるであろう。必ずその日があるに違いない」とあった。その文章を踏まえてこの詩は詠まれている。(3) 靈壁鎮れいへきちんを後にしてから、蘇軾は船中で、年末に詠んだ



『泗州除夜』の詩などを書いた。その跋文に「泗を過ぎてこの数篇の詩を書いた。たまたまこの佳紙と精墨を得たのでこれを写したのである。もって旌徳君〔妻の王閏之のこと〕に贈った。元豊八年正月十日、東坡居士書す」と記した。黄州を発つてからの長旅をねぎらうためであったのだろう。蘇軾は家族について記すことがまれなので、貴重な記録である。子を喪った後の王朝雲がどのように日々を過ごしていたのかは一切何もわからない]

## ■【07-2-005】和人見贈

【解題】潤州〔京口〕から送られてきた詩を船中で受け取り、それに和した。それが誰の詩であるのかはわからない。

### 【訳文】

私の詩は、東の坡のありよを写しただけで、

自分の名を顕そうとしたものではない。

この身は宿場の駅舎――

入れ替わり立ち代わり来ては去り行くのである。

川には春の水が増えきている、

それでも、私に仕ない心が起こることはもはやなく、

髪は衰えて病葉のように落ちるに任せている。

貴君のところでは「雪児」〔美しい歌妓の名の例〕が筆や硯を用意してくれているたろけれど、

私のところでは「竈婦」〔煤けた妻をいう〕が盆や瓶を洗っている。

きっと迷惑であるけれど、

いずれ京口に戻ったときには、貴君に酒を求めるつもりなので、

そちらではきっと「おねだり<sup>きょう</sup>経<sup>は や</sup>」が流行るだろう。

【補足】[この詩のメッセージは、常州<sup>じょう</sup>での居住が許されたなら再び京口<sup>けいこう</sup>を通るので、そのときに酒の無心をしようということ。最後の「おねだり<sup>きょう</sup>経<sup>は</sup>」の原文は「作客<sup>さくきやく</sup>経<sup>きょう</sup>」で、その意味を記者は承知していない。おおむねこのような意味であろうかという「ずっぱ訳」である]

## ■ 【07-2-006】南郷子

【解題】この詞には「宿州<sup>しゆくしゅうじょうげん</sup>上元」の副題がある。つまり1月15日に宿州に至っての作である。

### 【訳文】

千騎試春遊。[春の遊びに出ましたのは千騎]

小雨如酥落便收。[酥<sup>ヨーグルト</sup>のよ<sup>に</sup>白<sup>く</sup>煙<sup>って</sup>いた小雨<sup>が</sup>ちよ<sup>ど</sup>おさ<sup>まり</sup>ます]

能使江東歸老客、[江東<sup>こうとう</sup>[常州<sup>じょう</sup>]に帰ろうとしている老いた旅人は]

遲留。[ここに<sup>くずくず</sup>と引き留められています]

白酒無声滑瀉油。[白い酒が音もなく油<sup>よう</sup>に滑らかに注がれるのです]

飛火乱星球。[火が飛び、星が乱れます]

浅黛横波翠欲流。[薄<sup>まゆずみ</sup>黛<sup>みどり</sup>を施した女性が翠の波のように流れて行きます]

不似白雲郷外冷、[神仙<sup>はくうんきょう</sup>が住ま<sup>う</sup>「白雲郷」の冷やかさ<sup>こ</sup>は似<sup>ず</sup>に]

溫柔。[ここは温かく柔らかです]

此去淮南第一州。[こここそは淮南<sup>わいなん</sup>第一の都会なのです]

【補足】[前半は、上元<sup>じょうげん</sup>節の郊外の昼間に賑わいを、後半は、灯火を飾り付けた夜の

街の賑わいを歌っている]

## ■ 【07-2-007】 跋翰林錢公詩後

【**解題**】 しゆくしゆう 宿州から なんけいおうてん ふ 南京応天府を目指して北に進む途中で記した短文。

### 【訳文】

私は歯が生え換わるところに町の寺子屋に入り、せんえきこう すぐに錢易公の詩を朗誦した。ここに幸いにも錢易公の遺墨を見ることができた。

げんほう 元豊八年正月二十日。

【**補足**】 せんえき [錢易は、ごだいじゅうこく 五代十国時代に こう 杭州を都とした ごえつこく 呉越国の四代目の王の子。呉越国が そうちよう 宋朝に帰順した後は、錢易は学問をもって仕えた。その錢易の詩が、蘇軾が入学した寺子屋で教材として使われていたのである。誰かが蘇軾に錢易の書を見せに来て一文を求めたのだろう。このようなメモ書き程度のもので蘇軾の書は珍重された]

## ■ 【07-2-008】 寄蕪篔与蒲伝正

【**解題**】 これも なんけいおうてん ふ 南京応天府に至る途中での作であろう。蕪州産の竹で編んだ たけむしろ 篔 とともにこの詩を ほでんせい あざな そうもう 蒲伝正 [字は宗孟] に贈った [蕪州は こう 黄州の東隣りである]。蒲伝正は蘇軾と同郷の人で [→作品番号 06-4-007]、前年の8月まで都にいたのだが、蒲伝正は奢侈を好み、違法の行為があった疑いで左遷され [→作品番号 06-4-069]、じよ 汝州 [蘇軾が本来行くべきとされていたところ] の知事に一度任命された後に改めて はく 亳州知事となり、このときは任地に向かいつつあった。亳州は宿州から移動中の蘇軾にとって遠くないところである。

## 【訳文】

<sup>き</sup>蕪州<sup>らんけい</sup>の蘭溪の竹は美しい。

<sup>ぎょく</sup>玉の箬のように、霜を帯びた幹が並び立ち、

千の谷に万の竹が連なり、そこから自然と風が生じる。

蘭溪の竹からは笛を作ることができないので<sup>たけむしろ</sup>簞を編む。

それを手にすると、

また開く前から、風が吹き出して来て、ぞぐっとさせられる。

貴君の家は軒を連ねた豪邸で、

内に<sup>とさ</sup>美女を鎮し、

<sup>たま</sup>珠の簾に<sup>すだれ</sup>花の影が静かに移ろい、

<sup>とぼり</sup>帳に<sup>こう</sup>香の煙が漂い、

貴君は<sup>ベッド</sup>銀の牀で目覚めると、

象牙で作られた基石を打つよりすることがない。

東の<sup>たかざり</sup>坡の病気の老人は、

長い旅に出て、凍えて臥し、饑えて吟じ、

まるで餌のない痩せ鼠のようである。

春の風に破れた<sup>ふすま</sup>衾を洗ってみたところ、

あいにくと雪の降る夜になってしまい、あわてて<sup>わた</sup>ぼろ絮を被った。

舟からの子供たちの嘆きの声をもれる始末だ。

青いかすかな<sup>ともしび</sup>燈のもとで呻吟するこの姿を、

果たして誰が知るのだろうか。

天はいつになったら暖かな天候をもたらしてくれるのか、

そればかりを望んでいる身を取じらいつつ、

この八尺の黄色いたけむしろ簾を貴君に献じる。

たかどの高殿を掃き清めてこれを敷き、その上に臥し、

ここから吹き出す風にさざ波が立つ音を聞いていただきたい。

貴君の両脇から清浄な風が生じて[それによって奢侈の習性が改まるならば]、

その風に乗って貴君は朝廷に戻るであろう。

## ■ 【07-2-009】 満庭芳

【**解題**】蘇軾は1月の終わりごろに南京応天府なんけいおうてん ふに着き、この詞を詠んだ。短い序文がある。

### 【訳文】

私は黄州こうに謫居すること五年たぐきよ、汝州じょに赴くことになり、『満庭芳』の詞を作って黄州の人々と別れた。

南京応天府なんけいおうてん ふに至ると、皇帝の御恩を蒙り、陽羨ようせんに放ち歸されることになり、また『満庭芳』の一篇を作った。

【**補足**】[黄州こうを発つときに作った『満庭芳』の詞は作品番号06-5-026で見ている。この序文によって、南京応天府なんけいおうてん ふに着いた時点で、先に朝廷に提出した願いが容れられたことが知れる。この詞は黄州での作と同じ韻を用いている]

歸去來兮、[歸去來兮]

清谿無底、[どこに帰るのか——底がないほどに清らかな谷へ]

上有千仞嵯峨。[上には千仞せんじんの山が聳え立っています]

昼樓東畔、[昼は東の川べりの樓閣にあって]

天遠夕陽多。[空の彼方を見るうちに、とっぷりと暮れて行きます]

老去君恩未報、[もはや老いて、お上の御恩には報いられぬまま]

空回首、[空しく首を回らし]

弾鋏悲歌。[使われない鋏の悲しみを歌うのです]

舳頭転、[船の頭の向きを変え]

長風万里、[風に乗って一万里]

帰馬駐平坡。[さらに帰り行く馬を、平らな坡に駐めるのです]

無何。<sup>ユートピア</sup>[無何は]

何処有、[どこにあるのでしょうか]

銀潢尽処、[天の川の尽きるところ]

天女停梭。[天女の機織り機の停まるところでしょうか]

問何事人間、[人間世界には何があるのでしょうか]

久戲風波。[しばらく天の風や波と戯れています]

顧謂同来稚子、[(仙界に迷い込んで)子供らが遊んでいるのを見ているうちに]

忘爛汝、[斧の柄が腐ってしまったように]

腰下長柯。[空しい時を過ごしてしまうのです]

青衫破、[青い衫はぼろぼろになり]

群仙笑我、[もろもろの仙人に笑われ]

千縷挂煙蓑。[漁師の蓑を身にひっかけて、霧の中へと舟を進めるのです]

【補足】[後半は、空想をたくましくして、常州に住むことを天の川で遊ぶことになぞらえて歌っている。途中で、「斧の柄が腐ってしまう」といっているのは、仙界に迷い込んだ樵<sup>きこり</sup>が斧の柄に顎を載せて、2人の仙人が碁を打つのを眺めているうちに、斧の柄が腐ってしまうほどの時間がたちまち流れてしまったという説話に基づいてい

る]

## ■ 【07-2-010】 題陸柬之臨摹帖

【**解題**】ここからは南京応天府滞在中の諸作品を見てゆく。順序は必ずしも明らかではないので、最初に日付の記されているものを見て、あとは順不同である。これは唐代の陸柬之が模写した『蘭亭の序』に添えた短文。『蘭亭の序』は王羲之が永和9年〔353年〕に書いたもので、それは中国史上最も優れた書とされ、真筆は唐の太宗皇帝が自分の墓に入れてしまったために残っておらず、各種の模写が伝わっている。

### 【訳文】

陸柬之が模写した『蘭亭の序』を観ると、東晋時代の風流が蕭然として目に在るかのようだ。その筆迹は古雅で王羲之父子の筆に近く、奇矯なところはわずかしかない。陸柬之はどうしてこれほどのものを書けたのだろうか。……元豊八年二月十二日、眉陽の蘇軾が書く。

この年の十一月十八日、蘇軾は泗州を過ってこれを観た。

【**補足**】〔(1) 終わりの一文は弟の蘇轍が書き加えたもの。蘇轍はこの年の2月ごろに新しい任地である績溪県に到着し、8月に都に呼び戻され、ここにある日付のときに泗州を通過して都に向かったのである。(2) 蘇軾は予定していた通りに、乳母の楊金蟬を南京応天府郊外の広寿院に正式に葬った [→作品番号 05-3-032]。2月18日であった〕

## ■ 【07-2-011】 書楞伽經後

【**解題**】南京応天府に到着した蘇軾は、真先に大恩人の張方平のもとへと訪れたであろう。張方平とはかつて徐州から湖州に赴任する途中で会っていて [→作品番号 05-5-

029]、6年ぶりであった。張方平はすぐに蘇軾に一つの頼み事をした。その事情を7カ月後に記したのがこの文章である。前半の3分の2ほどは『楞伽阿跋多羅寶經』という仏典の解説であるので省略する。

### 【訳文】

……私は張公[張方平]の門下に遊ぶこと三十年、今年[元豊八年]二月、南京応天府を過り、公の私邸でお目にかかった。公は七十九歳、もはや現世の幻に惑わされることがなく、仏陀のまろやかな光に包まれている。私は憂患の内に老い、冷え切った灰のような思いを多々抱いていた。公はそんな私は教え導こうと、『楞伽經』を授けてくれた。

公は三十万銭を出資して、『楞伽經』を書写して配り、江淮[長江、淮河の下流域]のあたりに広めようと考えられた。すると金山寺の長老である仏印大師了元が「書写して配っても数に限りがあります。

版に刻めば無限に増やすことができます」といわれたので、私が版の元になるものを書くことになった。

私が書き終わると、仏印大師は弟子の曉機を錢塘[杭州]に走らせ、よい職人を求めて板に刻んだ。そしてその版は金山寺で保管することとなった。

【補足】[(1) 仏印大師了元の名は作品番号 07-1-061 などで見ている。ここで興味深いのは、仏印大師が印刷を勧めたことである。世界史でいう「宋の三大発明」とは火薬、羅針盤、印刷で、まさに印刷術の発展の流れに乗って、仏印大師は仏典の木版印刷を張方平に勧めたのである。さらに興味深いのは、杭州で版を刻んだことだ。都でも印刷術は発展しつつあっただろうが、杭州の方が何かにつけて文化の先進地だったのでらう]

### ■ 【07-2-012】 記夢、并叙

【解題】張方平が見た夢から生まれた詩。序文がある。



## 【訳文】

叙

らくぜん ちようほうへい  
楽全先生[張方平]が見た夢で、ある人が三篇の詩を示した。どの字も流れるように書いてあり、読むことができなかった。傍らに道衣を着た古めかしい容貌の人がいて、その中の一篇を読み上げた。「人事且常在、留質悟円間」[人事且常に在り、質を留めて円間を悟る]。もとは四句あったのだが、他の二句は忘れてしまった。その夢の話私に告げたので、私なりに一篇の詩にしてみた。

えん  
円の中に物がある、

物は本来、空である、

ならば、円の中は空であるのか。

井戸の中に空間がある、

円をその中に入れる、

ならば、空の中に空が入るのか。

天は円の形をしているとか、

自らの眼力をもってそれを窮めることができるのだろうか。

円の内に円がある連環を、人知で解きほどこことができるのだろうか。

天地の全体が共鳴するような風は吹くのか。

頭を下げて、種々の疑問を楽全先生に問うと、

先生は大きく笑っていう。

「真理に通じるのを妨げる者は誰もいない」

【補足】<sup>ちようほうへい</sup> [張方平は仏教に深く傾倒し、蘇軾も仏典に詳しい。この詩は仏典にある特殊な用語を多用し、訳者には全く理解できない。よってはなはだしい「ずっぽ訳」で

ある。結語は、ごちゃごちゃ理屈で議論するより、人それぞれに悟るところがあるという意味だとするのはおおむね正しいであろう]

## ■【07-2-013】西江月

【解題】この詞には、「姑熟〔当塗〕で再び勝之に会い、前の韻を用いてまた『西江月』の詞を作った」との注記がある。当塗は金陵の西側の長江沿いの町で、蘇軾は前年の7月にそこを通過して、そのときにこの詞を詠んだとっているのだが、王明清の隨筆『揮塵後録』[→作品番号07-1-108]は次のようなエピソードを伝える。

### 【訳文】

王明清：『揮塵後録』巻七より

徐大受の後房には甚だ麗しい女性が大勢いた。蘇軾はかつて徐大受の家でその女性たちが演奏する音楽を聴いて詞を詠んだ。最も寵愛されていたのが勝之であった。

蘇軾は黄州から北に向かう旅の途中で南京応天府を通り、張方平に会ったところ、勝之はその息子の張恕の情けを受ける身となっていた。蘇軾はそれを見て思わず顔を覆って慟哭した。勝之はかたわらの女中たちを顧みて大笑いした。

蘇軾はそれからいつもこのことを語り、妾を蓄えることの戒めとした。

【補足】[先の黄州知事の徐大受〔字は君猷〕のもとに大勢の歌妓がいて、勝之という女性に蘇軾は『西江月』の詞を贈ったことは作品番号06-2-014で見ている。その勝之が張方平の息子の妾になっているのを見て同じ『西江月』の詞を詠んだと『揮塵後録』は記しているのである。ここではそれに従ってその詞を訳すことにする。しかしながら、王明清の記録はあまり信用できないようである。なお、張方平の息子の張恕とはかねてから交流があったが、どうやら愚物だったらしいことは作品番号05-5-094

で見ている]

【訳文】

別夢已隨流水、[別れの夢はすでに水とともに流れ去ってしまったのでしょうか]

涙中猶裏香泉。[涙に濡れた <sup>ハンケチ</sup> 中にはなお香りが残っているのではありませんか]

相如依旧是臙仙。[昔のある人は真の美は仙界にあると説きましたが]

人在瑤台閨苑。[人はやはり華やかな場所に留まるものなのでしょうか]

花霧縈風縹緲、[やわやわと風に送られて霧が花にまわりつき]

歌珠滴水清円。[歌声は珠となって水に滴り落ちて清らかな円を描きます]

蛾眉新作十分妍、[美しく引き直した眉は非常に美しいけれど]

走馬歸來便面。[走り去った馬が戻ってくると顔を隠さずにはいられないのです]

【補足】[この詞の各句が何を意味するのか訳者には十分に掴めていないので、またしても「ずっぽ訳」である。全体としては、<sup>じょだいじゅ</sup>徐大受が亡くなったときに流した涙がまだ乾かないうちに、また美しく化粧して宴席に出ていることをたしなめるような内容であるのだろう。そこから<sup>おうめいせい</sup>王明清が伝えるような話が生まれたのだろう。しかし、<sup>じゅん</sup>潤州で2人の官妓の解放に力を貸した蘇軾であるから [→作品番号 07-1-073]、前のパトロンが亡くなってすぐによその土地に流れて行かなければならない女性の境遇に同情を寄せることはあっても、妾を持つなどの戒めとしたとは考えにくい]

■ 【07-2-014】 和王勝之三首

【解題】詩題に<sup>しょうし</sup>「勝之」とあるから、上に見た同じ歌妓かと早合点してはいけない。

こちらの「勝之」は<sup>おうえきじゆう</sup>王益柔の<sup>あざな</sup>字である。王益柔が<sup>きんりょう</sup>金陵の知事から<sup>なんけいおうてん</sup>南京応天府の知事

に移ったことは作品番号 07-1-055 で見ている。南京応天府で王益柔と再会し、その詩に和した。三首とも宴席での戯れの詩で、ごくいい加減な訳文を添えておく。

### 【訳文】

#### 其の一

まち  
城の楼閣から湖を見ると、

暖かな光に波が立とうとしている。

湖上の船から、

美しい女性が私に向かって、

「春の遊びに出ませんこと」

と歌いかける。

知事殿の客人はみな詩と酒をよくするのだが、

その中で神仙の域に達するのは誰であろうか。

#### 其二

知事殿の酒は緑の川の波のように漲り、

知事殿の詩はどの句も弦の音に乗って歌われる。

きよくすい  
曲水の宴は何も三月三日に限りはしない、

新しい詩を作って、かの永和の遊びを継ごうではないか。

【補足】 [えい わ 永和九年の きよくすい 曲水の宴のありさまを記したのが おう ぎ し 王羲之の らんてい じょ 『蘭亭の序』 [→作品番号 07-2-010] である。日付にこだわることなく、その遊びを継ごうというのだから、全くの戯れの詩である]

其の三

知事殿は独り旅する者を憐れみ、

知事殿のすばらしい詩に、

「鈍臭く和しても構わぬぞ」

と、その者にいうのだが、

その者は、酒樽の前で座ったまま眠ってしまい、

呼んでも応えない。

ようやく寝ぼけまなこでいうには、

「工夫を凝らしてはかえって天の和を損ないますので(眠っておりました)」

【補足】[居眠りをしたのはむろん蘇軾自身である]

■ 【07-2-015】 南都妙峰亭

【なんけいおうてん 解題】みょうほうてい 南京おうぎきじゅう 応天府にある妙峰亭で詠んだ詩。妙峰亭は知事の王益柔が建てたもの。かつて立派な建築物があった跡地に、簡単な見晴らし台を作ったのが妙峰亭であったようだ。この詩は含蓄がありげな語句を多用していて、意味を汲み取るのが難しい。訳文は一見すると原詩とは遠くかけはなれている。このように解釈すると、蘇軾が仕組んだ面白さを引き出せると思うからだ

【訳文】

かつてここにあったのは、

雲を凌ぐ高楼、風に波立つ大きな池、

高楼の扉を開くと、美しい風光が前に広がり、

見る人を輝き照らしたのだった。

それは池も畑に埋もれ、

桃や李の花園は草に覆われてしまった。

もはやここを顧みる人はなく、

日暮れ時になると、ころころと車が通り抜けて行くだけ。

いまの知事殿おうえきじゆう[王益柔]は世間の人々とは異なり、

その心こころは古の仏弟子のように静まり返っている。

それでも、ときには利益や名声を求める人の相手もしなければならないので、

その後で、塵埃にまみれた顔を洗おうと、ここに新たにあずまや亭を建てたのである。

町の外側の門に向かい合うのは東の丘、

知事殿は世の全てをここから見渡しつつ、

ちっぴけな人間界について思いを巡らせる。

みょうほうてい  
妙峰亭の名は、

俗界から遥かにろざん かざん抜さん出て、廬山も華山も石ころのように見下ろそうというココロからである。

ならば、知事殿の指を煩わしてどれがどの山かを教えていただく、

そうすればわざわざ世の名山に登りに行かずともすむであろうから。

## ■【07-2-016】跋李伯時孝経図

【**解題**】なんけいおうてん ふ南京応天府に滞在する間にり こうりん あざな はくじ李公麟 [字は伯時] の画を見てこの跋文を記した。

李公麟ほくそうは北宋を代表する画家の1人で、生年は蘇軾より13年あとで、没年は蘇軾の5年あとであるから、ほぼ同じ時代の人である。蘇軾が都でさかんに改革を批判していたところに科挙に合格し、官員としても活動したが、後世にはもっぱら画業をもって伝えられる。このとき見たのは儒学の経典の一つである『こうきょう孝経』から題材を採った画。

## 【訳文】

この図を観る者は、まさに『礼記』にあるところの「易直子諒の心、油然として生じる」[和やかな誠の心がふつふつと沸き立つ]となるであろう。筆跡の妙は顧愷之、陸探微に劣るものではない。『孝経』第十八章[親を喪った子の悲しみをテーマとする]の図は、人の子として忍びざるありさまを、見事にありありと描いている。道を得た君子でなければこのように描けるものではなく、顧愷之、陸探微といえども及ぶものではない。

【補足】[この文章だけからすると、もとの画は經典のプロパガンダ画であるように思ってしまうのだが、李公麟の画が高い精神性を有していることを評価したものなのだろう。このときは李公麟とはたぶん会っておらず、後に深い交友関係を結ぶようになる。なお顧愷之と陸探微は高校世界史の教科書にもその名が載るような中国を代表する画家である]

## ■ 【07-2-017】 寄怪石石斛与魯元翰

【解題】魯有開 [字は元翰] に怪石 [奇怪な形状の石] と石斛 [自然石で作った柸] を贈り、それに添えた詩。魯有開は杭州副知事時代に交流があった人 [→作品番号04-3-073など]。「怪石」は黄州の赤壁で拾ったもの [→作品番号06-3-040など]。「石斛」はどこで入手したのか不明。魯有開はこれまで都にいたのだが、何かの落ち度があった左遷となり、それを慰めるために蘇軾はこれらを贈ったのである。

## 【訳文】

斛は山の骨が四角に裁たれたもの、  
珍しい石は長江の浅瀬で拾ったものだ。  
清らかな池を湛える斛は机の上に置くのがよく、

月を砕いたような石は盤の上に置くのがよいだろう。

私は老いて白居易のいう「三友」[酒、琴、詩]を懐うのだが、

日常的には一碗の飯にも困っている。

斛の堅い姿はいささか自らの戒めとし、

怪石の秀れた色を腹の足しとしてきた。

さあ斛と怪石よ、行ぐがよい、髯の美しい卿[魯有開]のところへ、

道眼[真理を見抜く慧眼]をもって看てもらえるであろう。

この怪石は東坡居士のもとに残った最後のもの、

霜や雪のような輝きが人を寒く照らすであろう。

【補足】[「寒く」とあるのは、温度のことをいうのではなく、精神を引き締める高潔さをいうのであろう]

## ■ 【07-2-018】贈眼医王生彦若

【解題】南京応天府の眼科医、王彦若に贈った詩。蘇軾自身の注記によると、王彦若は張方平の門人である。

### 【訳文】

鍼の頭は麦の芒のように小さく細い、

その先端から、車軸のような勢いで気が流出する。

体の中は絡やら脈やらが複雑にからみ合い、

生命は毛筋のごとく、あるいは粟粒のごとく、ごく微小なものに依拠している。

とりわけ眼は清浄なもの、内部に天の燭が収められている。

それは琉璃の中に貯えられている露のように弱くて脆く、



触れることさえ危い。

ところが、王<sup>おう</sup>先生は眼の中で鍼を用い、

鋒<sup>ほこ</sup>や鍼<sup>かじり</sup>を縦横に振り回すかのようにして、

しかも、全く普段通りに談笑しながら行うので、

観る者は驚きのあまり首を縮めてしまう。

斤<sup>おの</sup>を動かして家<sup>さ</sup>を拆くようにして眼から翳<sup>かげ</sup>を取り除く。

常に疑われているのは、

王先生は幻を見せているのであって、

実は鍼のほかにまじないを用いているのではないかと。

先生はいう、

「私のしていることは道<sup>みち</sup>に敵<sup>かな</sup>っています。

貴君<sup>ことわり</sup>はその理<sup>ことわり</sup>がまだわかっておられないのでしょう。

人の身体はひとかたまりの塵や垢のようなもの、

身分に貴賤の上下があっても、どの人も草木と変わりがありません。

世間の人は外見を重んじ、やたらと瓦<sup>ぎやく</sup>と玉の違<sup>ちが</sup>いを見えています。

私も初めはわかっていなかったので、

眼を刺すのは肉を刺すのと同じであるように思っていました。

病人<sup>かじり</sup>だ眼を見ると翳<sup>かげ</sup>があり、翳<sup>かげ</sup>は眼ではありません。

眼と翳<sup>かげ</sup>が別々の物であるのなら、

それを分けるのは麦と豆のように簡単なのです。

農夫に聞いてみればわかるように、

雑草を取り去って穀物が損なわれるということはありません。

鼻の頭にだって広い空き地があり、

かん たん そ しよく  
肝と膽も楚国と蜀国ほどに離れています。

私は、人の体の中に蕩蕩とした空間を見ているので、  
鍼を使うのは、九台の車を並べられるだけの幅がある道进行するよなもの、  
二台の車が疾駆してもぶつかり合うことはないのです。

眼中に花が散るよな翳は誰が取り除こうとも、  
三日月が自然と満月になるよように、眼は明るくなります。

さらに尋ねたいことがあるのなら、

いまは言葉を忘れた境地にある楽全堂先生[張方平]にお聞きください

【補足】[蘇軾が黄州で赤眼を患ったことは作品番号06-4-004で見ているが、ここで王

彦若の診察を受けたかどうかはわからない]

## ■ 【07-2-019】春日

【解題】南京応天府でのある穏やかな午後の詩。

### 【訳文】

夫婦呼び合う鳩も、雛を育てる燕も、

いまは声なく静まりかえっている。

西の窓から、日が目にまぶしく射し込んで来る。

昼の酔いから醒めはしたけれど、

何もすることがない。

ならば、春の眠りをもって、

春のこの晴天を賞玩するとしてよう。

■ 【07-2-020】 李憲仲哀詞、并叙

【**解題**】 李廌<sup>り たい あざな ほうしゆく</sup> [字は方叔] [→作品番号 06-3-070] が陽翟<sup>ようてき</sup>から蘇軾<sup>なんけい</sup>に会うために南京<sup>なんけい</sup> 応天府<sup>おうてん ふ</sup>にやってきたので、その父の李惇<sup>り じゆん</sup> [字は憲仲<sup>けんちゆう</sup>] の挽歌を作った。蘇軾と李惇は同じ年に科挙に合格した「同年」の間柄である [→作品番号 06-2-039]。

【訳文】

叙

同年<sup>どうねん</sup>の友である李惇<sup>り じゆん</sup>、字は憲仲<sup>あざな けんちゆう</sup>、は賢<sup>けん</sup>にして才能<sup>けんちゆう</sup>があった。不幸<sup>ふこう</sup>にして早世<sup>そうせい</sup>したために、私<sup>わたくし</sup>には親しくさせていただく間<sup>ま</sup>がなかった。その子<sup>こ</sup>の李廌<sup>り たい</sup>が、この年<sup>このねん</sup>、陽翟<sup>ようてき</sup>から出て来て南京<sup>なんけい</sup> 応天府<sup>おうてん ふ</sup>で私<sup>わたくし</sup>と会った。李廌<sup>り たい</sup>は泣きながらいった。

「私の祖母<sup>そぼ</sup>の辺氏<sup>へん</sup>、母<sup>はは</sup>の馬氏<sup>ば</sup>、前の母<sup>まへ</sup>の張氏<sup>ちやう</sup>、そして父<sup>ちち</sup>までも、いまだに葬礼<sup>そうらい</sup>が終わっていません。貧乏<sup>ひんぱふ</sup>であっても、飢えや寒さなら憂い<sup>うれい</sup>はしません。四人<sup>よににん</sup>の葬礼<sup>そうらい</sup>が終わらないうちは、私は死んでも死に切れないのです」

このときまたま知り合<sup>しりあひ</sup>いの梁先吉<sup>りやうせんきち</sup>が、私<sup>わたくし</sup>が陽羨<sup>ようせん</sup>に帰農<sup>きゆうのう</sup>すると聞いて、絹<sup>きぬ</sup>十四、絹糸<sup>きぬいと</sup>百両<sup>ひゃくりやう</sup>を贖<sup>はなむけ</sup>として贈<sup>たま</sup>ってくれ、辞退<sup>じたい</sup>しても許<sup>ゆる</sup>してくれなかった。そこで、それらを李廌<sup>り たい</sup>に贈<sup>たま</sup>ることにした。

「これは仁<sup>まごころ</sup>のある人<sup>おひもの</sup>から饋<sup>たま</sup>です」

と、私は李廌<sup>り たい</sup>にいった。

さらに詩<sup>うた</sup>を作って、李惇<sup>り じゆん</sup>や李廌<sup>り たい</sup>を知る者<sup>しるもの</sup>に見せることにする。李廌<sup>り たい</sup>を助<sup>たす</sup>けてくれるのを願<sup>ねが</sup>うてのことだ。

李廌<sup>り たい</sup>は二十五歳<sup>にじゅうごさい</sup>、その文章<sup>ぶんしょう</sup>は曄然<sup>かはや</sup>き気節<sup>きせつ</sup>のあることは並大抵<sup>なみだいだい</sup>でない。決して窮<sup>きゆう</sup>したままで終わる者<sup>もの</sup>ではない。

人の一生<sup>いっせい</sup>は大きな夢<sup>ゆめ</sup>のようなもの、

ゆくゆくは覚<sup>さ</sup>める……

百年の期限を満たすことはなかなかない。

私ははなはだ悲しむ、

貴君<sup>りじゅん</sup>がその半ばに至らずしてすでに逝<sup>ゆ</sup>き、

さびれた建物の内で長い眠りにつき、

いまなお葬られずにいるのを。

念<sup>おも</sup>うに貴君と私は同年、

友愛<sup>とも</sup>の意は長くあろうとしたのだけれど、

貴君に許された歳月は短いものであった。

名馬でありながら塩を運搬する労苦に苦しみ、

貧困のために先祖を祀るための道具も失ってしまった。

貴君の子は奇骨<sup>きこつ</sup>があり、語り<sup>かた</sup>っぷりはすでに精悍である。

野生の鶴さなからの姿で、将来はきっと古<sup>いにしよ</sup>の名臣を凌ぐであろう。

生きるものは大塊<sup>たいかい</sup>〔肉体〕に生命を寄せ、

死んだ者はみな土の穴の中に入る。

ああ、貴君だけはまだに現世に留まり、地下の暖かさを知らずにいる。

私は孝子を助けようと衣を差し出す、

それとて、日照りの大地に一杯の水を注ぐようなもの。

さらに支援してくれる者はいないのか。

昔の人も大事なことはゆるがせにしてはならないといっているではないか。

【補足】〔(1) 先の黄州知事の徐大受<sup>こう じょだいじゆ</sup>の例で見たように [→作品番号 06-4082]、きちんとした葬礼を行うのは一大事業であった。蘇軾は自身に余裕がなくても何とか支援の手を差し延べようとしている。(2) 旧中国の人々にとって最も大きな願いは科挙に合格して官員になることだった。それでも、若くして死ねば妻子がたちまち困窮して

しまうようなことも珍しくはなかった。李廌<sup>り たい</sup>は三代にわたる先祖の葬礼をきちんとすませた上で、自身が科挙に合格して家を再興するのを悲願としていたのである]

## ■【07-2-021】王伯敷所藏昌花四首

【解題】南京応天府にある王廷老<sup>なんけいおうてん ふ</sup> [字は伯敷<sup>おうていろう あぎな はくよう</sup>] の家を訪問したところ、趙昌<sup>ちやうしょう</sup>が描いた画があった。趙昌<sup>しよく</sup>は蜀の人で、蘇軾より少し前に活躍し、花虫草木を描くことを得意とした。その画を見ての詩。王廷老はこのころは官職から退いていた。なお、王廷老の息子に、蘇轍は娘を嫁がせている [蘇轍には 5 人の娘がいていずれも名のある士大夫<sup>し たい ふ</sup>の息子と結婚している]。

### 【訳文】

#### 其の一 梅花<sup>ばい か</sup>

南へ南へと、山また山を越える。

<sup>くねくれ</sup>練練と流れ下る溪流の水はあくまでも清い。

日暮れが近づき、しかも細かい霰も降ってきて、

ここに旅人は愁いを極める。

不意に、心やさしく梅の花が、

美しい顔を寄せてくれる。

旅人はほのかな香りをまとい、

再び歩み出す。

ふと、振り返り見ると、

霰なのか、花びらなのか、

暗がり<sup>くら</sup>に千の小片が飛び交っている――

いま、梅花の画を開き見ると、  
 かのときを思い、老いた我が眼に涙があふれる。  
 かのときおもいの懐は文字に写すことができない、  
 この画に誘われて、  
 夢にまたあの梅の花のもとへと帰って行こう。

【補足】ちょうしやう [趙昌の梅の画を見て、蘇軾は作品番号 06-1-010 で詠んだ梅を思い出したと  
 解釈して、この訳文を作った]

### 其二 こう き 黄葵

あかい 葵は弱々しく夏の日中の永さに苦しみ、  
 暁の涼しさによって、そのすてきな姿が蘇る。  
 低く、あるいは高く、黄金の杯が揺れ、  
 昇ったばかりの日の光を受けて照り輝く。  
 紅い花の芯かきに暈がかかり、  
みどり 翠の葉の先のぎに芒が突き出る。  
 昔から葵を写生する人はいたけれど、  
ちょうしやう 趙昌の絶妙な技には誰も及ばない。  
よそお 朝に粧った姿も、昼に酔った姿も、  
 陰陽合わせもった真のありさまを描いている。  
 この花の枝を見るがよい、  
 宿った露の香りまでも感じ取れるではないか。

### 其三 ふ よう 芙蓉

林は秋の風に払われ、  
池の水は次第に浅くなり、  
蓮の花はすっかり尽きてしまった。  
溪のかたらは、  
芙蓉の木に、川のせせらぎと呼応するように花が開く。  
ほかにあるのは、霜に萎れた菊だけ。  
ひそやかな芙蓉は、  
迫る夕暮れの暗がりの中に埋もれつつ、  
無理にも微笑みを浮かべようとしている。  
そのうらさびしさは、  
見初められることもなく、  
我が衰えの早さに驚く貧家の娘のようである。  
誰がその娘のうかたいちい容を写したのか、  
剣南けんなんの老いた樵きこり[趙昌ちょうしょう]である。

其の四 山茶さんちゃ

冬の強い風が吹化、  
山の松が寂しげに鳴り、黄色い葉が飛んで落ちる。  
誰が隣れむのか、  
氷雪の中で、少女のようなこの花が、火の如き明るさを発しているのを。  
年の瀬の寒さの中の山茶花さんしかの姿を写し得たのは、  
昔からただ邱文播きゅうぶんが、いただけたとされた。  
趙昌はその妙所を得ただけでなく、

にかわ  
膠の粉を使う技法も一掃してしまった。

てのひら たん さ  
掌の中で丹砂を調合し、鶴の頂の紅の色を染め出してみせたのだ。

墨だけで花木を描いた江南のかの名人だけが、

賞賛の対象となるのではないのだ。

【補足】「墨だけで花木を描いた」というのは徐熙じょ きのこと。五代十国時代の南唐国ご だいじゅうこく なんとうこくの都の金陵きんりやうで、官に仕えずに自由人として画を描いた]

## ■ 【07-2-022】 代張安道進功德疏文

【解題】3月5日、神宗皇帝しんそうが死去し、息子の趙煦ちやうく てつそう [哲宗] が即位した。神宗はこのとき38歳。もしも50歳を過ぎるころまで生きていたならば、蘇軾の運命のみならず宋朝そうちやうの行く末も、さらには中国の歴史も大きく変わっていたかも知れない。王安石おうあんせきと神宗皇帝が始めた改革は当初の目的をかなりの程度達成しつつあって、宋朝は再び隆盛に向い始めていた。そのまま息子の哲宗へと改革政治が引き継がれていたならば、少なくとも宋が北方の新興勢力によってもろくも瓦解するようなことにはならなかったであろう。神宗皇帝が亡くなったとき哲宗はまだ10歳で、自ら政治を見ることができなかった。そのような場合に、母もしくは祖母が摂政となって、宰相等による集団指導体制をとるということがよく行われ、このときは哲宗の祖母である高氏こう えいそう [英宗の皇后。以下、高太皇太后と表記] が政権運営に意欲を燃やし、改革派を斥けて壮絶な卓袱台返しちやぶだいがえを行ったのだった。高太皇太后は神宗皇帝が改革を始めた当初からそれに懐疑的で、いまこそ国を正しい姿に戻さなければならないとの使命感に駆られ、改革派によって朝廷から排除されていた人々を次々に都に呼び戻し、改革のために作られた諸制度のほぼ全てを廃止した。しかし、後に哲宗が成長してその親政が始まると、再び卓袱台返しが行われて改革政治に戻り、宋朝の政治体制は極端から極端へと揺れ



動き、混迷を深めてしまうのである。後の歴史家は、そうした混乱をもたらしたそもそもの原因は改革にあったとして、王安石は史上稀に見る大悪人のようにされてしまうのだが、素直に見れば、混乱をもたらしたのは無理やり改革をストップしたことにあるのであって、もしも引き続き改革が進行していたならば、宋は経済発展を続けて長く国力を保ち、王安石は大功臣として評価されて、同様の改革がその後の王朝でも実施された可能性もあっただろう。蘇軾はきつと陽羨に隠棲したまま平穏な後半生を送り、<sup>こ</sup>黄州で見たのと同じような詩文が引き続き作られたであろう。それはそれで味<sup>い</sup>わい深いものとなったであろうけれど、さらにまた「愈<sup>いよ</sup>いよ<sup>きゆう</sup>窮<sup>すなわ</sup>すれば則<sup>いよ</sup>ち愈<sup>たく</sup>いよ工<sup>たく</sup>みなり」となって、次なる境地を切り開くチャンスは失われてしまったのだろう。

この項の表題に掲げたのは、神宗皇帝の安楽往生を願う文章を張方平に代わって書いたもの。意味は詮索せずに、お経と同じように音読みで重々しく朗読すればよいであろう。蘇軾にはいかなる種類の文章でもたちまち作り上げてしまう特殊能力があるので、張方平は代筆を頼んだのである。

伏<sup>ふ</sup>以<sup>い</sup>聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>示<sup>じ</sup>化<sup>か</sup>、棄<sup>き</sup>黄<sup>こう</sup>屋<sup>おく</sup>上<sup>い</sup>賓<sup>びん</sup>、凡<sup>ぼん</sup>庶<sup>しよ</sup>何<sup>か</sup>知<sup>ち</sup>、抱<sup>ほう</sup>鳴<sup>めい</sup>号<sup>ごう</sup>而<sup>じ</sup>永<sup>えい</sup>嘆<sup>たん</sup>。不<sup>ふ</sup>有<sup>ゆう</sup>崇<sup>ちゆう</sup>薦<sup>せん</sup>、曷<sup>か</sup>伸<sup>しん</sup>悃<sup>こん</sup>誠<sup>せい</sup>。故<sup>こ</sup>依<sup>い</sup>妙<sup>みょう</sup>湛<sup>たん</sup>之<sup>し</sup>尊<sup>そん</sup>、特<sup>とく</sup>設<sup>せつ</sup>清<sup>しやう</sup>淨<sup>じやう</sup>之<sup>し</sup>供<sup>きゆう</sup>。庶<sup>しよ</sup>民<sup>みん</sup>法<sup>ほう</sup>力<sup>りき</sup>、仰<sup>ぎやう</sup>導<sup>どう</sup>真<sup>しん</sup>游<sup>ゆう</sup>。恭<sup>きやう</sup>惟<sup>い</sup>神<sup>しん</sup>宗<sup>そう</sup>皇<sup>こう</sup>帝<sup>てい</sup>陛<sup>へい</sup>下<sup>か</sup>、伏<sup>ふく</sup>願<sup>がん</sup>永<sup>えい</sup>徵<sup>ちゆう</sup>仏<sup>ぶつ</sup>乘<sup>じやう</sup>、円<sup>えん</sup>成<sup>じやう</sup>道<sup>どう</sup>果<sup>か</sup>。

儲<sup>ちゆう</sup>神<sup>しん</sup>無<sup>む</sup>極<sup>きやく</sup>、逍<sup>しやう</sup>遥<sup>やう</sup>梵<sup>ぼん</sup>釈<sup>しやく</sup>之<sup>し</sup>間<sup>かん</sup>、卜<sup>ぼく</sup>世<sup>せい</sup>逾<sup>ゆう</sup>延<sup>えん</sup>、跨<sup>こ</sup>越<sup>えつ</sup>商<sup>しやう</sup>周<sup>しゆう</sup>之<sup>し</sup>盛<sup>せい</sup>。至<sup>し</sup>于<sup>う</sup>含<sup>がん</sup>識<sup>しき</sup>、併<sup>へい</sup>暢<sup>ちやう</sup>天<sup>てん</sup>和<sup>わ</sup>。

## ■ 【07-2-023】 神宗皇帝挽詩

【<sup>しんそう</sup>解題】蘇軾は神宗皇帝の死を悼むこの詩を詠んだ。これは皇帝の徳をひたすら讃えるもので、我々にとっては重々しい虚飾の語句を並べただけの作品としか見えないのだが、蘇軾は真剣に神宗皇帝の死を悼んでいる。かつて直接に神宗皇帝に会って話した蘇軾は、真に優れた帝王であったのを知っていたのである。

## 【訳文】

## 其の一

陛下は文も武ももとより天から縦ゆるされたお方、

欽つつしみ明らかであられること日々に新たであった。

民を化育されることでは「聖」ということとまらず、

万物の妙所に通じられて、ただ一人「神」と称えるべきお方であった。

政まつりごとは古代の「三王」さんのおうの上に超え、

おっしゃる言葉はどれも「六経」りくきょうの粹すいに適っていた。

高く聳える徳はもはや象なきまでに優れ、

臣わたしは詩に刻もうとしてもとてもできないはずかのを愧しく思うのである。

【補足】「三王」さんのおうは古代の伝説的な3人の聖王。「六経」りくきょうは儒学の最も重要な6種の  
 經典。当時の人々が抱いていた皇帝への畏敬の念は、我々には理解不能としか言いよ  
 うがない]

## 其の二

堯ぎょうに比すべき陛下の徳は名状し難く、

舜しゆんに比すべき陛下の功績はとても数え挙げられない。

陛下は小心翼翼々として孝に努められ、

そのついでに外敵を平定された。

典しゅうだい礼は周代の旧例通りに用いられ、

官儀の盛んなことは漢代かんだいの最盛期と同様であった。

最高の徳は何もしていないように見え、

民は千年に及ぶ徳化の風を承けたのである。

【補足】[この第2首に歌うのは事実とはまるで一致しない [夏国<sup>かこく</sup>と戦争を起こして失敗し、従来の法規を大幅に改めた]。皮肉な「褒め殺し」と受け止めるのは100パーセント邪推である]

### 其の三

陛下は千年にわたって続く大宋の皇統を受け継がれたのだが、

皇位にあられたのはわずかに十八年であった。

わたし しゅうなん こう  
臣が周南[黄州をいう]に留滞する間に、

朝廷はついに淒涼としたありさまになってしまった。

病んだ馬は(用いられる機会を失って) 櫪<sup>かいばけ</sup>に空しく嘶き、

枯れた葵は霜をかぶって萎れてしまいかない。

あおい  
我が余生は江海に臥し、

夢で皇廟に至って泣くのである。

【補足】[蘇軾は「江湖」に余生を送ることを朝廷に願ったのだが、ここでは神宗皇帝<sup>しんそう</sup>の恩に報いる機会を永久に失って「江海」に臥す無念さを歌っている。皇帝の徳は完全であったけれど、その治世に何か問題があったとすれば、臣下の者が朝廷を淒涼とさせてしまった [それで蘇軾は活躍できなかった] からである]

## ■ 【07-2-024】 与王定国

【解題】蘇軾は王鞏<sup>おうきょう あざな ていこく なんけいおうてん ふ</sup> [字は定国] と南京応天府で再会するのを楽しみにしていた

[→作品番号 07-1-101]。しかしどうやら擦れ違いになってしまったようだ。南京応天府にいる間に王鞏に送った手紙が二通残っている。

## 【訳文】

(1)先帝が亡くなられ、天下の人々は誰もが愛慕の念に駆られています。私と貴君は先帝の御恩を蒙ること最も深く、挽歌を作ったところで、思いの方に一つも言い表すことができません。それで敢えて作らずにいるのです。貴君ならその意を深く察して下さるでしょう。情けなくも罪に坐して廃された身となり、先帝だけが哀れんでくださいました。これからは誰が私を死の淵から救ってくれるのでしょうか。帰耕して生涯を終えるしかないのです。

【補足】 [これは、上で見た挽歌を作る前に出した手紙であろう。蘇軾は、必ず死罪になるところを神宗皇帝によって救われたと認識していたことがよくわかる]

(2)張公[張方平]は咳が続いて、月が改まってもなおやまずにいます。飲食は特に減ってはいませんが、少しお痩せになったようです。ここ数日はややよくなっておられるので、心配するまでもないのであります。……張公とは間もなくお別れするので、私の心の内は極めてよろしくありません。貴君がもし早く来て下さるのなら、一緒に集まれるであらうに。……

【補足】 [王鞏は張方平の婿であるので、その舅の健康状態を特に報せたのである]

## ■ 【07-2-025】 薦誠禪院五百羅漢記

【解題】 南京応天府に滞在する間に、鄆州にある薦誠禪院の五百羅漢についてこの文章を書いた。事情は本文中に記されている。

## 【訳文】

熙寧十年、私は徐州知事であったときこのようなことを聞いた。

黄河が澶淵で決壊し、巨野[鉅野]に溢れ出し、鄆州の東平郡に水が灌がれそうになった。東平の

吏民は驚き恐れ、どうしたらよいのかわからなかった。僧の忘言がある策を建言した。清冷口を鑿ち、黄河から溢れた水を北へと導き、古く廃れた河道に入れて北東へと流し、海に入れるというものであった。役人はその議論を聞いただけで放置していたのだが、忘言が強く弁じ続け、また黄河の決壊した状況がひどかったので、役人は無視できなくなり、ついにそれを実行した。水はいった通りに流れ、東平郡はそれで助かり、忘言の功績は大きかった。衆人は忘言に褒美を与えようとしたが、僧は笑って辞退した。

私はその僧を異と考えた。

その二年後に私は湖州知事となり、移動の途中で南京応天府に行ったところで、鄆州から忘言が来ていた。忘言は私に会うとこのようにいった。

「愚僧は鄆州に生まれ、若くして僧となり、仏の教えを説くことを仕事としてまいりました。銭明逸様のために精舎[仏教寺院]を鄆州の東の阿北新橋鎮に創り、高さ百二十尺の鉄の仏像を十三体造りました。それが完成しますと、趙概様が朝廷に願い出てその寺院に『薦誠』の名を付けてくださいました。愚僧はその寺院を守り続けてまいりましたが、いまは五百羅漢像を造って船に載せて持ち帰るために銭塘[杭州]に行くところです。このためには五百万銭を要しますが、それは文彦博様より下されました。皆様方は愚僧の施主にございます」

私はそれで忘言はますます優れた人であるのを知った。

それから六年、私は黄州から汝州に遷るにあたって南京応天府に来たところ、ちょうどまた忘言がいて、このようにいった。

「五百羅漢像はすでに完成しました。どうか愚僧のためにそれを記念する文章を書いてください」

嗚呼、士は功名を挙げることを貴いとする。事を論じるのは易く、事を為すのは難しい。事を為すのはまたしも易く、事を成就させるのは難しい。天下の士が誰もが忘言のようであれば、論じて必ず為し、為して必ず成就する。そうであれば、功名だらけとなって、いちいちそれを言うことはなくなるだろう。

【補足】〔(1) 蘇軾が徐州知事であったときに黄河が決壊し、大洪水に襲われたこと

は作品番号 05-3-062 以下で詳しく見ている。(2) ここに名前が挙げられている銭明逸<sup>せんめいつ</sup>、趙概<sup>ちやうがい</sup>、文彦博<sup>ぶんげんはく</sup>の3人はいずれも宋朝<sup>そうちやう</sup>の重鎮で、文彦博については作品番号 06-2-017 などで見ている。(3) 興味深いのは、応言<sup>おうげん</sup>が五百羅漢<sup>ごひやくらかん</sup>像<sup>ぞう</sup>の制作を杭州で行ったことで、先に見たように仏典の版木を刻むのを杭州で行ったことと合わせて、やはり杭州が文化の先進地であったことがわかる。(4) 蘇軾が杭州で治水工事に関わったときに仏教界の力を借りていたが [→作品番号 04-2-032]、この文章からも僧が土木建築に深く関わっていたことが知れるであろう]

## ■ 【07-2-026】 書画壁易石

【解題】蘇軾は3月末ないし4月初めに南京<sup>なんけい</sup>応天府<sup>おうてんふ</sup>を発ち、常州<sup>じやう</sup>へと向かった。再び<sup>また</sup>霊壁鎮<sup>れいへきちん</sup> [→作品番号 07-2-004] を過<sup>よぎ</sup>り、この文章を書いた。

### 【訳文】

霊壁<sup>れいへき</sup>では、表面に変わった模様のある石が出る。

劉氏<sup>りゅう</sup>の庭園の見晴らし台の下に、尖った独特の形状をした石があり、繰り返し眺めると、鹿が首をくねらせている<sup>あ</sup>りさまが見えてくる。

東坡居士<sup>とうぱこじ</sup>はこれが欲しくなり、園内の臨華閣<sup>りんかかく</sup>の壁に、奇怪な石と風に吹かれる竹の画を描いたところ、主人は喜んでその石を与えてくれた。東坡居士はそれを舟<sup>ふね</sup>に載せて陽羨<sup>ようせん</sup>に帰るのである。

元豐八年四月六日。

【補足】 [(1) 蘇軾は、若い頃には書画が欲しくてどうにもならないようなこともあったが、いつしか物に対する執着心がなくなったという趣旨のことを書いていた [→作品番号 07-1-038]。しかし、ここでは石が欲しくたまらず、それを得るために壁に画を描いている。そこまでしたのは、鹿の形が見えたからだろうか。蘇軾はしばしば自

分の本性は鹿であるといっていて、常州じょうの陽羨ようせんではその本性のままに生きてみたいと  
 考えていたのだろうか。(2) 昨年のうちに何度か会って、まだ科挙に合格できずいる  
 のをいつも励ましていた秦覲しんかんは [→作品番号 07-1-099 など] は、この春について科挙  
 に合格している。通常、科挙の合格発表は 3 月上旬に行われるのだが、ちょうどその  
 ころに神宗皇帝しんそうが亡くなっているの、例年通りではなかったのかもしれない。蘇軾  
 がいつその朗報を聞いたのか、合格を祝うような詩文が残っていないので明らかでは  
 ない]

## ■ 【07-2-027】 漁父

【解題】「漁父」もしくは「漁翁」は、本性のままに生きる人を象徴する存在だった  
 [→作品番号 05-1-051]。水の上で自由に生きているように見える漁師は、窮屈な地上  
 社会に縛り付けられている人間からすると、憧憬の対象となった。中国の四大奇書の  
 一つである『水滸伝』すいこでん [書かれたのは明代みんだいだが、舞台は蘇軾の時代のすぐ後の北宋ほくそう  
 末] には、阮小二げんしょうじ、阮小五げんしょうご、阮小七げんしょうしちの漁師の三兄弟が登場し、胸のすくような活躍  
 をし、梁山泊りょうざんぱくのリーダーの宋江そうこうが朝廷に帰順する決断をしたときに、阮小二はその方  
 針に最後まで納得しなかった。この詩は阮小二と比べたらずっとおとなしいけれど、  
 自由に振る舞う漁父を、3-3-6-7-6 の特殊なリズムで歌っている。

### 【訳文】

其の一

漁父飲、[漁父は飲む]

誰家去、[誰の家にゆくのか]

魚蟹一時分付。[魚と蟹をいっぺんにふちまける]

酒無多少酔為期、[酒は多い少ないではない、酔うまで飲む]

彼此不論錢數。[どの獲物がいくらたとかいいうことはない]

其の二

漁父酔、[漁父は酔う]

蓑衣舞、[蓑をまとして舞う]

酔裏却尋歸路。[酔ったところで帰り路を尋ねる]

輕舟短棹任斜横、[舟は軽く、棹の動きさおに任せるだけ]

醒後不知何處。[醒めたときには、はてどこにいるのやら]

其の三

漁父醒、[漁父は醒める]

春江午、[春の川の昼どき]

夢斷落花飛絮。[夢は終わり、花が落ち柳絮りゅうじょが飛ぶ]

酒醒還醉醉還醒、[酒が醒めたらまた酔い、酔ったらまた醒める]

一笑人間今古。[一笑する間に、人間世界の今はすでに昔]

其の四

漁父笑、[漁父は笑う]

輕鷗拳、[鷗が軽やかに拳がる]

漠漠一江風雨。[川一面がぼんやりと雨に包まれる]

江辺騎馬是官人、[川べりをゆくのは馬の上の官人]

借我孤舟南渡。[わしの舟を借りて、南に渡りたいのだとさ]



【補足】[漁父に舟を借りて南に行こうとする官人は蘇軾自身であろう]

■ 【07-2-028】 与欧育等六人飲酒

【解題】<sup>なんけいおうてん ふ</sup> 南京応天府から<sup>よう</sup>揚州に至る間のどこかで、<sup>こう</sup>杭州の任地へと向かい<sup>おう</sup>つつある欧育と出逢い、6人で飲んだという詩。

【訳文】

たちまち驚くのは、

春の風物の半分が早くも空しくなってしまったこと。

ここに置かれている紅い花を見ていられるのもあとわずかだ。

貴君は、白い扇を使いつつ詩を詠もうと苦戦している。

私は旅に倦み、酒樽の黄色い封を切ることばかりを思っている。

ここ何年かで、私は髪も齒もすっかり老いてしまった。

貴君はここを去って、<sup>わい が ちようこう</sup>淮河も長江も渡り、

さらに東へ東へと行かなければならない。

さあ、覚えておこうではないか、

ここに六人が集まって、

杯を引き、剣を看着、風が吹き立ったことを。

【補足】[(1)「春の半分が空しくなった」と歌っていることから2月の詩であるのだろう。(2)「剣を看着」と最後にあるのは、<sup>おういく</sup>欧育が立派な剣を蘇軾に見せたからで、その剣と戦袍<sup>せんぼう</sup> [陣羽織] を詠んだ別の詩がある。あまり興味深いものではないのでその訳は割愛する]

## ■ 【07-2029】 寄呉徳仁兼簡陳季常

【解題】この詩の題は「呉瑛 [字は徳仁] に寄せ、兼ねて陳慥 [字は季常、方山子] に書簡を送る」。呉瑛は官を退いて蘄水県に隠棲している人物で、かつて蘇軾はその近くを訪れたものの [→作品番号 06-3-029]、呉瑛には会わなかったとこの詩の後半で歌っている。陳慥は黄州で親しくした人物で、前年の4月に瑞昌県で別れている [→作品番号 06-5-035]。蘇軾自身の注記で、「詩中に云う『竜丘居士』は陳慥のこと、『濮陽公子』は呉瑛のこと」とある。この詩をこの時期に呉瑛と陳慥に送ったきっかけは不明である。

## 【訳文】

東坡先生は貧乏で一銭もない。

しかも、わずか一銭の値打ちのものさえ作り出せない。

俗にいわれているのは、

黄河を塞ぐことができ、黄金を作り出せるのなら、不老不死の薬もできるだろうと。

東坡先生は、それを真に受け、

十年間、家でちよろちよろ鉛を焼いてみたのだが、

髪が白くなるのをどうすることもできなかった。

竜丘居士[方山子]も気の毒なことに、

空を談したり有を説いたりして夜も眠らずにいる。

ところが、河東から訪れた客人[柳簿という人物であるらしい]が、

獅子が吼えるような声で説法したのに驚き、

杖を手から落とし、心は茫然となってしまった。

それに引き換え、

ぼくようこうし ごえい  
濮陽公子[呉瑛]の賢さには誰も及ばない。

酒は飲み、肉も食らっていないから、

我は仙道の極意を得たといっているのだ。

物に宿る真理は会得するけれど、

己の心を物に留めることはなく、

家にいても、家にあることを忘れる禅を学んでいる。

門前には稲が揺れる十頃けいの田があり、

清らかな溪流めぐが家を繞り、天に連なって花が開いている。

かつて、春風によって落花が雪のように降る下で、

濮陽公子は、呼んでも起きないまでに酔って眠っていた。

そのとき、私は近らんけいくの蘭溪せいせんじに遊んで清泉寺を訪れ、

世間を離れる旅装束を纏う気になって、

こらあたりの山で老いるのもよからうかと考えましたのだが、

たまたま興が尽きて船を返してしまった。

そのために、残念ながら、

私は濮陽公子に会えず、濮陽公子は私に会えなかった。

いつしか、洛陽らくようの道でたまたま三人が出会ったならば、

手を握り、笑い合っこのうのだ。

「あれから、ほんの三千年でしようかなあ」

【補足】[末尾の原文は「銅駝陌上会相見、握手一笑三千年」どうだほくじょうたまあ][銅駝陌上会たま相見  
見るなら、手を握みって一笑てす三千年にぎ いっしょう さんせんねん]。「銅駝陌」は洛陽らくようにあった街路の名で、「銀座  
通り」というように最も繁華な街路の象徴的名称。「三千年」は概数で、仙人になれば三千年もほんの一瞬ということである。なおこの句は江戸時代初期の詩僧、元政げんせいの

詩に、「銅駝陌上坡翁句、一笑吟春感轉多」<sup>どうだほくじょうはおうく いっしょうはるぎんかん</sup>〔銅駝陌上 坡翁の句、一笑 春を吟じて感  
 轉た多し〕<sup>うた おお</sup>〔銅駝陌 [=京都の二条通り] で再会して、蘇軾の詩句にあるように、一  
 笑して春を吟じると、いろいろに感じることが多い〕として引かれている。蘇軾のさ  
 ほど有名でもないこの詩がさりげなく用いられるまでに、蘇軾の詩文は当時の文人の  
 間で親しまれていたのだろう]

## ■ 【07-2-030】 題王逸少帖

【解題】「書聖」とされた王羲之<sup>おうぎし</sup>の墨蹟を集めた冊子に記した詩。

### 【訳文】

<sup>ふうでん ちゆうきよく</sup>瘋癲の張旭、<sup>かいそほうし</sup>酔っぱらいの懷素法師、  
 二人の禿翁<sup>どくおう</sup>〔たぐさんの筆を使ってちびらせた翁〕は書工と称されたけれど、  
 世間の好みを追っただけのことで、  
 夢の中でも王羲之<sup>おうぎし</sup>や鐘繇<sup>しゅうよう</sup>のような本物の書家を見たこともなく、  
 やたらと飾り立てて、眼の利かない連中を欺いたのだった。  
 言ってみれば色街の娼<sup>あそびめ</sup>が青やら紅やらを顔に塗りたり、  
 妖しく歌ったり舞ったりして若者を眩惑させるようなものだ。  
<sup>しょうぜん</sup>蕭然として自ずと林のもとに立つ風情がある——  
 そのように讃えられた南朝<sup>しゅうけ</sup>の謝家の婦人がいたけれど、  
 王羲之<sup>しよ</sup>の書はまさしく気品があり、  
 草書となると、天の門より竜が躍り出る勢いがあり、  
 ピーチク轉る小鳥〔張旭や懷素法師〕ともは一掃されてしまうのだ。  
 私はその書法を継ぎたいと思うのだが、

早々にできることではないのでしばらく待ってもらいたい。

【補足】〔(1) この詩のオチは、王羲之おうぎしの墨蹟を見せに来た人が蘇軾に草書を所望したのを断ったということであろう。(2) 草書は無造作に書いているように見えて、実は最も難しいものであるというのが蘇軾の考え方であった。それを示すために、草書を得意とした唐代とうだいの有名な書家の張旭ちやうぎやくと懷素法師かいそほうしをさんざんにコケおろしている。(3) 鐘繇しょうようは曹操そうそうに仕えた武将であったが、書家としても超一流で、王羲之以前の第一の書家とされる〕

## ■ 【07-2-031】 書林逋詩後

【解題】林逋りんぼの詩の後に書いた詩。林逋は杭州の人で、蘇軾をより70年ほど早くに生まれ、西湖の孤山こざんに隱棲して清らかな詩を詠んだ。

### 【訳文】

「呉の人である儂は、

湖と山との間に生まれ、

湖の光を呼吸し、

山の緑を飲んで成長した。

わざわざ世間の外へと出て隠れ君子を気取るまでもなく、

ここでは、雇われ小僧も、行商のおばさんも、みんな氷玉ひようぎよくのように清らかなのだ」

このようにいった先生[林逋]こそは実に絶俗ぜつぞくの人である。

精神は清く、骨の髄まで冷涼で、俗っぽさは一切ない。

私は会ったことがないけれど、夢でなら見たことがある。

瞳とらびが明るくて燭のように光っていた。

遺された詩や字があちこちにあり、

西湖せいこをいくら歩いて見て回ってももう十分といふことはない。

詩は唐代とうだいの孟郊もうこうに似るとされるが、それほど寒々しくはなく、

書は宋初そうしよの李建中りけんちゆうに似るとされるが、それよりまろりとしている。

平生こうせつの高節は誰も継げるものではなく、

終わりに臨んでこの句をつぶやいたという。

茂陵異日求遺草、[後になって、この地に書き残したものを探しにきても]

猶喜初無封禪書。[もとより「封ぜんほうぜんの書」などはないのを喜ばしく思う]

おかしいのは、呉には物好きな人がいないことで、

先生の住まいの跡しどうに祠堂を作ってその傍に青い竹を植えたりなどしないのだ。

ならば、西湖すいせんおうの水仙王の廟に先生を合祀して、

冷たい水一杯、野菊の一本でも捧げたいものである。

【補足】[(1) 林逋りんぼの言葉として訳した中にある「傭兒販婦皆氷玉」ようじはんぷみなひょうぎよく]

の句は非常にすばらしい。世俗の一般庶民に非常に高い価値を置いたのである。

これは貴族および軍事中心の唐代以前の社会と、庶民および経済中心の宋代の社会との圧倒的な差異から生まれ出た言葉であるのだろう。(2) 後半に引かれている林逋の

臨終の詩にはやや詳しい説明が必要であろう。漢の時代かんに司馬相如し ばしやうじよという人がいて、

歴史上の著名人ではあるけれど蘇軾の評価があまり高くないことは作品番号 07-1-039

などですで見ているが、ここでもやはりひどくけなされている。司馬相如し ばしやうじよは、茂陵

の家で死にそうになったときに、妻に「私が死んだ後で、もしも朝廷から使者が来た

ならば、かねて書いておいた皇帝ほうぜんに封禪を勧める文章を出して示してくれ」といった。

「封禪」とは皇帝が泰山たいざんに登って地の神と天の神を祀る儀式で、それを行えるのは王朝の最盛期を現出した最高の指導者に限るとされていた。皇帝に封禪の儀を勧めるのは、皇帝へのこの上ない賛辞、もしくは詔いである。司馬相如は、封禪の書を遺すことが皇帝への忠誠心の証になると考えたのである。林逋が生きていた時代に、実際に真宗皇帝しんそうが封禪の儀を行い、側近連中が詔いの珍レースを繰り広げ、およそ奇怪な封禪フィーバーを演出した [→作品番号 04-1-061]。林逋はそういうことには背を向け、西湖畔せいこで静かな日々を送っていたのである。なお王鞏おうきょうの祖父の王旦おうたんは名宰相として真宗皇帝の治世を支えたのが、死に際して、封禪フィーバーを止められなかったのは一生の痛恨事であったと述懐している [詔い連中が巧みに王旦の口を封じ、王旦も皇帝の意向を慮って強く抵抗しなかったのである]。(3) 原詩には林逋の詩の引用の次に「更肯悲吟白頭曲」[更に肯てせんや『白頭の曲』を悲吟するを]の句が置かれているが、わずらわしいので訳さなかった。司馬相如は晩年、若い女性を家に迎え入れようとしたので、妻の卓文君たくぶんくんは悲しんで『白頭の曲』[白髪になるまで愛が続かなかったことを嘆く歌]を泣きながら歌ったという伝説がある。林逋は終生独身であったから、そのような不人情なことをするはずもなかったというのである。(4) 常州じょうに向かう蘇軾が見習うのは、断じて司馬相如 [郷里しよくの蜀の先人]ではなく、林逋 [呉ごの人]なのである。(5) この詩を書いた蘇軾の真蹟が現存している]

## ■ 【07-2-032】和仲伯達

【解題】かつて徐州じょでともに大洪水と格闘した仲伯達ちゆうはくたつ [→作品番号 05-4-063] が、旅の途中のどこかで訪ねきた。これは仲伯達の詩に和したもので、何がしたいのかさっぱりわからない。それでも仲伯達がわざわざきたのを尊重して、滅茶苦茶な「ずっぱ訳」ながらも敢えて訳文を掲げておく。

## 【訳文】

退隱するにしても、残念なのは、残された歳月が多くはないこと。

丹砂たんさの靈藥があるとかが、老いをどうすることもできない。

溪谷の花は、誰に見せることもなく、自ずから美しく染まり、

潭たんの水は、誰かを映すわけではなく、月の光がただ宿るのである。

己のことが世に知られないのを憂うことはない、

己の貴さを己が保てばよいのであって、

雷とともに竜に変じて天に昇るようなことは望みもしない。

## ■ 【07-2-033】 代呂申公上初即位論治道

【解題】蘇軾は3月の終わりにないし4月の初めに揚州ようしゅうに到着し、少しの間滞在した。

再び呂公著りょこうちよ [呂申公りよしんこう] に会い、政治について論じ合った。前回 [→作品番号 07-1-083] と異なり、もはや世間を憚ることなく大いに語ることができた。そして、新たに即位したばかりの皇帝に向かって政治の最も肝要なところ説く二つの文章を、呂公著のために代筆した。2番目の文章のごく一部だけを見ておこう。

## 【訳文】

……近年は水害や旱魃が頻発し、盜賊が横行し、民衆は土地を離れて流浪し、地方は不安な状況に陥っているにもかかわらず、人々は宰相の責任を問おうとせず、中央官庁の幹部は膨大な書類に一日中埋もれて力を尽し、書類の隅に字を書けただけで時間を費やしてしまっています。これは全て官僚を厳しく管理することにした弊害で、変えなければならないのであります。……

【補足】 [改革を速やかに実行するために、改革派は官僚の成績を厳しく評価する仕



組みを作った。蘇軾は、そのようなことをしたら、官僚は上の意向がどこにあるかを懸命に見定めて、それに沿うよう振る舞おうとし、さらには偽の結果報告さえするようになる、改革の当初から警告していた [→作品番号 03-2-009]。そして、実際に蝗の甚大な被害を隠して中央に伝えなかった悪例を見て、朝廷に報告している [→作品番号 05-1-018]。そうした官僚政治の弊害を直ちに改めなければならぬと、呂公著と蘇軾は考えたのである。なお呂公著はこの文章を朝廷に提出した後すぐに朝廷に呼び戻された]

### ■ 【07-2-034】 過文覚頭公房

【解題】揚州の寿寧寺を訪ね、文覚頭公の部屋でこの詩を詠んだ。

#### 【訳文】

色とりどりの玉を細かく砕いたかのような菖蒲を養いつつ、  
清らかな泉から一勺の水を酌んで石の盃に満たすと、  
明るい窓辺に机を置いて、経典を写し始める、  
一文字ずつごく丁寧に小さな文字を書いて行くのである。

【補足】[文覚頭公がどのような僧であったのか不詳である。丹念に仕事をする人であったのだろう]

■ 【07-2-035】 雲師無著自金陵来、見余広陵、且遺余支遁鷹馬図。将帰、以詩送之、且還其画

【解題】詩の題は、「雲師無著が金陵から来て広陵 [揚州] で私と会い、支遁 [晋の時代の高僧] が養うところの鷹と馬の図を贈ってくれた。雲師が帰るときにこの詩を

渡し、その画は返した」。

### 【訳文】

雲師<sup>うんし</sup>は將軍の家の三代目である。

「三世の將は必ず敗れる」との諺を嫌って家を棄て、  
それから十年、今や壮年に至った。

容貌が秀でているのは、さすがに富貴の家の生まれであることを隠せず、  
漆黒の瞳は、人間界を超えて天をも照らし出している。

去年<sup>きんりゅう</sup>、金陵<sup>ちゅうかんきょう</sup>の長干橋でお会いしたときには、

衆人の中から抜きん出て飛び立つ鳳<sup>おおとり</sup>の勢い<sup>おとど</sup>があったのだが、

今年<sup>きんねん</sup>、揚州<sup>やうしゅう</sup>の竹西寺<sup>ちくせいじ</sup>に来られたのを見ると、

病<sup>やまい</sup>によって痩せてもしたのか、

霜をかぶった松のようになっておられる。

朱を注いだような若々しい顔色は、

歳月に持って行かれ、

風の中の蒿<sup>よもぎ</sup>の火、あるいは湯の中の雪のようにして消えてしまうのだろうか。

さあ、問われるがよろしかろう、

貴僧<sup>きそう</sup>が帰依する黄面翁<sup>おうめんおう</sup> [釈迦<sup>しゃか</sup>]に、

いかりにして明珠<sup>めいしゆ</sup>のような知恵<sup>ちゑ</sup>をもって生滅<sup>しょうめつ</sup>の理<sup>ことわり</sup>を照らすのかと。

そして、学ぶ必要はないだろう、

支遁<sup>しとん</sup>やその友人<sup>おうちん</sup>の王羲之<sup>し</sup>が、

鷹<sup>ひじ</sup>を臂<sup>うで</sup>に乘せたり、馬<sup>うま</sup>を走らせたり、その神駿<sup>しんしゆん</sup>を愛したようなことは。

だから、この画は貴僧にお返しする。

土をこねて作った牛に木で刻んだ人に乗せたのを見ても、  
何かしら悟るには十分であるのだから。

【補足】〔詩中に詠まれている竹西寺ちくせいじは有名な寺で、前回の揚州ようしゅう滞在中にも訪れていた〔→作品番号 07-1-088〕〕

## ■ 【07-2-036】 与蘇子容

【解題】揚州ようしゅうにいる間に、潤州じゆんの蘇頌そしやう〔字は子容あざな しやう〕〔→作品番号 07-1-071〕に送った手紙。

### 【訳文】

広陵こうりやう〔揚州ようしゅう〕で甥御殿せうごてんから貴君のお手紙を受け取りました。近況について御丁寧にお尋ねくださり、まことに感じ入りました。兼ねて、貴君の御健勝であることを伺えて、喜びに堪えません。私は昆陵こんりやう〔常州〕に行こうとしていますが、まだ運河の水位が上がっていないようなので、家族は儀真ぎしん〔真州〕に留めて、小さな舟で独り行くことになるでしょう。すぐにはお目にかかりに参上できないかもしれません。……

【補足】〔(1) 手紙の取次ぎをした蘇頌そしやうの甥がどのような人物であるかはわかっていない。(2) 住まいがきちんと用意できるまでは、家族を真州しんしゅうに預けておこうとしている。真州には昨年二度にわたって滞在していて、そのようなことができる見通しもあったのだろう〕

## ■ 【07-2-037】 帰宜興、留題竹西寺三首

【解題】蘇軾そしは1カ月ほど揚州ようしゅうで過ごした後、5月1日に常州じやうしやう宜興ぎこう県に向けて出発した。その際に竹西寺ちくせいじに書き残した詩。

## 【訳文】

## 其の一

十年の間、

故郷に帰る夢を、西に向かう風に寄せていた。

ここを去って、真に田舎の翁になる。

ちくせいじ  
竹西寺の井戸の新鮮な水を汲むとしよう、

それは郷里の川の水と同じ味がする、

だからそれを携えてじょう常州に行きたいのだ。

## 其の二

どうじん し そ ジュース  
寺の道人は紫蘇の水を勧めてくれ、

け し スープ  
寺の童子は罌粟の湯を煮てくれる。

とう  
藤を編んだ寝台と枕をしばらく借りるとしよう。

竹の間から吹き来る涼しい風に、

知らん顔をして行ってしまふわけにはいかないから。

【補足】[旧暦の5月は夏の盛り、紫蘇のジュースは清涼飲料として供せられたのだらう。罌粟＝芥子はいまは栽培が禁止されているが、薬効があるとして用いられていた]

## 其の三

この身は、きつと、全て何事もないなかにあるのだらう。

しかも、今年は大豊作の年に当たりそうだ。

この寺に来てからは好い言葉ばかりを聞く。

野の花も啼く鳥も喜んでいるではないか。

【補足】 [(1) 陽羨ようせんに向かう蘇軾の心は軽い。行けば実り多い日々が確実に待っているのは、黄州こうの東の坡たかまりですすでに経験済みである。(2) この詩は心の軽やかさのままに言葉遣いもまた軽快である。原詩を掲げるのでもう一度味わってほしい。なお、この詩は後に若干の波紋を呼ぶことになる]

此生已覚都無事、[此この生せいは已すでに覚おぼえる都すべて事こと無なきと]

今歳仍逢大有年。[今歳ことしは仍すなわち逢あわん大有だいゆうの年としに]

山寺归来聞好語、[山やまの寺てらに帰かえり来きて好よい語かたりを聞きき]

野花啼鳥亦欣然。[野のの花はなも啼なく鳥とりも亦また欣きん然ぜんとしてる]

## ■ 【07-2-038】 到常州謝表

【解題】蘇軾ようは揚州ちようこうを発つと、長江しんに出して少すこし上流しんに遡さって真州そしやうに行いき、蘇頌そしやうに宛あてた手紙 [→作品番号 07-2-036] に記していた通りに家族をそこに留め、身軽みかろになつて常州じやうへと向むかった。途中ちゆうちゆうで仏印ぶついでん禪師ぜんじ了元りやうげん [→作品番号 07-2-011] と会あつたようである。5月22日、蘇軾は常州の州庁のある町まちに到着すると、宜興ぎこう県けん陽羨ようせんに居住するのを許してくれたことに感謝する文章を書いて朝廷に提出した。皇帝宛てと高太皇太后宛ての2種類があり、趣旨は同じであるので、二つを適宜合成して訳す。

### 【訳文】

臣わたし蘇軾が申し上げます。先に御恩を蒙まかつて汝州じょしゆう団練副使本州安置を授かり、ついで表を提出して常州に居住することを乞こいましたところ、聖旨を頂戴し、願ねがうところをお許ゆるさしました。かくて臣は今月二十二日に常州に到着し終わりました。

臣わたしの積たかもり積たかもった釐きざは磨せんき難でく、いまだ洗滌せんてきされておられません。罪はあまりに大き、臣はあまりに微小

で、永久に棄て去られ当然でありました。ここに陛下の御聖断を奉じ、御恩を感じて涙を止めることができません。

伏して念おもいますに、臣わたくしは凡材みだでありながら猥みだりに早くから朝廷にお仕えし、聖政の御世に逢いながら、独り愚かさを改めることなく、臣わたくしの犯しました罪は誅せられてしかるべきでありました。先帝陛下の至明によらなければ、今日生きながらえることはできなかったのであります。

廃棄されること六年、田野に我が身のあることも忘れて過あやまらして過あやしておりましたが、万里の彼方より生命を保ったまま脱することができたのは、あるいは太皇太后陛下の厚い徳の賜り物でありましょうか。太皇太后陛下の至仁は天に代わって春に生命を育み秋に実りを成すもので、虫や魚に至るまでその真心を感じているのであります。伏して皇帝陛下の仁孝聡明にお遇あひまいし、縲囚るいしゅうより稍ようやく出て、これよりは田を耕やし井戸を鑿うがって農民とともに老い、門を閉ざしひたすら自省するものであります。先帝陛下の銜恩に報むかいすることもできないままに身を沈め、残骸ちんがいを魑魅ちみに寄せるばかりでありまして、いずれ首は碎かれ、肝えくは抉えられ、死ぬところはどこであるのか知れないのであります。

## ■ 【07-2-039】 与孟震同遊常州僧舍三首

【**解題**】 上で見た 表ささげぶみ を書いて後は常州じょうの町に少し留とどまったようで、5月27日には孟震もうしん [字は亨之] とともに常州かんじじの感慈寺こうじを訪れている。孟震はかつて黄州の副知事をしていた人物で [→作品番号 06-4-070]、このときに偶然に再会を果たしたようである。

### 【訳文】

#### 其の一

このところますます思うのは、

この生せいは浮ういて流ながれるようなものたということ。

かくて三呉さんごの地ちで浪漫らうまんと遊あそんでいると、

たちまち東平の孟君子と会い、

夢の中でのように黄州での日々を語り合うのである。

【補足】[「三呉」とは常州、蘇州、湖州あたりをいう。「東平」とは鄆州のことで、孟震は鄆州の人である]

### 其の二

水を湛えた清らかな谿は五月も寒く、

小さな山ながらも、碧の岩が無数にそそり立っている。

並び立つ杉は三千本、

湧き立つ雲が山を抱え込んでいるかのようだ。

### 其の三

貴君はこれより去って帰耕するといふ。

笑って指さすのは、

一枚の葉よりも軽そうな一艘の舟。

ならば、神に靈雨を乞い、

水かさが増した流れに乗り、

貴君が行くのを見送るのである。

【補足】[(1) 何らかの事情で孟震もまた官職を離れて帰郷する途中だったようだ。

(2) 同じときに、感慈寺の報恩長老に贈った詩があるが、仏教用語を多用していて、意味が掴めないので割愛する。(3) このころ都では保守派が続々と呼び戻され始めていた。その動きが蘇軾に及ぶまでには少しばかり時間がかかる]

## ■ 【07-2-040】 常州太平寺法華院蒼萄亭醉題

【解題】 同じころに常州の太平寺の法華院の蒼萄亭で酔って作った詩。蒼萄は仏典に出てくる植物で、クチナシの一種であるという。

## 【訳文】

六弁の花が咲く蒼萄せんぼくの林、

九つの節のある菖蒲しょうぶが生える石、

そこにおられる禅僧と、

この東坡居士とうば こじと、

野狐のぎつねともが怖がるのはどちらであろうか。

東坡居士は鉄拄杖てつしゆじょうで、狐の偽にせの禅問答を一喝してしまうのだ。

【補足】 [(1)「狐の偽にせの禅問答」と訳した原文は「野狐禅やこぜん」。本来は、狐が有難い法話を聞いて人身に変じたことを「野狐禅」というのだが、ここでは、それから転じていかさまな問答を「野狐禅」といっているようだ。見かけは高遠で、実はわけのわからないことを並べているだけの言説を蘇軾が嫌ったことは前に見ている [→作品番号 06-1-092]。その一方で、蘇軾は意味のよくわからない禅問答のような詩をしばしば作っている。蘇軾に問えば、自身の詩は深い思索があつてのことだというのだろう。②鉄拄杖てつちゆうじょうは禅僧が行脚修行のときに使う鉄の杖で、それを使って狐ども [まやかしの禅僧] を驚かせてやると蘇軾は息巻いてみせたのである。]

## ■ 【07-2-041】 与滕達道

【解題】 蘇軾は5月末ごろに宜興ぎこう県陽羨ようせんに到着し、そこでの新たな暮らしが始まった。そのころに湖州知事の滕元発とうげんはつ [字は達道あざな たつどう] [→作品番号 07-1-069] に宛てた手



紙。

【訳文】

賈収君が来られて、貴君からのお手紙を受け取りました。賈収君の最近の御様子も知れ、感じるところはなほ大きなものがあります。私は家族を真州に留め、常州には独りで来ました。貴君に会いたいと強く思いつつも、運河がまだ通じていません。以前からのお約束ですから、きっと参ります。ただ、家には壮年の男子がいないので、住居を定めるためにはすぐに帰らないとなります。どうぞそのあたりのことをお察してください。……三十壺も贈ってくださり、愚妻のもとに渡そうと思っています。もろもろのことは賈収君からお聞きください。……

【補足】 [湖州に住む自由人の賈収 [号は耘老] [→作品番号 07-1-080] が滕元発と蘇軾の間を行き来したのである]

■ 【07-2-042】 墨花、并叙

【解説】 宜興県陽羨での新たな暮らしが始まった。黄州に行ったときには、これからいかなることになるのか大きな不安があった。今回は作品番号 07-2-037 で見たように、精神的にゆとりがあった。退居は自ら望んだことであつたし、どこに行ってもすぐに豊かな人間関係を新たに築ける自信も十分に具わっていた。黄州で、士大夫仲間に限らず社会の様々な階層の人々にも交際範囲を広げてゆくありさまを見た通りのことが陽羨でもすぐに起こった。この詩は、墨で花を画くのを得意とする尹白という人に贈った詩。短い序文がある。

【訳文】

叙

墨で山水、竹石、人物を画く者は世に多いが、花を画く者はいない。汴の人の尹白はそれが上手にできる。それで一首の詩を賦した。

【補足】[先に墨だけで花木を描いた徐熙の名を挙げていた [→作品番号 07-2-021]。そういう者はいなかったかのようにここで書いているのは、尹白の独自性を強調するためであろう]

造物者とは何も造らずにいた。

忽然と何かを造り出すや、

いかなるものもたやすく造ってしまうのだった。

尹白の墨は、

ほんのり花の芯を画き出すや、

線の端々から春の気配が生じ、

形はまた縹緲としているのに、

扶疏とした花木のありさまがすでにそこに完全に具わっている。

蓮の花は風を受けてことごとく傾き、

杏の花は雨に打たれて半分が碎かれ落ちる。

ここに、頭のおかしな東坡居士がやってきて、

真っ黒な牡丹を画いて「乱いと求めた。

その画と合わせて、

漢代の張衡の作った『帰田賦』を書いて、

「雪堂」に帰って掲げようと思うのである。

【補足】[(1) この詩の終わりの部分は、いわゆる楽屋オチの類である。蘇軾が黄州の東の坡に雪堂を建てたことは作品番号 06-3-016 などで見ている。雪堂には雪の画

を飾って白づくめにした。この詩でいう「雪堂」は陽羨ようせんでの新たな住居を指すのだらう。そちらは、黒々と書いた文字と黒い牡丹で黒づくめにしようと洒落たのである。

(2) 張衡の『帰田賦』は、文字通り故郷の農園に帰ることを歌った賦である。その中に「仲春令月、時和氣清」の句があり、令和の元号の出典とされる『万葉集』の当該の箇所と関係するのではないかと一時注目された]

## ■ 【07-2-043】 送竹几与謝秀才

【**解題**】謝秀才しゃしゅうさいという人に、竹几ちくき [竹夫人、竹で編んだ抱き枕] を贈り、それに添えた詩。時期は6月の暑い盛りである。

### 【訳文】

日常の暮らしにやたらと立派な物があるのは、  
人間の本性を乱すことになる。

老いてこの身一つになって田に帰って来た私が、  
留め置くのは、

常に同行する一本の杖だけ。

貴君ちくきにこの竹几を贈ろう。

秋になると、扇とともに不要となる物だが、

また次の夏にはなくてはならない。

竹夫人たけふじんの名はあっても、夜ごとえんに艶を競う煩わしさはない。

笑ってしまうのは唐代とうだいの蘆堂ろどうで、

老いてのちに家において口をきく相手といったら蛙しかいないと、

珍妙な句を吐いたものだ。

何も語らない竹几こそが貴君にはふさわしからう。

【補足】[この詩からすると、謝秀才<sup>しゃしゅうさい</sup>は科挙をあきらめ、もしかしたら独身のまま、余生を静かに村里で送ろうとしていたのだろう]

## ■【07-2-044】贈章黙

【解題】章黙<sup>しょうもく</sup>という貧乏な僧に贈った詩。序文がある。

### 【訳文】

叙

章黙居士<sup>しょうもくこじ</sup>の字は志明<sup>あがな しめい</sup>である。

公侯<sup>こうこう</sup>の家[かつて官職に就くような者を出した家筋]に生まれ、才高く、爽やかな性格である。家を棄てて道<sup>みち</sup>[仏教]を求め、妻はなく、世間との煩わしい繋がりは無い。父母と兄が亡くなり、貧乏のために葬儀<sup>ひたすら</sup>を行うことができず、眷眷に世間にすかりつき、人に援助を求めないわけにはいけなくなった。私はその志を深く哀れみ、わずかに助けをくれた。

居士の言葉を取って詩を作り、その振る舞いに対して贈ることにした。この詩によって、居士を哀れむ者があることを願う。

【補足】[またしても、親の葬儀を営めずに苦しむ者を蘇軾は支援している。葬儀は一生の一大事であった。用意なく亡くなった場合には、仮の棺に亡骸を納めて一時的に寺などに預かってもらい、後に立派な棺や埋葬地を得てから正式な葬礼を行う。この序文にあるような「公侯の家」<sup>こうこう</sup>であるのなら、それにふさわしいだけのことはしたいし、手厚く葬ることが死後の世界での安らかさと直結するので、安直にはすませられない。葬儀の費用が用意できないで仮の棺のまま地上に置いていたのでは、死後の世界でいつまでも宙ぶらりんの状態で、子としてはとてつもなく不孝なのである]

しょうもくこじ

章黙居士はいまだに親を葬れずにいる。

章黙居士その人は、生きながらえてはいるもののひどく病弱である。

朝には村里で悲しく吟じて嘔び泣き、

夜には涙で寢床を腐らせている。

悲しみの余り、先の年には眼を患い、今年髪が真っ白になった。

身は歳月とともに老いゝに向かって逝き、

親を葬れずにいる恨みは天地が畢るまでも続く。

章黙居士が願っているのは、

どれほどの不毛の土地でもよいから田を得て、我が力で墓を築くこと。

章黙居士はいう――

「昔のある人は死ぬに際し、

『わしは「真」に帰るのであるから裸のまま葬ってほしい』といました。

昔のある人は死ぬに際し、

『わしの屍は焼いて灰にし、大地を棺としてほしい』といました。

ああ、私はそのどちらも忍び難くてできません。

都には大金持ちが大勢いて、

一度の賭けに百万両を擲つことだってしています。

でも、私は知っているのです、

そうした人たちは、義のためとなるとこればかりだって出そうとしないのです。

ですから、貧乏のお仲間に頼むしかないのです。

一粒の粟の施してもよいのです、

積みばいつかは丘となり山となるでしょう。

この思いを朝に遂げられましたなら、夕べに死んでも構いません。

私自身は誓って、『無生の理』[仏教の真理]を求め、  
『有為の跡』を踐む[眼前の物に惑わされる]ことはありません。

我が身は山に棄て、鳥が狼籍するのに任せるまでです」

【補足】[仏教徒の間では火葬も行われたが、国の法はそれを禁じていた。遺骸を損なってしまうと、死後の世界では、損なわれた状態の体を使わなければならないと考えられていて、まして焼いて灰にしてしまったなら、死後の魂は宿るところを失ってしまうのである]

## ■ 【07-2-045】次韻答賈耘老

【解題】以上の3篇の詩から、陽羨ようせんで新たな人々と親しみ始めた蘇軾そしつの姿を窺い知ることができる。しかし、残念ながらこれ以上に発展することなく、陽羨での日々はたちまち終わってしまった。蘇軾そしつが常州じょうに到着した頃にはすでに朝廷てんていにおいて、「本州安置不得簽書公事」[居住あんちの自由ふとくせんしよこうじがなく、公務こうむに携たづなわることができない]の禁を解き、登州とう知事に任じるとの決定けつていがなされていた。6月の終わりに、湖州こ知事の滕元發とうげんはつはそのことを知ると、再び賈耘かしゆうに陽羨ようせんに出向しゆいてもらって、祝いのメッセージを伝えた。これは急いでやってきた賈耘が詠んだ詩に次韻した作品。

### 【訳文】

五年の間、

黄州こうで一つの夢のなかにあった――

我が身を襲った饑寒、疾病……

それを貴君は憂うれいてくれた。

私が東<sup>ようせん</sup>[陽羨]に来たのは六月、

井戸には水がなく、

奔牛台<sup>ほんぎゅうだい</sup>の古い堤防を見ると、

その名はあっても奔る牛の姿はなく、日照りにぐったりしていた。

かねてから「管鮑<sup>かんぼう</sup>の交わり」ともいべき貴君と私であるからこそ、

この困窮のときに貴君は訪ね来てくれた。

貴君は、流れの滞った泥水を夜に渡ろうとして、

押し<sup>ひ</sup>したり挽いたりしながらようやくここに着いたのだった。

貴君はいう、

「酒の飲みすぎで、中風を患ってしまいました。

それでも、故郷で安楽に過ごしているだけでなく、

溝に臥すような困窮に陥った人々を救いたいとの思いくらいは、いまもあります。

老いと病のためにかつてのように楽しめずいたのですが、

今年になって、「臥竜<sup>がりゅう</sup>」といわれた諸葛孔明<sup>しよかつこうめい</sup>のような新たな知事<sup>どうげんはつ</sup> [滕元発<sup>こ</sup>]が湖州<sup>こ</sup>に来られまして、

その言葉は炎天<sup>ひょう</sup>に雹<sup>すぐすが</sup>が降るような清々しさがありません。

そのお方が九尺の蒼い髯を垂らし、

なんと私のちっぽけな水辺の家を訪ねてくださり、

貴君のことを知らせてくれたのです」

私はいう。

「友人たちが、顔を改めて次々に祝いに来てくださいます。

しかし、子供のように驚かされた私は、

また疑って信じることができずいます。

貴君のために酒を置きましょう。

飲んで歌おうではありませんか。

草の間にいる秋の虫だって歌うのですから。

憐れむべきは、

老いた馬は真に老いてしまったのです。

遠く地の果ての天山てんざんにまで駆けて、天下に功名を挙げるような気持ちは、  
さらさないのです」

【補足】[この詩には、蘇軾の複雑な心情が未整理のままに詠まれているようだ。次韻という作詩法が、他人の作った詩の韻の位置に縛られて、ともすると求心力の働かない散漫な詩になりがちなうえに、登州知事の辞令をどう受け止めたらいのか、蘇軾の心がまだ定まっていなかったために、このような詩になったのだろう。蘇軾はしばらく、あるいはずっと長く田園生活を送るつもりで陽羨ようせんに来た。黄州こうの東の坡たかまりでの日々と同じく、豊かな精神生活を享受できることが確実に約束されていた。しかも、江南こうなんの温和な風土を蘇軾はこよなく愛していた。州知事になるということは、完全な名誉回復であるのだが、復職すればその先には政争の場に再び立つであろうことが容易に予想できた。8歳のときに4人のスーパースターに憧れて以来の初心は、国のため民のために働くことであるのだから、登州に行く以外に進むべき道はないのは明らかであっても、田園生活を送り始めて直ちに中断させられたのは残念といえば残念なのだった。だから、辞令を信じたくない気持ちも確かにあったのだろう]

## ■ 【07-2-046】小飲公瑾舟中

【解説】鄧公瑾とうこうきんという人物と舟の中で飲みつつ詠んだという詩。鄧公瑾がどのような人物であるのかはよくわからない。



【訳文】

壁に塗られた青い泥が、  
夏の午後の赤い日ざしを受けて燃え上がるようななかを、  
舟に乗り、柳の影の中を走って貴君のところへと訪ねきた。  
私は東の坡たかざりで無限の眠りの中にあつたのを止めて、  
貴君の住む南の浦の無尽の風を賞味している。  
朝廷からの報せを見ながら迂叟うそう しぼこう[司馬光]について語り合い、  
滁山じょざんについて貴君が説くすいおう おうようしゅうのを聞きつつ醉翁すいおう おうようしゅう[歐陽脩]を想う。  
ここより澄んだ水辺は三万頃けいの広がり、  
私が還る空を明るい月が照らすであらう。

【補足】 [(1) この詩には蘇軾自身の注で、この日に、司馬光しぼこう ちん かしょうが門下省に入ったのを邸報〔官報〕で知ったと記している。朝廷が司馬光を呼び寄せたのは5月26日で、蘇軾とうを登州知事に任命することが決定されたのは5月6日である。(2) やはり蘇軾自身の注で、鄧公瑾とうこうきん じよは滁州の人であると記している。滁州おうようしゅうは歐陽脩が一時期流されていたところ〔→作品番号 06-3-073〕。醉翁すいおうは歐陽脩の号である。(3) 終わりに、明るい月に照らされるとあるのは、ついに政界への復帰が赦された蘇軾の心情を表すものであるうか]

■ 【07-2-047】 与王文玉

【解題】とう登州知事に任命されたことを聞いてからは、陽羨で落ち着くためにいろいろ手を付け始めていたのを止めて、遠く任地に赴くための準備をしなければならなくなり、陽羨と家族がいる真州しんとの間をあわただしく行き来した。これは池州知事の王琦ち  
〔字は文玉〕〔→作品番号 07-1-040〕に送った手紙。

## 【訳文】

去年、そちらに帰る人に手紙を託しましたが届きましたでしょうか。行き先が定まらぬままにあちこち行き来し、そちらに参ることができておりません。このごろはいかがお過ごでしょうか。私は 忝かたじけなくも我が身に過ぎた任務を拜命しました。もとより私の力の及ぶところではないですが、どうしたことなのでしょう。もはやお会いすることが叶わないと思つと、残念な気持ちが増してなりません。酷暑の折、お国ためにますます自重されますように。

## ■ 【07-2-048】 次韻許遵

【解題】陽羨ようせんと真州しんの間を行き来すると必ず潤州じゆんを通ることになる。折しも潤州知事の許遵きよじゆん [字は仲塗あぢな ちゆうと] [→作品番号 07-1-060 など] が官職を去って金陵きんりやうに帰る送別の宴に居合わせ、そこでこの詩を詠んだ。

## 【訳文】

潤州じゆんの蒜山さんざんの下の渡し場で、

この夕暮れに帰り行く船を見送る。

金陵きんりやうの朱雀橋しゅくわくきやうのたもとで、

旅姿の貴君が見られることになるのだろう。

ここでの送別の宴に、長い帳とばりを廻らし、

すでに大金を費やしてしまったらうから、

新鮮な魚を振る舞おうと多くの料理人を煩わすようなことはしないでよい。

向こうに着いてからは、

禪ちやうかんを問うために長干寺じに行ったり、

閑な時間りよくやどに緑野堂で酒を飲んで過ごしたりすることだろう。

そうした味いは、年若な連中に覚えさせるのはまだ早すぎる。

まして、北向きの窓辺で涼しい風に吹かれていると、

太古の人になったような楽しさがあるなどと、

行きずりの人に語ってはならないのだ。

【補足】〔(1) 詩の冒頭にさんざん蒜山の名が出ている。そこを退隱の地にしようとする一時期考えたことは作品番号 07-1-070 で見ている。(2) 詩の終わりの部分は、退隱の楽しさをうっかり若い連中に知らせてしまうと、真面目に働く者がいなくなってしまうということを恐れるのであって、そうした発想はこれまでも何度か見ている。「北向きの窓辺云々」は陶淵明とうえんめいの詩句を踏まえている。文明が発展する以前の遠い太古の時代には、人間が本来ある通りに生きていられたという思想がその背後にある。(3) 登州とうに行く前にすませておくべき最も大切なことは張方平ちやうほうへいに頼まれた『楞伽經』〔→作品番号 07-2-011〕を書き写すことだった。潤州の金山寺さんざんでらにしばし籠かごって書き上げ、了元りやうげん禅師ぜんじに託した]

## ■ 【07-2-049】 溪陰堂

【解題】真州しんに行った折に、溪陰堂けいいんどうに立ち寄ってこの詩を詠んだ。

### 【訳文】

秋の水が満ちてきた池に、二羽の鷺が下る。

緑えんじの槐きの高いところで、蝉が一声鳴く。

酒が醒めると、

門の外で日が傾いている。

川の向こうの十畝の田へと、長く影が落ちてゆくのを、  
臥したまま見渡す。

【補足】[溪陰堂で実際にこのようなゆったりとした時を果たして過ごせたのだろうか。この詩に描かれているような静かな風光のもとでの日々を陽羨で過ごせるものと、蘇軾は期待していたのだろうか]

## ■ 【07-2-050】跋蔡君謨書

【解題】もしかすると、蘇軾は真州からさらに長江を遡って金陵にも行ったのかもしれない。金陵は五代十国時代には南唐国の都であった。南唐国は長江沿いの豊かな地を版図におさめ、唐文化の伝統を受け継ぎ、金陵は杭州、成都と並んで文化の先進地であった。南唐国の最後の皇帝であった李煜は書や詞に優れた才能を発揮した風流人で、蘇軾は金陵で李煜の書を見る機会があったのだろう、この短文を蔡襄 [字は君謨] の書の後ろに記した。蘇軾が蔡襄の書を高く評価していることは作品番号06-2-013などで見ていて、ここでもその主張を繰り返している。

### 【訳文】

かつて私は蔡襄の書が本朝第一であると論じた。一家言ある者の多くはそうではないといい、ある者は蔡襄の書は弱いといった。これは特に書を知らない者の言い分である。外見は勁く険しいけれど、中身が何も無いのを真に弱いというべきである。世間の者は李煜の書は勁いとするのだが、その論で蔡襄の書を弱いというのであろう。

げんほう  
元豊八年七月四日。

【補足】[蘇軾は諸葛氏が制作する筆を礼賛していた [→作品番号 06-1-048]。諸葛氏の技術は、李煜とその父が文化芸術の愛好者で、その保護のもとで発展したのだった。

しかし、李煜は一国の指導者としては落第で、政治的に重要な局面に直面するごとに、もののみごとに全ての判断を誤り、民衆を苦しめ、国を滅ぼしてしまったのである]

## ■ 【07-2-051】 与滕達道

【解題】<sup>とう</sup>登州に向かつて<sup>こ</sup>出発する少し前に<sup>とうげんはつ</sup>湖州知事の<sup>あざな</sup>滕元発 <sup>たつどう</sup> [字は達道] [→作品番号 07-2-041] に送った手紙。

### 【訳文】

……七月中旬ないしは下旬を過ぎずに出発する予定です。人々は貴君が皇帝のもとに呼ばれるのを望んでいます。また聞こえてこないのはどうしたわけなのでしょう。お会いしてお別れを述べることができずにないので、寂しくそちらの方を見えています。……

【補足】<sup>ようせん</sup>陽羨で<sup>とうげんはつ</sup>落ち着いたなら滕元発を訪ねようとの計画はふいになってしまったのだった]

## ■ 【07-2-052】 蝶恋花

【解題】<sup>とう</sup>蘇軾が登州に向かつて出発したのは7月下旬であった。そのときの思いを託したのがこの詞。

### 【訳文】

雲水縈回溪上路。[雲と水が<sup>めぐ</sup>縈る<sup>たに</sup>溪の(ほとり)の道]

疊疊青山、[重なり合う青い山々]

環繞溪東注。[環り<sup>まわ</sup>繞<sup>めぐ</sup>って溪の水は東へと注ぎます]

月白沙汀翹宿鷺。[月の光に白く照らされる水際の沙で、鷺が羽を休めて眠ります]

更無一点塵来处。[ここには一点の塵さくることがないので]

溪叟相看私自語。[溪に住む老人が私を見てつぶやきます]

底事区区、[「どせして区せ区せと]

苦要為官去。[官職のために去って行くのかね]

尊酒不空田百畝。[百畝の田があれば酒樽をいっぱいにできるだろうに]

归来分得閑中趣。[閑中の趣おそひを分かち合えるのはこんど帰ってきたときでしょうか]

## ■ 【07-2-053】 贈杜介

【解題】蘇軾は常州から潤州に行き、杜介〔字は幾先〕〔→作品番号 07-1-088〕と出逢い、この詩を贈った。

### 【訳文】

叙

元豊八年七月二十五日、杜介は先に浙東〔杭州の南のあたりの地〕に行き、(揚州へと)帰ろうとしていた。私は金山において杜介と出会い、杜介が天台山の奇異なありさまを話してくれたので、この詩を贈った。

私はかつて夢の中で天台山に遊んだ――

空の彼方に、石の橋が小さく浮かび、

草の上の露に、秋の風が吹き寄せ、

山の翠の潤いが裊裊と香る、

応真〔真理に応じた僧〕が錫杖を飛ばして傍らを過り、

見る見る鳥のように絶壁の間の雲の上へと渡って行く、  
私は意を決して、これに従おうし、  
儻然たうぜんのうちに松こげの杪こげの先を超え、  
僧さんぜんの微かな言葉は珠玉のように燦然と輝き、  
まだ何かを説かないうちに、私は意こころに了解する——  
空から墮ちたように目が覚めると、  
窓にほんのり暁の白さがあった。  
諸々しゅうしゅうの生類は迷いの網あみに陥り、  
独り真理に達する者は昔から少ない。  
杜叟子とそうし [杜介とかい]はいかなる人であるのか、  
万物の外側うそに出て長く嘯うそき、  
妻子はなく、家はただ四方の壁があるばかり、  
杖を振るって軽やかに行くことを念おもい、  
ついに赤城山せきじょうざん [天台あそ山の一峰]に遊び、  
縹緲ひょうびょうと空を凌しのいで飛んで歩いたのだった。  
禅を問うて僧舎そうしやに帰ることを忘れ、  
時に飲食をつなくために下界げがいに降りた。  
杜叟子とそうしの志しを識しる者が誰一人いなくても、  
仏の眼は自ずと照らし出してくれる。  
貴君が実際に見たのを私が夢に見たのは、  
まさか魔まに誑たぶらかされたためではないだろう。  
ここに貴君とともに茶を煎れて御仏ごぶつに捧げ、  
これからは馬に乗ることもなく戸を閉ざし、

さんざん  
金山の内に籠るとしようか。

そして時に、天台山の仏頂岩へと飛び行き、

そうれんしょう  
双蓮沼へと馳せ下るのだ。

【補足】〔(1) 前の詞と合わせて蘇軾の本心がここに現れていると見てもよいのだろう。 (2) 蘇軾は杭州副知事だったときに天台山に登りたいとの思いがありながら果たすことができなかった [→作品番号 04-1-089]。今回も天台山から遠く離れた地に移ることになり、名残惜しさがあったのだろう〕

## ■ 【07-2-054】送穆越州

【解題】潤州に滞在する間に、蜀の地から越州〔杭州の南東〕へと転任する穆珣に出逢い、送別の詩を作った。

### 【訳文】

川を隔て、陸を隔て、貴君を仰ぎ見ること十五年、

いまようやくに会い、

羨ましく思うのは、

貴君が年を経た松柏のようにますます蔚然と盛んであること。

貴君は四朝〔仁宗、英宗、神宗、哲宗〕に仕え、氷霜を耐え抜いた長老、

このたびは蜀から越へと、両郡の風流水石の間を移り行くこととなった。

蜀の父老はいまなお貴君の善政を語り合い、

越の溪山にはすでに貴君を待ち望む声が鳴り響いている。

送別の盃の前にいるのはとも「蓬萊の太守」、

高楼から眺める雪や月をこれからもなおざりにしないのだ。



【補足】 [(1) 詩の終わり「蓬萊の太守」とあるのは、越州には蓬萊閣があり、登州にも蓬萊閣があることから、2人がともに海の彼方の蓬萊〔仙境の地〕の太守〔知事〕になると洒落たのである。(2) 穆珣は官界の先輩で、会って話をするのはこれが初めてであったようだ。潤州は長江と大運河の交点に位置する水上交通の要であったから、人の往来が多くてこうした出逢いを生んだのである。「小児の遷延」を繰り返していた蘇軾はこの間に少なくとも6回は潤州を訪れている]

## ■ 【07-2-055】 金山妙高台

【解題】 潤州に来ればやはり金山を訪れる。妙高台に登って、この詩を詠んだ。

### 【訳文】

私は飛ぶ車に乗り、  
東に赤松子〔伝説の仙人〕を訪ねたく思う。  
しかし、三万里の海を隔てた蓬萊山にはとても行けない。  
というわけで金山に渡るのがよかろうと、  
風に帆を上げたなら、  
半分開いただけでもう着いてしまう。  
金山には妙高台の高樓があり、  
雲の峰が一つ抜き出た上に立っている。  
仰ぎ見て最初は路がないようであるのだが、  
信じられないことに、  
峰の上は砥石のように平らである。  
妙高台には老いた僧がいて、

あお  
碧い眼から窓や机を照らす光が発せられ、

ぎよく さらさら  
玉を削って骨となし、凜凜と霜を齒としている。

ほこさき  
語を発する鋒先は触れるべからざる鋭さがあり、

ひ  
水をひっくり返すような勢いで、千の偈を自在に吐き出す。

とくうん  
徳雲[法を説いた古代インドの僧]に尋ねるまでもなく、

この僧に教わればよいのである。

ちやうせい  
長生[仙道の不老長生]を学ぶよりも、

ちやうふ し ふしょうふめつ  
長不死[仏教の不生不滅]こそを学ぶべきなのである。

【補足】 [(1) 上の詩に続いて蓬萊山が出てくるのは、東方の大海に浮かぶ神仙世界である蓬萊島に最も近いのが登州のあたりだと考えられていたからだ。(2) 仙人になる方法を問うよりも、仏教を教わるべきだとする妙高台の僧とは仏印禪師了元であるらう]

## ■ 【07-2-056】 記焦山長老答問

【解題】 じゆん ちんこう きんざん しょうざん ほくこざん ちんこうさんざん  
潤州 [鎮江] には金山、焦山、北固山の鎮江三山があり、かつて蘇軾がその三山に登ったことは作品番号 03-4-038 以下で見ている。とう 登州に向かうにあたって、再び三山を巡ったようだ。

### 【訳文】

とうぼ こじ うわざい しやういんざん うわざい  
東坡居士は酔って背にひとえの衫をはおり、招隠山に遊んだ。酔いから醒めて、衫をひっかけて寺の大衆に問うた。

「たまたまた来た酔っぱらいはどこに行くのか」

誰も答える者はいなかった。

翌日、東坡居士は焦山しょうざんに向かって、同じ問を發した。すると、焦山は両手を交差させて挨拶してくれた。

【補足】[潤州じゆんに少しく滞在していたのは、恐らく真州しんに留めておいた家族と合流するためだったのだろう]

## ■【07-2-057】楊康功有石、状如醉道士、為賦此詩

【解題】蘇軾じゆんは潤州を發って長江を横切り、大運河を北上して揚州ように至った。その途中の瓜洲か しゆうで楊繪ようかい [→作品番号 06-5-032] に宛てて手紙を記している。楊繪から使者が来て、登州知事に任命されたことを祝う手紙を受け取ったことへの返事である。揚州は前年の秋から南北に行き来してこれが3回目。先に揚州で会った呂公著りよこうちよ [→作品番号 07-2-033] は朝廷の高官としてすでに都に復歸し、代わって揚州知事として赴任したのが楊景略ようけいりやく あざな こうこう [字は康功] であった。その楊景略の所蔵する石が、酔っぱらい道士どうの形をしているのを見てこの詩を詠んだ。

### 【訳文】

この界限の山にはもとはたくさんの猿がいた。

なかでも青い猿は、黠ずるがしこくて寿ながいきで、

頭のおかしな道士どうしに変化し、

山や谷を恣ほしいままに駆け巡り、

誤かって華陽洞かうやうどう[神仙のすまい]に入り込み、

大茅君たいぼうくんが造った神聖な酒をこっそり飲んでしまった。

大茅君はその猿を巖いわおに閉じ込め、

岩かせを械とし、松の根を足に絡ませ、藤の蔓で肘を縛り、

目に苔いばらを塗り付け、口を棘で塞いだ。

かくて三年で石になり、玉ぎよくに匹敵するほどの堅さとなり、  
 もはや雲に叫ぶ声もなく、杯を舞わした手は空しく形だけが残ったのだった。

樵まこりはこれを見つけて笑い、

抱き帰って売り払い、米と酒に換えた。

楊知事ようは、俗な連中は友人とはなりえない方で、

かつて高麗国こうらいこくに行ったときに、

海辺こやせんで姑射仙人こやせんに会い、互いに笑ってわずかにうなずきあった。

それから、「海中の仙」と呼ばれるようになった。

どうしてそのときに姑射仙人を船に載せて帰らずに、

いまこの醜い石を手元に置いているのだろうか。

楊知事は、この石の奇異なることを詩に詠むよう私に求め、

この詳しい本末を聞かせてくれた。

私がここに詠んだのは全く妄言ではない、

なぜなら、亡是叟ぼうしそという立派な御仁ごじんに確かめたのだから。

【補足】[(1) 最後の「亡是叟」は読み下せば「是亡き叟」で、つまり「ほらふき男爵」というようなもの。この詩は嘘八白を並べたものだと白状したのである。(2) この詩に詠まれている猿は『西遊記』の孫悟空を彷彿とさせるものがある。岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳『蘇東坡詩集』(1927年)は、玄奘法師げんじょうほうしの『大唐西域記』に基づく講談本『大唐三蔵取経詩話』[南宋時代の本で日本だけに残った]の前身となるようなものを蘇軾が読んでいたのではないかと推測している。(3) なお、酔っぱらい道士どうしの画に付した跋文を作品番号02-4-022で見ている]

## ■ 【07-2-058】 記石塔長老答問

【**解題**】揚州ようの石塔寺せきとうじでのちょっとした出来事を記した短文。

【**訳文**】

石塔せきとうが東坡居士とうぼこじと別れた。

私はいった。

「慌ただく過ぎ去るために、石塔を一見できないのを残念に思います」

塔が起立していった。

「では、これはかわら博の塔なのですか」

私はいった。

「いえ、縫い目がありますな」

塔はいった。

「もしも縫い目がなければ、どうやって世間のけん虻やい蟻を容れることができましょうか」

私はその言葉ことばに肯いた。

【**補足**】 [この文章はこのままでは意味が取りにくい。いろいろと補って冗漫に訳すと次のようになるだろうか]

石塔せきとう [実は石塔寺の長老ちやうらうのこと]と東坡居士とうぼこじ [私] が別れることになった。

私はいった。

「慌ただく過ぎ去るために、石塔 [石塔寺の名の由来となった石塔のこと] を一見できないのを残念に  
思います」

塔 [石塔寺の長老] が起立していった。

「では、愚僧を石の塔ではなく、かわら博の塔とても御覧になるのですか」

私はいった。

「いやいや、貴僧は衣を纏い、縫い目がありますな[石の塔でも<sup>かわら</sup>博の塔でもない]

塔[石塔寺の長老]はいった。

「もしも縫い目[のような隙間]がなければ、どうやって世間の<sup>けん</sup>虻や蟻[救济を待つ衆生]を受け容れることができましょか」

私はその言葉に肯いた。

【補足】[石塔寺の長老とは、作品番号07-1-090で見た禅僧の<sup>むたく たくこう</sup>無択[択公]で、蘇軾が南北を行き来している間に、竹西寺から石塔寺に移っていたのである。そのことが次の詩の題に示されている]

■【07-2-059】余将赴文登、過広陵、而択老移住石塔、相送竹西亭下、留詩為別

【解題】この詩の題は、「私は<sup>ぶんとう</sup>文登県[<sup>とう</sup>登州]に赴こうとして<sup>こうりょう</sup>広陵[<sup>よう</sup>揚州]を<sup>よぎ</sup>過った。<sup>たくちやうろう</sup>択長老は<sup>せきとうじ</sup>石塔寺に移っていて、<sup>ちやくせいじ</sup>竹西寺まで同行してくれ、この別れの詩を書き留めた」。この詩は上の問答の翌日の作であろう。

### 【訳文】

<sup>ちやくせいじ</sup>竹西寺はすばらしい僧を失い、

<sup>せきとうじ</sup>石塔寺は<sup>えしやう</sup>恵照師[<sup>とうしよ</sup>唐初の名僧で<sup>たくちやうろう</sup>択長老になぞらえる]に出逢ったのだった。

私も変化する身、

<sup>とうかい</sup>東海<sup>の</sup>ほどりへと行く。

我が姓名が世の人に知られないようにできないものだろうか。

【補足】[(1)「<sup>とうかい</sup>東海<sup>の</sup>ほどり」とあるのは<sup>とう</sup>登州のこと。登州は<sup>さんとう</sup>山東半島の北東の端、<sup>ぼっかいわん</sup>渤海湾に面する<sup>かい</sup>海辺に位置する。中国大陸の人々にとって海洋は東にあるので、「東海」と総称する。(2) 択長老は無択とも<sup>かいおしょう</sup>戒和尚ともいい、<sup>せきとうじ</sup>石塔寺に移ったので<sup>せきとう</sup>石塔

ちょうろう

長老ともいうようになり、元の姓名で呼ばれることはない。蘇軾もそのような変化を望むということがこの詩の終わりに歌われているのだろう]

## ■ 【07-2-060】 送楊傑、并叙

【**解題**】楊傑 [字は次公] という朝廷に仕える人に出逢って詠んだ詩。序文が付いている。

### 【訳文】

叙

楊傑は無為子と号し、かつて勅使として泰山の絶頂に登り、鶏が一鳴するとともに日が昇り出るのを見た。また、かつて朝廷の御用で華山に行き、重九の日に蓮花峰の上で一杯飲んだ。いまは皇帝の詔を奉じて、高麗国の僧、義天とともに銭塘[杭州]に行くところである。いずれも朝廷の御用で、方外[世俗の外]の楽しみをなすのであって、善哉未曾有のことである。詩を作って楊傑に送る。

夜の間、泰山の天門から登り、

昇り来る日を出迎えた。

紅い波が万里に広がり、天の半分が赤く染まった。

山から帰り来た後は、

平地において見る日の光は弾丸が跳ぶおごとく、

あたかも黄金で鑄た橋の実のようになった。

華山の峰の絶頂で重九の宴を催し、

天からの風が艶やかな菊の花の酒を吹き、

崩れるような絶壁の上で、

大声で歌い、手を揮って酔舞し、崖を一気に駆け下った。

そのとき神は八極[大宇宙]に遊び、現世との万縁は全て虚しく消え、

下に視るのは、汚れた溝でぶんぶん飛ぶ蚊の群れであった。

大千世界を一息に八十回往復し、

笑って東の海に渡り、鯨の背にまたがったのだった。

ここに高麗の王子[義天]が西に仏法を求めに来た。

それは古の弥天のような高僧で、

貴君は古の鑿齒のような学者であるから、まさに好敵手である。

高僧には仏難がつきもの、

長江を過ぎるときに強風が吹き荒れ、

山のごとき浪に襲われることもなくはないであろう。

船頭に頼むのは、

どうかこの両人を大切に看てくれたまえ。

【補足】[朝鮮半島の高麗国のことが詠まれている。僧の義天は高麗王の子で、釈迦のように王子の位を棄てて仏法を求め、遼[契丹]や日本にも使者を送って仏典を集め、国際的に名の知れた人物であった]

## ■【07-2-061】次韻孫莘老斗野亭寄子由、在邵伯堰

【訳文】揚州を発って、邵伯堰にあった孫覚[字は莘老]の斗野亭を訪れた。孫覚

[→作品番号 07-2-002]はこのとき都にいて不在で、留守番役の老僧から孫覚の詩を

見せられ、それに次韻して弟の蘇轍に送った。邵伯堰はかつて晋の時代に謝安が築いた堤がもとになっていた。それで詩の冒頭に「謝公の渚」とある。謝安は蘇軾の憧れの人物として時折登場する。弟の蘇轍は績溪県の知事として2月に着任していたが、8



月の初めに都へ召喚する辞令が下り、そのことがこの詩の終わりに詠み込まれている。

【訳文】

帆を降ろしたのは謝公の渚、  
東西に広がる平らな川面に、日脚が落ち下る。  
ぽつんとたつ斗野亭で少し憩うと、  
暮れなずむ景色はさらに清らかさを増す。  
僕がそのまま座り続けていると、  
斗宿、牛宿の星々が南の麓の上に現れ出る。  
ここを守る老僧は、ひとたび笑うと、  
昔からの知り合いであるかのように感じられ、  
すでに意が傾くのを感じる。  
孫覚殿の新しい詩を見せていただき、  
かつての日々が前世のことであったかように疑われる。  
思えば僕は今生の世において七回ここを往来し、  
老いを海のほとりの町で送ろうとしている。  
人に逢うと、このような自分であることを思わず晒してしまい、  
魚を得ても、我が身に重ねて、煮て食べるのは忍び難く思えてしまう。  
聞くところでは、  
績溪の老人はまた都に行くとか。  
僕は秋の菊のような小さなこの詩をここに置いて行くから、  
霜の中でもきつと明らかに君は見出してくれるであろう。  
僕の詩に感じるものがあつたなら、

春さかえの榮を呼び起こす長篇の詩を詠んでくれたまえ。

【補足】〔「績溪せきけいの老人」とは弟のこと。弟も同じ経路で都に行くので、ここに詩を置いておくのだ〕

## ■ 【07-2-062】 贈葛葦

【解題】葛葦かっせいという人に贈った詩。次の詩の王寂おうせきとともに、どこのどのような人物であるのかは不明で、揚州ようから登州とうへの旅の途中でたまさか知り合ったのだろう。

### 【訳文】

竹の椽たえぎも茅の屋根も半ば碎け半ば傾いている。

貴君は蜂の巢ちゅうほどのほかない住居に暮らし、

川波によってさらわれてしまうのではなからうかと、

私は恐れるあまり、

何なら貴君を船尾に載せて連れて行こうかとさえ思う。

貴君がさっと作ってくれる詩は唐の孟郊とう もうこうのように渋い味わいで、

さらさらと書いてくれる字は晋の張伯英しん ちやうはくえいの草書を見るかのようだ。

百年の人生はいかにして使い尽くすのがよいのか。

貴君きこうは帰耕しそなった私を憐れむのである。

【補足】〔「帰耕きこうしそなった」とは陽羨ようせんでの暮らしがたちまち終わってしまったことをいうのだろう〕

## ■ 【07-2-063】 贈王寂

【解題】王寂おうせきという人に贈った詩。

【訳文】

貴君としは別れるのは嘆くまでもない。

俯仰する間にまた帰ってくるのだから、

鬢の毛が白くなることもないだろう。

覚えておこう、

江南の煙る雨の中、

青い山の途切れたところに貴君の家があることを。

【補足】 [ここでいう「江南」は広く淮河以南の南中国をいうのだろう]

■ 【07-2-064】 迨作淮口遇見詩、戯用其韻

【解題】 淮河の流れへと船が乗り出したところで、次男の蘇迨が『風に遇う』という題の詩を作り、それに次韻した。我が子の詩を手放しで褒めているので、詩の題に「戯れ」と記している。蘇迨はこのとき16歳であった。

【訳文】

私の詩は病気になった馬のようなもの、

枯れかけた草に向かって、悲しげに嘶いている。

我が子は真に駿馬、

噴と息を一つ吐いただけで、群がる馬どもは倒れてしまう。

とはいえ、

いまは気を養うとき、

やたらと吟じたりなったりしない方がよいだろう。

世に名が知れるのが早すぎるのははなはだよろしくない。

わい が  
淮河を波立たせる風は、

君の筆力を借りて、ますます勢いを増し、

雲を残らず吹き払った。

とうえんめい  
陶淵明は、息子がいつまでたっても梨や棗を求めて走りまわっていると嘆いたけれど、

我が子とどっちがましたかわかったものではない。

それでも君が強引にも韻を踏んでしまう技を見ると、

もうこう かとう  
私にはどうも孟郊や賈島より勝っているように思ってしまうのだ……。

【補足】もうこう かとう かんゆ [孟郊、賈島は韓愈の高弟である]

## ■ 【07-2-065】 書遺蔡允元

【解題】風のために上の詩と同じ場所に留まっている間に蔡允元さいいんげんという人の訪問を受け、この短文を書いて与えた。蔡允元は古くからの友人とあるが、他にその名は見えず、いかなる人であるか不明であるという。

### 【訳文】

私は閑居すること六年、また出仕することとなった。六月に朝廷の命を受け、いま初めて淮河わい がのほとりに至った。しかし、大風のために、三日の間、河を渡れずにいる。

古い友人さいいんげんの蔡允元が来て、船中で別れた。蔡允元は眷眷としてなかなか帰ろうとしない。私も遅回ぐずぐずと出発しようとする。意では風がずっと続くことを願っているのだ。一座の人々が口を揃えて、東坡居士とうぼ こが官の仕事に赴く様子は、小児が遷延のろのろと勉強場に行こうとしないのにそっくりだという。

その語が実にぴったりであるのを愛し、ここに書き記し、蔡允元に与える。後に帰休したときにこれを見て笑うのもよいたろう。

【補足】[ここにある「殆似小兒遷延避学」[小兒の遷延として学を避けるに殆ど似る]とは実にうまいことをいったものである。前年の春に黄州を発つてからの蘇軾の足取りはまさにその通りの印象を与える]

## ■【07-2-066】次韻送徐大正

【解題】いつまでも淮河の入り口に留まっているわけにもいかず、船は北上して楚州に至り、そこで徐大正[→作品番号 07-1-087]と別れてこの詩を詠んだ。この詩には蘇軾自身の注があって、「徐大正とはかねてから長江と淮河の間の地で隣同士に住もうと約束していた。登州に赴くに当たり、同じ舟で山陽[楚州]に至った。徐大正が送別の詩を作り、私は詩を残した」とある。徐大正は、黄州知事の任にあった徐大受の弟で、先に揚州のあたりで会って一度別れているのだが、いつどこで再会したのかは不明である。

### 【訳文】

別れの蓋が燈火に照らされている。

そこにたまった蠟の形状から占うと、遠からず私は帰ってくるはずだ。

去年、一緒に長江を渡ったときに、升のように大きな萍の実を食べた。

今年、それぞれが海辺の地に向かうときに、瓜のように大きな棗の実を食べる。

情ある明月は貴君のためにここに来てくれている。

値なき青山[無上の価値のある自然]は私のために遥かまで続いている。

千首の新しい詩と一本の竹の釣竿がここにある。

いつかとも川に槎を浮かべよとの約束は空しいものではないはずだ。

【補足】[去年に長江を渡ったとあるのは、蘇軾は汝州に向かうために、徐大正は兄

の棺を郷里に運ぶために黄州を離れたことをいうのだろう。今年は海辺の地に向かうとあるのは、蘇軾は登州に行くことをいい、徐大正は恐らく郷里に行くことをいうのだろう。徐大正がまだ兄の葬儀を済ますことなくなおこのあたりに留まっていたとは考えにくいので、何かの用事で郷里から出てきていたのだろうか]

## ■ 【07-2-067】 次韻徐積

【**解説**】楚州で徐積という人に会い、その人の詩に次韻した。徐積については次のような記録があるという。「徐積は山陽の人で、幼いときに父を喪い、母に仕えて至って孝行で、四十歳になっても結婚しなかった。村人たちの支援で科挙を受け、母とともに上京して合格した。ところが、官職に就く前に母が亡くなり、郷里に帰って喪に服し、そのまま官に仕えなかった。お上は徐積の振る舞いを見て、楚州の学校の教授にした。しばらく務めた後で郷里に帰り、初めて妻を娶った。その後、天寿を全うして終わった」。蘇軾が楚州に着いたのは徐積が教授となった直後であったようだ。

### 【訳文】

子路[孔子の高弟で親孝行で知られた]のような貴君を、

鶏を絞めて招くようなことはしないで、

飯を包んで自ら訪ねに行った。

貴君は、中年に至って、庭に槐を植えた学び舎に隠れているけれど、

本来なら朝廷で立派な文章を書くお方である。

私は、海のとりの地に向かって東へと去り行く身、

風雨が引き留めてくれたお陰で貴君に会うことができた。

峨眉山が眼の前にあるのならば、

敢えて故郷に帰るまでもないのだ。

【補足】[恐らく徐積<sup>じよせき</sup>のもと<sup>のもと</sup>の詩に、蘇軾<sup>そ</sup>の故郷<sup>がびさん</sup>の峨眉山<sup>がびさん</sup>は遙か遠くだといったことが詠まれていて、最後の部分はそれに応えたものであるのだろう。蘇軾はかつて密州<sup>みつ</sup>知事であったときに、障日峰<sup>しょうじつほう</sup>という山に、形状が峨眉山に似ることから「小峨眉<sup>しょうがび</sup>」と名付けていた [→作品番号 05-1-033]。楚州<sup>そ</sup>から登州<sup>とう</sup>に至る途中で密州を通り、「小峨眉」を目の前に見ることになるので、そこが我が故郷である、つまり地上のどこもが故郷なのだといったのである]

### ■ 【07-2-068】 過泗上喜見張嘉父

【解題】船は泗上<sup>しじょう</sup>に至り、張大享<sup>ちやうだいきやう</sup> [字は嘉父<sup>あざな かふ</sup>] に会った。張大享はこの年の科挙に合格したばかりの人。

#### 【訳文】

其の一

眉の間に氷雪のような気配が宿り、

淮河<sup>わいが</sup>のあたりを照らし出す。

筆を下せば、波瀾を引き起こす勢いがあり、

いずれは老成し、平穩になってゆくことだろう。

かくて貴君の持つものを全うする妙を得るならば、

いますでにかやかやと評判が高いことなど気に掛けるまでもあるまい。

其の二

山々は人を娯ませ、

人の心は自ずと山へと還る。

明るい窓辺にくつろぐなら、

心は秋とともに穏やかになる。

もはや名利などといものは到らない、

さかずき  
觴を取って山とともに飲むのである。

## ■ 【07-2-069】 蝶恋花

【解題】蘇軾は東シナ海に近い海州かいに至り、この詞を詠んだ。「漣水れんすい [海州の南の地] を通り趙昶ちやうちやうに贈った」との副題がある。趙昶は蘇軾が密州知事であったときからの知り合いで [→作品番号 05-1-069]、藤州知事 [→作品番号 06-1-106] を経て、このときは海州にいた。

### 【訳文】

自古漣漪佳絶地。れんすい [漣水はその名の通り昔から漣漪さざなみがごくすばらしいところ]

繞郭荷花、めぐはす [町を繞る荷の花は]

欲把吳興比。ごこう [吳興に比べることができましよう]

倦客塵埃何処洗、じんあい [旅に倦んだ人はどこで塵埃を洗ったらよいのでしやう]

真君堂下寒泉水。しんくんだう ちやうちやう [真君堂 [趙昶の住まい] の下の冷たい泉の水でしやう]

左海門前酤酒市。いさ [海辺の町の門前の酒を売る市]

夜半潮来、[夜半に潮が満ちて]

月下孤舟起。[月の下で一艘の舟が漕ぎ出します]

傾蓋相逢拚一醉、[招き合ってわずかに酔うと]



双鳧飛去人千里。[二羽の鳧けりに乗って飛び去るのです]

【補足】[(1) 呉興ごこう こうなんは江南の町で、かつて湖州知事であったときにその美しい風光を愛でていた [→作品番号 05-5-051]。 (2) 「鳧けりに乗って飛び去る」とは仙人の姿で、前にもその故事を見ている [→作品番号 01-2-037 など]。前半に「真君堂しんくんどう」[真君は真に道みちに達した人] の名があることから、趙昶ちょうちょうは道教に通じていたのだろう。 (3) 原詞の後半の冒頭に「左海さかい」とあるのは、天子が南向きに坐したときに、大海は左側にくるからだ]

■ 【07-2-070】元豊七年有詔京東、淮南築高麗亭館、密、海二州、騷然有逃亡者。明年、軾過之、嘆其壯麗、留一絶云

【解題】先に楊傑ようけつが高麗国こうらいこくの僧そうを送って杭州こうに向かうのに出会っているが [→作品番号 07-2-060]、その背景には、宋そうが北方りょうこくの遼国きつたん [契丹] の動きを牽制しようと、朝鮮半島にある高麗国との友好を深めようとしていたことがある。陸路を使うと、宋と高麗の間には遼が挟まるが、海路を使えば朝鮮半島は向かい側である。そこで、海州かいに高麗国の使者を迎えるための施設が作られた。詩の題は「元豊七年、京東と淮南げんほう けいとう わいなん こうに高麗亭館らいていかんを築くよう 詔みことり が下った。密州みつ、海州の二州は騷然となり、逃亡する者も出る事態となった。その明くる年、私は高麗亭館を見て、その壮麗な建築に嘆息し、一絶句を詠んだ」。

### 【訳文】

塙の外からも、高麗亭館こうらいていかん ひさし はしらの檐や楹が空に飛び舞うりさまが見える。

村々は土木工事に疲弊し、ひっそりと静まり返っている。

我が民衆を高麗国こうらいこくの奴隷として使役したに等しいのではなからうか。

そのような犠牲を償ったのが果たしてあるのか。

【補足】[改革政治は積極的な対外政策を採り、西方では夏国かこくと開戦して失敗した。北方では遼国りょうこく [契丹きつたん] に対して何とか優位を築こうと模索し、高麗国こうらいこくとの友好関係を深めようとした。遠くの国と手を結んで、間に挟まる国を叩こうとする考え方は、その後、宋国そうこくを亡ぼすことになる。これより数十年後に、遼国よりも北の地に俄かに勃興した金国きんこくと同盟を組み、遼国を挟み撃ちにしてまんまと遼国を滅ぼすことに成功するのだが、金国の圧倒的な強さの前に宋国の都も陥落してしまうのだった]

## ■ 【07-2-071】 懐仁令陳徳任新作占山亭二絶句

【解題】蘇軾かいは海州の懐仁県かいじんを過り、県知事の陳徳任ちんとくにんが新たに作った占山亭せんざんていを訪れてこの詩を詠んだ。

### 【訳文】

#### 其の一

昔むかし太公望たいこうぼうは南征して穆陵関ぼくりょうかんにまで至り、

この海辺の地を自身の領地とした。

まさか誰も思いもしなかったらう、

そうした太公望の苦勞を尻目に、

ここにきた詩狂いの人が、

膠西県の山々の半分までもやすやすと占拠してしまうとは。

【補足】[詩の後半は占山亭せんざんていが、その名の通り山々の景色を独り占めにしてしまうところから洒落たもの。膠西県こうせいは密州みつに属することから次の第二首が続く。

## 其の二

私は膠西こうせいのもとの知事である。

だから、私だってこれらの山々を貴君と半分ずつにしたってよいはずだ。

むしろ「山中の宰相」を密かに名乗ろうかと思っているくらいだ。

あの山に隠棲し、時折、白雲はくうんに詩を寄せるのだ。

【補足】「山中の宰相」とは陶弘景とうこうけいの故事による。陶弘景は若いころは南齊なんせいの朝廷に仕えたが、36歳で茅山ぼうざん [金陵きんりょうの山] に隠棲した。陶弘景の詩に「山中に何があるのか、嶺の上に多くの白雲はくうんがある」との句があり、それ以来、「白雲」は隠者の清らかな心の象徴となった。皇帝はしばしば陶弘景に手紙や礼物を贈って厚く遇したので、人々は「山中の宰相」と呼んだ

## ■ 【07-2-072】再過常山和昔年留別詩

【解題】密州みつの南に常山じょうざんがある。蘇軾は密州知事であったときに何度か常山に登って雨を祈り [→作品番号 05-2-033 など]、密州を離れるに当たって常山の零泉うせんで送別の詩を詠んだ [→作品番号 05-2-044]。登州とうに向かう道で再び常山じょうざんを過り、かつての送別の詩に和した。

### 【訳文】

常山じょうざんの前で老人達が深々と頭を下げる。

私を出迎えるのは初めてであるかのようにしている。

夢幻の内を駆け巡る身は、

一念一念ごとにもう昔の人でないのだ。

長らく川や湖を放浪し、

朝廷ばかりでなく街にも親しい人はもはやいない。

ここから<sup>うせん</sup>雩泉の源を尋ね、俗世を避けた<sup>とうげんきやう</sup>桃源郷に逢おうかと思う。

【補足】[このあたりの一連の詩から、蘇軾が登州に赴任することにより積極的に  
なかったと推測しても、あながち見当違いではないであろう]

## ■ 【07-2-073】再過超然台贈太守霍翔

【解題】蘇軾は9年ぶりに<sup>みつ</sup>密州を訪れた。州庁の北側には蘇軾が築いた<sup>ちょうぜんたい</sup>超然台があった  
た [→作品番号 05-1-077]。超然台に登り、州知事の<sup>かくしやう</sup>霍翔にこの詩を贈った。

### 【訳文】

昔、私は<sup>うせん</sup>雩泉の水を飲んで<sup>じやうざん</sup>常山と別れた。

そのとき天は冬に向かって寒く、<sup>たつ</sup>歳は<sup>み</sup>辰と巳の間にあった。

山中の児童は手を拍って笑い、

「西に去って、いつ還ってくるのですか」

と、私に尋ねた。

児童らとは竹馬の遊びを再びする約束をした。

それここにかかわらず、十年もの間ここに来ることがなく、

私は小舟に乗って独り遠くで釣りをしていたのだった。

ようやく重ねてここに来ると、

老人たちは幼い子に支えられながら、道を遮って出迎えてくれた。

かつて赤ん坊であった者もすでに七尺<sup>たけ</sup>の丈に成長したのを見れば、

私はどうしたって若いままではいられない。

人々に、いまの知事殿はどのような人であるかと尋ねたところ、

かん「漢の時代の趙ちやうじゆうくに充国將軍のようなお方です。

それについて、お年はまだえらく若いのです。

その上、民衆を労働に使うときには、

知事様御自身が酒や食べ物を用意して慰勞して(た)さいます」

といった。

私が密州知事であったときには、

ちやうぜんたい『超然台の記』に、

「台所はいつもすっからかんで、

くこ杞の葉やら菊の花やらを毎日食くべなければならぬい」

と、書いたくらいであったから、

「うちの知事様はしみつたれだ」

と、嘲りを受けていたのだが、

いまの知事殿はそういうことは全ぜんくないのだ。

かくて超然台に旧跡を尋ねて酒を置くと、

当時の詩賦しふを刻んだ石がそのままに残っている。

雲が飛んでばじさん馬耳山に日が落ちゆき、

超然台の碧みどりの壁が霧の内うちで金色に輝く。

ふき邾淇の水は古いにしへからのままに北きたに向かって流れ、

波を立てて瀨たまたかを下りつつ環飾たまかざりりがぶつかり合う音を響かせている。

知事殿に願ねがうのは、

談笑だんせうの内にその川かわに石せきの堞ていを築つくき、

居いながらにして城郭じやうかくの周りに新田しんでんを生なみ出すことである。

【補足】〔蘇軾自身の注で、密州知事の霍翔かくしやうは熙河きが〔夏国かこくとの戦いの前線地〕で屯田

を開く功績があったと自ら語ったとある。それで、西方諸国を平定するのに偉大な功績があった漢かんの時代の趙ちょう充国じゅうこくになぞらえた句を詠んだのである。詩の終わりは、遠く辺境の地ではなく、むしろ身近なこの地において新たな農地を開くことを霍翔に勧めたのである]

## ■ 【07-2-074】 過密州次韻趙明叔喬禹功

【**解題**】ここに懐かしい名を見る。趙ちょう杲卿こうけい [字は明淑あざな めいしゆく] [→作品番号 05-2-030 など] と喬きょう紱じょ [字は禹功う こう] [→作品番号 05-1-084 など] で、2人とも密州知事であったときに交流があった。

### 【訳文】

趙ちょう先生は昔通り貧乏のまま、  
喬きょう知事もやはり酔っぱらっては門番に叱られている。

世間を笑わせるだけの価値すらないのに、

こうして我等三人はまた向き合っている。

鶏の声を暁に聞けば、悲しい曲を歌っているかのようだ。

白髪を見ると、秋はこの身にこそあると驚かされる。

膠西こうせいの旧い友ともう別れるのだが、

いつかの春に小舟に乗ってともに釣りをしようではないか。

【**補足**】 [(1) 趙ちょう杲卿こうけいが学校の教授で貧乏であることは作品番号 05-1-030 で、喬きょう紱じょが門衛に馬鹿にされるような目に会うということは作品番号 05-1-020 でそれぞれ見ている。(2) 釣り竿を並べるのは、徐大正じょたいせいとの別れの詩 [→作品番号 07-2-066] でも見ているように、自由人同士の楽しい遊びの象徴である]

## ■ 【07-2-075】 書柳子厚詩

【解題】 いよいよ登州とうしゅうに近づくと海が見えるようになった。柳宗元りゅうそうげんの詩を思い出して書き、この短文を添えた。柳宗元は韓愈かんゆと同じ時代の人で、政争に巻き込まれて二度流罪になり、それによって詩文に独自の境地を開いた。蘇軾も同じような経験をすることで、次第に柳宗元に接近するようになる。

### 【訳文】

私は東武とうぶ [密州みつしゅう] から文登ぶんとう [登州] へ向かい、海に沿って数日間進んだ。道の傍に並ぶ山々はまことに剣先けんせんのようである。柳宗元りゅうそうげんの詩を唱えつつ、この海辺の山々の多さを柳宗元は果たして知っていたのだろうかと思った。

柳宗元りゅうそうげんの詩にはこのようにある。

海上尖峰若劍鋌、[海辺の尖った峰々は剣先のようで]

秋来处处割人腸。[秋が来て、その剣が人の心を引き裂く]

若為化作身千億、[どうせなら、この身を千億にもわけて]

遍上峰頭望故郷。[すべての峰の頂いただきにおいて故郷を望みたいものだ]

【補足】 柳宗元りゅうそうげんもとの詩は、『与浩初上人同看山寄京華親故』 [浩初上人こうしよしやうにん とともに山をみて、京華けいけの親故しんこに寄せる] という題で、遠く南方りゅうの柳州に流されていたときに都の友人に送った詩である。柳宗元りゅうそうげんは長安ちやうあんの生まれで、都がまさに故郷であった。なお、柳州は内陸の町で実際に海が見えるわけではないが、南シナ海に近く、都から見れば海辺の町というイメージであるのだろう]

## ■ 【07-2-076】 与枢密

【解題】蘇軾は10月15日に登州<sup>とう</sup>に到着した。その日のうちに着任したことを皇帝に報告する感謝状を書いて差し出した。表題に掲げたのは副宰相に宛てた感謝状。具体的には章惇<sup>しょうてん</sup>に宛てたものであろうとされている。また、これとほぼ同文の手紙を、朝廷の要職に戻った司馬光<sup>しばこう</sup>にも送っている。つまり、誰宛てでも通用する極めて儀礼的な手紙で、重々しい言葉遣いを省いて実質的な内容だけを抽出して訳そうとすると、ほとんど何も残らないので、原文だけを掲げておく。注目すべきは最後の日付である。

私啓、孟冬薄寒、伏惟枢密正議台候万福福。軾即日蒙恩、罪戾之余、崇命逾分、区区尺書、不足上謝、又不敢廢此礼、進退恐栗。未縁趨侍、伏冀上為廟朝、精調寢味。下情祝頌之至。謹奉啓起居、不宣。軾頓首再拜枢密執事。十月十七日。

## ■ 【07-2-077】 海市、并叙

【解題】伝聞によれば、天下に名高い蘇軾の赴任<sup>とう</sup>を登州の人々は大いに歓迎したとあり、蘇軾は久しぶりに知事としての職務に意欲的に取り組み始めた。ところが着任からわずか5日後の10月20日、蘇軾を朝廷に召喚するとの辞令が届き、たちまち都に向かうべくあたふたしなければならなくなった。あまりにも短期間で去らねばならないことに蘇軾としては心残りがあったということがこの詩の序文に記されている。

## 【訳文】

叙

私は登州の「海市」[海に町が浮かんでいるようなありさまが見られる現象、すなわち蜃気楼<sup>しんきろう</sup>]につい



で以前から聞いていた。土地の父老によると、いつも春から夏に出て、今年はまだ冬になつたので見られないという。私は着任して五日で去ることになり、「海市」を見られないのを残念に思い、海神かいじん こうの広徳王とくおうの廟に祈った。その明る日に「海市」が現れたので、この詩を作った。

【補足】〔登州とうの州庁は渤海湾ぼっかいわんを北に臨む海辺の町にあった。中国は広大な国で海岸線も長い、大半の人々にとって海は遠い存在である。蘇軾も海辺の地に住まうことを珍しく感じ、有名な「海市」を見ることを一つの楽しみとしていたのだらう〕

東方の雲と海、

空くうにしてまた空くう、

その空明くうめいの中に群仙が出没し、

ゆらゆら揺れる浮き世が現れ出て、

万象ばんしょうが生じるといふ。

よもや貝が真珠の宮殿を吐き出すのではないだらう。

心に知り抜いているのは、

見るものすべては幻影であるということ。

それでも、我が耳目を驚かすために、

わざわざ神たくみの工を煩わしてみることにした。

「天地が寒さと水の冷たさに閉ざされたこの季節、

私ぎょりゅうのために冬籠りしている魚竜を鞭打って起こして下さい」

すると、霜降る曉に、重なり合う楼閣みどりと翠すずの阜みかが出現した。

この異事に百歳の翁も、ぶつ倒れんばかりに驚いた。

人間世界で得られる物なら、我が力ちからで取ることもできるだらう。

この世の外には物はなく、誰であれたくさんたくさんの物を取って誇示することはできない。

私はいきなり頼んだのだが、神はなぜか拒みはしなかった。

それで知ったのは、

私は人から厄わざわいを受けたのであって、天が窮こまらせたのではなかったのだ。

唐代の韓愈とうだい かん じゆは遠く南方の潮州ちゆうに流された後、

都に帰還する途中、霧に閉ざされた道で神に祈ったところ、

石廩せきりんと祝融しゆくゆうの二つの峰みねが堆うづたかく聳そびえる姿が現れ出たので、

「我が心が正しく素直であることが山の神を動かしたのだ」と豪語した。

実際のところは、韓愈かん じゆの竜鍾りゆうしゆうとしたありさまを造物者が哀れんだのだろう。

顔をほころばせて笑うのだってそうそうあることではない。

神が山を見せてくれただけでその報いむかひは十分に豊かであったのだ。

まして私は世にない物までも見せてもらえた。

日が斜めになり、万里の彼方に鳥が飛び去った後は、

碧あおい海が青銅を磨いたように広がるばかり。

きらびやかな言葉を並べて新しい詩を作ったところで、

何の役にも立たないのはわかっている。

結局は、風とともに全て変化して消えてしまうのだ。

【補足】[詩の半ばに「信我人厄非天窮」[信に我は人厄にして天窮に非ざるを]とある。つまり、流罪の身になったのは人によって与えられた災厄であって、天の定めによるものではないというのである。蘇軾はこれまで、罪に墜ちたのは、時に天の定めによるといい、時に自分自身によるといつていた。都に召喚されることが決まったことで、ようやく本当に思うところを詩に託したのだろう]

## ■ 【07-2-078】 与潘彦明

【**解説**】<sup>こう</sup>黄州にいる<sup>はんへい</sup>潘丙<sup>あざな</sup>〔字は彦明〕<sup>びんめい</sup>〔→作品番号 07-1-112〕に送った手紙。

【**解題**】

あちらこちらへと行方が定まらないなかにあって、しばらく御無沙汰しておりました。<sup>とう</sup>登州に到着したところで、お手紙を受け取りました。お健やかにお過ごしとのこと、はなはだ安堵いたしました。

こちらにきてまだ席が温まらないうちに重ねての<sup>みことり</sup>詔をいただき、強いて走り行かねばならず、嘆息してやみません。かつての遊びをかれこれ思うと、ほとんど耐え難いような気持ちになります。お母様は以前に変わらないとのこと、<sup>はんこう</sup>潘鯁君からもお手紙をいただいております。甚だ多忙の折から、また御返事していません。<sup>かくこう</sup>郭邁君や<sup>ここうどう</sup>古耕道君にもよろしくお伝えください。……

【**補足**】〔(1) <sup>はんへい</sup>潘丙は科挙には合格しなかった。<sup>とう</sup>蘇軾が登州に赴任すると聞いて、兄の<sup>はんこう</sup>潘鯁とともに登州に宛て手紙を送ったのだらう。(2) <sup>かくこう</sup>郭邁や<sup>ここうどう</sup>古耕道は前の章でお馴染みの人々〔→作品番号 06-2-003、06-3-005 など〕。〕

■ 【07-2-079】 登州孫氏万松堂

【**解説**】<sup>とう</sup>蘇軾が登州にいたのは二十日間ほどであったようで、そのわずかな日々のうちにもあちこちを訪ね、幾つかの詩を詠んだ。これは登州の町の中にあつた<sup>そん</sup>孫氏の<sup>まん</sup>万松堂<sup>しょうどう</sup>で詠んだもの。

【**訳文**】

一万本といわれる松を誰が植えたのか。

さわさわと風に鳴り、

<sup>みね</sup>嶺に<sup>あお</sup>積む蒼い雲のよう<sup>くに</sup>この邦を覆っている。

堂に登って見るなら、

松より滴る露が家々の屋根へと降りかかる。

冬の川からは、石の歯が水を噛み砕く音が風とともに聞こえてくる。

南の部屋では、大竹、小竹の二つの島が空に浮かぶさまが見え、

北の窓辺では、夕陽を受けて松の影が伸びるのを見る。

平安を告げる夕べの烽が海の向こうに上がるのを見てから、

逢逢と鳴る太鼓の響きを踏んで帰ろうと思う。

【補足】 [渤海湾の北側は遼国の、東側は高麗国の領地である。国境地帯で何事もなければ狼煙 [平安火] が上げられるという]

## ■ 【07-2-080】 遺直坊、并叙

【解題】 登州の人に依頼されて詠んだ詩。

### 【訳文】

叙

富弼の知り合いに登州の李常という人がいた。かつて李師中が登州知事であったときに、李常の住むところを「遺直」と名付けた。李常の子の李大方が私に詩を求めたので、この一首を作った。

【補足】 [ここに見える李常は、これまでにしばしば登場した親友の李常とは別の人である。李師中の名は作品番号 05-3-007 で見ている]

李師中知事は浪りに外出する人ではなかったけれど、

李常先生に対しては師弟の礼をもってその門を叩いた。

李先生はただ座っているだけであっても、

挙止がすでに多くを語って教え、

当時のこの邦の人々はそれによって教化され、  
町で朝から飲んだり食べたりして騒ぐような不届きな連中にはなくなった。  
それからどれほどの歳月が経ったのか、  
李先生も李知事も九原<sup>きゅうげん</sup>[あの世]の人になってしまった。  
国の衰えを嘆いた孔子<sup>こうし</sup>の声はいまも伝わっているけれど、  
李先生の魂を呼び戻して再び人々を教え導くことができないものだろうか。  
私はここに「遺直」<sup>いちょく</sup>[正しいことを遺す]の詩を作るので、  
この地を過ぎる者は必ずここを敬って礼を捧げてほしい。

【補足】[4行目の原文は「薤水已多言」<sup>かいすいすで たげん</sup>で、薤<sup>にら</sup>を引き抜く仕草[薤は精神の強さの象徴]からも、水を汲む様子[水は心の清らかさの象徴]からも人を教え諭すものがあるという意味]

## ■ 【07-2-081】 鰻魚行

【解題】「中国三大珍味」といわれるものがある。フカヒレ、海ツバメの巣、それに干シアワビだ。登州<sup>とう</sup>はアワビの産地であり、輸入基地でもあった。これは鰻魚<sup>ふくぎよ</sup>[アワビ]の行。

### 【訳文】

漢王朝<sup>かん</sup>[前漢<sup>ぜんかん</sup>]から皇位<sup>おうち</sup>を奪い取った王莽は、  
最後<sup>せんたい</sup>は漸台に籠り、矢が尽きるまで戦った末に殺された。  
そのとき、憂憤<sup>あわび</sup>のあまり酒と鰻魚しか喉を通らなかつたとか。  
やはり漢王朝<sup>ごかん</sup>[後漢<sup>こうかん</sup>]から皇位<sup>おうち</sup>を奪い取ろうとした曹操<sup>そうそう</sup>は、  
死に際に、帳<sup>とばり</sup>を廻らせて女性たちに歌わせた。

そのとき、息子は父が好む<sup>あわび</sup>鰻魚を届けようとしていたが間に合わなかったとか。

二人とも同じ皇位を盗むような人間であっただけに、嗜好も同じだったのだろうか。

私は<sup>あわび</sup>鰻魚を前にすると、いつもため息が出る。

それは、「<sup>あわび</sup>鰻魚の味はかきふたの味に似ている」などと、妙なことを言った人がいたので気分が悪くなるだけでなく、この二人のことを思うからだ。

覇者が林立して通行が遮断された時代には、<sup>あわび</sup>鰻魚一枚の値が千金にもなった。

幸いにもここ百年は南に北に魚も野菜も運ばれ、<sup>あわび</sup>鰻魚も下々の者に至るまで口にしてあり余るほどにある。

さらには、東からは海船に載せられて、倭国の<sup>わこく あわび</sup>鰻魚までも届き、「倭螺」と呼ばれている。

その他にも、<sup>とう</sup>登州には異国のいろいろなところからたくさんの珍宝がくる。

<sup>ほうらくかく</sup>蓬萊閣の先にある<sup>だきとう</sup>駝棋島では、

八月になると遠国から吹き来る強風に備えなければならない。

海の怪物が威力を震い、船舶は浪にもまれ、人々は崖や谷に倒されてしまう。

<sup>あわび</sup>鰻魚の採集や運搬には苦勞を伴うのだが、ひとたび料理人の手に渡ると、上手に調理されて皿の上で輝く光を放ち、立派なお屋敷の食卓に乗る。

世の珍味とされる<sup>にくし</sup>肉芝とか<sup>せきじ</sup>石耳とかも、

酔に合えた<sup>あわび</sup>鰻魚の皮に比べたら物の数ではない。

都会の貴人たちがこの味を珍重するので、

酒粕や油に漬けて遠くにまで送られる。

とかく<sup>あわび</sup>鰻魚にはいろいろな話がある――

昔、日に一万錢を厨房で費やしても、

世に旨いものがないと抜かしていた大金持ちがいたのだが、

<sup>あわび</sup>鰻魚を食べると、目をひんむいて千日の酔いも醒めたとか、

かつて三韓<sup>さんかん</sup>[朝鮮]の使者が金の鼎<sup>かなえ</sup>を朝廷に献じたときに、

箱一杯に<sup>あわび</sup>鰻魚を詰めて返礼こしたとか、

あるいは、遼東の太守が遠くから朝廷に<sup>あわび</sup>鰻魚を献じたとか、

<sup>りんし</sup>臨淄の役人が褒美として<sup>あわび</sup>鰻魚を下げ与えられたとか……。

この私は生きながえて東の地に来ることができ、

いささかなりとも<sup>あわび</sup>鰻魚を食べられれば満足で、

葉に包んでその筋の方々への付け届けしようなどとは思っていない。

<sup>あわび</sup>鰻魚のスープは眼によいといふから、

人々に分け与えて、

細かい字も読めるようにしてやりたいと思うのである。

【補足】[日本から干しあわびが運ばれ、<sup>とう</sup>登州が交易のルートになっていたようだ。

このころの日本は平安時代の院政期であった]

## ■ 【07-2-082】 奉和陳賢良

【解題】科挙の賢良方正科<sup>けんりょうほうせい か</sup>に合格した陳<sup>ちん</sup>という人の詩に和した。詩の題に「奉る」とあるので、蘇軾より年配の先輩であるのだろう。

## 【訳文】

孫<sup>そん</sup>氏<sup>し</sup>や呉<sup>ご</sup>氏<sup>し</sup>や太<sup>たい</sup>公<sup>こう</sup>望<sup>ぼう</sup>の兵法を学んだことがないから、  
この驚<sup>ど</sup>馬<sup>ば</sup>の身をもつて英豪たちに並ぼうとは思っていない。

海の彼方に視線を極めても、

天はますます遠く、

向<sup>ひ</sup>日<sup>ま</sup>葵<sup>れり</sup>が日を追うように心は皇帝に向かうのだが、

日は高ますます高くにある。

我が身の外にある浮き名を求めてあくせくするのはやめよう。

夢の中でも故郷へ帰る思いはよいは溢れ出てくる。

蓬<sup>ほう</sup>萊<sup>らい</sup>島<sup>とう</sup>の三<sup>さん</sup>山<sup>ざん</sup>はもとより神<sup>しん</sup>仙<sup>せん</sup>の地、

貴<sup>き</sup>君<sup>くん</sup>と手を取りあつて東の海へと乗り出し、

巨大な鼈<sup>お</sup>を釣<sup>り</sup>あげようではないか。

【補足】〔陳<sup>ちん</sup>は科<sup>か</sup>挙<sup>きよ</sup>には合格しても志を得ずにいたのだろう。登<sup>とう</sup>州<sup>しゅう</sup>の土<sup>ど</sup>地<sup>ち</sup>柄<sup>がら</sup>からして  
神<sup>しん</sup>仙<sup>せん</sup>世界へ思いを寄せて、陳<sup>ちん</sup>氏<sup>し</sup>を慰めたのだろう〕

## ■ 【07-2-083】 蓬萊閣記所見

【解題】登<sup>とう</sup>州<sup>しゅう</sup>の町から北に三里の海<sup>かい</sup>邊<sup>べん</sup>にある蓬<sup>ほう</sup>萊<sup>らい</sup>閣<sup>かく</sup>を訪れてこれを記した。登<sup>とう</sup>州<sup>しゅう</sup>に蓬  
萊閣があることは作品番号 07-2-054 ですすでに触れていた。

## 【訳文】

登<sup>とう</sup>州<sup>しゅう</sup>の蓬<sup>ほう</sup>萊<sup>らい</sup>閣<sup>かく</sup>に上つて海を望むと、鏡の面のように広がり、遠く天と境目を接している。その中に、たち  
まち黒い豆のようなものが数点現れ出た。土地の人がいかに、「海船が来たのです。飯が炊けるより



も短い時間で、船はもう蓬萊閣の下にまで来た。

げんほう みそか びざん  
元豊八年十月晦日、眉山の蘇軾が書く。

【補足】〔内陸の眉山<sup>びざん</sup>に生まれ育った蘇軾にとって海辺の風光は珍しいものがあつたのだろう。「海船<sup>かいはく</sup>」は外海を航行する船で、小川環樹・山本和義『蘇東坡集』（1972年）では「貿易船」と訳している〕

## ■ 【07-2-084】 留別登州举人

【解題<sup>とう</sup>】登州を去る前に、科挙を目指しているとある受験生に贈った詩。恐らく、蘇軾の到着を心待ちにして自作の詩文を見せにきたのだろう。

### 【訳文】

身も世も忘れるという<sup>そうし</sup>荘子の哲学はかねてから知っていたから、  
なおも官界を旅し、古来名高いこの地に来た。

かん たいしじ  
漢の時代にこのあたりに避難していた太史慈は、

こうゆう し  
孔融が赴任して来なければその才能は世に識られなかった。

貴君が筆を下すなら、世の風流人を驚かし、

貴君が琴を演奏するなら、古の名人の弟子にもなれるであろう。

わすか 5日<sup>そうそう</sup>で匆匆に去ってしまう私を嫌わないでほしい、

都に帰ったならば、貴君の詩を皆に伝えるであろうから。

【補足】〔この詩を与えた<sup>きよじん</sup>举人の名が伝えられていないことから、この人の詩が都の人々の間で評判になるようなことはなかったのだろう〕

## ■ 【07-2-085】 仏心鑿偈

【**解題**】<sup>とう</sup>登州を発つ直前のこと、<sup>そ か</sup>三男の蘇過の持つ鏡を寺に寄付した。そのことを翌年になって記した短文。

### 【訳文】

<sup>そ か</sup>三男の蘇過は<sup>う どうかん</sup>烏銅鑿を持っていた。直径は数寸で、奥深く通る光を放っていた。

<sup>げん ほう</sup>元豊八年十一月二日、<sup>とう</sup>登州の延洪禪院に遊ぶと、<sup>ぶんたい</sup>僧の文泰が<sup>しゃ か ぶんぞう</sup>ちよど釈迦文像を造ろうとしていた。

そこで、<sup>ぶっしんかん</sup>仏心鑿に<sup>かがみ</sup>してもらうべに<sup>げ</sup>の鑿を寄付し、偈を作った。

鑿中面像熱時炎、<sup>かんちゅう めんぞう あつ とき も</sup>〔鑿中の面像熱く時に炎ゆる〕

無我無造無受者。<sup>む が むぞう むじゅ もの</sup>〔無我無造無受の者〕

心花發明照十方、<sup>しん か めい ほう じゅうほう て</sup>〔心花明を發して十方を照らし〕

還度如是常法衆。<sup>ま はか によぜ じょうほう じゅう</sup>〔還た度に<sup>に</sup>如是常法の衆〕

<sup>びざん</sup>眉山の蘇軾、<sup>げんゆう</sup>元祐元年三月一日、石に刻んで立てる。

【**補足**】〔(1)「<sup>ぶっしんかん</sup>仏心鑿」とは、仏の心として仏像の中に納める鏡なのだろう。(2) <sup>げ</sup>偈の意味はわからないので、とりあえず読み下し文にした。たぶん、鏡の光はすなわち衆生を照らす仏陀の叡智だというようなことなのだろう〕

### ■ 【07-2-086】書吳道子画後

【**解題**】<sup>とうだい</sup>唐代の吳道玄〔<sup>ご どうし</sup>吳道子〕の画について、蘇軾はしばしば詩や文章において言及している。この文章は<sup>とう</sup>登州滞在中に<sup>しぜんしゆく</sup>史全叔が所蔵する画を見て、それが間違いなく吳道玄の真筆であると鑑定して書いたもの。史全叔は登州の官に仕えない人であったようだ。

## 【訳文】

知恵のある者が何かを創造し、能力のある者がそれを敷衍し展開する。一人の力だけで成就するのはない。

学問における君子にしても、技術における百工[職人]にしても、創造と敷衍さんだいがあって、三代[古代の理想の時代]から漢代を経て唐代に至って何事も完備するようになった。だから、詩は杜甫に、文は韓愈かんゆに、書は顔真卿しよ がんしんけいに、画は呉道玄ごどうげんに至って、古今の変化が尽くされ、天下の能力のある人のすべきことは完了したのである。

呉道玄が人物を画くのは、燈火を掲げて影を取ることに喩えられるであろうか。光線が来るのを迎えたり往くのに従ったり、傍らから見たり側面から出て行ったり、横に斜めに平らに直に、各おのを乗除して、自然の本質すうとなる数[法則]を得て、それと毫末も違えることなく画くのである。こうして、新意を法度の内より出し、妙理を豪放の外みょうり ごうほうに寄せたのである[奔放自在に新味を生み出しているように見えて実は理に適っているという意味]。いわゆる「刃を余地に遊ばせ、斤を運らして風を成す」を為したことについては、古今において呉道玄一人であろう。

私は他の人の画では、それを描いた人の名を必ずしも言い当てることができない。しかし、呉道玄の画は、さっと見るだけでその真偽がわかる。ところが世間に本物は減多しぜんしやくにない。史全叔の所蔵するものは、これまでに一つか二つしか見たことのないほどのものである。

元豊八年十一月七日、書く。

【補足】〔(1) この文章の前半に、蘇軾の文化史観が簡潔に述べられている。冒頭に置かれた「知者創物、能者述焉。非一人而成也」[知者は物を創り、能者は述ぶ、一人にして成るに非ざるなり]の14文字は、力強くかつ当時としては大胆な主張である。

「述」の原義は、「人に付いて従う」で、そこから「人の意見を重ねて言う」という意味が出て、さらに単に「言う、告げる」という意味が出た。この文章で「述ぶ」と

っているのは、原義に近く、「祖述する」[先人を手本として受け継ぐ] という意味である。古い中国の歴史観はおおむね尚古主義で、大昔 [よく「三代」[夏、殷、周] という] に聖人が完璧なものを人間世界に示し、時代が下るとともに悪くなっていくと考えていた。ところが、蘇軾は、知者 [聖人] が提示したものを能力のあるものが継承、発展させることによって完成すると主張し、唐代に至って完備したとっている。ここでは蘇軾は言及していないが、唐代に完備してしまった後を受けて、後世の者は何をしたらよいのかというのが、蘇軾たちの大きな課題であった。(2) 中段にある「燈火を掲げて影を取る」とか「乗除して数を得る」とかの表現は、いわゆる「理系」的な発想といってよいだろう。土木に秀でていたり、医術に深い関心があったり、化学実験に熱心だったりすることも合わせて考えると、蘇軾は実はすこぶる理系人間であったのではないかと思えてくる。(3) その後にある「新意を法度の中より出し、妙理を豪放の外に寄せる」という文章はそっくりそのまま作品番号 06-4-031 で掲げた『呉道玄の地獄変相の跋文』で見ている。呉道玄の画をいうのにこれ以上の表現はないということなのだろう。(4) 続いて「刃を余地に遊ばせ、斤を運らして風を成す」とあるのは、『荘子』に記された二つの寓話に基づくものである。牛を解体する名人は、自然の法則に従って刃を使うので、骨と肉の間に刃を自由に動かせる広々とした空間があるといった。また、大工の名人は、人の鼻先についたわずかなしっくい、風を起こすように斤を振って削り取っても、人の鼻を少しも傷つけなかった。両者とも達人の技の最高の境地である]

## ■ 【07-2-087】 書自作木石

【解題】おなじく史全叔に贈った短文。

【訳文】

東坡は登州知事に移って五日、知事職から去ることになった。この地の山海の景勝が名残惜しく、  
日々に賓楼に挙がって同僚と飲んだ。酒酣たけなわにこの木石ぼくせきの画を描き、筆を投じて嘆息して感じるに、今  
回ここに来たのは最上のことであったのだ。  
その画は史全叔しぜんしゆくが取って所蔵することになった。

■ 【07-2-088】 過萊州雪後望三山

【解題】二つ上の文に11月7日の日付があり、蘇軾とうは登州を発ったのはその直後だっ  
たようだ。登州から海岸に沿って西に進み、萊州らいに至り、雪が降った後の海さんざんとうに三山島  
を見てこの詩を詠んだ。

【訳文】

東の海は碧い環のように、  
西北はて とう らいの果の登州と萊州を取り巻いている。  
雲からの光と天の色とが回転しながら、三山島へと落ちかかる。  
我が旅はちょうど冬の真中にあたり、  
うすらと雪が積もって、地上に浮く埃を収めてくれた。  
黄昏たそがれ時になって風が収まり、  
夜中に海がかりりと開けた。  
三山島は華山の頂のように見え、  
雲と波の間に見え隠れする。  
古いにしえの仙人である安期も羨門も、  
竜に乗ってあのあたりから飛び去って、

いまはいったどこにいるのだろうか。

神仙の世界に憧れて、諸仙人に一献勧めたいと願っていた漢の武帝も、  
虚しく茂陵に葬られてしまった。

私にしても天帝の住まいで会う約束はできないであろうから、  
せめて諸仙人の魂を招き寄せる詩を作ってみようと思うのである。

【補足】[萊州では、皇族の洋川公の家に立ち寄り、所蔵する書画を見せてもらい、その謝札に画に一文を書き添えている。その訳は割愛する]

## ■ 【07-2-089】 与王慶源

【解題】登州を発って間もないころに郷里にいる王淮奇 [字は慶源] [→作品番号 06-1-084] に宛てて出した手紙。

### 【訳文】

……出発に臨んで忙殺され、御返事を書くことができず、道中からお出しすることになりました。登州は下に最果ての海を臨み、枕の下に天と水が連なって、蓬萊三山もぼんやりと見えようかというところでありました。春と夏の間は常に海市が現れ、霞か雲のようなありさまのなかに建物や人物の姿が見えます。たまたま数日前に見ることができたので、そのときの詩を記して、一笑に供しましょう。……

【補足】[内陸奥深くの郷里の人々には海の景色は珍しかろうと、『海市』の詩 [→作品番号 07-2-077] を特に書いて送ったのである]

## ■ 【07-2-090】 与米元章

【解題】蘇軾は萊州から青州に出て、そこで米黻 [字は元章] からの手紙を受け取り、ごく短い返書をしたためた。米黻は蘇軾よりも 15 年若く、官職には就いたもの

の、奇行が多く、もっぱら文人として活躍した。北宋第一の書家、ならびに北宋第一の画家、ならびに北宋第一の収集家、その三冠の王者が米黻である。蘇軾と米黻がいつ知り合ったのかは定かではないが、これより4年前の元豊4年秋に米黻は黄州を訪れていた。そのことがこの手紙に記されている。

### 【解題】

……私は登州から都に赴き、すでに青州に達しました。衰病の余り身で、騒がしい市場に初めて入るわけで、憂いと畏ればかりがあります。東の坡で一緒に過ごしたときの楽しさは、これからもまた得られるものなのでありましょうか。……

【補足】[権力抗争の場である都に行く不安が記されている。我々としても東の坡で作られたような詩を読みたいのであって、残念ながら次の章では、我々が期待するような蘇軾らしい作品はあまり多くを見出すことができなくなる]

## ■ 【07-2-091】真相院釈迦舍利塔銘、并叙

【解題】蘇軾は青州から、黄河に臨む町、齊州 [済南] に出た。そのルートはかつて密州から都に向かったときと同じである [→作品番号 05-3-003]。この文章は翌年になって書かれたものだが、齊州での出来事が記されている。

### 【訳文】

洞庭湖の南に阿育王塔があり、釈迦如来の舍利[骨]が分葬されている。かつて大施会が行われ、僧も俗人もその舍利に触れ、涙を流して礼拝した。そのときにある僧が三つばかりの舍利を竊み取った。桃のような色合いで、大きさは薏苡[ジュズダマ]ほどであった。これを別の場所に置いて、衆生に福をもたらそうとした。たがなかなか思う通りにできずに、舍利を方子明という者に授けた。

げんほう げんほう せいのあにのそく せいのあにのそく せいのあにのそく  
元豊三年、私の弟の蘇轍が高安[筠州]謫居となり、方子明はその舍利を弟に預けた。

げんほう せいのあにのそく せいのあにのそく せいのあにのそく  
元豊七年、私は御恩によって齊安[黃州]から臨汝[汝州]に移ることに、高安に立ち寄ってこれを見た。

げんほう ぶんとう ぶんとう しゅうしよれいぶろう さいなん ちゆうせいしんそういん よぎ  
元豊八年、文登[登州]の知事に移り、さらに尚書礼部郎として召され、済南の長清真相院を過ると、僧の法泰がちょうど十三層の磚塔を造り、人も鬼神もともに仰ぎ見るように高く聳え立っていた。しかし、舍利はまだ取められてはいなかった。私は密かにこのように思った。

「弟が所有している釈迦の舍利の宝をここに置いたらどうだろうか。我が先君の文安主簿贈中大夫、  
いみな じゅん ぶしやうたいくん てい せいじんこうれん さんぼう  
諱は洵と、先夫人の武昌太君の程氏は二人とも性仁行廉で、三宝[仏教]を崇信していた。二人は亡くなる日に、それまでの思いを改めて述べ、愛するところの物を捨てて仏事をなすようにいった。人は止めようとしたが、その志は限りなく大きいものであった。さまざまなことが重なって、その遺志を遂げられないことを二十年になろうとしている。できれば前々からのことをいましめてはいいか」

法泰は私の思いを聞くと大いに喜び、翌年になって都にきてそれを行うことを願った。篋の中を探ると、金一両と銀六両があったので、衆人が寄付するもの合わせて、舍利を納める棺槨を具えるようにいった。

……[銘の本文は省略]……

## ■ 【07-2-092】 跋王氏華嚴経解

【解題】 せい りゅうざんちん  
【解題】 齊州の南の竜山鎮での出来事を記した短文。

### 【訳文】

さいなん せい りゅうざんちん よぎ そうほうこく おうけいこう おうあんせき けいこんきやうかい  
私は済南[齊州]の竜山鎮を過ると、徴税人の宋宝国が王荊公[王安石]が著した『華嚴経解』を見せてくれた。

宋宝国がいうには、



「王荊公は仏道について理解し尽くしておられるのであります」

私は宋宝国に尋ねた。

「もとの『華嚴経』は八十巻あります。この『解』は一卷だけです。どしてなのであるでしょうか」

宋宝国はいった。

「王荊公がいわれるには、ここにあるのが釈迦しゝかの深妙な語であって、そのほかはすべて弟子たちの語なのです」

「なるほど。では、もしも私があらゆる経典から釈迦の言葉の数句を取り出して弟子たちの語の中に置いたならば、あるいは弟子たちの語を釈迦の言葉の中に置いたならば、あなたはそれらを区別できるでしょうか」

「できません」

「あなただけができないのではなく、王荊公もできませんでしょう。私が昔、岐下きか [鳳翔ほうしょう]にいたときのことです。汧陽けんよう県の猪肉が最高ぶたにうまいと聞きまして、人を遣わして取り寄せたところ、その者は酔って、その猪ぶたを夜のうちに逃がしてしまったので、ほかの猪ぶたを自分で弁償して置いたのでした。私はそれを知らずにいて、客人たちぶたにその肉を出したところ、皆が肉を讃え、ほかの土地のものは及ばないと言いつたのでした。ところが、事が明らかになり、客人たちは皆が大いに恥じたのでした。いま王荊公ぶたの猪はまた事が明らかになっていないだけなのでしょう。肉屋は肉の売買をし、歌い手は歌うたを唱い、それぞれに何が本物であるのか悟ることもあるでしょう。清浄な一念があるなら、壁土でも瓦礫がれきでもどれもが無上の法 [仏教の本質] を説いていることにもなるでしょう。釈迦の語の深妙は弟子たちの及ぶところではないというのは、夢の中の寢言のようなものではないでしょうか」

宋宝国はそれを聞くと、

「唯唯ぶいぶい」

と、いった。

【補足】 [この短文は、蘇軾そうあんせきと王安石の思考パターンの違いをよく示している。敢え

て単純化すれば、王安石は演繹的で、蘇軾は帰納的である。王安石は優れた洞察力で本質を見極め、それを出発点にして壮大な思索を組み上げてゆく。その構想力をもって大改革を立案したのである。蘇軾は旺盛な探求心をもって大量の知識を蓄え、諸事象を複数の視点から縦横無下に思索してゆく。その考察力をもって大改革を批判したのである。より単純に言えば、王安石は思い込みが強すぎるし、蘇軾は何でもありになってしまう。蘇軾は金陵で直接に王安石と話したことで〔→作品番号 07-1-046〕、自身との相違をよりはっきりと意識したのだろう。それがあったので、ここに記されているようなことを語ったのだが、王安石の信奉者と思われる宋宝国を相手に話したのは、たぶんあまりよいことではなかったのではなかろうか。蘇軾の巧みな比喻で、宋宝国は「唯唯」とうなずきはしたけれど、かなり気を悪くしたのではないだろうか。蘇軾はあけっぴろげで、人と楽しく会話しようと努めるのだが、相手によっては不快感を抱かせ、場合によっては生涯の仇敵を作ってしまうことにもなる。なお、ここまで蘇軾の詩文に親しんできた読者なら、豚肉のたとえ話はその場の思い付きで作ったのではなかろうかとの疑いを持つであろう。訳者もまた強く疑うものである]

## ■ 【07-2-093】 書文与可墨竹、并叙

【解題】蘇軾は齊州からは黄河に沿って都に向かい、その途中のどこかで文同〔字は与可〕〔→作品番号 06-1-055 など〕の描いた墨の竹の画を見てこの詩を記した。

### 【訳文】

叙  
亡き友の文同には四絶〔非常に優れた四種の技量〕があった。一は詩、二は楚辞、三は草書、四は画である。文同はかつて私にこういった。

「世の中に私を知る者はいなかった。ただ君だけが一目で私の妙所しを識しってくれた」  
文同が没して七年、ここでその遺のこした画を見て、この詩を作った。

筆は貴君とともに逝しってしまった。

いま詩を新たに作るのは誰なのか。

斤おの めぐを運めらした妙技のこの跡が空しくこ遺のこっている。

聴いてくれる友を喪しって琴の弦を断きった昔の人と同じ思いで、

私は貴君のこと思おもふのである。

【補足】〔(1)「斤おの めぐを運めらす妙技」については作品番号 07-2-091 で見たばかりである。

(2)「琴の弦を断きつ」とは伯牙はく がという人の故事。親友の鐘子期しやう し きが死ぬと、自分の音を知る者はいないと、伯牙は琴を弾くことをやめてしまった。序文で、蘇軾が一目で文同ぶん どうの妙所を知ったと書いているが、その逆も同じことであったのだ。(3) 流罪りゅう ざいとなって都を出た直後に文同の書を見て短文を書いたこと〔→作品番号 06-1-002〕を思い起こすと、都に帰還する直前に文同の画を見てこの詩を詠んだのには不思議な巡り合わせを感じる。自分をわかってくれているわけではない人々、あるいははっきりと敵視している人々が大勢にいる都に行く蘇軾の心境をこの詩から推し量ることができよう。 「小児しょう にの遷延くずぐず」を終えたことが蘇軾に何をもたらすのか、次の章で見ることになる。(4) 先に作品番号 07-1-023 として仏印ぶつ いん禪師ぜん し了元りやう げんに宛てた手紙はこのころに出したものであろう。都へ行く不安が綴つづられている。(5) ある考証によれば、齊州せい じゅうから都に至る間に、やや脇道なん けい おう てん ふ ちやう ほう へいにそれて南京なん けい応天府おう てん ふで張方平ちやう ほう へいに会っているようだ]

## ■ 【07-2-094】登州召還議水軍状

【解題】12月初めに、まだ都に着く前に、前登州知事として、登州における政策課題

についてまとめた二通の意見書を朝廷に送っている。一つは軍備について、もう一つは塩の専売についてである。いずれも登州知事として取り組もうと考えていたことで、職務が代わったからといって放置はできないと、敢えて朝廷に提出したのである。ここでは前者を部分的に読んでおこう。塩の専売については、すでに作品番号05-1-066などで蘇軾の見解を見ていて、そこで指摘していた弊害が現実には生じているので、それへの対応を提案している。

### 【訳文】

げんほう ちようほうろうぜん ち どうしゅうぐんしゅうじ  
 元豊八年十二月某日、朝奉郎前知登州軍州事の蘇軾、書状をもって奏上いたします。右の臣は  
 ひそか どう ほくりょ りやうこく  
 竊に思いますに、登州の地は北虜[遼国]に近く、極辺と呼ばれ、北虜の中の山川がぼんやりながら  
 も見え、順風に帆を張れば、たちまち我が町にまで至ることができます。宋朝が始まって以来、常に重  
 く兵を備え、水戦を習わせ、朝夕に狼煙を伝え、急報が通じるようにしてきました。毎年四月には駝基  
 とうき  
 島に兵士を派遣して守らせ、八月に帰還することで不慮の事態に備えてきました。しかし、景德年間  
 以後は登州に駐屯する兵士は常に四五千人以下となっています。……[以下、兵士の数が減り、  
 訓練が不足している現状を述べる]……兵力が各所に分散して弱くなっており、北虜の欲  
 心を開くもどとなるてありましょう。しかも、軍の指揮官は交替で派遣されてくるために、ほとんど水戦を習  
 ったことがなく、武芸も廃れており、緩急を誤る恐れがあります。伏して朝廷におかれてはこのような事情  
 を詳しく酌んで、明快な指揮を下されますように。……

【補足】[余談になるが、都に入る前のどこかでなかなかの珍事があったと伝える書物がある。かなり眉唾物ではあるが、もしも事実であれば相当程度におもしろいので見ておこう]

### 【訳文】

そんそうかん せいよ きろく  
孫宗鑑:『西畚瑣録』より

そとうば げんほう げんゆう とう  
蘇東坡は元豊年間に獄に繋がれ、元祐の初め[元豊の末年]に起用されて登州知事になり、すぐ  
れいぶ いんがいろう ごとくかん  
に礼部員外郎として都に召還された。登州から都への道の途中で、かつて獄中にあったときの獄官  
[獄の番人]に遇った。獄官には非常に愧じる様子があった。

蘇東坡は獄官に戯れていった。

「一匹の蛇が人を螫んで殺した。蛇は冥官[あの世の裁判官]の審理を受け、法に拠ると死刑に相当した。蛇は前に進み出て冥官に訴えた。『まことに罪はあります。しかし、某には功績もあります。その功績と合わせて罪を帳消しにしてはいただけないでしょうか』。冥官はいった。『どのような功績があるのか』。蛇はいった。『某には黄色い肝がございます。それで病気を治すことができます。すでに数人を活かしておるのでございます』。役人が調べてみると、嘘ではなかったので、蛇は死刑を免れることができた。しばらくして、一頭の牛が牽かれてきた。獄吏がいった。『この牛は人を突いて殺しました。罪は死に当たります』。牛は冥官にいった。『わたしにも黄色い肝があります。それで病を治すことができます。数人を活かすことができます』。牛も死刑を免れることができた。またしばらくして獄吏が一人の人間を引いてきていった。『この者はもっぱら人殺しをしていました。ところが、生きている間は死罪になりませんでした。いまこそこの者の命を取るべきであります』。その人は大慌てで、「おいらにも黄色い肝があります」といった。冥官は大いに怒り、問い詰めてこういった。『蛇には蛇黄、牛には牛黄があって、どちらも薬になることは天下の人が皆知るところだ。おまえは人間ではないか。黄色い肝などないのだ』。その人は困り果て、苦しまぎれにいった。『わたくしめに確かに人黄はございません。しかし、いさかの慚惶ならございます』

【補足】[最後は、人黄と慚惶[恥じること]の地口落ちである。恥じらいがあるのなら、かろうじて赦されることもあろうかということであろう。このときに会った獄官は、かつて獄中で詠んだ詩の題に「獄吏によっていささか酷い扱いを受けた」[→作品番号 05-5-094]と記していたその人であったのだろうか。蘇軾は、当意即妙のジ

ヨークを飛ばす達人で、逮捕されたときに妻に向かってひどく場違いなジョークを飛ばしたことを蘇軾自身が記しているくらいであるから [→作品番号 05-5-087]、この話が事実であった可能性もないわけではない。作り話であるとしたら、蘇軾がこのようなたとえ話を即興で作る名人であると広く思われていたことが背景にあるといえるだろう。自分をひどく苦しめた相手であっても、皮肉が混じっているにして、つい笑わせてしまうようなことをするのが、大衆の思い描く蘇軾のイメージなのである]

## 第7章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

■ 【07-1-001】 円通禅院、先君旧游也。四月二十四日晚、至、宿焉。明日、先君忌日也。乃手写宝積献盖頌仏一偈、以贈長老仙僊公。僊仙撫掌笑曰、昨夜夢宝蓋飛下、著处輒出火、豈此祥乎。乃作是詩。院有蜀僧宣、逮事訥長老、識先君云

石耳峰頭路接天、梵音堂下月臨泉。

此生初飲廬山水、他日徒參雪竇禪。

袖裏宝書猶未出、夢中飛蓋已先伝。

何人更識嵇中散、野鶴昂藏未是仙。

■ 【07-1-002】 子由在筠作東軒記、或戲之為東軒長老。其婿曹煥往筠、余作一絕句送曹以戲子由。曹過廬山、出以示円通慎長老。慎欣然亦作一絕、送客出門、歸入室、趺坐化去。子由聞之、乃作二絕、一以答余、一以答慎。明年余過円通、始得其詳。乃追次慎韻

其一

君到高安幾日回、一時斗擲旧塵埃。

贈君一籠牢收取、盛取東軒長老来。

余送曹詩

其二

大士何曾有生死、小儒低处覓窮通。

偶留一峽千山上、散作人間萬竅風。

余和慎詩。

■ 【07-1-003】 与仏印

■ 【07-1-004】 過建昌李野夫公挾故居

彭蠡東北源、廬阜西南麓。

何人修水上、種此一双玉。

思之不可見、破宅余修竹。

四隣戒莫犯、十畝森似束。

我来仲夏初、解籜呈新綠。

幽鳥向我鳴、野人留我宿。

徘徊不忍去、微月掛喬木。

遙想他年歸、解組巾一幅。

对牀老兄弟、夜雨鳴竹屋。

臥聽隣寺鐘、書窓耿殘燭。

■ 【07-1-005】 与子由弟

■ 【07-1-006】 将至筠、先寄遲、适、遠三猶子

露宿風餐六百里、明朝飲馬南江水。

未見豐盈犀角兕、先逢玉雪王郎子。

对牀欲作連夜語、念汝還須戴星起。

夜来夢見小於菟、猶是髭鬣垂兩耳。



憶過濟南春未動、三子出迎殘雪裏。  
我時移守古河東、酒肉淋漓渾舍喜。  
而今憔悴一羸馬、逆旅擔夫相汝爾。  
出城見我定驚嗟、身健窮愁不須恥。  
我為乃翁留十日、掣電一歡何足恃。  
惟當火急作新詩、一醉兩翁勝酒美。

■ 【07-1-007】 端午游真如、遲、适、遠從、子由在酒局

一与子由別、却数七端午。  
身隨絲絲繫、心与昌歎苦。  
今年匹馬來、佳節日夜数。  
兒童喜我至、典衣具雞黍。  
水餅既懷鄉、飯筒仍愍楚。  
謂言必一醉、快作西川語。  
寧知是官身、糟麴困熏煮。  
独携三子出、古刹訪禪祖。  
高談付梁羅、詩律到阿虎。  
歸來一調笑、慰此長齟齬。

■ 【07-1-008】 宿資福院

月明寫炤寺林幽、最是江湖入念頭。  
衣染爐煙金漏迴、茶烹石鼎玉蟾留。  
山星幾点躔官舍、僧院百年過客舟。

封事未投聖主意、長安此夕亦多愁。

■ 【07-1-009】 阮郎歸

綠槐高柳咽新蟬、

薰風初入弦。

碧紗窓下水沈煙、

棋聲驚昼眠。

微雨過、

小荷翻、

榴花開欲然。

玉盆纖手弄清泉、

瓊珠碎却圓。

■ 【07-1-010】 別子由三首兼別遲

其一

知君念我欲別難、我今此別非他日。

風裏楊花雖未定、雨中荷葉終不濕。

三年磨我費百書、一見何止得雙璧。

願君亦莫嘆留滯、六十小劫風雨疾。

其二

先君昔愛洛城居、我今亦過嵩山麓。

水南卜築吾豈敢、試向伊川買修竹。  
又聞緱山好泉眼、傍市穿林瀉冰玉。  
遙想茅軒照水開、兩翁相對清如鶴。

其三

兩翁歸隱非難事、惟要佗家好兒子。  
憶昔汝翁如汝長、筆頭一落三千字。  
世人聞此皆大笑、慎勿生兒兩翁似。  
不知樗櫟薦明堂、何似塩車压千里。

■ 【07-1-011】 初別子由至奉新作

雙鵲先我来、飛上東軒背。  
書隨好夢到、人与佳節会。  
一飲難把玩、回首了無在。  
却渡來時溪、斷橋号淺瀨。  
茫茫暑天闊、藹藹孤城背。  
青山眊眊中、落日淒涼外。  
盛衰豈吾意、離合非所礙。  
何以解我憂、粗了一事大。

■ 【07-1-012】 白塔鋪歇馬

甘山廬阜鬱相望、林隙熹微漏日光。  
吳国晚蠶初斷葉、占城蚤稻欲移秧。

迢迢澗水隨人急、冉冉巖花撲馬香。

望眼儘從飛鳥遠、白雲深处是吾鄉。

■ 【07-1-013】 初入廬山三首

其一

青山若無素、偃蹇不相親。

要識廬山面、他年是故人。

其二

自昔懷清賞、神游杳藹間。

如今不是夢、真箇在廬山。

其三

芒鞋青竹杖、自掛百錢游。

可怪深山裏、人人識故侯。

■ 【07-1-014】 書導師詩

■ 【07-1-015】 書葛道純詩後

■ 【07-1-016】 跋太虛弁才廬山題名

■ 【07-1-017】 登樓題名

■ 【07-1-018】 世傳徐凝瀑布詩云、一條界破青山色。至為塵陋。又偽作樂天詩稱美此句、有賽不得之語。樂天雖涉淺易、然豈至是哉。乃戲作一絕  
帝遣銀河一派垂、古來惟有謫仙詞。  
飛流濺沫知多少、不与徐凝洗惡詩。

■ 【07-1-019】 書司空圖詩

■ 【07-1-020】 廬山二勝、并叙

叙

余遊廬山、南北得十五六奇勝、殆不可勝紀。而懶不作詩、獨挾其尤佳者作二首。

其一 開先漱玉亭

高巖下赤日、深谷來悲風。

擘開青玉峽、飛出兩白竜。

亂沫散霜雪、古潭搖清空。

余流滑無声、快瀉双石甃。

我來不忍去、月出飛橋東。

蕩蕩白銀闕、沈沈水精宮。

願隨琴高生、脚踏赤鯀公。

手持白芙蕖、跳下清冷中。

其二 棲賢三峽橋

吾聞太山石、積日穿綫溜。  
況此百雷霆、万世与石闘。  
深行九地底、陰出三峡右。  
長輸不尽溪、欲満無底竇。  
跳波翻潜魚、震響落飛狢。  
清寒入山骨、草木尽堅瘦。  
空濛煙靄間、瀕洞金石奏。  
彎彎飛橋出、激激半月馱。  
玉淵神竈近、雨雹乱晴画。  
垂瓶得清甘、可嚙不可漱。

■ 【07-1-021】 題西林壁

橫看成嶺側成峰、遠近高低総不同。  
不識廬山真面目、只縁身在此山中。

■ 【07-1-022】 贈東林総長老

溪声便是広長舌、山色豈非清浄身。  
夜来八万四千偈、他日如何拳似人。

■ 【07-1-023】 与仏印

■ 【07-1-024】 書李公扨白石山房

偶尋流水上崔嵬、五老蒼顔一笑開。

若見謫仙煩寄語、匡山頭白早歸來。

■ 【07-1-025】 同年程筠德林求先墳二詩

其一 思成堂

宰樹連山谷、祠堂照路隅。

養松無觸鹿、助祭有馴烏。

歸夢先寒食、兒啼到白鬚。

遙知隣裏化、醉叟道爭扶。

其二 歸真亭

旧笑桓司馬、今師鄭大夫。

不知徂歲月、空覺老楸梧。

祭礼伝家法、阡名載版圖。

会看千字誄、木杪見龜趺。

■ 【07-1-026】 陶驥子駿佚老堂二首

其一

文學與元礼、尚得稱世旧。

淵明吾所師、夫子仍其後。

掛冠不待年、亦豈為五斗。

我歌歸來引、千載信尚友。

相逢黃卷中、何似一杯酒。

君醉我且歸、明朝許來否。

其二

我從廬山來、目送孤飛雲。  
路逢陸道士、知是千歲人。  
試問當時友、虎溪已埃塵。  
似聞伏老堂、知是幾世孫。  
能為五字詩、仍戴漉酒巾。  
人呼小靖節、自号葛天民。

■ 【07-1-027】 和李太白、并叙

叙

李太白有潯陽紫極宮感秋詩。紫極宮、今天慶觀也。道士胡洞微以石本示余、蓋其師卓玘之所刻。玘有道術、節義過人、今亡矣。太白詩云、四十九年非、一往不可復。予亦四十九、感之、次其韻。玉芝一名瓊田草、洞微種之七八年矣、云、更數年可食、許以遺余。故并記之。

寄臥虛寂堂、月明浸疏竹。  
冷然洗我心、欲飲不可掬。  
流光發永歎、自昔非余獨。  
行年四十九、還此北窓宿。  
緬懷卓道人、白首寓醫卜。  
謫仙固遠矣、此士亦難復。  
世道如弈棋、變化不容覆。



惟忘玉芝老、待得蟠桃熟。

■ 【07-1-028】 次韻道潛留別

為聞廬岳多真隱、故就高人斷宿攀。

已喜禪心無別語、尚嫌剃髮有詩斑。

異同更莫疑三語、物我終當付八還。

到後與君開北戶、拳頭三十六青山。

■ 【07-1-029】 石鐘山記

■ 【07-1-030】 邁硯銘

■ 【07-1-031】 評文選四首

■ 【07-1-032】 書李白集

■ 【07-1-033】 與王文玉

■ 【07-1-034】 天石硯銘

■ 【07-1-035】 郭祥正家、醉畫竹石壁上、郭作詩為謝、且遺二古銅劍

空腸得酒芒角出、肝肺槎牙生竹石。

森然欲作不可回、吐向君家雪色壁。

平生好詩仍好画、書牆洩壁長遭罵。  
 不嗔不罵喜有余、世間誰復如君者。  
 一双銅劍秋水光、兩首新詩争劍鏃。  
 劍在牀頭詩在手、不知誰作蛟竜吼。

■ 【07-1-036】 竜尾硯歌、并引

引  
 余旧作鳳咮石硯銘、其略云、蘇子一見名鳳咮、坐令竜尾羞牛後。已而求硯於歙。歙人云、子自有鳳咮、何以此為。蓋不能平也。奉議郎方彥德、有竜尾大硯、奇甚。謂余若能作詩、少解前語者、當奉餉、乃作此詩。

黄琮白琥天不惜、顧恐貪夫死懷璧。  
 君看竜尾豈石材、玉徳金声寓於石。  
 与天作石来幾時、与人作硯初不辭。  
 詩成鮑謝石何与、筆落鐘王硯不知。  
 錦茵玉匣俱塵垢、擣練支牀亦何有。  
 況曠蘇子鳳咮銘、戯語相嘲作牛後。  
 碧天照水風吹雲、明窓大几清無塵。  
 我生天地一閑物、蘇子亦是支離人。  
 麤言細語都不捩、春蚓秋蛇随意昼。  
 願從蘇子老東坡、仁者不用生分別。

■ 【07-1-037】 書鳳咮硯

■ 【07-1-038】 張近幾仲有竜尾子石硯、以銅劍易之

我家銅劍如赤蛇、君家石硯蒼壁橢而窪。

君持我劍向何許、大明宮裏玉珮鳴衝牙。

我得君硯亦安用、雪堂窓下爾雅箋虫蝦。

二物与人初不異、飄落高下隨風花。

崩猴玉具皆外物、視草草玄無等差。

君不見秦趙城易壁、指囟睨柱相矜誇。

又不見二生妾換馬、驕鳴啜泣思其家。

不如無情兩相与、永以為好譬之桃李与瓊華。

■ 【07-1-039】 眉子石硯歌贈胡閻

君不見成都画手開十眉、橫雲却月争新奇。

游人指点小顰处、中有漁陽胡馬嘶。

又不見王孫青瑣橫双碧、腸断浮空遠山色。

書生性命何足論、坐費千金買消渴。

爾來喪乱愁天公、謫向君家書硯中。

小窓虚幌相嫵媚、令君曉夢生春紅。

毘耶居士談空处、結習已空花不住。

試教天女為磨鉛、千偈瀾翻無一語。

■ 【07-1-040】 与王文玉

■ 【07-1-041】 白鷺亭題柱

■ 【07-1-042】 張庖民挽詞

東晋巾車令、西京執戟郎。  
甘心向山水、結髮事文章。  
故自輕千戶、何曾羨一囊。  
天高鬼神惡、骨朽姓名芳。  
庾嶺銘旌暗、秦淮旧宅荒。  
吾詩不用刻、妙語有黃香。

■ 【07-1-043】 次韻段縫見贈

季子東周負郭田、須知力穡是家傳。  
細思種菴五十本、大勝取禾三百廬。  
若得与君連北巷、故応終老忘西川。  
短衣匹馬非吾事、只擬関門不問天。

■ 【07-1-044】 次韻杭人裴維甫

余杭門外葉飛秋、尚記居人挽去舟。  
一別臨平山上塔、五年雲夢沢南州。  
淒涼楚些緣吾發、邂逅秦淮為子留。  
寄謝西湖旧風月、故応時許夢中游。

■ 【07-1-045】 次韻答宝覺

芒鞋竹杖布行纏、遮莫千山更万山。

從來無脚不解滑、誰信石頭行路難。

■ 【07-1-046】次荊公韻四絕

其一

青李扶疏禽自來、清真逸少手親栽。

深紅淺紫從爭發、雪白鵝黃也鬪開。

其二

斫竹穿花破綠苔、小詩端為覓橙栽。

細看造物初無物、春到江南花自開。

其三

騎驢渺渺入荒陂、想見先生未病時。

勸我試求三畝宅、從公已覺十年遲。

其四

甲第非真有、閑花亦偶栽。

聊為清淨供、却對道人開。

（公病後、舍宅作寺。

■ 【07-1-047】同王勝之遊蔣山

到郡席不暖、居民空惘然。

好山無十里、遺恨恐他年。  
欲款南朝寺、同登北郭船。  
朱門收画戟、紺宇出青蓮。  
夾路蒼髯古、迎人翠麓偏。  
竜腰蟠故国、鳥爪寄層巔。  
竹杪飛華屋、松根泫細泉。  
峰多巧障日、江遠欲浮天。  
略約橫秋水、浮囿插暮煙。  
歸來踏人影、雲細月娟娟。

■ 【07-1-048】 書子由金陵天慶觀詩

■ 【07-1-049】 去歲九月二十七日、在黃州生子名遯、小名幹兒、頎然穎異。至今年七月二十八日、病亡於金陵、作二詩哭之

其一

吾年四十九、羈旅失幼子。  
幼子真吾兒、眉角生已似。  
未期觀所好、蹣跚逐書史。  
搖頭却梨栗、似識非分恥。  
吾老常鮮歡、頼此一笑喜。  
忽然遭奪去、惡業我累爾。  
衣薪那免俗、變滅須臾耳。  
歸來懷抱空、老淚如瀉水。

其二

我淚猶可拭、日遠當日忘。  
母哭不可聞、欲與汝俱亡。  
故衣尚懸架、漲乳已流牀。  
感此欲忘生、一臥終日僵。  
中年忝聞道、夢幻講已詳。  
儲藥如丘山、臨病更求方。  
仍將恩愛刃、割此衰老腸。  
知迷欲自反、一慟送余傷。

■ 【07-1-050】 葉濤致遠見和二詩、復次其韻

其一

平生無一女、誰復歎耳耳。  
滯留生此兒、足慰周南史。  
那知非真實、造物聊戲爾。  
煩惱初無根、恩愛為種子。  
煩公為佞說、反覆相指似。  
欲除苦海浪、先乾愛河水。  
棄置一寸鱗、悠然笑侯喜。  
為公寫余習、瓶罍一時耻。

其二

聞公少已悟、拄杖久倚牀。  
笑我老而癡、負鼓欲求亡。  
庶幾東門子、柱史安敢望。  
嗜毒戲猛獸、慮患先不詳。  
囊破蛇已走、尚未省齧傷。  
妙哉兩篇詩、洗我千結腸。  
点蚕不作繭、未老輒自僵。  
永謝湯火厄、冷然超無方。

■ 【07-1-051】 次韻葉致遠見贈

欲求五畝寄樵蘇、所至遲留似賈胡。  
信命不須歌去汝、逢人未免歎猶吾。  
人皆勸我杯中物、我独憐君屋上烏。  
一技文章何足道、要言摩詰是文殊。

■ 【07-1-052】 題孫思邈真

先生一去五百載、猶在峨眉西嶽中。  
自為天仙足官府、不忘尸解坐虵虫。

■ 【07-1-053】 戲作鮎魚一絕

粉紅石首仍無骨、雪白河魨不葉人。  
寄語天公与河伯、何妨乞与水精鱗。



■ 【07-1-054】 与滕達道

■ 【07-1-055】 漁家傲

千古竜蟠並虎踞、  
從公一弔興亡处。

渺渺斜風吹細雨。

芳草渡、

江南父老留公住。

公駕飛車凌彩霧、

紅鸞駝乘青鸞馭。

却訝此洲名白鷺。

非吾侶、

翻然欲下還飛去。

■ 【07-1-056】 至真州再和二首

其一

老手王摩詰、窮交孟浩然。

論詩曾伴直、話旧已忘年。

北上難陪驥、東行且趁船。

離亭花映肉、醉眼鷺窺蓮。

梅軫三山没、風回五兩偏。

荒祠過瓜步、古甃墮松巔。

聞道清香閣、新篔白玉泉。  
莫教門掩夜、坐待月流天。  
小院檀槽鬧、空庭樺独煙。  
公詩便堪唱、為付小嬋娟。

其二

公顏如雪柏、千載故依然。  
笑我無根柳、空中不待年。  
肯留歸闕旆、坐待逆風船。  
特許門伝鑰、那知箭起蓮。  
相逢月上後、小語坐西偏。  
流落千帆側、追思百尺巔。  
躬耕懷谷口、水石羨平泉。  
茅屋歸元亮、霓裳醉樂天。  
行聞宣室召、歸近御爐烟。  
未用歌池上、隨宜教李娟。

■ 【07-1-057】 与袁真州

■ 【07-1-058】 贈袁陟

是身如虛空、万物皆我儲。  
胡為強分別、百金買田廬。  
不見袁夫子、神馬載尻輿。

游乎無何有、一飯不願余。  
官湖為我池、學舍為我居。  
何以遺子孫、此身自蘧蔭。  
薰風暗楊柳、秋水靜芙蕖。  
忘觀我知子、不怪子知魚。

■ 【07-1-059】 次韻蔣穎叔

月明驚鷓未安枝、一棹飄然影自隨。  
江上秋風無限浪、枕中春夢不多時。  
瓊林花草聞前語、罨畫溪山指後期。  
豈敢便為雞黍約、玉堂金殿要論思。

■ 【07-1-060】 次韻滕元發、許仲塗、秦少游

二公詩格老弥新、醉後狂吟許野人。  
坐看青丘吞沢芥、自慚黃潦薦溪蘋。  
兩邦旌纛光相照、十畝鋤犁手自親。  
何似秦郎妙天下、明年獻頌請東巡。

■ 【07-1-061】 以玉帶施元長老、元以衲裙相報、次韻二首

其一

病骨難堪玉帶圍、鈍根仍落箭鋒機。  
欲教乞食歌姬院、故與雲山旧衲衣。

其二

此帶閑人如伝舎、流伝到我亦悠哉。

錦袍錯落真相称、乞与佯狂老万回。

■ 【07-1-062】 送金山郷僧帰蜀開堂

撞鐘浮玉山、迎我三千指。

衆中聞磬效、未語知郷里。

我非箇中人、何以默識子。

振衣忽歸去、隻影千山裏。

涪江与中泠、共此一味水。

氷盤薦琥珀、何似糖霜美。

■ 【07-1-063】 金山夢中作

江東賈客木綿裘、会散金山月滿楼。

夜半潮來風又熟、臥吹簫管到揚州。

■ 【07-1-064】 秦少遊夢発殯而葬之者、云是劉発之柩、是歳発首薦。秦以詩賀之、劉涇亦作、因次其韻

君看三代士執雉、本以殺身為小補。

居官死職戰死綏、夢尸得官真古語。

五行勝己斯為官、官如草木吾如土。

仕而未禄猶賓客、待以純臣蓋非古。

饋焉曰献称寡君、豈比公卿相爾汝。

世衰道微士失已、得喪悲歡反其故。  
草袍蘆箬相嫵媚、飲酒嬉游事群聚。  
曲江船舫月燈毬、是謂舞殯而歌墓。  
看花走馬到東野、余子紛紛何足數。  
二生年少兩豪逸、詩酒不知軒冕苦。  
故令將仕夢發棺、勸子勿為官所腐。  
塗車芻靈皆假設、著眼細看君勿誤。  
時來聊復一飛鳴、進隱不須煩伍舉。

■ 【07-1-065】 送沈遼赴広南

嗟我与君皆丙子、四十九年窮不死。  
君隨幕府戰西羌、夜渡氷河斫雲壘。  
飛塵漲天箭灑甲、歸對妻孥真夢耳。  
我謫黃岡四五年、孤舟出沒烟波裏。  
故人不復通問訊、疾病飢寒疑死矣。  
相逢握手一大笑、白髮蒼顏略相似。  
我方北渡脫重江、君復南行輕万里。  
功名如幻何足計、學道有涯真可喜。  
勾漏丹砂已付君、汝陽甕盎吾何恥。  
君歸趁我雞黍約、買田築室從今始。

■ 【07-1-066】 次韻周種惠石鉞

銅腥鉄法不宜泉、愛此蒼然深且寬。

蟹眼翻波湯已作、竜頭拒火柄猶寒。  
 薑新塩少茶初熟、水漬雲蒸蘇未乾。  
 自古函牛多折足、要知無脚是輕安。

■ 【07-1-067】 贈潘谷

潘郎曉踏河陽春、明珠白璧驚市人。  
 那知望拜馬蹄下、胸中一斛泥与塵。  
 何似墨潘穿破褐、瑯瑯翠餅敲玄笏。  
 布衫漆黑手如龜、未害冰壺貯秋月。  
 世人重耳輕目前、区区張李爭媿妍。  
 一朝入海尋李白、空看人間画墨仙。

■ 【07-1-068】 書潘谷墨

■ 【07-1-069】 与滕達道

■ 【07-1-070】 蒜山松林中可卜居、余欲僦其地、地属金山、故作此詩与金山元長老

魏王大瓠無人識、種成何翅實五石。  
 不辭破作兩大樽、只憂水淺江湖窄。  
 我材瀟落本無用、虛名驚世終何益。  
 東方先生好自譽、伯夷子路并為一。  
 杜陵布衣老且愚、信口自比契与稷。  
 暮年欲学柳下惠、嗜好酸鹹不相入。

金山也是不羈人、早歲聞名晚相得。  
我醉而嬉欲仙去、傍人笑倒山謂實。  
問我此生何所歸、笑指浮休百年宅。  
蒜山幸有閑田地、招此無家一房客。

■ 【07-1-071】蘇子容母陳夫人挽詞

蘇陳甥舅真冰玉、正始風流起頽俗。  
夫人高節稱其家、凜凜寒松映修竹。  
雞鳴為善日日新、八十三年如一晨。  
豈惟家室宜壽母、實與朝廷生異人。  
忘軀殉國乃吾子、三仕何曾知慍喜。  
不煩擁笏強垂魚、我視去來皆夢爾。  
誦詩相挽真區區、墓碑千字多遺余。  
他年太史取家傳、知有班昭統漢書。

■ 【07-1-072】王中甫哀辭、并叙

叙  
仁宗朝以制策登科者十五人、軾忝冒時、尚有富彥國、張安道、錢子飛、吳長文、夏公酉、陳令舉、錢醇老、并王中甫與軾家弟轍、九人存焉。其後十有五年、哭中甫於密州、作詩弔之、則子飛、長文、令舉沒矣。又八年、軾自黃州量移汝海、與中甫之子沆之相遇於京口、相持而泣、則十五人者、獨三人存耳、蓋安道及軾與家弟而已。嗚呼悲夫。乃復次前韻、以遺沆之、時沆之亦以辜謫家於錢塘云。

生芻不独比前人、束藁端能廢謝鯤。  
子達想無身後念、吾衰不復夢中論。  
已知毅豹為均死、未識荊凡定孰存。  
堪笑東坡癡鈍老、区区猶記刻舟痕。

■ 【07-1-073】 減字木蘭花

鄭莊好客。  
容我樽前先墮幘。  
落筆生風  
籍籍声名不負公。

高山白早。  
瑩骨冰膚那解老。  
從此南徐。  
良夜清風月滿湖。

■ 【07-1-074】 与王荊公

■ 【07-1-075】 菩薩蛮

買田陽羨吾將老。  
從來只為溪山好。  
來往一虛舟、  
聊隨物外遊。



有書仍懶著。

水調歌歸去。

筋力不辭詩。

要須風雨時。

■ 【07-1-076】 艤舟迎恩亭題

■ 【07-1-077】 陶淵明詩

■ 【07-1-078】 楚頌帖

■ 【07-1-079】 豆粥

君不見滹沱流澌車折軸、公孫倉皇奉豆粥。

濕薪破竈自燎衣、飢寒頓解劉文叔。

又不見金谷敲冰木春、帳下烹煎皆美人。

萍齏豆粥不佞法、咄嗟而弁石季倫。

干戈未解身如寄、声色相纏心已醉。

身心顛倒自不知、更識人間有真味。

豈如江頭千頃雪色蘆、茅簷出沒晨煙孤。

地碓春秬光似玉、沙瓶煮豆軟如酥。

我老此身無著處、坼書來問東家住。

臥聽雞鳴粥熟時、蓬頭曳履君家去。

■ 【07-1-080】 答賈耘老

■ 【07-1-081】 答秦太虚

■ 【07-1-082】 乞常州居住表

■ 【07-1-083】 広陵後園題申公扇子

露葉風枝曉自勻、緑陰青子浄無塵。  
閑吟繞屋扶疏句、須信淵明是可人。

■ 【07-1-084】 書韓魏公黄州詩後

■ 【07-1-085】 与徐得之

■ 【07-1-086】 徐大正閑軒

氷蠶不知寒、火鼠不知暑。  
知閑見閑地、已覺非閑侶。  
君看東坡翁、懶散誰比数。  
形骸墮醉夢、生事委塵土。  
早眠不見燈、晚食或敲午。  
臥看鼯取盜、坐視麥漂雨。  
語希舌頰強、行少腰脚儂。  
五年黄州城、不踏黄州鼓。  
人言我閑客、置此閑処所。  
問閑作何味、如眼不自睹。

頗訝徐孝廉、得閑能幾許。  
介子願奉使、翁婦備文武。  
忘緣不耐閑、名字掛庭宇。  
我詩為閑作、更得不閑語。  
君如汗血駒、軫盼略燕楚。  
莫嫌鑿輅重、終勝塩車苦。

■ 【07-1-087】 与徐得之

■ 【07-1-088】 元豐七年十一月十三日、与幾先自竹西來訪慶老、不見、独与君卿供奉、蟾  
知客東閣道話久之

卷卷長廊走黃葉、席簾垂地香煙歇。  
主人待來終不來、火紅銷盡灰如雪。

■ 【07-1-089】 秦少游真贊

■ 【07-1-090】 別沢公

黍離不復閔宗周、何暇雷塘弔一丘。  
若問西來祖師意、竹西歌吹是揚州。

■ 【07-1-091】 邵伯梵行寺山茶

山茶相對阿誰栽、細雨無人我独來。  
說似与君君不会、爛紅如火雪中開。

■ 【07-1-092】 高郵陳直躬処士画雁二首

其一

野雁見人時、未起意先改。  
君從何處看、得此無人態。  
無乃槁木形、人禽兩自在。  
北風振枯葦、微雪落璀璨。  
慘澹雲水昏、晶熒沙礫碎。  
弋人悵何慕、一舉渺江海。

其二

衆禽事紛爭、野雁獨閑潔。  
徐行意自得、俯仰苦有節。  
我衰寄江湖、老伴雜鵝鴨。  
作書問陳子、曉景画蒼雪。  
依依聚凹沙、稍稍動斜月。  
先鳴獨鼓翅、吹亂蘆花雪。

■ 【07-1-093】 蔡景繁官舍小閣

使君不獨東南美、典型長記先君子。  
戲嘲王叟短轅車、肯為徐郎書紙尾。  
三年弭節江湖上、千首放懷風月裏。  
手開東閣坐虛明、目淨東溪照清泚。

素琴獨酒容一榻、落霞孤鶩供千里。  
大舫何時繫門柳、小詩屢欲書窓紙。  
文昌新構滿鸕鷀、都邑正喧収杞梓。  
相逢一醉豈有命、南來寂寞君歸矣。

■ 【07-1-094】 和王旂二首

其一

異時長怪謫仙人、舌有風雷筆有神。  
聞道騎鯨游汗漫、憶嘗捫蝨話悲辛。  
氣吞余子無全目、詩到諸郎尚絕倫。  
白髮故交空掩卷、淚河東注問蒼旻。

其二

嫋嫋春風送渡閨、娟娟霜月照生還。  
遲留歲暮江淮上、來往君家伯仲間。  
未厭水灘吼新洛、且看松雪媚南山。  
野梅官柳何時動、飛蓋長橋待子閑。

■ 【07-1-095】 王平甫夢靈芝宮

■ 【07-1-096】 錢子飛施葉

■ 【07-1-097】 和田仲宣見贈

頭白江南醉司馬、寬心時復喚殷兄。  
寒潮不応淮無信、客路相隨月有情。  
未許低頭揖東野、徒言共飲勝公榮。  
好詩惡韻那容和、刻燭応須便置觥。

■ 【07-1-098】 浣溪沙

一夢江湖費五年。  
歸來風物故依然。  
相逢一醉是前緣。

遷客不応常眊▲、[▲は目+梟という字]

使君為出小嬋娟。  
綠鬢聊著小詩纏。

■ 【07-1-099】 虞美人

波声拍枕長淮曉。  
隙月窺人小。  
無情汴水自東流。  
只載一船離恨、  
向西州。

竹溪花浦曾同醉。

酒味多於淚。

誰教風鑿在塵埃。

醞造一場煩惱、

送人來。

■ 【07-1-100】 木峰偈

■ 【07-1-101】 与王定国

■ 【07-1-102】 次韻王定国南遷回見寄

土暈銅花蝕秋水、要須悍石相礪砥。

十年冰蘖戰膏粱、万里煙波濯紈綺。

歸來詩思轉清澈、百丈空潭數魴鯉。

逝將桂浦擷蘭蓀、不記槐堂收劍履。

却思庾嶺今何在、更說彭城真夢耳。

君知先竭是甘井、我願得全如苦李。

妄心不復九回腸、至道終當三洗髓。

宏陵陽羨何足較、只有無何真我里。

樂全老子今禪伯、掣電機鋒不容擬。

心通豈復問云何、印可聊須答如是。

相逢為我話留滯、桃花春漲孤舟起。

■ 【07-1-103】 乞常州居住表

■ 【07-1-104】 書唐林夫惠硯

■ 【07-1-105】 贈梁道人

采葉壺公处处過、笑看金狄手摩挲。  
老人大父識君久、造物小兒如子何。  
寒尽山中無曆日、雨斜江上一漁蓑。  
神仙護短多官府、未厭人間醉踏歌。

■ 【07-1-106】 龜山弁才師

此生念念浮雲改、寄語長淮今好在。  
故人宴坐虹梁南、新河巧出龜山背。  
木魚呼客振林莽、鉄鳳橫空飛彩繪。  
忽驚堂宇變雄深、坐覺風雷生警效。  
羨師遊戲浮漚間、笑我榮枯彈指內。  
嘗茶看画亦不惡、問法求詩了無礙。  
千里孤帆又独來、五年一夢誰相對。  
何当來世結香火、永与名山躬井磑。

■ 【07-1-107】 如夢令

其一

水垢何曾相受。  
細看兩俱無有。



寄語指背人。

尽日劳君揮肘。

輕手。

輕手。

居士本来無垢。

■ 【07-1-108】 行香子

北望平川。

野水荒湾。

共尋春、

飛步屣顏。

和風弄袖、

香霧縈鬟。

正酒酣適、

人語笑、

白雲間。

飛鴻落照、

相將歸去。

淡娟娟、

玉宇清閑。

何人無事、

晏坐空山。

望長橋上、  
燈火乱、  
使君還。

■ 【07-1-109】 次韻張琬

新落霜余兩岸隆、塵埃拳袂識西風。  
臨淮自古多名士、樽酒相從樂寓公。  
半日偷閑歌嘯裏、百年暗盡往來中。  
知君不向窮愁老、尚有清詩氣吐虹。

■ 【07-1-110】 泗州南山監倉蕭淵東軒二首

其一

偶隨樵父采都梁、竹屋松扉試乞漿。  
但見東軒堪隱几、不知公子是監倉。  
溪中亂石牆垣古、山下寒蔬匕箸香。  
我是江南旧遊客、掛冠知有老蕭郎。

其二

北望飛塵苦昼霾、洗心聊復寄東齋。  
珍禽声好猶思越、野橘香清未過淮。  
有信微泉來遠嶺、無心明月轉空階。  
一官倉庾真堪老、坐看松根絡斷崖。

■ 【07-1-111】 雍秀才画草虫八物

其一 促織

月叢号耿耿、露葉泣溥溥。  
夜長不自暖、那憂公子寒。

其二 蟬

蛻形濁污中、羽翼便翾好。  
秋來閑何闊、已抱寒莖槁。

其三 蝦蟇

睥目知誰曠、蟠腹空自脹。  
慎勿困蜈蚣、饑蛇不汝放。

其四 蜩螗

洪鐘起暗室、飄瓦落空庭。  
誰言軋丸手、能作殷林聲。

其五 天水牛

兩角徒自長、空飛不服箱。  
為牛竟何事、利吻穴枯桑。

其六 蠍虎

跂跂有足蛇、脈脈無角龜。

為虎君勿笑、食尽蠹尾虫。

其七 蝸牛

腥涎不满殼、聊足以自濡。

升高不知回、竟作粘壁枯。

其八 鬼蝶

双眉卷鉄糸、両翅暈金碧。

初来花争妍、忽去鬼無跡。

■ 【07-1-112】 与藩彦明

■ 【07-1-113】 与千之侄

■ 【07-1-114】 祭蔡景繁文

■ 【07-1-115】 浣溪沙

細雨斜風作曉寒、

淡煙疏柳媚晴灘。

入淮清洛漸漫漫。

雪沫乳花浮午盞、

蓼茸蒿筍試春盤。

人間有味是清歡。

■ 【07-1-116】 滿庭芳

三十三年、  
飄流江海、  
万里煙浪雲帆。  
故人驚怪、  
憔悴老青衫。  
我自疏狂異趣、  
君何事、  
奔走塵凡。  
流年盡、  
窮途坐守、  
船尾凍相銜。

巉巖。  
淮浦外、  
層樓翠壁、  
古寺空巖。  
步携手林間、  
笑挽纖纖。  
莫上孤峰尽处、  
縈望眼、

雲海相攙。

家何在、

因君問我、

歸夢繞松杉。

■ 【07-1-117】 如夢令

城上層樓暈嶽

城下清淮古汴。

拳手揖吳雲、

人与暮天俱遠。

魂斷、

魂斷、

後夜松江月滿。

■ 【07-1-118】 題清淮樓

觀魚惠子台燕沒、夢蝶莊生冢木秋。

惟有清淮供四望、年年依旧背城流。

■ 【07-1-119】 泗州除夜雪中黃師是送酥酒二首

其一

暮雪紛紛投碎米、春流咽咽走黃沙。

旧遊似夢徒能說、逐客如僧豈有家。

冷硯欲書先自凍、孤燈何事獨成花。

使君半夜分酥酒、驚起妻孥一笑嘩。

其二

闕右土酥黃似酒、揚州雲液却如酥。

欲從元放覓拄杖、忽有麴生來坐隅。

對雪不堪令飽暖、隔船應已厭歌呼。

明朝積玉深三尺、高枕牀頭尚一壺。

■ 【07-1-120】 章錢二君見、和復次韻答之、二首

其一

黃昏已作風翻絮、半夜猶驚月在沙。

照汴玉峰明似利、隔淮雲海暗人家。

來牟有信迎三白、薔蔔無香散六花。

欲喚阿鹹來守歲、林烏檉馬鬪喧嘩。

其二

分無纖手裁春勝、況有新詩點蜀酥。

醉裏冰髭失纓絡、夢回布被起廉隅。

君忘旅睫寒生暈、我亦飢腸夜自呼。

明日南山春色動、不知誰佩紫微壺。

■ 【07-2-001】 正月一日、雪中過淮謁客回、作二首

其一

十里清淮上、長堤轉雪竜。  
氷崖落屐齒、風葉乱裘茸。  
万頃穿銀海、千尋度玉峰。  
從來修月手、合在広寒宮。

其二

攢眉有底恨、得句不妨清。  
霽霧開寒谷、飢鴉舞雪城。  
橋声春市散、塔影暮淮平。  
不用殘燈火、船窓夜自明。

■ 【07-2-002】 孫莘老寄墨四首

其一

徂徠無老松、易水無良工。  
珍材取樂浪、妙手惟潘翁。  
魚胞熟万杵、犀角盤双竜。  
墨成不敢用、進入蓬萊宮。  
蓬萊春昼永、玉殿明房櫳。  
金箋灑飛白、瑞霧縈長虹。  
遙憐醉常侍、一笑開天容。

其二

溪石琢馬肝、剡藤開玉版。



噓噓雲霧出、奕奕竜蛇縮。  
此中有何好、秀色紛滿眼。  
故人歸天祿、古漆窺蠹簡。  
險藥給尚方、老手擅編剗。  
分余幸見及、流落一嘆赧。

其三

我貧如飢鼠、長夜空齧齧。  
瓦池研竈煤、葦管書柿葉。  
近者唐夫子、遠致烏玉玦。  
先生又繼之、圭壁爛箱篋。  
晴窓洗硯坐、蛇蚓稍蟠結。  
便有好事人、敲門求醉帖。

其四

吾窮本坐詩、久服朋友戒。  
五年江湖上、閉口洗殘債。  
今來復稍稍、快癢如爬疥。  
先生不譏訶、又復寄詩械。  
幽光發奇思、點黠出荒怪。  
詩成一自笑、故疾逢蝦蟹。

■ 【07-2-003】 泗岸喜題

■ 【07-2-004】 留題蘭皋亭

雪後東風未肯和、扣門遷客夜經過。  
不知旧竹生新筍、但見清伊換濁河。  
無復往来乘下沢、聊同笑語説東坡。  
明年我亦開三徑、寂寂兼無雀可羅。

■ 【07-2-005】 和人見贈

只写東坡不著名、此身已是一長亭。  
壯心無復春流起、衰鬢從教病葉零。  
知有雪兒供筆硯、忘嗤寵婦洗盆瓶。  
回来索酒公忘厭、京口新伝作客經。

■ 【07-2-006】 南郷子

千騎試春遊。  
小雨如酥落便收。  
能使江東歸老客、  
遲留。  
白酒無声滑瀉油。

飛火乱星球。  
浅黛横波翠欲流。  
不似白雲郷外冷、

溫柔。

此去淮南第一州。

■ 【07-2-007】 跋翰林錢公詩後

■ 【07-2-008】 寄蘄簞与蒲傳正

蘭溪美箭不成笛、離離玉筋排霜脊。

千溝万縷自生風、入手未開先慘慄。

公家列屋閑蛾眉、珠簾不動花陰移。

霧帳銀牀初破睡、牙籤玉局坐彈碁。

東坡病叟長羈旅、凍臥飢吟似飢鼠。

倚賴春風洗破衾、一夜雪寒披故絮。

火冷燈青誰復知、孤舟兒女自嚶呻。

皇天何時反炎燠、愧此八尺黃琉璃。

願公淨埽清香閣、臥聽風漪声滿榻。

習習還從兩腋生、請公乘此朝闈闔。

■ 【07-2-009】 滿庭芳

歸去來兮、

清谿無底、

上有千仞嵯峨。

昼樓東畔、

天遠夕陽多。

老去君恩未報、  
空回首、  
彈鋏悲歌。  
舡頭轉、  
長風万里、  
歸馬駐平坡。

無何。  
何処有、  
銀潢尽処、  
天女停梭。  
問何事人間、  
久戲風波。  
顧謂同來稚子、  
忘爛汝、  
腰下長柯。  
青衫破、  
群仙笑我、  
千縷挂煙蓑。

■ 【07-2-010】 題陸柬之臨摹帖

■ 【07-2-011】 書楞伽經後

■ 【07-2-012】 記夢、并叙

叙

樂全先生夢人以詩三篇示之、字皆旁行而不可識。傍有人道衣古貌、為誦其中一篇云、人事且常在、留質悟円間。凡四句、覺而忘其二、以告其客蘇軾。軾以私意広之云。

円間有物物間空、豈有円空入井中。

不信天形真箇様、故忘眼力自先窮。

連環已解如神手、万竅猶号未濟風。

稽首問公公大笑、本来誰礙更求通。

■ 【07-2-013】 西江月

別夢已隨流水、

淚巾猶裏香泉。

相如依旧是臞仙。

人在瑤台闥苑。

花霧縈風縹緲、

歌珠滴水清円。

蛾眉新作十分妍、

走馬歸來便面。

■ 【07-2-014】 和王勝之三首

其一

城上湖光暖欲波、美人唱我踏春歌。  
魯公賓客皆詩酒、誰是神仙張志和。

其二

齊釀如灑漲綠波、公詩句句可弦歌。  
流觴曲水無多日、更作新詩繼永和。

其三

要知太守憐孤客、不惜陽春和俚歌。  
坐睡樽前呼不応、為公雕琢損天和。

■ 【07-2-015】 南都妙峰亭

千尋挂雲闕、十頃含風灣。  
開門弄清泚、照見双銅環。  
池台半禾黍、桃李余榛菅。  
無人肯回首、日暮車班班。  
使君非世人、心与古仏閑。  
時要声利客、来洗塵埃顔。  
新亭在東阜、飛宇凌通關。  
古甃磨翠壁、霜林散煙鬢。  
孤雲抱商丘、芳草連杏山。  
俯仰尽法界、逍遙寄人寰。

亭亭妙高峰、了了蓬艾間。  
五老压彭蠡、三峰照潼關。  
均為拳石小、配此一掬慳。  
煩公為標指、免使勤躋攀。

■ 【07-2-016】跋李伯時孝經圖

■ 【07-2-017】寄怪石石斛与魯元翰

山骨裁方斛、江珍拾淺灘。  
清池上几案、碎月落杯盤。  
老去懷三友、平生困一簞。  
堅姿聊自傲、秀色亦堪餐。  
好去髯卿舍、憑將道眼看。  
東坡最後供、霜雪照人寒。

■ 【07-2-018】贈眼医王生彦若

針頭如麥芒、氣出如車軸。  
間闕絡脈中、性命寄毛粟。  
而況清淨眼、內景含天燭。  
琉璃貯沆瀣、輕脆不任觸。  
而子於其間、來往施鋒鏃。  
笑談紛自若、觀者頸為縮。  
運針如運斤、去翳如拆屋。

常疑子善幻、他技雜符祝。  
 子言吾有道、此理君未矚。  
 形骸一塵垢、貴賤兩草木。  
 世人方重外、妄見瓦与玉。  
 而我初不知、刺眼如刺肉。  
 君看目与翳、是翳要非目。  
 目翳苟二物、易分如麦菽。  
 寧聞老農夫、去草更傷穀。  
 鼻端有余地、肝膽分楚蜀。  
 吾於五輪間、蕩蕩見空曲。  
 如行九軌道、並驅無擊轂。  
 空花誰開落、明月自臄臄。  
 請問樂全堂、忘言老尊宿。

### ■ 【07-2-019】 春日

鳴鳩乳燕寂無声、日射西窓澆眼明。  
 午醉醒来無一事、只将春睡賞春晴。

### ■ 【07-2-020】 李憲仲哀詞、并叙

叙

同年友李君諱惇、字憲仲。賢而有文、不幸早世、軾不及与之遊也、而識其子薦有年矣。薦自陽翟見余於南京、泣曰、吾祖母辺、母馬、前母張与君之喪、皆未葬、貧不敢以飢寒為戚、顧四喪未举、死不瞑目矣。適会故人梁先古老聞余当歸耕陽羨、以絹十匹糸百兩為贖、辞



之不可。乃以遺廌、曰、此亦仁人之饋也。既又作詩、以告知君与廌者、庶幾皆有以助之。廌年二十五、其文曄然、氣節不凡、此豈終窮者哉。

大夢行当覺、百年特未滿。  
違哀已逝人、長眠寄孤館。  
念我同年生、意長日月短。  
塩車困騏驎、烈火廢圭瓊。  
後生有奇骨、出語已精悍。  
蕭然野鶴姿、誰復識中散。  
有生寓大塊、死者誰不窾。  
嗟君独久客、不識黃土暖。  
推衣助孝子、一溉滋湯早。  
誰能脱左驂、大事不可緩。

■ 【07-2-021】 王伯敬所藏趙昌花四首

其一 梅花

南行渡關山、沙水清練練。  
行人已愁絕、日暮集微霰。  
殷勤小梅花、彷彿吳姬面。  
暗香隨我去、回首驚千片。  
至今開画囿、老眼淒欲泣。  
幽懷不可写、歸夢君家倩。

其二 黄葵

弱質困夏永、奇姿蘇曉涼。  
低昂黄金杯、照耀初日光。  
檀心自成量、翠葉森有芒。  
古来写生人、妙絶誰似昌。  
晨妝与午醉、真態含陰陽。  
君看此花枝、中有風露香。

其三 芙蓉

清颿已扈林、積水漸收潦。  
溪邊野芙蓉、花水相媚好。  
坐看池蓮尽、独伴霜菊槁。  
幽姿強一笑、暮景迫摧倒。  
淒涼似貧女、嫁晚驚衰早。  
誰写少年容、樵人劍南老。

其四 山茶

蕭蕭南山松、黄葉隕勁風。  
誰憐兒女花、散火冰雪中。  
能伝歲寒姿、古来惟丘翁。  
趙叟得其妙、一洗膠粉空。  
掌中調丹砂、染此鶴頂紅。  
何須誇落墨、独賞江南工。

■ 【07-2-022】 代張安道進功德疏文

■ 【07-2-023】 神宗皇帝挽詞三首

其一

文武固天縱、欽明又日新。

化民何止聖、妙物独称神。

政已三王上、言皆六籍醇。

巍巍本無象、刻画愧孤臣。

其二

未易名堯德、何須数舜功。

小心仍致孝、余事及平戎。

典礼從周旧、官儀与漢隆。

誰知本無作、千古自承風。

其三

接統真千歲、膺期止一章。

周南稍留滯、宣室遂淒涼。

病馬空嘶櫪、枯葵已泫霜。

余生臥江海、歸夢泣嵩邙。

■ 【07-2-024】 与王定国

■ 【07-2-025】 薦誠禪院五百羅漢記

■ 【07-2-026】 書画壁易石

■ 【07-2-027】 漁父四首

其一

漁父飲、誰家去、魚蟹一時分付。  
酒無多少醉為期、彼此不論錢數。

其二

漁父醉、蓑衣舞、醉裏却尋歸路。  
輕舟短櫂任橫斜、醒後不知何處。

其三

漁父醒、春江午、夢斷落花飛絮。  
酒醒還醉醉還醒、一笑人間今古。

其四

漁父笑、輕鷗拳、漠漠一江風雨。  
江邊騎馬是官人、借我孤舟南渡。

■ 【07-2-028】 与欧育等六人飲酒

忽驚春色二分空、且看樽前半丈紅。  
苦戰知君便白羽、倦游憐我憶黃封。  
年來齒髮老未老、此去江淮東復東。  
記取六人相會處、引杯看劍坐生風。

■ 【07-2-029】 寄吳德德仁兼簡陳季常

東坡先生無一錢、十年家火燒凡鉛。  
黃金可成河可塞、只有霜鬢無由玄。  
竈丘居士亦可憐、談空說有夜不眠。  
忽聞河東獅子吼、拄杖落手心茫然。  
誰似濮陽公子賢、飲酒食肉自得仙。  
平生萬物不留物、在家學得忘家禪。  
門前罷垂十頃田、清溪繞屋花連天。  
溪堂醉臥呼不醒、落花如雪春風顛。  
我遊蘭溪訪清泉、已弁布襪青行纏。  
稽山不是無賀老、我自興盡回酒船。  
恨君不識顏平原、恨我不識元魯山。  
銅駝陌上會相見、握手一笑三千年。

■ 【07-2-030】 題王逸少帖

顛張醉素兩禿翁、追逐世好稱書工。  
何曾夢見王與鐘、妄自粉飾欺盲聾。  
有如市倡抹青紅、妖歌嫵舞眩兒童。

謝家夫人淡豐容、蕭然自有林下風。  
 天門蕩蕩驚跳鼈、出林飛鳥一掃空。  
 為君草書統其終、待我他日不恩慙。

■ 【07-2-031】 書林逋詩後

吳儂生長湖山曲、呼吸湖光飲山綠。  
 不論世外隱君子、傭兒販婦皆冰玉。  
 先生可是絕俗人、神清骨冷無由俗。  
 我不識君曾夢見、瞳子瞭然光可燭。  
 遺篇妙字處處有、步繞西湖看不足。  
 詩如東野不言寒、書似留台差少肉。  
 平生高節已難繼、將死微言猶可錄。  
 自言不作封禪書、更肯悲吟白頭曲。  
 我笑吳人不好事、好作祠堂傍修竹。  
 不然配食水仙王、一盞寒泉薦秋菊。

■ 【07-2-032】 和仲伯達

歸山歲月苦無多、尚有丹砂奈老何。  
 繡谷只忘花自染、鏡潭長與月相磨。  
 君方傍海看初日、我已橫江擊素波。  
 人不我知斯我貴、不須雷雨起鼈梭。

■ 【07-2-033】 代呂申公上初即位論治道

■ 【07-2-034】 過文覺顯公房

爛斑碎玉養菖蒲、一勺清泉滿石盂。

淨几明窓書小楷、便同爾雅注虫魚。

■ 【07-2-035】 雲師無著自金陵來、見余廣陵、且遺余支遁鷹馬圖。將歸、以詩送之、且還

其畫

道人自嫌三世將、棄家十年今始壯。

玉骨猶含富貴余、漆瞳已照人天上。

去年相見古長干、衆中矯矯如翔鸞。

今年過我竹西寺、病瘦已作霜松寒。

朱顏不弁供歲月、風中蒿火湯中雪。

好問君家黃面翁、乞得摩尼照生滅。

莫學王郎與支遁、臂鷹走馬憐神駿。

還君畫圖君自収、不如木人騎土牛。

■ 【07-2-036】 與蘇子容

■ 【07-2-037】 歸宜興、留題竹西寺三首

其一

十年歸夢寄西風、此去真為田舍翁。

剩覓蜀岡新井水、要携鄉味過江東。

其二

道人勸飲雞蘇水、童子能煎鶯粟湯。  
暫借藤牀与瓦枕、莫教辜負竹風涼。

其三

此生已覺都無事、今歲仍逢大有年。  
山寺歸來聞好語、野花啼鳥亦欣然。

■ 【07-2-038】 到常州謝表

■ 【07-2-039】 与孟震同遊常州僧舍三首

其一

年來轉覺此生浮、又作三吳浪漫遊。  
忽見東平孟君子、夢中相對說黃州。

其二

湛湛清池五月寒、小山無數碧巒岿。  
檉杉戢戢三千本、且作凌雲合抱看。

其三

知君此去便歸耕、笑指孤舟一葉輕。  
待向三茅乞靈雨、半篙流水送君行。



■ 【07-2-040】 常州太平寺蒼筤亭醉題

六花蒼筤林間仙、九節菖蒲石上仙。

何似東坡鐵拄杖、一時驚起野狐禪。

■ 【07-2-041】 与滕達道

■ 【07-2-042】 墨花、并叙

叙

世多以墨画山水竹石人物者、未有以画花者也。汴人尹白能之、為賦一首。

造物本無物、忽然非所難。

花心起墨暈、春色散毫端。

縹緲形纔具、扶疏態自完。

蓮風尽傾倒、杏雨半披殘。

独有狂居士、求為墨牡丹。

兼書平子賦、歸向雪堂看。

■ 【07-2-043】 送竹几与謝秀才

平生長物擾天真、老去歸田只此身。

留我同行木上坐、贈君無語竹夫人。

但隨秋扇年年在、莫鬪瓊枝夜夜新。

堪笑荒唐玉川子、暮年家口若為親。

## ■ 【07-2-044】 贈章默、并叙

叙

章默居士、志明。生公侯家、才性高爽。棄家求道、不蓄妻子、与世無累、而父母与兄之喪、貧不能举、以是眷眷世間、不能無求於人。余深哀其志、既有以少助之、又取其言為詩以贈其行、庶幾有哀之者。

章子親未葬、余生抱羸疾。  
 朝吟噎隣里、夜淚腐茵席。  
 前年黑花生、今歲白髮出。  
 身随日月逝、恨与天地举。  
 願求不毛田、親築長夜室。  
 難從王孫裸、未忍夏后髀。  
 五陵多豪士、百万付一擲。  
 心知義財難、甘就貧友乞。  
 不辭毛粟施、行自丘山積。  
 此志苟朝遂、夕死真不戚。  
 誓求無生理、不踐有為迹。  
 棄身尸陀林、烏鳶任狼籍。

## ■ 【07-2-045】 次韻答賈耘老

五年一夢南司州、飢寒疾病為子憂。  
 東來六月井無水、仰看古堰橫奔牛。  
 平生管鮑子知我、今日陳蔡誰從丘。

夜航爭渡泥水洪、牽挽直欲來瓜洲。  
自言嗜酒得風痺、故鄉不敢居溫柔。  
定將泛愛救溝壑、衰病不復從前樂。  
今年太守真臥菴、笑語炎天出冰雹。  
時低九尺蒼鬚髯、過我三間小池閣。  
故人改觀爭來賀、小兒不信猶疑錯。  
為君置酒飲且哦、草間秋虫亦能歌。  
可憐老驥真老矣、無心更秣天山禾。

■ 【07-2-046】小飲公瑾舟中

青泥赤日午相烘、走訪船窓柳影中。  
輟我東坡無限睡、賞君南浦不貲風。  
坐觀邸報談迂叟、閑說滁山憶醉翁。  
此去澄江三萬頃、只忘明月照還空。

■ 【07-2-047】與王文玉

■ 【07-2-048】次韻許遵

蒜山渡口挽歸艫、朱雀橋邊看道裝。  
供帳已忘煩百兩、擊鮮毋久溷諸郎。  
問禪時到長干寺、載酒閑過綠野堂。  
此味只憂兒輩覺、逢人休道北窓涼。

■ 【07-2-049】 溪陰堂

白水満時双鷺下、緑槐高处一蟬吟。  
酒醒門外三竿日、臥看溪南十畝陰。

■ 【07-2-050】 跋蔡君謨書

■ 【07-2-051】 与滕達道

■ 【07-2-052】 蝶恋花

■ 【07-2-053】 贈杜介、并叙

叙

元豐八年七月二十五日、杜幾先自浙東還、与余相遇於金山、話天台之異、以詩贈之。

我夢遊天台、橫空石橋小。  
秋風吹茵露、翠湿香嫋嫋。  
忘真飛錫過、絕磻度雲鳥。  
拳意欲從之、翛然已松杪。  
微言粲珠玉、未說意先了。  
覺来如墮空、耿耿窓戸曉。  
群生陷迷網、独達從古少。  
杜叟子何人、長嘯万物表。  
妻孥空四壁、振策念輕矯。

遂為赤城遊、飛步凌縹緲。  
問禪不歸舍、屢為瓠壺繞。  
何人識此志、仏眼自照了。  
我夢君見之、卓爾非魔嬈。  
仙葩發茗碗、剪刻分葵蓼。  
從今更不出、閉戶閑騾裏。  
時從仏頂巖、馳下双蓮沼。

■ 【07-2-054】 送穆越州

江海相忘十五年、羨君松柏蔚蒼顏。  
四朝耆旧冰霜後、兩郡風流水石間。  
旧政猶伝蜀父老、先声已振越溪山。  
罇前俱是蓬萊守、莫放高楼雪月閑。

■ 【07-2-055】 金山妙高台

我欲乘飛車、東訪赤松子。  
蓬萊不可到、弱水三万里。  
不如金山去、清風半帆耳。  
中有妙高台、雲峰自孤起。  
仰觀初無路、誰信平如砥。  
台中老比丘、碧眼照窓几。  
巉巖玉為骨、凜凜霜入齒。  
機鋒不可觸、千偈如翻水。

何須尋徳雲、即此比丘是。

長生未暇学、請学長不死。

■ 【07-2-056】 記焦山長老答問

■ 【07-2-057】 楊康功有石、状如醉道士、為賦此詩

楚山固多猿、青者黠而寿。

化為狂道士、山谷恣騰蹂。

誤入華陽洞、竊飲茅君酒。

君命囚巖間、巖石為械杻。

松根絡其足、藤蔓縛其肘。

蒼苔眯其目、叢棘哽其口。

三年化為石、堅瘦敵瓊玖。

無復号雲声、空余舞杯手。

樵夫見之笑、抱壳易升鬥。

楊公海中仙、世俗那得友。

海邊逢姑射、一笑微俯首。

胡不載之歸、用此頑且醜。

求詩紀其異、本未得細剖。

吾言豈妄云、得之亡是叟。

■ 【07-2-058】 記石塔長老答問

■ 【07-2-059】 余將赴文登、過弘陵、而挾老移住石塔、相送竹西亭下、留詩為別  
竹西失却上方老、石塔還逢惠照師。  
我亦化身東海去、姓名莫遣世人知。

■ 【07-2-060】 送楊傑、并叙

叙  
無為子嘗奉使登太山絕頂、雞一鳴、見日出。又嘗以事過華山、重九日飲酒蓮花峰上。今乃  
奉詔與高麗僧統遊錢塘。皆以王事、而從方外之樂、善哉未曾有也、作是詩以送之。

天門夜上賓出日、万里紅波半天赤。  
歸來平地看跳丸、一点黃金鑄秋橘。  
太華峰頭作重九、天風吹灑黃花酒。  
浩歌馳下腰帶鞶、醉舞崩崖一揮手。  
神遊八極万緣虛、下視蚊雷隱污渠。  
大千一息八十返、笑厲東海騎鯨魚。  
三韓王子西求法、鑿齒弥天兩勍敵。  
過江風急浪如山、寄語舟人好看客。

■ 【07-2-061】 次韻孫莘老斗野亭寄子由、在邵伯堰

落帆謝公渚、日脚東西平。  
孤亭得小憩、暮景含余清。  
坐待斗與牛、錯落掛南甍。  
老僧如夙昔、一笑意已傾。

新詩出故人、旧事疑前生。  
吾生七往来、送老海上城。  
逢人輒自哂、得魚不忍烹。  
似聞績溪老、復作東都行。  
小詩如秋菊、艷艷霜中明。  
過此感我言、長篇發春榮。

■ 【07-2-062】 贈葛葦

竹椽茅屋半摧傾、肯向蜂窠寄此生。  
長恐波頭卷室去、欲將船尾載君行。  
小詩試擬孟東野、大草閑臨張伯英。  
消遣百年須底物、故忘憐我不歸耕。

■ 【07-2-063】 贈王寂

与君暫別不須嗟、俯仰歸來鬢未華。  
記取江南煙雨裏、青山断处是君家。

■ 【07-2-064】 迺作淮口遇見詩、戲用其韻

我詩如病驢、悲鳴向衰草。  
有兒真驢子、一噴群馬倒。  
養氣勿吟哦、声名忌太早。  
風濤借筆力、勢逐孤雲掃。  
何如陶家兒、繞舍覓梨棗。



君看押強韻、已勝郊与島。

■ 【07-2-065】 書遺蔡允元

■ 【07-2-066】 次韻送徐大正

別時酒盞照燈花、知我歸期漸有涯。  
去歲渡江萍似斗、今年並海棗如瓜。  
多情明月邀君共、無佞青山為我賒。  
千首新詩一竿竹、不忘空釣漢江槎。

■ 【07-2-067】 次韻徐積

殺雞未肯邀季路、裹飯先須問子來。  
但見中年隱槐市、豈知平日賦蘭台。  
海山入夢方東去、風雨留人得暫陪。  
若說峨眉眼前是、故鄉何處不堪回。

■ 【07-2-068】 過泗上喜見張嘉父二首

其一

眉間冰玉照淮明、筆下波瀾老欲平。  
直得全生如許妙、不知形跡已多名。

其二

空翠娛人意自還、明窓一榻共秋閑。

会知名利不到处、定把清觴属此山。

■ 【07-2-069】 蝶恋花

自古漣漪佳絶地。

繞郭荷花、

欲把吳興比。

倦客塵埃何処洗、

真君堂下寒泉水。

左海門前酤酒市。

夜半潮来、

月下孤舟起。

傾蓋相逢拚一醉、

双鳧飛去人千里。

■ 【07-2-070】 元豐七年有詔京東、淮南築高麗亭館、密、海二州、騷然有逃亡者。明年、軾

過之、嘆其壯麗、留一絶云

檐楹飛舞垣牆外、桑柘蕭条斤斧余。

尽賜昆耶作奴婢、不知償得此人無。

■ 【07-2-071】 懷仁令陳德任新作占山亭二絶

其一

尚父提封海岱間、南征惟到穆陵關。

誰知海上詩狂客、占得膠西一半山。

其二

我是膠西旧使君、此山仍占与君分。

故宧竊比山中相、時作新詩寄白雲。

■ 【07-2-072】再過常山和昔年留別詩

偃僂山前叟、迎我如迎新。

那知夢幻軀、念念非昔人。

江湖久放浪、朝市誰相親。

却尋泉源去、桃花宧避秦。

■ 【07-2-073】再過超然台贈太守霍翔

昔飲零泉別常山、天寒歲在竜蛇間。

山中兒童拍手笑、問我西去何當還。

十年不赴竹馬約、扁舟独与漁蓑閑。

重来父老喜我在、扶挈老幼相遮攀。

當時纒襍皆七尺、而我安得留朱顏。

問今太守為誰歟、護羌充国鬢未斑。

躬持牛酒勞行役、無復杞菊嘲寒慳。

超然置酒尋旧跡、尚有詩賦鑱堅頑。

孤雲落日在馬耳、照耀金碧開煙鬟。

邦淇自古北流水、跳波下瀨鳴玦環。

願公談笑作石埭、坐使城郭生溪湾。

■ 【07-2-074】 過密州次韻趙明叔、喬禹功

先生依旧広文貧、老守時遭醉尉嗔。

汝輩何曾堪一笑、吾儕相對復三人。

黃雞催曉淒涼曲、白髮驚秋見在身。

一別膠西旧朋友、扁舟歸釣五湖春。

■ 【07-2-075】 書柳子厚詩

■ 【07-2-076】 与枢密

■ 【07-2-077】 海市、并叙

叙

予聞登州海市旧矣。父老云嘗出於春夏、今歲晚不復見矣。予到官五日而去、以不見為恨、禱於海神広徳王之廟、明日見焉、乃作此詩。

東方雲海空復空、群仙出沒空明中。

蕩搖浮世生万象、豈有貝闕藏珠宮。

心知所見皆幻影、敢以耳目煩神工。

歲寒水冷天地閉、為我起螭鞭魚竜。

重樓翠阜出霜曉、異事驚倒百歲翁。

人間所得容力取、世外無物誰為雄。

率然有請不我拒、信我人厄非天窮。  
潮陽太守南遷歸、喜見石廩堆祝融。  
自言正直動山鬼、豈知造物哀鼃鍾。  
伸眉一笑豈易得、神之報汝亦已豐。  
斜陽万里孤鳥沒、但見碧海磨青銅。  
新詩綺語亦安用、相与變滅隨東風。

■ 【07-2-078】 与潘彥明

■ 【07-2-079】 登州孫氏万松堂

万松誰種已攸從、半嶺蒼雲映此邦。  
露重珠瓔蒙翠蓋、風來石齒碎寒江。  
浮空兩竹橫南閣、倒景扶桑射北窓。  
坐待夕烽傳海嶠、重城歸去踏逢逢。

■ 【07-2-080】 遺直坊、并叙

叙

富鄭公之客李君諱常、登人也。故太守李公諱師中、榜其閭曰遺直。而其子大方、求詩於軾、為賦一首。

使君不浪出、羔雁親扣門。  
先生但清坐、薤水已多言。  
當時邦人化、市無晨飲豚。

歲月曾幾何、客主皆九原。  
 魯經有余歎、楚些無歸魂。  
 我作遺直詩、過者式其藩。

■ 【07-2-081】 鰻魚行

漸台人散長弓射、初瞰鰻魚人未識。  
 西陵衰老總帳空、肯向北河親饋食。  
 兩雄一律盜漢家、嗜好亦若肩相差。  
 食每對之先太息、不因噓嘔緣瘡痍。  
 中間霸據閼梁隔、一枚何啻千金直。  
 百年南北鮭菜通、往往殘余飽臧獲。  
 東隨海舶号倭螺、異方珍寶來更多。  
 磨沙淪瀦成大敵、剖蚌作脯分余波。  
 君不聞蓬萊閣下駝碁島、八月辺風備胡獠。  
 舶船跋浪鼉鼉震、長鑊鏹处崖谷倒。  
 膳夫善治薦華堂、坐令雕俎生輝光。  
 肉芝石耳不足數、醋芼魚皮真倚牆。  
 中都貴人珍此味、糟泔油藏能遠致。  
 割肥方厭万錢廚、決皆可醒千日醉。  
 三韓使者金鼎來、方奩饋送煩輿台。  
 遼東太守遠自獻、臨淄掾吏誰爲材。  
 吾生東歸収一斛、苞苴未肯鑽華屋。  
 分送羹材作眼明、却取細書防老誦。

■ 【07-2-082】 奉和陳賢良

不學孫吳與六韜、敢將駑馬並英豪。  
望窮海表天還遠、傾盡葵心日愈高。  
身外浮名休瑣瑣、夢中歸思已滔滔。  
三山舊是神仙地、引手東來一釣鼇。

■ 【07-2-083】 蓬萊閣記所見

■ 【07-2-084】 留別登州舉人

身世相忘久自知、此行閑看古黃睡。  
自非北海孔文學、誰識東萊太史慈。  
落筆已吞雲夢客、抱琴欲訪水仙師。  
莫嫌五日恩恩守、歸去先傳樂職詩。

■ 【07-2-085】 仙心鑒偈

■ 【07-2-086】 書吳道子畫後

■ 【07-2-087】 書自作木石

■ 【07-2-088】 過萊州雪後望三山

東海如碧環、西北卷登萊。

雲光与天色、直到三山回。  
我行適冬仲、薄雪収浮埃。  
黄昏風絮定、半夜扶桑開。  
參差太華頂、出沒雲濤堆。  
安期与羨門、乘竜安在哉。  
茂陵秋風客、勸爾麾一杯。  
帝鄉不可期、楚些招歸來。

■ 【07-2-089】 与王慶源

■ 【07-2-090】 与米元章

■ 【07-2-091】 真相院釋迦舍利塔銘、并叙

■ 【07-2-092】 跋王氏華嚴經解

■ 【07-2-093】 書文与可墨竹、并叙

叙

亡友文与可有四絕、詩一、楚辭二、草書三、画四。与可嘗云、世無知我者、惟子瞻一見、識吾妙處。既没七年、睹其遺迹、而作是詩。

筆与子皆逝、詩今誰為新。  
空遺運斤質、却弔断弦人。



■ 【07-2-094】 登州召還議水軍狀